

Tohoku Gakuin University Faculty Activities Report 2024

東北学院大学 教員業務・活動報告書 2023

東北学院大学
2024（令和6）年8月31日

東北学院大学
教員業務・活動報告書

2023

東北学院大学
2024（令和6）年8月31日

凡　例

1．業績の範囲

・2023年４月から2024年３月までとする。

2．掲載対象

・2023年４月１日現在で本学に在職するすべての専任の教育職員を対象とする。

3．掲載順序

・文学部（英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科）、経済学部（経済学科）、経営学部（経営学科）、法学部（法律学科）、工学部（機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科）、地域総合学部（地域コミュニティ学科、政策デザイン学科）、情報学部（データサイエンス学科）、人間科学部（心理行動科学科）、国際学部（国際教養学科）、教養学部（人間科学科、言語文化学科、地域構想学科）、教養教育センターの順とし、さらに教授（嘱託教授含む）、准教授、講師、助教別に五十音順とした。

・各教員から提出された区分別に、年代の古い順から掲載した。なお、教育活動、研究活動のいずれにおいても時期が複数年にわたる場合には、活動の開始時期を基準として年月日順に記載し、学会等及び社会活動については、就任年月日順に記載した。

4．掲載内容

・掲載内容は、すべて本人からの報告によるものである。

・大学院の授業担当の有無は、2023年度に開講された授業のものである。

・教育活動の区分は、１．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）、２．作成した教科書、教材、参考書、３．教育方法･教育実践に関する発表、講演等、４．その他教育活動上特記すべき事項とした。

・研究活動の区分は、Ａ．学術書、Ｂａ．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）、Ｂｂ．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）、Ｃ．Ｂに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文、Ｄ．一般著書・論文・エッセー（専門分野）、Ｅ．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）、Ｆ．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）、Ｇ．学会における研究発表、Ｈ．翻訳（学術書や原典等）、Ｉ．特許とした。

・共著（論文）の場合、該当頁数の記入にあたって、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載した。

・芸術分野や体育実技等の分野の教員は、著書・論文等以外の展覧会・演奏会・競技会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについて記載した。

教員一覧

学長
教授
大西晴樹

文学部
英文学科
教授
石橋敬太郎
泉順子
植松靖夫
大石正幸
豊島孝之
那須川訓也
バックレイ フィリップ
福士航
吉村富美子
准教授
井出達郎
大沼仁美
森山盛吉

総合人文学科
教授
川島堅二
木村純二
椎名雄一郎
出村みや子
原田浩司
吉田新
准教授
田島卓
講師
大門耕平
藤野雄大
渡邊有美
渡邉蘭子

歴史学科
教授
小沼孝博
河西晃祐
菊池慶子
楠義彦
佐川正敏
櫻井康人
佐藤義則
下倉渉
竹井英文
辻秀人
永田英明
七海雅人
政岡伸洋
渡辺昭一
准教授
金子祥之
杵淵文夫
講師
多賀良寛

教育学科
教授
稲垣忠
加藤卓
紺野祐
佐藤正寿
清多英羽
長島康雄
村野井仁
ロング クリストファー
渡辺通子
准教授
大友麻子
清水遥
髙橋千枝
助教
松本進乃助

経済学部
経済学科
教授
アレイ ウィルソン
伊藤健宏
泉正樹
大塚芳宏
小沼宗一
倉田洋
佐藤純
佐藤康仁
篠崎剛
白鳥圭志
千葉昭彦
舟島義人
前田修也
若生徹
准教授
板明果
稲見裕介
小林陽介
谷達彦
谷祐可子

田野　穂
松前　龍宜
宮本　拓郎
吉田　惇
講師
塩見　由梨
白井　大地
望月　理生

経営学部
経営学科
教授
岡田　耕一郎
小野　慎一郎
折橋　伸哉
小池　和彰
齋藤　善之
佐久間　義浩
菅山　真次
鈴木　好和
根市　一志
藤　祐司
松岡　孝介
松村　尚彦
村山　貴俊
矢口　義教
准教授
秋池　篤
工藤　大介
古賀　裕也
棚橋　則子
窪田　嵩哉
堀　治彦
森下　俊一郎
講師
板橋　慶明
宋　元旭

法学部
法律学科
教授
阿部　未央
石垣　茂光
井上　義比古
遠藤　隆幸
大窪　誠
菊地　雄介
木下　淑惠
黒田　秀治
近藤　雄大
齋藤　誠
佐々木　くみ
佐藤　英世
佐藤　優希
陶久　利彦
辻田　芳幸
冨田　真
中村　雄一
宮川　基
横田　尚昌
准教授
高浜　智輝
玉井　裕貴
内藤　裕貴
羽田　さゆり
松浦　陽子
講師
井坂　正宏
塚原　義央
松原　俊介

工学部
機械知能工学科
教授
魚橋　慶子
小野　憲文
梶川　伸哉
加藤　陽子
城戸　章宏
熊谷　正朗
斎藤　修
星　朗
松浦　寛
矢口　博之
准教授
岡田　宏成
佐瀬　一弥
濱西　伸治
李　渊
北條　智彦

電気電子工学科
教授
石上　忍
岩谷　幸雄
大場　佳文
小澤　哲也
郭　海蛟
加藤　和夫
川又　憲
金　義鎭
呉　国紅
佐藤　文博
嶋　敏之
土井　正晶
栫　修一郎
原　明人
准教授
桑野　聡子
佐々木　義卓
鈴木　仁志

環境建設工学科
教授
李　相勲
井川　望
石川雅美
櫻井一弥
鈴木道哉
武田三弘
恒松良純
中沢正利
中村寛治
韓　連煕
宮内啓介
山口　晶
准教授
﨑山俊雄
千田知弘
三戸部佑太

情報基盤工学科
教授
淡野照義
神永正博
郷古　学
志子田有光
鈴木利則
吉川英機
准教授
門倉博之
木下　勉
深瀬道晴
物部寛太郎
講師
森島　佑

地域総合学部
地域コミュニティ学科
教授
伊藤晶文
岩動志乃夫
大迫章史
佐久間政広
清水貴裕
菅原真枝
原　義彦
平吹喜彦
増子　正
柳井雅也
准教授
泉山靖人
遠藤　尚
大澤史伸
品田光春
坪田益美
目代邦康
柳澤英明

政策デザイン学科
教授
伊鹿倉正司
石川真作
奥山忠裕
熊沢由美
黒坂愛衣
佐藤　滋
和田正春
准教授
小宮友根
齊藤康則
佐久間香子
定池祐季
宮地克典
武藤敦士
講師
市川　樹
河村真実

情報学部
データサイエンス学科
教授
石田弘隆
伊藤則之
片瀬一男
坂本泰伸
菅原　研
杉浦茂樹
鈴木　努
武田敦志
牧野悌也
松尾行雄
松本章代
村上弘志
准教授
岩田友紀子
片方　江
木村敏幸
小林信重
佐藤　篤
高橋秀幸
土原和子
星野真樹
講師
渡邉　圭

人間科学部
心理行動科学科
教授
加藤健二
金井嘉宏
神林博史
坂本　譲
櫻井研三
宍戸隆之

仙田幸子
高橋信二
萩原俊彦
平野幹雄
福野光輝

准教授
天野和彦
井川純一
岡崎勘造
東海林渉
吉田雄大

講師
臼倉瞳

国際学部
国際教養学科

教授
アンドリューズ　デール
郭基煥
佐々木郁子
古川弘子
松谷基和
三須拓也
渡部友子

准教授
李承赫
金亨貞
佐藤真紀
城山拓也
房賢嬉
フリック　ウルリッヒ

講師
沓掛沙弥香

教養学部
人間科学科

教授
黒須憲

言語文化学科

教授
秋葉勉
津上誠

地域構想学科

教授
松原悟

教養教育センター

教授
今井奈緒子
岸浩介
金永昊
佐伯啓
信太光郎
千葉智則
塚本信也
中村教博
坂内昌徳
楊世英
リース　エイドリアン

准教授
井上正子
巖谷睦月
原貴子
翠川博之
文景楠

講師
遠海友紀
斎藤渉
西田昌之
宮本直規
門間俊明

助教
千葉真哉

教員業務・活動報告

学　　長

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大西　晴樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

文　学　部

英　文　学　科

総合人文学科

歴　史　学　科

教　育　学　科

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	石橋　敬太郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・『イギリス詩Ⅰ・Ⅱ』、『イギリス演劇Ⅰ』および『英米文学演習Ⅰ・Ⅱ』において、学科課程における必要性という観点から到達目標と合致する資料を作成する。 ・小テストなどを実施しながら、学生の習熟度を確認して授業を進める。	
今年度の進捗状況	・上記目標については、小テストを実施して学生の習熟度を確認しながら授業を実施したことにより、有意な結果が得られたことから、ある程度の進捗がみられた。	
来年度の進捗目標	・小テストの問題を改善し、学生の習熟度の向上に努める。 ・2025年度担当予定の『イギリス文学史Ⅰ・Ⅱ』の配布資料を作成する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
『ジュリアス・シーザー』における権力者の倫理とその時代性	単著	2024年3月	英語英文学研究所紀要(48)	石橋 敬太郎	pp.1-19
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
『西の国の美女』二部作におけるノスタルジックなモロッコ表象	単著	2024年2月	東北学院大学論集(英語英文学)(107)	石橋 敬太郎	pp.81-97
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・イスラーム世界を扱ったイギリス演劇の改宗をめぐる主題について研究を進める。 ・著書『イスラーム世界を扱ったイギリス演劇』を完成させる。				
今年度の進捗状況	・上記目標については、研究対象であるフィリップ・マッシンジャー作『背教者』を除くすべての作品研究を終えたことから、ある程度進捗があったといえる。				
来年度の進捗目標	・上記目標については、フィリップ・マッシンジャー作『背教者』を研究会で発表したのち論文をまとめるとともに、著書の出版に向けた準備をする。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年9月～2023年9月	シェイクスピアの『冬物語』におけるヒューマニズムと信仰(東北学院大学文学部英文学科公開講座) 講師
2023年8月～2023年8月	文学作品における歴史的背景と現代社会の平和について 講師, 助言・指導

2021年4月～	日本シェイクスピア協会 委員
1987年4月～	日本英文学会東北支部 会員
1987年4月～	日本シェイクスピア協会 会員
1987年4月～	日本英文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1. 英語英文学専攻主任
2. 地域連携センター所員

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	泉　順子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容を理解し、習得してもらうための工夫	2023年4月～2024年3月	英語の授業では、その日に読んだ英文を学生が理解しているか確認するために、授業の終わりにドリル時間を設けている。このドリルを通じて学生がその日に学んだことを復習し、自らの理解度を確認できるような問題を作成している。
学生が自ら調べ、読み、論点を整理して、発表する力を身につけるための工夫	2023年4月～2024年3月	演習の授業では、作品についての自分の解釈に関連した先行研究論文を調べ、読み、その論点をまとめ、さらに参考になった点や興味深い考察などについて発表する機会を設けている。段階的に進めていくために、学生にはワークシートを配布し、そこに必要事項を記入してもらいながら、発表に必要な内容を積み上げられるようにしている。また、基本的な発表の作法を身につけてもらうために、一つの型を全員に実践してもらうだけでなく、聞き手に関心をもってもらえるような発表をするために心がけること、それを言語化できるような工夫を伝えた。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	① 学生の習熟度に合わせた授業運営 ② 学生の好奇心を引き出しつつ、学習内容を自らの体験や生活につなげていける工夫
今年度の進捗状況	① 本年度、本学に着任したため、2023年度は細かな点を確認しながら授業を進めた。そして教科書や授業資料の適合性など、調整する必要があることを認識した。 ② 授業で扱われている作品や資料を、どれだけ自分事として吸収し、同時に社会と繋げていくか、という姿勢を養っていくために、一通りの解釈に頼らずに多角的に作品を読み解くことの面白さを伝えられるような授業運営を心がけた。また、できる限り多くの参考書籍、先行研究、辞書を補足資料として紹介し、学んでいることを発展させたり、様々な事例を有機的に繋げることの面白さを感じてもらえるよう努めた。
来年度の進捗目標	① 学生間の習熟度には偏りがみられるため、できる限り全体の習熟度と個別の習熟度の双方を配慮しながら授業運営を行えるよう、さらなる工夫を重ねていきたい。 ② できるだけ多くの作品に触れることで、多様な世界観があることを認識してもらえるようにする。また、表面的な読みでは得られない気づきを導き出しながら、その作業を学生が主体的に行えるような指導をしていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
『高慢と偏見』に描かれる「ライブラリー」と「枠」――「読む」エリザベスの精神的成長との関連から――	単著	2024年2月	東北学院大学学術研究会，東北学院大学論集（英語英文学）(107)	泉　順子	pp.99-127
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

″Reading Short Stories for Psychological Well-Being.″	単独	2023年6月	16th International Conference on the Short Story in English(Nanyang Technological University)	Yoriko Izumi	

H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	① 19世紀～20世紀のイギリス小説研究 ② ＜読書＞に関わる文学・文化研究
今年度の進捗状況	① 2023年度は19世紀の女性作家による作品の研究を行なった。主に、彼女たちの作品に描かれる＜読書＞と＜手工芸＞の描写に注目し、当時の文化的・社会的背景を調べつつ、作品を読解・分析した。そして、その研究成果の一部を論文として発表した。 ② 2023年度は18世紀後半から19世紀のイギリス社会における女性と読者に注目して研究を進めた。その研究成果の一部を論文として発表した。
来年度の進捗目標	①については、今後も資料収集を継続しつつ、論考をまとめて発表していきたい。 ②については、今後も資料収集を継続しつつ、論考をまとめて発表していきたい。 ①と②に加え、20世紀初頭の作品研究についても研究成果を発表できるように努めたい。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2023年10月～	日本英文学会　東北支部 会員
2019年8月～	ASLE-Japan / 文学・環境学会 会員
2015年7月～2024年3月	日本読書学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	嘱託教授	氏名	植松　靖夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	嘱託教授	氏名	大石　正幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に興味を持たせると同時に，学生の自発的な学習を促すための工夫	2020年4月～	学修低下の著しい学生に理解力の涵養のため，理解が進むことを実感できる指導をおこなっている．問題設定と解を自分でおこなわせ，さらに，茫漠とした解を文字化することを通して理解の整理を促している．
授業内容の理解を促進するための工夫	2020年4月～	毎回の授業の冒頭から半分ほどまでを，復習に当て，前回の授業の概略を述べ，授業終了時には次回のための下準備を伝える．
論文作成および研究の指導	2020年4月～	大学院において，論文作成と研究遂行に必須の基礎的事項の指導を細かくおこなっている．
授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫	2020年4月～	授業とは別の時間を（オフィスアワー等を利用し）随時受け付け，学生個人の興味と習熟に沿った始動をしている．
授業内容の組み立てに関する工夫	2020年4月～	問題設定と判断材料，論理的帰結を常時意識させるようにし，項目中心ではなく大きな議論の枠組みで感上げることを意識させている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2004年～	日本英語学会

1983年～	日本英語学会 会員
1982年～	日本言語学会 (The Linguistic Society of Japan) 会員
1981年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	豊島　孝之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
反転授業	2022年10月～	大規模講義科目において、予習としてオン・デマンド講義ビデオを視聴させ、教室講義では再度詳説・追加事例を加えて授業を展開している。
学生の習熟度を見極めながら授業を行っている。	2018年～	必修、専門、選択などの科目の性質に応じて、授業形態、学生の興味・習熟度に応じて、授業の進度、説明、練習の分量・方式を試している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オン・デマンド講義ビデオ	2020年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Passive Nominals Cannot Voice the External Argument	共同	2023年6月	Journées Scientifiques Nantes Université: 10es Journées d'Etude sur les Nominalisations – Sizing Up Nominalizations(Nantes)	◎Hikaru Chiba, Takashi Toyoshima	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年5月～2023年10月	日本英語学会 2023年度　学会賞審査委員

2018年7月～	日本言語学会 会員
1994年1月～	Linguistic Society of America 会員
1990年11月～	日本英語学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	那須川　訓也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2022年度教育功績等優秀教員賞受賞	2023年7月6日	2021年度に実施された授業改善のための学生アンケートのほか，シラバスや教員業務活動報告などの資料に基づいて総合的に評価し，教育活動において優れていると認められた教員を表彰するものである．
論文作成，および，研究発表の指導	2023年4月1日～2024年3月31日	大学院において、論文作成、および、研究発表の仕方について、きめ細やかな指導をしている。
授業内容全体の組み立てに関する工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	学生のレベルや興味を把握し、それらを授業に反映させる目的で、独自の事前調査を初回の授業でおこなっている。
授業内容の理解を促進するための工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	毎回の授業の冒頭で、復習という意味で、前回の授業の概略を必ず述べ、授業終了時にはその回のまとめをおこなっている。
授業内容に興味をもたせると同時に，学生の自発的な学習を促すための工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し、それに沿って授業をおこなっている。授業内容の理解を深めるように、グループ活動および学習発表の機会を設けている。
業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	授業とは別の時間を設け、音声・音響解析装置を使いながら、学生個々人にきめ細やかな指導をしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Oishi, M. & K.Nasukawa. Introduction to English Linguistics. Llun Press.	2023年4月1日～2024年3月31日	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学模擬授業の講師を務めた。	2023年12月6日	宮城県古川高等学校の1年生を対象とした訪問学習（フィールドワーク）において、「英語の歴史、アメリカ英語の誕生」と題する模擬授業をおこなった。
Research中間発表会に、アドバイザーとして参加した。	2023年10月5日	宮城県向山高等学校の2年生を対象とした向陵Research中間発表会に、アドバイザーとして参加した。
大学模擬授業の講師を務めた。	2023年8月25日	宮城県向山高等学校の2年生を対象としたアカデミックインターンシップにおいて、「言語を研究する」と題する模擬授業をおこなった。
大学模擬授業の講師を務めた。	2023年4月27日	仙台市立仙台高等学校の2年生を対象に「英語らしい発音：子音編」と題する模擬授業（90分）を2回おこなった。

現在の課題・目標	①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「English Phonetics I・II」「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。
今年度の進捗状況	上記目標①については、授業評価アンケートで好評価を得ることができた。 上記目標②については、「English Phonetics I・II」「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善することで、より分かりやすい授業を展開することができた。 上記目標③についても、「英語学演習I・II」の教材を改善することで、より理解しやすい授業を展開することができた。 補足：　東北学院大学2022年度教育功績優秀教員賞（2022年7月受賞）。
来年度の進捗目標	①今年度に引き続き、授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ④「社会言語学I」の授業用ハンドアウトを改善する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Nasal vowels in French: A Precedence-free approach, *Elements, Government and Licensing: Developments in phonology*	共著	2023年8月	UCL Press	Backley, Phillip & Kuniya Nasukawa	pp.289-309
Effects of annual quantity of second language input on pronunciation in EFL environments, *Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives*, Volume 1: Cross-Linguistic Studies	共著	2023年7月	De Gruyter Mouton	Noriaki Yusa, Cornelia D. Lupsa, Naoki Kimura, Kensuke Emura, Jungho Kim, Kuniya Nasukawa, Masatoshi Koizumi and Hiroko Hagiwara	pp.193-209
Introduction to English Linguistics (3rd ed.)	共著	2023年4月	Llun Press	Oishi, Masayuki & Kuniya Nasukawa	pp.51-97
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Alexithymic traits augment intensity of utterance-final particles *-yo* and *-ne* as socioemotional linguistic markers in Japanese	共著	2023年4月	Department of Psychology, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University, *Tohoku Psychological Folia*, 81	Ge Song, Kuniya Nasukawa & Sachiko Kiyama	pp.15-26
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
A PfP approach to word-final consonants	単著	2023年10月	Sapporo University, *Phonological Externalization*, 8	Nasukawa, Kuniya	pp.61-74
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
シンポジア第6部門：語順決定の諸問題 語内部要素の具現化――音節構造と搬送信号変調度の関係	単著	2023年8月	日本英文学会，日本英文学会第95回大会（2023年度）Proceedings	那須川 訓也	pp.1-2
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
A PfP approach to the Domain-Final Empty Nucleus Parameter	単独	2024年2月	The 15th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure: Theory, Typology and History (PHEX15) (Tokyo Woman's Christian University + Online, Japan)	Nasukawa, Kuniya	
Hierarchical organization and precedence in phonology	単独	2023年11月	Workshop on Sequencing in Phonology (SIP) (University of Tromsø, Norway)	Nasukawa, Kuniya	
音韻範疇と超分節構造：モーラ性の表示を中心に	単独	2023年10月	The 14th Workshop on the Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (PHEX14) (札幌市（札幌大学）)	那須川 訓也	
The formal status of 'syllable' and 'mora'	単独	2023年8月	音韻論フォーラム 2023 特別企画：「モーラ」と「音節」の形式的位置付け (東京（目白大学）)	那須川 訓也	
Representing tones without precedence relations	単独	2023年6月	Government Phonology Roundtable (GPRT) 2023 (University of Ljubljana, Ljubljana, Slovenia)	Nasukawa, Kuniya	
音韻構造と音声的外在化	単独	2023年6月	関西言語学会 第48回大会 (オンライン)	那須川 訓也	
Vowel metathesis without precedence relations	共同	2023年5月	The 30th Manchester Phonology Meeting (University of Manchester, UK)	Nasukawa, Kuniya & Shin-ichi Tanaka	

語内部要素の具現化：音節構造と搬送信号変調度の関係	単独	2023年5月	日本英文学会第95回全国大会シンポジア第6部門「語順決定の諸問題」(神奈川県横浜市（関東学院大学 関内キャンパス))	那須川 訓也	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①進化言語学の枠組みで、非時系列音韻（Precedence-free Phonology）を用いて諸音韻現象を分析する。 ②様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。
今年度の進捗状況	上記目標①については、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した（「研究活動」を参照）。 上記目標②についても、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した（「研究活動」を参照）。 補足： 東北学院大学2023年度研究功績等賞（2024年1月受賞）。
来年度の進捗目標	①今年度の研究成果をもとに、進化言語学の枠組みで、非時系列音韻（Precedence-free Phonology）をさらに発展させ、音韻構造構築過程について探求する。 ②今年度に引き続き，様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2026年度	共同(研究代表者)	一般言語学における生成文法理論の見地から、語（形態素）を構成する音韻表示がどのように構築され、それがどのように音声的に具現化されるかを、理論的かつ実証的に明らかにすることを目的とする。従来、言語機能の統語部門は形態・統語表示のみを構築する演算装置であると考えられてきた。これに対し本研究では、音韻表示も統語部門で構築され、統語表示の外在化過程と同じ仕組みで、音韻構造も音声的に具現化（例 線形化、強勢付与、分節音弱化）されるということを理論的に明らかにすると同時に、諸言語の音韻現象を参照・分析し、考案モデルの妥当性を言語類型論的、言語獲得論的、通時的角度からも検討する。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	生成文法のミニマリスト・プログラムに基づき、統語（計算）部門で作られる構造（集合）が、どのように音声に写像されるかを、理論的・実証的に明らかにすることが目的である。線型順序のない統語構造に基づいて強勢と韻律が決定され、その特徴によって語順や「移動」などの「統語的」特徴が決定されるという新しいモデル Structure-Phonology-Order (SPO) を提案し、統語と音韻のインタフェイス（外在化）を理論的に明らかにするとともに、英語史コーパスおよび世界の言語の包括的なデータベースを検証することによって、このモデルが歴史的にも言語類型論的にも正しいことを実証する。
科学研究費助成事業 基盤研究(S)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	主語(S)が目的語(O)に先行するSO語順がその逆のOS語順に比べて処理負荷が低く母語話者に好まれる傾向があることが報告されている。しかし，従来の研究はSO語順を基本語順にもつSO言語を対象にしているため，SO語順選好が個別言語の基本語順を反映したものなのか，あるいは人間のより普遍的な認知特性を反映したものなのかが分からない。この2種類の要因の影響を峻別するためには，OS語順を基本語順に持つOS言語で検証を行う必要がある。そこで，本研究では，SO言語とOS言語を比較対照することによって，人間言語における語順選好を決定する要因ならびに，「言語の語順」と「思考の順序」との関係を明らかにする。

科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	日本語の文末助詞（ね、よ等）には、言語における対人コミュニケーション情報が集中的に出現する。例えばたった一文字の違いである「いいね」と「いいよ」は、適切に使用しないと問題となりえる。これに対応するかのように自閉症者は文末助詞（特に「ね」）をあまり使用しないことが知られている。本研究では終助詞が社会的な情報を生み出す脳メカニズムを検討し、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出す。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	日本音韻論学会 副会長
2018年4月～	日本言語学会 評議員
2017年11月～	Generative Linguistics in the Old World（GLOW） 査読委員
2017年7月～	文部科省委託 小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業「平成30年度東北学院大学小学校教員のための中学英語免許取得認定講習」（英語音声の仕組み） 講師
2016年1月～	John Benjamins 査読委員
2015年12月～	Glossa 査読委員
2015年5月～	Lingua 査読委員
2013年9月～	Journal of Linguistics 査読委員
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 査読委員
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 諮問委員会委員
2012年10月～	Old World Conference in Phonology（OCP） 査読委員
2010年10月～	The Linguistic Review 査読委員
2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事
2005年～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 会員
1998年～	Generative Linguistics in the Old World （GLOW） 会員
1997年～	日本音韻論学会 会員
1993年～	日本言語学会 会員
1993年～	Linguistic Association of Great Britain (LAGB) 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2020年 4月～2024年 3月　東北学院大学大学院文学研究科長
2020年 4月～2024年 3月　グループ主任（2020年度英文学科入学生）
2022年 4月～2026年 3月　グループ主任（2022年度英文学科入学生）
2023年 4月～2024年 3月　東北学院大学学術研究会評議委員長・編集委員長
2023年 4月～　文学部教員資格審査委員
他

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	バックレイ　フィリップ	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業の進め方，および，授業内容をよく理解させるための工夫	2023年4月	授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し，それに沿って授業をおこなっている。
授業内容に興味をもたせると同時に，学生の自発的な学習を促すための工夫	2023年4月	授業内容に興味をもたせるために，マルチメディア機器を利用している．また，それらの機器の使用方法を具体的に指導している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Nasal vowels in French: a precedence-free approach『Elements, Government, and Licensing: Developments in Phonology』	共著	2023年8月	UCLPress	P.Backley, K.Nasukawa	pp.238-254
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	福士　航	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	吉村　富美子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
zigsaw法による共同学習の推進<英語コミュニケーション演習Ⅰ～4＞	2021年4月～	学生に英文を読ませるときは、学生同士が助け合いながら学習できるようにzigsaw法を取り入れている。専門家グループで協力して担当部分の準備を行わせ、それぞれがホームグループに戻ったときに担当部分を音読し説明させている。このように分担を明確にし、学生通しの助け合いを推進するように工夫している。
プロジェクトの学生による振り返りの実施 ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞ ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学生に行わせたプロジェクトについては、詳細な振り返りシートを作成し、それに記入させることで、自分の活動やライティングプロセスの振り返りを行わせ、どのくらい努力をしたか、自分の得意・不得意は何か等自分の特徴をを確認させた。
教員独自の学生による授業評価の実施 ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学部で実施する学生による授業アンケートに加えて，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施し、授業改善に役立てている。
授業中に学生による相互評価(peer evaluation)などの活動を取り入れた ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞	2020年4月～	学生同士が書いた英文の途中原稿を読み合って，お互い批評をしたり補助したりする相互評価を授業中に取り入れている。
個別指導の実施 ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞	2020年4月～	さまざまなジャンルの英文ライティング課題をいくつかのプロセスを分けて、一つひとつの課題を丁寧に行うことで、最終的にはまとまった英文を書けるように指導している。学生には各学期3つのプロジェクトを課したが、学生の書いたfinal draft一つひとつは分析的評価表を用いて評価しコメントも書いて学生に返却して質問を受け付ける等の個別指導を行っている。
学生によるプロジェクト実施 ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学生に各自興味のあるトピックについてonline情報を探して読み、その内容を自分の言葉で言い換えたり要約したりして発表原稿を作成し、presentation sessionsでその内容を英語で説明してもらった。Presentation sessionsでは、司会 (chair)、発表の評価 (evaluation)、時間計測 (timer) 等の会議に必要な役割も英語で行わせている。さらに、話し言葉を書き言葉に再度書き換えさせ、引用のルールに従ってレポートを作成させた。学生の活動が中心だが、教員は工程表作成、実施確認、途中原稿へのフィードバック等を行いプロジェクトが円滑に行われるようにガイドした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
令和5年度英語科研修会ー小・中・高等学校の系統性を踏まえた「話すこと」の指導と評価	2023年8月22日	東北学院大学・宮城県教育委員会主催の英語科研修会において校種別の授業作りにおいて指導・助言、講評を行った。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
2023年度教員採用試験対策講座　英語Ⅰ　5時間目：ライティング力のつけ方	2023年7月4日～2023年7月4日	教員採用試験対策講座　英語Ⅰ　ライティング力のつけ方の中で、教員採用試験のライティング問題の傾向と解答法を説明したり、ライティングの勉強法を紹介している。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Searching for promising academic English instruction methods	単著	2024年2月	Institute for Research in English Language and Literature, Journal of Institute for Research in English Language and Literature, 48	Fumiko Yoshimura	pp.21-42
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Effectiveness of academic English on EFL academic reading comprehension and self-efficacy	単著	2024年2月	東北学院大学論集107号 英語英文学, 107	吉村富美子	pp.129-151
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 英語の名詞化に着目した指導が英文読解と読解への自信に与える影響に関する研究	2020年度～2023年度	個別(研究代表者)	アカデミックイングリッシュの大きな特徴の一つに名詞化(nominalization)がある。名詞化により英文は読みにくくなるが、名詞化には情報をまとめて論理展開に寄与するという働きもある。この名詞化に着目した指導を行うことで、学生の英文読解力が高まったり英文読解への自信が深まるかを実証研究によって検証することが本研究の目的である。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2019年6月～2024年3月	若草プロジェクト賛助会員(若草プロジェクト賛助会員)
2018年5月～	全国語学教育学会 会員
2010年3月～	TESOL International Association 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	井出　達郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概　　要
1．教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
自らの問いと向き合う力の養成	2023年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」の授業では，各回に自らの考察を書てもらい，その次の授業でよいと思えるものを共有した。
学生同士における学びの促進	2023年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
学生との双方向の授業づくり	2023年4月	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。「英米文学概説」「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「英語II」の授業では，毎回まとめと感想を含んだ小レポートをmanabaで提出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「演習」の授業では，未翻訳のテクストを分担して訳したものを提出してもらい，こちらで添削を行い，ポイントを解説した。
自らの問いと向き合う力の養成	2022年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では，各回に自らの考察を書てもらい，その次の授業でよいと思えるものを共有した。
学生同士における学びの促進	2022年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
学生との双方向の授業づくり	2022年4月～	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。「英米文学概説」「英語II」「文学」の授業では，毎回まとめと感想を含んだ小レポートをmanabaで提出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「演習」の授業では，未翻訳のテクストを分担して訳したものを提出してもらい，こちらで添削を行い，ポイントを解説した。
自らの問いと向き合う力の養成	2021年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」では，各回に自らの考察を書てもらい，それに関連する文献なども自分で見つけながら，最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。
学生同士における学びの促進	2021年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。

自らの問いと向きあう力の育成	2020年～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。 「Academic Writing」では，エッセイとして書く内容を自分たちで決定させ，それに関連する文献なども自分で見つけながら，最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。
学生同士による学びの促進	2020年～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員が英語でプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者が英語でプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。
学生との双方向の授業づくり	2020年～	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。 「Academic Writing」の授業では，学習支援システムmanabaで書いたものを提出してもらい，こちらからの添削をコメントをつけて返却した。

2. 作成した教科書、教材、参考書

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	・自分の言葉で考え、発表する力を養成する。 ・英語学修において、インプットだけでなくアウトプットの機会を設ける。
今年度の進捗状況	・生成AIの登場により、翻訳やレポートにおいてそれらを用いたものが散見され、この環境の中でどのような課題があるかが浮き彫りになった。 ・英語IIだけでなく演習においても英語で意見を言う時間を設けたが、多くの学生がほとんどうまくいかず、まず話す内容をしっかり準備させるという課題が浮き彫りになった。
来年度の進捗目標	・生成AIを利用しながらも、自分の言葉で考え、発表するための適切なやり方を考え、実践する。 ・学生にとって効果的な英語のアウトプットへと至るための適切なやり方を考え、実践する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
‘I’ as an Experience of Radical Passivity in Charles Yu’s ″Standard Loneliness Package″	単独	2023年9月	The 27th Biennial AISNA Conference, “Vulnerabilities: Weaknesses, Threats, Resilience in the U.S.A. and in Global Perspective”(Narni, Italy)	Tatsuro Ide	
モダンムーヴメントでつなぐロレンス、ミラー、ニンの「流れ」──精神分析、欲望、建築をめぐって	単独	2023年9月	第12回アナイス・ニン研究会(東京)	井出達郎	
″Where did it begin?″: Care for Singularity through Temporal Vulnerability in F. Scott Fitzgerald’s Tender Is the Night	単独	2023年6月	The 16th International Fitzgerald Society Conference(Växjö, Sweden)	Tatsuro Ide	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・今年度に終了する科研費の研究を単著としてまとめる。 ・今年度に行った国際学会での口頭発表を論文としてまとめる。
今年度の進捗状況	・今年度中に内容をまとめきることができず、やや遅れている。 ・科研費の研究の遅れに合わせ、着手することができずにいる。
来年度の進捗目標	・科研費の研究を単著としてまとめる。 ・国際学会での口頭発表を論文としてまとめる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	(研究代表者)	伝統的に個人の自律性に重きを置いていたアメリカにおいて、とりわけその自己のあり方が国家および個人レベルで大きく揺らいだモダニズム期の文学作品群に注目し、個人の自律性の理念からは否定的に克服すべきものとされてきた「傷つきやすさ（vulnerability）」のモチーフを拾い上げ、それが他者への「ケア（care）」という積極的な意味の物語を生み出してきたことを浮き彫りにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会 編集委員会
2019年4月～	日本ロレンス協会 編集委員会
2017年4月～	日本F.スコット・フィッツジェラルド協会 大会・研究会準備委員会
2014年4月～	日本アメリカ文学会
2013年4月～	日本英文学会
2012年4月～	日本アメリカ文学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	大沼　仁美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	森山　盛吉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	川島　堅二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
いま日本社会に求められる宗教リテラシーについて	単著	2023年12月	生活経済政策	川島堅二	pp.12-16
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
『わたしがカルトに？　ゆがんだ支配はすぐそばに』	監修	2023年6月	日本キリスト教団出版局	斎藤篤, 竹迫之	pp.3-8
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
大宮司信『宗教精神病理学』弘文堂2020年	単著	2023年6月	東北学院大学キリスト教文化研究所紀要(第41号)	川島堅二	pp.91-97
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年9月～	日本脱カルト協会顧問 委員
2016年9月～	日本基督教学会
2005年4月～	日本宗教学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	木村　純二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
歌語としての「みたま」（六）	単著	2024年3月	東北学院大学宗教音楽研究所、『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第28号(28)	木村純二	pp.1-8
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
「美と徳の狭間 風流をめぐって」	単独	2023年9月	日本倫理学会第74回大会ワークショップ「徳倫理学ワークショップ6 西洋との対話で考える日本の徳」(オンライン開催)	立花幸司, 木村純二, 上野太祐, 板東洋介	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年10月～	日本倫理学会年報編集委員会
2017年4月～	日本倫理学会
2008年11月～	日本思想史学会 会員
2004年4月～	東北哲学会 会員

1997年4月～		日本倫理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	椎名　雄一郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ディベートの大人数授業での導入	2023年9月20日～2024年1月31日	「キリスト教の歴史と思想」の100人を超える受講者で、ディベートをおこなった。いくつかのテーマを決め、賛成派、反対派を小グループで割り振り、賛成、反対を交互に発表した。聴いている学生にはディベート前後にテーマについて賛成か、反対かをresponで意思表示をしてもらい、ディベート前後でどのように賛成反対の考えが変化しているかをとおして、テーマへの内容理解を深めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
QRコードの使用した鑑賞曲共有	2023年4月1日～2024年3月31日	キリスト教と音楽、ヨーロッパ音楽史では、各回授業で多くの作品を取り上げるが、すべてを授業内で聴くことは困難である。昨年まではmanaba上にYouTubeの再生リストのURLを挙げていたが、今年度はスマホで手軽に操作ができるよう、授業教科書内に各回QRコードを付し、授業前後の学修のために提供した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・「聖書を学ぶ」、「キリスト教の歴史と思想」、「キリスト教学」においては、講義型の授業ではなく、アクティブラーニングを取り入れた授業を目指す。 ・専門科目においては最新の研究成果を授業内容に取り入れる。 ・授業方法において、学生がより資料等を手に入れられるような方法を開発する。
今年度の進捗状況	・「キリスト教の歴史と思想」では、授業内でディベートの要素を取り込んだ。身近な話題をディベート課題とし、そこからキリスト教の思想を説明する形式をとったが、学生の反応は良く、より課題に取り組む姿勢が見られた。 ・一定数の学生が、授業内容に興味を持てないと思われる学生がおり、どのように興味を持ってもらうかが課題である。 ・専門科目では、想定外の履修者数により、プレゼンテーションなどができなかった。 ・授業ではすべて聴くことができない音源をQRコードで提供するなど工夫を行った。
来年度の進捗目標	・興味を持つ学生への教育内容は今年度の内容を引き続き継続する。 ・興味をもつことが難しい学生にどのように、興味をもち学修するように持っていくかが課題である。オンライン上の様々なツールを研究しつつ、使用していく。 ・専門科目においは双方向のアクティブラーニングを推進する。具体的には作成教科書をさらに改訂し、各項目に話し合うべき課題を挙げ、実際に授業内でディスカッションする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
J.S. バッハのオルガン観 ―ミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」をめぐって―	単著	2023年6月	東北学院大学キリスト教文化研究所, 東北学院大学キリスト教文化研究所紀要, 41	椎名　雄一郎	pp.23-45
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・J.S.バッハのオルガン作品を、社会、楽器、演奏習慣、神学等、様々な視点から研究する。 ・J.S.バッハとその周辺の作曲家、また当時の楽器に関する研究を進める。 ・バッハに関する専門書と一般向けの書を同時並行でまとめ、発表する。
今年度の進捗状況	・昨年度から継続して研究している「バッハのオルガン観」について、総合人文学科の公開講座等で発表した。 ・来年度研究書出版に向けて、J.S.バッハのオルガン作品の内、自由作品の研究を進め、年内に研究成果をまとめることができた。 ・一般向け書については編集者とも話し合いつつ、全体の構成を固めた。
来年度の進捗目標	・2024年に出版予定の研究書の内容の確認、補足資料収集を引き続きおこなう。 ・一般向け書については執筆を進める。 ・「バッハとオルガン」と題して、楽器、そしてキリスト教からの視点から、バッハのオルガン音楽研究を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年2月	椎名雄一郎オルガン公開レッスン＆セミナーコンサート 講師
2023年5月	日本オルガン研究会 運営委員
2022年4月～	横浜みなとみらいホールオルガン委員会 専門委員
2022年4月～	日本基督教団讃美歌委員会 実務委員
2022年4月～	秋田アトリオンホールオルガン講座特別講師 講師
2021年5月～	日本オルガニスト協会 副会長
2021年3月～	日本音楽学会 会員
2013年9月～	ピティナ（一般社団法人全日本ピアノ指導者協会） 会員
1994年5月～	日本オルガン研究会 会員
1993年5月～	日本オルガニスト協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
日本基督教団富士見町教会イースター・オルガン演奏会	日本基督教団富士見町教会大礼拝堂	2024年3月	シャイト、シャイデマン、バッハ等の作品
第19回市川三本松教会オルガンコンサート「アドヴェントに備えて」	日本キリスト教団市川三本松教会	2023年11月	アドヴェントに因んだオルガン作品
パイプオルガンコンサート	日本キリスト教会仙台黒松教会	2023年10月	ベーム、バッハ、プラニアフスキー等の作品

現在の課題・目標	・J.S.バッハのオルガン作品を中心に、様品研究と演奏実践をおこなうことを課題としている。 ・北ドイツ・オルガン楽派からの影響を研究する他、バッハの各作品の作品改訂にも注目し、初期稿などの演奏も積極的におこなう。
今年度の進捗状況	・6月に北ドイツ・オルガン楽派のブクステフーデ、ベーム、ブルーンスの作品による自主リサイタルを開催した。バッハにどのような影響を与えたかが、聴衆が理解できるプログラムを構成した。 ・様々な演奏会場の楽器に適した作品を演奏することを、第一にプログラムを各演奏会で組んだ。
来年度の進捗目標	・北ドイツの楽器で、ブクステフーデのオルガン作品の録音を予定。 ・北ドイツの楽器でバッハのオルガン作品演奏の可能性は探る。 ・バッハの作品では初期稿を意識したコンサートプログラムを構成する。 ・11月にリサイタルを開催し「バッハからの道」をテーマにブラームス作曲の《11のコラール前奏曲集 op.122》全曲を取り上げる。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・就職キャリア委員として、3年次学生を対象に2回のガイダンスをおこない、就職活動への準備の機会をもった。
・キリスト教文化研究所長として、各種催しの企画・実施を統括した。

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	嘱託教授	氏名	出村　みや子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	2023年度文学研究科FD研修会(2023.2.17)	
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
オリゲネスの『ケルソス駁論』における護教論的意図とその多文化主義的文脈	単著	2023年6月	東北学院大学キリスト教文化研究所紀要, 41	出村みや子	pp.47-60
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Christianity and Roman Civic Duties in Origen's Contra Celsum	単独	2023年9月	13th Asia-Pacific Early Christian Studies(シンガポール)	DEMURA　MIYAKO	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	原田　浩司	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
第28回東北学院大学キリスト者研修会発題	2024年1月25日	大学礼拝の状況と説教の課題　～　聴き手の「今」と聖書の言葉
第67回東北学院大学教職員修養会 全体協議発題	2023年8月21日	東北学院宗教センター発足とその活動
2023年度東北学院中高修養会講師	2023年8月18日	第一回: 東北学院のキリスト教 ～ 原点としての「LIFE LIGHT LOVE」 第二回 「LIFE LIGHT LOVE」を念頭に置いたキリスト教教育の実践
4. その他教育活動上特記すべき事項		
中高大一貫教育事業 入学前教育プログラム　宗教の講話	2024年2月13日	東北学院（TG）の「キリスト教教育」～ 実例からの学び
岩手県立一関第一高校出張講義	2023年7月5日	「『死生学』って何だろう？」

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2011年6月～	日本基督教学会 会員
2010年4月～	日本基督教団の諸教会での主日礼拝の奉仕（説教・聖礼典の執行）講師

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	吉田　新	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
参加型授業への工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	大規模授業である1年次「聖書を学ぶ」「キリスト教の歴史と思想」、3年次「キリスト教学Ⅱ（キリスト教と現代社会」「キリスト教学Ⅱ（キリスト教と文化）」において、コメントカードやマナバ等を用いて、可能な限り、双方向型の授業になるように心掛けた。 また、今年度も、視聴覚教材を多く用いるなど、可能な限り理解しやすい授業を運営するように心掛けた。キリスト教学関連の授業では、聖書やキリスト教に初めて触れる学生たちに対して、学生にとって身近な問題を通して、聖書の内容などを理解できるように努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	① 参加型授業が可能か模索したい。 ② フィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に取り組みたい。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成に取り組みたい。
今年度の進捗状況	① 今年度も、大規模教室の授業において参加型授業をできる限り取り入れるように試みた。 ② 今年度、学外のフィールドワークは開催することはできなかったが、授業内容をさらに深めるために礼拝堂や資料館を見学するなどを行った。 ③「総合人文学の基礎」において、宗教・神学の研究内容をできる限り詳しく説明した。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に今年度も取り組んでいる。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成に今年度も取り組んでいる。
来年度の進捗目標	① 大規模教室授業において、双方向型、参加型授業が可能か模索したい。 ② 学内外のフィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③「人文学演習」において、卒業論文を三年次から具体的に準備できるように指導したい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に取り組みたい。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成に取り組みたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
日本語版BasisBibel の可能性について	単独	2023年8月	第4 回日本聖書翻訳研究会(東京)	吉田新	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①『ペトロの第一の手紙』の釈義の書籍化を実現する。 ② 和訳聖書翻訳史の研究　和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、次年度以降の書籍化をめざす。 ③『ペトロの第一の手紙』におけるメタファーに関する研究を開始する。

今年度の進捗状況	①『ペトロの第一の手紙』の釈義の書籍は次年度に出版する予定である。 ② 和訳聖書翻訳史の研究　和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を続けている。 可能であれば、次年度、または次々年度に書籍として出版したい。 ③『ペトロの第一の手紙』におけるメタファーに関する研究を引き続き進めている。
来年度の進捗目標	① 和訳聖書翻訳史の研究　和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、書籍化をめざす。 ②『ペトロの第一の手紙』におけるメタファーに関する研究を続け、学術論文としてまとめる。 ③ 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版を目指す。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年9月～	日本聖書翻訳研究会 会員
2021年9月～	日本聖書翻訳研究会 書記
2017年4月～	日本基督教学会東北支部幹事 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	田島　卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
RTTPを用いた授業の運営	2023年9月1日～	Reacting to the Past(RTTP)というロールプレイング形式のゲームを用いて、旧約聖書概説Ⅱの授業運営を行なった。
manabaの掲示板を活用した双方向学習支援	2020年9月1日～	学生の学習状況を確認し、遠隔授業で欠落しがちな学生相互のつながりの構築のために、各階の小レポートに替えて、掲示板に小レポートと同程度の文章を投稿してもらい、学生相互のやりとりを活性化した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①専門教育科目（「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」）におけるテクストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。 ②「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」において、専門性を維持しながら、学生のアクティブラーニングを促す。 ③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進し、ディプロマポリシーにより適合した授業展開を図る。
今年度の進捗状況	①専門教育科目（「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」）におけるテクストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。 → ただし、テクスト読解の実践に関しては、十分な効果を上げることが難しかった。シラバスおよびクラスデザインの変更を検討したい。
来年度の進捗目標	テクストをベースにした具体的な読解・思考能力の深まりを目指す。 ドイツ語圏における新たな教科書を批判的に導入することで、より先端の研究成果と関連した授業を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『浅野順一『予言者の研究』』	単著	2023年4月	講談社学術文庫	田島　卓	pp.250-256
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
田中光『新しいダビデと新しいモーセの待望』	単著	2023年9月	日本の神学, 62	田島　卓	pp.118-123
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①イザヤ書53章を中心とした、イザヤ40-55章の成立史について、特にFortschreibungモデルの理解を深め、批判的検討を行う。 ②①に基づく、「僕の詩」テクストの哲学的解釈・文芸批評的意義を検討する。
今年度の進捗状況	モーセ五書の全体に関わる構成に関して、一定の見方の変更を獲得した。 雅歌理解に関して、インターテクスチュアリティに関する読解に一定の仮説を立てることができた。

来年度の進捗目標	モーセ五書および預言者の、相互的影響関係や、アップデートされた仮説を踏まえながら、思想的意義を再検討する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年4月～	聖書学研究所
2018年9月～	日本基督教学会 会員
2017年6月～	日本旧約学会 会員
2011年4月～	日本宗教学会 会員
2009年4月～	日本倫理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	大門　耕平	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		①キリスト教関連科目において、アクティブラーニング、協働的な学習を導入し、主体的で深い学びを提供する。 ②論文演習などの研究を目的とする講義において、、研究手法などを教示し、主体的で意欲的な研究活動を実現する。 ③教職科目の担当において、理論と教育現場での実践を結び付けた学びの機会を提供する。
今年度の進捗状況		①アクティブラーニング、協働的な学習を多く取り入れることにより、積極的な参加が実現できた。 ②論文指導において、データ分析、アンケート調査という手法での研究活動を行わせることができた。 ③理論の学びだけではなく、現場での実践例やデート分析をおこなうこと、及び、新しい教育の形であるICTを用いた教育実践についての学びも提供した。
来年度の進捗目標		①より主体的で意欲的なマン日を提供するために、引き続きアクティブラーニング・共同的な学習を実現するための教育法について研究する。 ②研究手法を複数提示することにより、様々な手法での研究活動（卒業論文）を促す。 ③教職科目の担当において、複数の中学校高等学校の現場教員との連携を深め、教材の共有や実践例の検討などの学びを提供する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
数学科における発展的な学習に関する研究	単著	2024年3月	鳴門教育大学教員教育国際協力センター, 鳴門教育大学国際教育協力研究(17)	坂井武司, 大門耕平, 赤井秀行, 石坂広樹	pp.11-17
幼児期の宗教教育の経験が中学生の自己肯定感・ソーシャルスキル・道徳性の発達に及ぼす影響についての研究	単著	2024年2月	東北学院大学学術研究会, 人文学と神学(21)	大門耕平	pp.33-46
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
幼小接続期のパターンの認識を評価するフレームワークに関する研究	共同	2024年3月	2024 年度数学教育学会春季年会(大阪公立大学 杉本キャンパス旧教養地区8号館)	坂井武司, 赤井秀行, 石坂広樹, 日下智志, 大門耕平	
英語教育におけるラウンドシステムの導入が中学生の英語への意識および成績に与える影響	共同	2023年12月	日本教育実践学会 第26回研究大会(上越教育大学　新潟県上越市山屋敷町1番地　臨床研究棟, 音楽棟, 美術棟, 講義棟)	大門耕平, 荻本竜也, 来田宣幸	
学校いごこち度アンケートを用いた生徒支援の実践	共同	2023年12月	日本教育実践学会 第26回研究大会(上越教育大学　新潟県上越市山屋敷町1番地　臨床研究棟, 音楽棟, 美術棟, 講義棟)	@駒田淑久, 大門耕平, 来田宣幸	

生徒会広報誌を用いた中学生へのいじめ防止教育の効 果の検証	共同	2023年8月	日本応用心理学会第 89 回大会 (東京都武蔵野市・亜細亜大学)	大門耕平,荻本竜也, 来田宣幸	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①キリスト教教育の教材の検討、および、実践、そして、その効果について、検証する。 ②中学校教育における生徒支援のためのシステムの構築を実現する。 ③日本の近代化における宣教師(ヴォーリズ)の功績について調査を実施する。
今年度の進捗状況	①学術論文1本を執筆した。 ②学術論文を1本、および、学会発表3件をおこなった。 ③滋賀県庁をはじめ、複数の企業によるヴォーリズについての冊子に原稿を執筆した。
来年度の進捗目標	①キリスト教教育についての教材の開発・実践・検証を行う。 ②学校教育について、生徒視点のための教育実践について検証を行う。 ③ヴォーリズの活動についての資料をまとめ、学会や学術論文で発表する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年10月～	「宗教と社会」学会 会員
2016年5月～	日本応用心理学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	藤野　雄大	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「東北学院の神学について―東北学院神学部とユニオン神学校、ランカスター神学校との結びつきから」	単著	2024年3月	学校法人東北学院，東北学院史資料センター年報(9)	藤野雄大	pp.37-47
「チャールズ・G・フィニーの罪人の回心と『完全なる聖化』(Entire Sanctification)に関する考察」	単著	2024年2月	東北学院大学学術研究会，人文学と神学(21)	藤野雄大	pp.15-32
「マーサーズバーグ神学の教会論と教会史研究の結びつき:『教会論的疑問』を巡って」	単著	2023年12月	歴史神学研究会，歴史神学研究(7)	藤野雄大	pp.80-107
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
「マーサーズバーグ神学におけるドイツ神学の受容」	単独	2024年3月	キリスト教学会東北支部会(東北学院大学)	藤野雄大	
「フィリップ・シャフの神学に見るアメリカ例外主義	単独	2023年9月	キリスト教史学会(東北学院大学)	藤野雄大	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年9月～	基督教史学会 会員

2019年9月～	日本基督教学会 会員
2019年6月～	Mercersburg Society 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	渡邊　有美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
「『聖なる家(サンタ・カーザ)』と巡礼ー教皇庁とフランチェスコ会との関係からー」	単著	2024年3月	『ヨー ロッパ文化史研究』(25)	渡辺有美	pp.1-1
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年7月～	早稲田大学イタリア研究所　招聘研究員 研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	渡邉　蘭子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向型授業の工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	担当するすべての授業においてresponを用いて学生にコメント（意見・感想）を書いてもらい、その場で教員が応答することで双方向型の授業を行った。また、コメントを他の学生にも共有することで、視野を広げたり、理解を深められたりできるようにした。さらに、文字資料だけでは理解しにくい事柄についてはイメージが湧きやすいように映像資料を活用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・学科専門科目でグループディスカッションを効果的に行う。 ・すべての授業において学生が授業に集中できるようにresponや小テストのタイミングを工夫する。
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	・学科専門科目ではグループディスカッションの前に、蓄えた知識や自分の意見を整理してレポートを書いてもらい、充実した議論ができるようにする。 ・すべての授業においてresponを授業内で何度か提出させて集中が切れないようにする。 ・「聖書を学ぶ」と「キリスト教の歴史と思想」において最後に小テストを行うことで集中が切れないようにする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
キリスト教と夢―アウグスティヌス	単独	2023年11月	西洋古典学連携共同研究会（Zoom）	渡邉蘭子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・博士論文の内容を学会発表でブラッシュアップし、出版に向けて準備を進める。 ・西洋古典学連携共同研究会において担当しているキリスト教と夢（特にアウグスティヌス）についての議論をまとめ、出版に向けて準備を行う。 ・アウグスティヌスの研究書（英語）の翻訳を仕上げる。
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	・博士論文の一部をブラッシュアップしたものをコロキウム・パトリスティクムや教父研究会で発表し、教父研究会の雑誌『パトリスティカ』に論文投稿する。 ・西洋古典学連携共同研究会でキリスト教と夢（特にアウグスティヌス）について2回目の発表を行い、出版準備を本格化させる。 ・アウグスティヌスの研究書（英語）のパート1を翻訳完了させる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2019年8月～2023年12月		コロキウム・パトリスティクム 幹事	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	小沼　孝博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
動画コンテンツの活用	2023年4月～	オンライン授業を実施した経験をふまえ、対面型の授業においても、従来に比べて動画コンテンツを積極的に取り入れた授業を実践している。
専門購読の授業内容の刷新	2023年4月～	3年生対象の専門購読では、2023年度より、東北学院大学図書館において未整理のまま残されていた約3,000冊の漢籍の整理を開始した。なお手探りの状態が続くが、学生たちの意識も高く、研究・教育に活用できるようデータの採取と入力作業を進めている。
演習科目でのレポート採点	2023年4月～	3年生の総合演習の授業では学期末に字数制限を設定したレポートを、2年生後期の基礎演習Ⅱでは輪読テキストの要約文を課している。それらはすべて添削をおこない、コメントを付して返却し、受講者は修正稿を再提出することになる。添削および評価のポイントは、課題の内容が的確にまとめられているかとい点だけではなく、文法・構成・論理展開など日本語の文章としての正確さに力点を置いている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
漢籍整理のための教材作成	2023年4月1日～	専門購読で実施している漢籍整理に関連する教材・マニュアルの作成を進めている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
ウズベキスタンにおける文化講座の講師	2024年2月27日	タシュケント国立東洋学大学日本学部に招かれ日本文化講座の講師を担当した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Manchu Words Referring to the Qing Emperor: han and ejen	単著	2023年6月	Saksaha: A Journal of Manchu Studies, 12	Onuma Takahiro	pp.61-72
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
1871年阿古柏伯克与清朝交涉始末	共著	2024年3月	アジア流域文化研究(15)	新免康、小沼孝博	pp.101-107
20世紀前半のグルジャにおけるユヌチ家の活動	単著	2024年2月	東北学院大学論集 歴史と文化(69)	小沼孝博	pp.215-234
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
＜新刊紹介＞「華立『清代新疆社会変遷研究』」	単著	2023年6月	満族史研究(22)	小沼孝博	pp.85-86
G．学会における研究発表					

1762-63年におけるアフガン使節の来朝：清朝宮廷とムスリム	単独	2024年2月	東北大学イスラム圏研究会・第5回公開講演会「ユーラシアにおけるムスリムの移動と文化の様態」(東北大学東北アジア研究センター4階436会議室)	小沼孝博	
20世紀前半のグルジャにおけるヨヌチ家の活動	単独	2023年11月	科研費基盤(B)「現代新疆における少数民族の文化動態に関する研究」2023年度第1回研究会(東洋文庫7階大会議室)	小沼孝博	
清代におけるムザルト峠の交通と管理：その予備的考察	単独	2023年5月	科研費基盤(B)「近世・近代移行期のアジア山岳地域における峠の交通と地域変容」第1回研究会(Online)	小沼孝博	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2023年度～2026年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2020年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2020年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～	満族史研究会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	河西　晃祐	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド型キャリア教育の実施	2020年～	3年次前期科目「近現代日本と東アジア」の講義に際して、3年生の就活支援のために「就活動画」を作成し、学生への就活支援を行った。
オンライン・アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料解読の課題を提示し、毎回提出させている。	2020年～	毎回の講義中に、アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料に関する課題を提示し、周囲の学生らと話し合いながら課題解決に至る時間を設け、必ず課題を提出させている。
オンデマンド型講義動画の作成	2020年～	コロナウィルスの流行により、大講義はオンデマンド型講義となったので、映像・画像資料などを取り入れた講義動画を作成した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オンデマンド型講義動画の作成	2020年～	前期に2本、後期に1本の講義動画を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	日本植民地研究会 理事
2017年4月～	日本植民地研究会理事(日本植民地研究会理事就任（現在に至る）)
2009年4月～	岩沼市史編纂 委員
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク 理事

2007年4月～	東北史学会
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事就任(現在に至る))

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	楠　義彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
パワーポイントの利用	2018年～	「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリィ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。
授業評価の実施	2017年4月1日～	学科で決定したすべての授業で実施している。
独自に作成した資料の配布	2017年～	「ヨーロッパ中近世社会史」の授業で、授業内容を図式的に理解できるように工夫している。特に一人ひとりが資料を読み取った結果を、少人数のグループで検討させ発表させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ヨーロッパ中近世社会史の教科書『魔女のヨーロッパ史』の作成	2022年7月13日～	楠義彦『魔女のヨーロッパ史』KDP（アマゾン直販）、2022年、全235頁、1700円（税別）。ISBN 978-8-8401-9039-5
東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』	2020年～	コラム4「日本地震学会とイギリス人の地震観」95-96頁
授業内容のレジュメの作成と配布	2010年1月～	学生の理解を深め定着させるために，授業での板書とは別にレジュメを配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	佐川　正敏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員自身が1986年～1998年に文化庁奈良国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）で研究員・主任研究官として飛鳥地域や藤原宮・京跡、平城宮・京跡の発掘調査と研究に従事した経験を授業に活かしている。また、東・北アジアを中心とする国内外の遺跡で毎年実施してきた考古学的調査・研究の成果、その際に撮影した映像資料に基づいて作成し、更新しているパワーポイントを授業教材として使用している。	2020年4月1日～	考古学概説Ⅰ（1年）、基礎演習Ⅰ（2年）アジアにおける国家の誕生（3年）、考古学実習Ⅰ（2年）、考古学実習Ⅱ・Ⅲ（3年）、考古学総合演習Ⅰ・Ⅱ（3年）、考古学の諸問題Ⅱ（3年）、考古学論文演習Ⅰ・Ⅱ（4年）、考古学の諸問題Ⅲ（4年）， 及び大学院講義科目で実施
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)	2021年度～2025年度	共同(研究分担者)	モンゴルのウイグル可汗国地方官衙遺跡であるシャルツ・オール1遺跡の発掘調査と出土瓦塼の調査及びその中国・ロシアとの比較研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	岩手県一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会 委員
2018年4月～	岩手県「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会 委員
2016年11月～	国史跡 鳥海柵跡（岩手県金ケ崎町）整備委員会 委員

2016年11月～	国史跡 上人壇廃寺跡(福島県須賀川市)整備委員会 委員長
2016年4月～	山形県高畠町日向洞窟調査指導委員会 委員
2012年6月～	長野県茅野市尖石遺跡縄文文化賞審査委員会 委員
2010年3月～	福島県南相馬市国指定史跡「泉官衙遺跡」調査・整備検討委員会 委員
2004年6月～	日本旧石器学会会員 会員
2000年9月～	中国社会科学院古代文明研究センター 客員研究員
1998年5月～	宮城県考古学会 会員
1998年2月～	古代瓦研究会 会員
1990年4月～	日本考古学協会会員 会員
1989年9月～	日本中国考古学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	櫻井　康人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
考える力の向上	2021年4月～	演習において自由討論の機会を極力多く設けることで、学生の考える力の向上を図っている。
考える力の向上	2020年4月1日～	演習等において，学生が自発的に自分の考えを発言し，そして他の学生がそれに対する自分の考えを述べられるような雰囲気を作ることに努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
貨幣封から見る十字軍国家の社会構造（1099～1192年）	単著	2024年3月	ヨーロッパ文化史研究(25)	櫻井康人	pp.49-72
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
教皇クレメンス4世の十字軍政策（Ⅰ）	単著	2024年3月	東北学院大学論集　歴史と文化（旧歴史学・地理学）(69・70)	櫻井康人	pp.191-214
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『十字軍国家』	単著	2023年8月	筑摩書房	櫻井康人	pp.1-414
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	西洋中世学会常任委員 会員
2007年4月～	東北史学会評議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	佐藤　義則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	国公私大学図書館協力委員会・大学図書館著作権検討委員会顧問 委員
2014年6月～	宮城県図書館協議会 委員（会長）
2013年12月～	国立国会図書館科学技術情報整備審議会 委員
2008年7月～	一般社団法人ALFAE（アジア・太平洋　食・農・環境　情報拠点）相談役 委員
2006年7月～	American Society for Information Science & Technology. 会員 委員
2005年4月～	国立国会図書館カレントアウェアネス編集企画委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	下倉　渉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	竹井　英文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミにおける地域史研究活動の実践	2021年4月～	仙台市周辺にフィールドを定め、城館跡の縄張調査、古文書・古記録の調査、石造物や古道の調査、古絵図の調査を行い、総合的に地域史を研究する活動をしている。これまで利府町・松島町をフィールドに調査し、研究成果を『東北文化研究所紀要』に掲載してる。2023年度は黒川郡域の研究を開始した。
「古文書学Ⅰ」の授業における工夫	2021年4月～	古文書に記された文字を解読・読解するだけでなく,①本物の古文書を使っての実演・解説,②パワポによるを使用した解説,③古文書のコピーを配布して折り方・封の仕方を学生に体験してもらう,④サインである花押を実際に書いてもらい,かつ自分オリジナルの花押を作ってもらう,などのことをした。
城館跡での縄張図作成会の実施	2021年4月～	学生有志と仙台市周辺の城館跡の縄張図（平面プランを表した図）の作成会を随時実施している。自ら図を描くという作業を通して,城館の構造を身をもって理解すると同時に,遺跡そのものから歴史・地域を考える手法を学んでもらっている。2023年度は、名取市内の城館跡などで実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
「越中国切」をめぐる政治過程―信濃情勢との関わりから―『シリーズ織豊大名の研究11　佐々成政』	共著	2023年8月	戎光祥出版, 1	竹井英文	pp.243-268
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「越中国切」をめぐる政治過程―信濃情勢との関わりから―	単著	2023年8月	戎光祥出版, シリーズ織豊大名の研究11　佐々成政	竹井英文	pp.243-268
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
全国城郭一覧『郷土史年表・資料集』	単著	2024年2月	朝倉書店	竹井英文	pp.404-409
はじめに,Ⅲ　織豊期『描かれた中世城郭　城絵図・屏風・絵巻物』	編者（編著者）	2023年12月	吉川弘文館, 1	竹井英文	pp.1,89-134
第三編第五章「近世の幕開けと相馬氏」『相馬市史1　通史編Ⅰ　原始・古代・中世』	編纂	2023年11月	相馬市, 1	竹井英文	pp.586-639
はしがき,葛西晴信,片倉景綱『戦国武将列伝東北編』	編者（編著者）	2023年4月	戎光祥出版, 1	竹井英文	pp.1,187－201,-281－294

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

小林清治氏の中近世史研究と「東北」	単独	2023年9月	東北史学会創立75周年記念シンポジウム(仙台)	竹井英文	
宮城県の中近世城館跡をめぐる諸問題	単独	2023年5月	2023年度宮城県考古学会総会・研究発表会(宮城県松島町)	竹井英文	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	名取市市史編さん専門部会 専門部員
2018年6月～	茨城県中世城館跡総合調査委員会 専門委員
2018年3月～	杉山城跡史跡整備検討委員会（埼玉県嵐山町教育委員会） 委員
2017年4月～	相馬市史編さん中世部会 執筆委員
2016年12月～	北上市史編さん委員会古代・中世部会 委員
2013年10月～	岩櫃城跡保存整備委員会（群馬県東吾妻町教育委員会） 委員
2013年8月～	笠間城跡調査指導委員会（笠間市教育委員会） 委員
2012年11月～	静岡県伊豆の国市史跡等整備調査委員会（韮山城跡整備部会） 専門委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	辻　秀人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
リモートを活用した講義展開	2021年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
manabaを活用した学生とのコミュニケーション	2021年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
日本考古学の動向(1)総説	単著	2023年12月	日本考古学協会年報75	辻　秀人	pp.11-8
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
いわゆる『画期論』をめぐって	単著	2023年10月	北杜Ⅱ	辻　秀人	pp.1-16
古代東北研究のパラダイム	単著	2023年10月	日本考古学協会2023年度宮城大会「災害と境界の考古学」研究発表資料集	辻　秀人	pp.11-16
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年7月～2024年5月	日本考古学協会会長 企画立案・運営等

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	永田　英明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生を引率した遺跡見学会等の実施	2023年9月～	平城宮跡、飛鳥宮跡などの都城遺跡や寺院遺跡などの見学実習を実施
博物館と連繋した実習的ゼミ学習	2023年～	演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。
博物館情報と連繋した博物館・メディア論授業の実践	2020年9月～	博物館情報・メディア論の授業として、学生による展示紹介動画の製作実習を実施した。
manabaを活用した学生アンケートの実施	2020年4月～	
演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。	2019年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
平安中期陸奥・出羽の貢納制と絹	単著	2024年2月	東北学院大学学術研究会，歴史と文化(69・70)	永田英明	pp.1-21
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
文献から見る7世紀の辺境支配―城柵形成史の視点から―	単独	2023年10月	日本考古学協会宮城大会第3部会(東北学院大学)	永田英明	
古代東北の物流・交通と地域編成－陸奥側の視点から－	単独	2023年7月	古代交通研究会第22回大会(慶應義塾大学三田キャンパス)	永田英明	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年～		名取市史編さん委員会原始古代部会 委員	
2020年～		郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 委員長	
2018年12月～		仙台市文化財保護審議会 委員	
2018年10月～		岩沼市原遺跡発掘調査指導検討委員会 委員	
2017年4月～		北上市史編さん委員会古代中世史部会（古代班） 委員	
2017年～		NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク理事	
2014年～		山形県大石田町駒籠楯跡指導検討委員会 委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	七海　雅人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究（A）	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	名取市文化財保存活用地域計画策定協議会 委員
2020年9月～	歴史科学協議会 全国委員
2019年4月～	宮城県文化財保護審議会（松島部会） 委員
2017年1月～	仙台市文化財保護審議会 委員（2021年3月から副会長）
2016年12月～	北上市史編さん古代・中世部会 中世班委員
2013年6月～	東北学院大学中世史研究会 会長
2013年5月～	相馬市史 調査執筆員
2009年4月～	東松島市文化財保護審議会 委員（2020年4月から副会長）
2007年4月～	NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク 理事

1996年～	東北学院大学中世史研究会 会員
1996年～	歴史科学研究会 会員
1995年9月～	宮城歴史科学研究会 委員
1995年～	日本史研究会 会員
1993年～	宮城歴史科学研究会 会員
1992年～	日本古文書学会 会員
1992年～	史学会 会員
1992年～	歴史学研究会 会員
1990年10月～	東北史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	政岡　伸洋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
フィールドワーク実施する科目において、地域との連携を深めている	2005年4月1日～	歴史学科2年生配当科目「民俗学調査入門Ⅰ」、3年生配当科目「民俗学実習Ⅰ」「民俗学実習Ⅱ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、2005年度より県立博物館や市町村の教育委員会、私設博物館、また地元の郷土研究会等とも提携し、調査を実施している。その際学芸員や技師の方々がボランティアで参加してくれているが、学生たちもさまざまな専門分野からのアドバイスが受けられ、学問的関心を深められるようである。また、その成果は発表会や調査報告書の刊行により、地元への還元も行っている。
学生からの質問、感想に対するコメントの実施	2004年4月1日～	授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義課目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしてきたが、教員とのコミュニケーションや講義課目に対する関心を深められるようで、学生には好評であった。そこで、オンデマンド授業となった今年度の民俗学概説Ⅱでは、出席確認のResponを自由記述にし、質問や感想を書いてもらい、その内容についてコメントした動画を、次の授業の際に講義内容とは別にアップして見てもらうようにしたところ、教員とのコミュニケーションがとれているといった実感を持ってもらえたようで、非常に好評であった。
前回の授業内容の確認の実施と授業理解の促進	2004年4月1日～	毎回新たな講義内容に入る前に、前回の授業内容を簡単に解説し、学生の理解に配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①　身近な生活文化の当たり前を問い直す、民俗学の面白さを理解させる。 ②　これを通して、イメージに流されることなく、自ら調べ考え、物事を客観的に把握できる能力を身につけさせる。 ③　そのためにも、地道な基礎的作業と深い思考の重要性を理解させ、実践できる能力を身につけさせる。 ④　地域とのかかわりを重視し、実際の暮らしに触れつつ、座学で終わることなく、より実践的な教育を心掛ける。 といった、民俗学という学問の見方・考え方の訓練を通して、専門分野に関連するような職業はもちろんであるが、それ以外の一般企業等を目指す学生にとっても、さまざまな情報が氾濫する現代社会において、社会人として自ら考え試行錯誤しつつ、よりよく生きるための思考法を身につけてもらえることを目標においている。
今年度の進捗状況	本学民俗学研究室の活動は、民俗学のみならず周辺諸科学の学会や文化財行政でも高い評価を受けており、在学生が優れた研究成果を発表したことで全国学会で表彰され、卒業生の中には博物館の学芸員や文化財担当者など、高度な専門的知識を活かした職業に就く者もほぼ毎年出るようになってきた。また、一般企業に就職した学生たちからも、民俗学で学んだものの見方・考え方が社会に出てからも役立っているという声が聞かれ、これまでも全国紙の教育特集等で取り上げられるなど、学生によって程度の差はあるにせよ、ある程度達成できているのではないかと判断している。 　一方、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、これまでの教育活動を制限せざるを得ない期間が続いてきたが、5類への移行により行動制限も解除され、今年度は3年生を対象とした民俗学実習では河原町を中心とする仙台城下町を、2年生を対象とした民俗学調査入門では津波警告板で有名な和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区を対象に、地元の教育委員会や博物館とも連携しつつ、本格的な合宿形式の民俗調査を実施することができ、学生たちにとっても貴重な経験となったのではないかと考えている。 なお、アクティブ・ラーニングの手法も参考にしたこれらの活動は、学生たちにとっては日々の教育活動が単なる「お勉強」ではなく、自らの学習成果が地域に対して大きな意味を持つことを実感させたようで、実践的な教育成果として注目して良いのではないかと考えている。
来年度の進捗目標	引き続き、現在の課題・目標にあげた項目について、各学生のニーズに即しつつ、より教育的効果を高められるよう対応していければと考えている。特に実習系科目については、来年度も民俗学実習では河原町を中心とする仙台城下町を、民俗学調査入門では和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区を対象に、地元の教育委員会や博物館とも連携しつつ、合宿形式の民俗調査を実施し、報告書の下書き原稿作成までの作業を行う予定である。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Development and the Current State of Family and Kinship Research in Folklore Studies	単著	2023年10月	Japanese Review of Cultural Anthropology, 24(1)	Nobuhiro Masaoka	pp.147-181
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
第三部 「京都民俗」の四〇年	共著	2023年7月	京都民俗, 41	八木透, 東城義則, 内田忠賢, 村上忠喜, 政岡伸洋, 土居浩, 島村恭則, 三隅貴史	pp.177-241
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	これまで、「歴史的背景を踏まえた、民俗の実践とその意義」という視点から、従来の民俗理解の限界と新たな課題の提示について、関連するテーマを設定し研究を行ってきたが、現在、関心のある具体的な研究テーマは以下の通りである。 ① 被災地における暮らしの復興過程および災害の記憶の継承をめぐる民俗学的課題 ② 国家的周縁域における民俗の展開とその歴史的背景に関する調査研究 ③ 近代における被差別部落の形成過程と差別言説の背景に関する調査分析 ④ 民俗学の展開とその歴史的背景に関する分析
今年度の進捗状況	①については、これまでコロナ禍で中断せざるを得なかった宮城県南三陸町戸倉波伝谷地区での調査を再開することができた。また、災害の記憶の継承をめぐる問題についても、和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区および石垣島で調査を行うことができた。 ②については、沖永良部島の世之主伝説を対象に、奄美群島における「琉球文化」的要素の再検討および比較のための徳之島での調査を行った。また、湯殿山の即身仏についても、非常にあいまいな民間信仰ではなく仏教との関連で再検討を行った。海外では台湾の澎湖諸島の元宵節やベトナム北部山岳地帯の少数民族の現在に関する調査も行うことができた。 ③については、近代部落史の研究成果を民俗学としてどのように取り込んでいくことができるかについて検討するとともに、インドのカースト制度など海外との比較についても研究をはじめつつある。 ④については、これまでの日本における家族・親族研究の学史的再検討を行い、グローバルな議論を念頭にDevelopment and the Current State of Family and Kinship Research in Folklore Studiesと題して発表した。また、民俗学では国内の地方学会の動向も非常に重要であるが、その中でも注目を集める京都民俗学会40周年記念シンポジウムの成果も原稿化し発表することができた。
来年度の進捗目標	①について、宮城県南三陸町戸倉波伝谷地区を対象とした暮らしの復興過程をめぐる問題についてはある程度の方向性が見えてきたと同時に、調査を再開することができたので、これまでのデータ整理と補充調査を実施し、原稿化および出版に向けての準備を進めていく予定である。 ②について、南西諸島を対象とした研究では、引き続き奄美群島の「琉球文化」的要素の再検討に関する調査検討を行う。また、新たに興味を持った来訪神儀礼と仏教遁関連についても調査を開始したい。また北日本を対象とした研究では、湯殿山の即身仏のほか、ある程度資料が集まりつつある新潟湊祭りについても原稿化を進め、行政調査で協力する塩竈市浦戸諸島でも調査を開始したい。その他、コロナ禍で中断せざるを得なかった韓国やドイツでの調査についても再開の可能性を探る予定である。 ③でも、引き続き近代史部落史の研究成果を再検討すると同時に、海外のマイノリティの動向も押さえつつ、民俗学からみた部落問題について原稿化を進め、出版に向けての準備を開始したい。 ④については、今年度原稿化した論文を執筆する過程で見えてきた戦後民俗学のパラダイム成立のプロセスと背景についての研究を進め、論文化を目指す予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	比較家族史学会 理事

2022年8月～	塩竈市文化財保存活用地域計画協議会 調査部会 委員
2014年9月～	ひょうご部落解放人権研究所 会員
2014年9月～	ひょうご部落解放・人権研究所 会員
2010年10月～	岩手民俗の会 会員
2010年6月～	民俗芸能学会 会員
2009年10月～	岩手民俗の会 会員
2008年5月～	現代民俗学会 会員
2004年6月～	東日本部落解放研究所 会員
2004年6月～	東北民俗の会 会員
2004年6月～	東北民俗の会 会員
2004年4月～	東日本部落解放研究所 会員
2003年4月～	日本村落研究学会 会員
2003年4月～	徳島地域文化研究会 会員
2000年8月～	韓国・朝鮮文化研究会 会員
1998年10月～	比較日本文化研究会 会員
1995年2月～	沖縄民俗学会 会員
1994年6月～	日本文化人類学会（旧日本民族学会） 会員
1994年4月～	部落解放人権研究所 会員
1994年4月～	部落解放・人権研究所 会員
1991年11月～	比較家族史学会 会員
1988年4月～	京都民俗学会（旧京都民俗学談話会） 会員
1988年3月～	日本民俗学会 会員
1988年1月～	近畿民俗学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	渡辺　昭一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	感染症対策により平常に戻りつつあることから、引き続き対面での教育活動を優先していく。 ゼミ生内の対話を重視しながら、研究発表の仕方・卒業論文の作成と就職活動を両立させることを目指す。〃	
今年度の進捗状況	早い段階から、卒業論文作成の準備を促しつつ、就職活動に全力で取り組むように指導した。そのため、10名全員が卒業と同時に就職が決定した。3年生についても、卒論と就活の準備に向けた指導を行った。	
来年度の進捗目標	昨年以上に対面を重視していくことから、よりきめ細かい指導を行う予定でいる。 充実した学生生活をおくれるよう個別指導にも力を入れていく。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
「帝国日本をめぐる鉄道経営の国際移転―人的資源を中心に―」「イギリス帝国史研究の視点から」	共同	2023年5月	社会経済史学会第92回全国学会(西南学院大学)	渡辺昭一	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	基盤B(代表：矢後和彦(早稲田大学))と基盤B(代表：竹内真人(日本大学)))の課題成果の発表へ移り、学会報告と出版へと準備を進めていく。 科学研究補助金基盤C(代表：渡辺昭一)が平成6年度が最終年度となるため、総括にとりかかる。
今年度の進捗状況	3つの科研課題の追求に専念してきたが、一次資料の収集を行いつつ、その成果の一部を論文として発表できた。また、本学ヨーロッパ総合研究所の公開講演において、一般向けに研究成果を発表した。
来年度の進捗目標	3つの科研課題を引き続き追求していく。その成果を学会報告とともに編著の出版に取り組む。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科研費基盤（B）	2021年度～	共同(研究分担者)	グローバル債務の歴史的構造―成長と開発の国際連関―
科学研究費助成事業 日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤C）	2021年度～	共同(研究代表者)	南アジア冷戦下の国際援助と軍事的自立化の研究
科学研究費助成事業 科学研究費　基盤B	2020年度～	共同(研究分担者)	ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2018年4月～	国際武器移転史研究所 研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	金子　祥之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2022年度教育功績等優秀教員（東北学院大学）	2023年7月	
過疎集落・自治体と連携した民俗学教育の実施	2020年4月～	福島県会津地方は、過疎高齢化が極端に進行する地域である。そうした地域と連携し、民俗学の実習を通じて、地域の民俗文化を掘り起こす。それにより、地域文化の保全と、地域の魅力向上に寄与する教育実践を行なっている。
被災集落と連携した民俗学教育の実践	2020年4月～	原発災害により深刻な被害を受けた福島県相双地方の集落と連携し、民俗学教育を実践している。具体的には、民俗学実習により、民俗誌の作成を通じた地域文化の記録化、および震災前後の生活変化を記録する。また民俗芸能の継承支援も行っている。
オンデマンド型講義の提供	2020年4月～	「民俗学概説Ⅰ」「民俗学の諸問題Ⅱ」の講義用にyoutubeチャンネルを開設し、オンデマンド授業に対応した学習機会を提供した。毎回の小課題を通じ授業内容の理解度を確認し、次回の講義においてフィードバックを行なった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
渡邉悟史・芦田裕介・北島義和編『オルタナティヴ地域社会学入門―「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす』ナカニシヤ出版	2023年5月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
2022年度教育功績等優秀教員（東北学院大学）	2023年7月	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
The Roots of Resilience: Forest Commons and the Cultivation and Disappearance of Livelihood Security in a Nuclear Disaster-Afflicted Community『Everyday Life-Environmentalism: Community Sustainability and Resilience in Asia』	分担執筆	2023年12月	Routledge	Hiroyuki　Kaneko	pp.142-155
不気味なもの：ホームに生きる人々の二重性の経験『オルタナティヴ地域社会学入門―「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす』	分担執筆	2023年5月	ナカニシヤ出版	渡邉悟史・北島義和・芦田裕介・金子祥之・佐藤真弓	pp.107-125
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
修験の残した切紙と呪符・御札―福島県双葉郡川内村地蔵院旧蔵・横田家文書	単著	2023年12月	東北文化研究所紀要，55	金子祥之	pp.69-208
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
災害文化の継承・創造『環境社会学事典』	分担執筆	2023年4月	丸善出版	金子祥之	pp.350-351

自然のリズム『環境社会学事典』	分担執筆	2023年4月	丸善出版	金子祥之	pp.8-9

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

ふるさとの芸能をつなぐ―学生たちと被災集落の模索を通じて	共同	2024年3月	日本民俗芸能学会第197回研究会(早稲田大学演劇博物館)	金子祥之・今野実永・佐澤春花	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2024年度	(研究代表者)	本研究では、何ゆえに極小集落が存続し続けることができたのか／あるいはできているのかを、民俗学的なアプローチにより明らかにする。すなわち、人口規模が極端に小さな集落が発揮するレジリエンスを、生活者の立場から解明する。現代の日本社会では、人口規模の小さな集落は統廃合の対象としてみなされ始めている。たしかに極小集落には、のちに廃村に至るものがあり、存続可能性が乏しいように見受けられる。しかしながら、小規模であるにもかかわらず、存続し続けてきた集落があることも確かである。本研究では、小さな集落のレジリエンスを通時的・共時的に分析し、生活者の立場からとらえた村落社会の存続論を展望する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年3月～	日本社会学会『社会学評論』専門委員
2023年4月	東北歴史博物館資料収集専門委員会 資料収集専門委員（民俗）
2021年11月～2023年11月	日本村落研究学会 理事
2021年6月～2023年6月	環境社会学会 理事
2021年6月～2023年6月	環境社会学会 研究活動委員会委員
2021年6月～2023年6月	福島県民俗学会 幹事
2017年11月～2023年11月	日本村落研究学会 ジャーナル編集委員
2017年7月～	檜枝岐村教育委員会檜枝岐村民俗史編さん委員会 専門員（民俗）
2017年6月～	環境社会学会 会員
2017年～	日本社会学会 会員
2016年5月～	現代民俗学会 編集委員
2015年11月～	日本村落研究学会 会員
2014年5月～	現代民俗学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
修験の残した切紙と呪符	東北学院大学博物館	2024年3月～	金子研究室で2022年度・23年度の2年間をかけて実施した、川内村横田家文書（地蔵院旧蔵文書）の展示である。

現在の課題・目標	

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	杵淵　文夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習形式の授業におけるラジオ番組での研究成果発表の実施	2020年4月1日～	ラジオ番組制作は2015年度以来継続している取り組みである。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」や「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」において学部3・4年生は卒業論文を見据えて各自のテーマを設定し，課題の研究を進めている。学生が資料調査や研究に積極的に取り組むように刺激する効果と，情報を他者にわかりやすく伝えるプレゼンテーション能力の涵養を狙いとして，学生の希望者にラジオ番組での研究成果の公表を行わせた。 リスナーの存在を意識することで、参加学生はラジオ番組の出演を想定し課題の調査や研究を緊張感をもって行うようになった。また、ラジオは音声だけでしか情報を伝えることができないメディアであるため，適切な言葉と分かりやすい表現を使えるようになろうと，反省会を企画して改善点を確認するなど主体的に工夫するようになった。 ただし、2020年度に引き続き2021年度も新型コロナウイルスの流行のため、協力ラジオ局のスタジオを利用することができなかったため、活動の機会は限られたが、感染対策を十分に施した上で収録を行った。 コロナ禍が下火になって以降は、地元ラジオ局の協力を得られやすくなり、以前のようにラジオ局の協力のもと発表活動を行っている。
卒業論文の研究テーマに関する個人面談	2020年4月1日～	前年度に引き続き、今年度も「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生を対象に、卒業論文のテーマ選択に関する個別相談を実施した。今年度は、新型コロナウイルス流行のためZoomも活用した。一人当たり平均2回程度で、1回あたりの平均面談時間は20分であった。新型コロナウイルスの流行により、総合演習と論文演習をZoomで実施することが増えたため、学部3・4年生それぞれの卒論研究を進めさせる代替的な方法として、この個別相談を継続した。 その結果、3年生はテーマ選択については学生それぞれの進度にバラツキは出たものの、最終的にはどの学生も卒業論文のテーマを設定することができた。
少人数の授業における学生コメント一覧の作成・配付	2020年4月1日～	少人数の演習型授業「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」等では、学生が発表した後に、他の受講学生の意見感想を知ることができるようにしている。授業時間内に全員が意見を言えなかったり、口頭では言いにくい内容も多々あると推測されるため、2021年度もこれを継続した。 具体的には、授業内の発表に対して意見や批判を書かせて、それを一覧の形式で取りまとめ、次回の授業で配付した。これによって、発表学生は教員や一部学生の意見だけでなく、他の学生が自分の発表についてどのように考えているかを知ることが出来るようになり、次回の発表にフィードバックするようになった。 なお、2021年度は新型コロナウイルスの流行拡大もあり、記入では主にインターネットツールの（Respon）を活用した。Responの設定等では相応の時間と労力が掛かってしまうものの、記入内容の取りまとめと各学生への配付の作業では負担が軽減された。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材「第一次大戦開戦に関する史料」	2020年4月1日～	「基礎演習Ⅱ」の共通テーマとして第一次世界大戦の勃発原因研究を設定した。受講学生が、大戦の勃発原因について一次史料を使って分析できるように、関連史料を邦語訳して授業で活用した。 その史料としては、大戦勃発研究において最も重要視されているものを選び出した。対象としたのは、サライェヴォ事件（1914年6月28日）後からオーストリア=ハンガリー共通閣議（1914年7月7日）までのドイツとオーストリア=ハンガリーの公文書、手記、手紙等である。 授業では、場面ごとに5つに区分して史料を分析させ、学生同士で史料の解釈を議論させた。その成果として、受講学生それぞれがオーストリア=ハンガリーが開戦の方針を固める経緯を考察したレポートを提出した。 歴史上の重要史料に触れることはとても好評であったため、この取り組みは次年度も継続する予定である。

学術研究の手続きに関する教材の開発	2020年4月1日～	学術研究を進める際に踏まなければならない手続きを総括的にまとめた資料を加筆修正した。2018年度以来続けている取り組みであるが、学生が問題関心および研究目的の提示、先行研究の紹介と批判、研究課題の設定、研究方法の取捨選択を、実例に基づきつつ理解できる内容になるよう工夫している。「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」で活用した。
「卒業論文の書き方」（東北学院大学生向け）の執筆	2020年4月1日～	学生が卒業論文の執筆に取り掛かる際に参照するためのマニュアルとして「卒業論文の書き方」を、2015年度以来作成している。2020年度は文献収集の方法が学生にわかりやすくなるよう加筆修正した。2021年度も、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の3年生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の4年生に配付し、卒業論文研究等で活用させた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
SD「ハラスメント対策講習会」への参加	2023年12月6日	2023年12月6日（水）15：00～16：30（場所：土樋キャンパス8号館ホール）に 「2023年度ハラスメント対策講演会」に参加し、アネスティ法律事務所の弁護士須田晶子氏による講演：「ハラスメントの基礎知識と大学におけるハラスメント」を聴jき、見聞を深めた。
東北学院大学のe-ポートフォリオ（TG-folioの整備	2022年4月1日～2024年3月31日	TG-folioi委員として、東北学院大学のe-ポートフォリオの整備に参与した。
学内の遠隔授業サポートチームへの参加	2020年4月13日～	新型コロナウイルスの流行により、2020年4月13日に学科長の要請により学内の遠隔授業サポートチームの構成員となった。 4月15日にはそのミーティングに参加し、オンライン授業の実施方法について情報を共有した。オンライン授業に関する学科教員、学部生・大学院生からの質問にも対応した。4月末には、前期授業の実施方法に関するアンケートに従事した。4月15日と5月7日には歴史学科独自のオンライン授業の講習にも参加した。さらに、7月以降は後期授業の実施形態調査に協力した。
「研究・発表の技法」の授業計画の作成	2020年4月1日～	新型コロナウイルスの感染拡大で前期の授業がオンラインになったために、学部1年生は学友も作れず大学に入学した実感を持てないというメンタル上の深刻な問題が生じた。そのため、学科長が「研究・発表の技法」の担当教員数（コマ数）を増やして、対面授業で実施する計画を策定した。 当初の授業計画とは状況（特に受講人数）が大きく変わることとなったため、当初計画にもとづきつつ授業計画を立て直す必要が生じた。そこで、この授業の計画を修正するとともに、担当教員への説明のための資料を作成した。毎授業の30分前に教員控室に集合し、授業内容の説明と調整を担当した。
学生の就職活動の支援	2020年4月1日～	「ヨーロッパ史総合演習」と「ヨーロッパ史論文演習」の所属学生を対象として、就職活動の支援を行った。例年のような、「就活情報交換会」、「OB/OG社会人生活報告会」、「模擬面接」、「就活個別相談会」は実施できなかったものの、適宜、履歴書やESの書き方講座、SPIの講座、就活の進め方講座を実施し、就職活動に関する情報をManabaやメールで断続的に提供し続けた。これらを通じて3年生は次年度の就職活動に向けて、準備を進めるとともに意識を高めた。 その他に、3・4年生の履歴書やESの添削依頼や進路相談にも対応した。 2021年度は新型コロナウイルスの流行によって新卒採用の状況は厳しさを増したものの、ゼミ所属4年生12名中11名が秋の時点で内定を獲得できていた。次年度も就活支援を継続する予定である。
新入生（来年度学部1年生）の履修指導の準備	2019年～	新年度入学生のオリエンテーションにおける履修指導の準備を行った。グループ主任らとの打ち合わせ（3月22日、3月27日）に出席し、学生協力者（オリエンテーションリーダー）と準備の協議を行った。このほかに、履修指導の動画（1年生向け、2年生向け2種類、3年生向け2種類）を作成し、Manabaで公開した。

現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。 ①「ゼミ関連」:2023年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。 ②「ゼミ以外の授業」:新型コロナウイルスの流行を考慮し、特に1年生と2年生に関して学生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を改善する。 ③「授業以外のサポート」:学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。
今年度の進捗状況	①. 新型コロナウイルス流行による活動の制限もほぼ解除され、計画通りに進められた。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は、第一次大戦勃発論に関する文献としてW. マリガン『第一次世界大戦への道』をグループワークで討論した。「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は卒業論文計画にもとづいて研究を進め、卒業論文を完成されることができた。 ②. 予定通りに進めた。学部1年生向けの「研究・発表の技法」の後継科目として2023年度にスタートした「入門演習Ⅱ」は対面で実施した。学生は教員提示の研究課題にグループワークで取り組み、発表水準は例年以上に良かったと考えている。 ③. 予定通りに進捗した。学部3年生には自己分析、履歴書ES作成、就活の進め方等について指導を行った。学部4年生には、進路選択に関する個別相談や書類添削などの指導を粘り強く行った。4年生はおおむね希望に沿った内定を得て、進路を確定させることができた。
来年度の進捗目標	①「ゼミ関連」:2024年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。 ②「ゼミ以外の授業」:2024年度は、特に1年生科目を多く担当する(4コマ)事情から、新入生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を改善する。 ③「授業以外のサポート」:学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
オーストリア＝ハンガリーの十二月条約の更新問題:工業家クラブを中心に	単独	2023年10月	東北史学会(西洋史部会)(宮城県仙台市青葉区川内)	杵淵文夫	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。 ①. 科研費の研究課題を進展させる。具体的には、オーストリア＝ハンガリーの「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」の史料分析の結果を、それぞれ論文にまとめて学術誌に投稿する。 ②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業と連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。
今年度の進捗状況	①. 部分的に進捗したが、完全には目標を達成できなかった。「工業家クラブ」の分析は、東北史学会で発表した。「農林業利害擁護総本部」の分析は2023年度中に学会公表するまでには至らなかった。 また、名古屋大学で重要な史料を発見し、2023年度は2回資料調査を行った。 ②. 多少進捗した。七月危機におけるオーストリア＝ハンガリー側史料の読解を進めた(ホヨスの回想録)。また、オッテ(T. G. Otte)の研究書『July Crisis』を読解し、基本的な研究状況の把握を進めた。

来年度の進捗目標	①. 科研費の研究課題を進展させる。具体的には、オーストリア＝ハンガリーの「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」の史料分析の結果を、それぞれ論文にまとめて学術誌に投稿する。「オーストリア中欧経済協会」の設立過程の研究に着手する。 ②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業とも連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年～	西洋史研究会 評議員
2019年4月～	東北史学会 評議員
2019年～	東北史学会
2012年4月～	東欧史研究会 会員
2010年4月～	東北史学会 会員
2008年4月～	ドイツ資本主義研究会 会員
2007年4月～	社会経済史学会 会員
2004年4月～	西洋史研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

○入試委員（2023年度）
入試委員として、以下の業務に従事した。
受験生・高校生向けの校内ガイダンスや合同説明会に出席し説明を行った（4月17日アエル進学相談会、6月8日TGオリエンテーション、6月15日仙台商業高等学校校内ガイダンス、6月22日五橋キャンパスでの進学懇談会、2024年3月19日榴ヶ岡高校学科紹介・模擬講義）。
オープンキャンパスでは、アドミッションオフィスの部署で高校生向けの個別相談を担当した（6月24日初夏のオープンキャンパス、7月29日夏のオープンキャンパス、12月9日冬のオープンキャンパス）。
総合型選抜や推薦入試に関しては、その運営や準備に尽力した（9月21日総合型選抜業務の予行演習、9月30日総合型選抜A日程の本部運営・受験生の誘導等、11月17日総合型選抜二次・推薦入試の会場準備、11月18日・19日総合型選抜・推薦入試の本部運営・受験生の誘導等、12月15日総合型選抜B日程の会場準備、12月16日総合型選抜B日程の本部運営等）。
大学入学共通テストに関しては、その運営や準備に尽力した（12月14日と26日監督者説明会の運営業務、2024年1月9日テスト問題解答用紙等の問題搬入や袋詰め作業、1月12日共通テストの会場設営・点検、1月13日・14日大学入試共通テストの本部運営・答案用紙整理等の業務）。
本学の一般入試と共通テスト利用入試に関しては、その運営や準備に尽力した。（2023年10月10日～13日入試問題の初校、10月30日～11月1日入試問題の再校、12月4日～6日入試問題の三校、12月19日入試問題の念校、2024年1月17日入試問題下見、1月25日受験生の調査書評価と入試問題の袋詰め作業、1月30日一般選抜監督者説明会、1月31日一般選抜試験会場設営、2月1日～3日一般選抜前期の本部運営・答案整理作業等、2月5日共通テスト得点換算チェック作業、2月7日一般選抜前期日程の判定説明会、2月20日追加合格説明会、3月1日一般選抜後期の調査書評価、共通テスト得点換算チェック、問題袋詰め、3月5日一般入試後期の本部運営・答案整理作業）
編入学・社会人入学試験に関しては、10月5日の同試験の本部運営と試験監督、3月4日3月4日編入学社会人入学試験の本部運営に従事した。
9月24日に、歴史学科の高校生向けイベント「大学で学ぶ東北の歴史探究バスツアー」に引率者として同行した。大学受験に関する高校生の質問にも丁寧に対応した。
その他に、4月3日以降の新入生オリエンテーションに出席して新入生の履修指導にあたり、4月3日と4日の編入学生オリエンテーションに出席した。また、6月10日の後援会総会学科別懇談会と、8月30日の進研アドの研修、12月2日の保護者向け就活説明会に出席した。

○TG-folio委員（2022～23年度）
TG-folioの会議に出席し、またメール審議に参加した。出席できなかった会議については録画を視聴して審議内容を把握した（5月17日、10月20日、2024年1月9日、2月1～5日、2月6日～9日）。新入生向けの本格導入に伴い、新入生オリエンテーションや入門演習Ⅰ・入門演習Ⅱにおいて、長期目標、前期および後期の学修目標と振り返りの記入を指導した。また、歴史学科の全学DPと学科DPを算出し提出した。初年度の運用に合わせて、歴史学科の運用方針の修正を行った。

○文学部・歴史学科点検評価委員（2017年度～2023年度）
文学部および歴史学科の点検評価委員会のメール審議（2023年7月8日～13日、12月11日～20日）に参加した。

○ヨーロッパ文化総合研究所副所長（2023年度）
2023年度は東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所主事として、研究所の実施計画に従事した。本年度は、専門誌『ヨーロッパ文化史研究』の特集に関する折衝（福山大学村上准教授、福岡女子大学馬場教授）、公開講演会の講師との交渉（獨協大学伊豆田俊輔准教授）との折衝、公開講演会の司会および運営協力（10月7日）に従事した。また、5月11日と11月9日にヨーロッパ文化総合研究所総会に出席し、2024年1月17日には2024年度の予算ヒアリングに出席した。

○一般入試問題（世界史）作成委員、校正委員、採点委員（2015年度～継続）
2023年度は、一般入試の「世界史」の問題の作成（大問1つ）、校正（初校：10月10-13日、再校：10月30日-,11月1日、三校：12月4-6日、念校：12月19日、下見：1月17日）、採点（2022年2月1-3日、3月5日）に従事した。

○2024年度ヨーロッパ史分野の授業担当者の調整（2015年度～継続）
2024年度のヨーロッパ史分野の授業科目の担当者について、資料を準備した上で、2023年9月7日に調整の話し合いを行った。非常勤講師への依頼等を決定の上、決定内容を学科長に報告した。

2023年度

所属	文学部　歴史学科	職名	講師	氏名	多賀　良寛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
漢文読解の実践的トレーニング	2022年～	漢文法基礎から白文の講読にいたる系統的な漢文読解トレーニングの講義を実施した。高校までに習得した漢文能力のバラツキを考慮しつつ、クラス内で取りこぼされる受講生が出ないよう、講義の進度に最大限注意を払った。また中国正史の日本伝をはじめ、日本が題材とされた漢文をテキストとして取り上げることにより、受講生が漢文により親近感をもてるよう工夫を行った。
大学における新しい東南アジア通史講義の試み	2022年～	大学生にとって馴染みのない東南アジアの通史を、海域史やグローバルヒストリーの視点を取り入れることで、わかりやすく伝える講義を実践した。講義では図版をふんだんに盛り込んだスライドを用いたが、webclassを通じ教材を事前頒布することで、受講生が予習のうえ講義に臨めるよう工夫を行った。
東南アジア史をテーマにしたアクティブラーニング形式の授業実施	2022年～	基礎演習Ⅱにおいて、東南アジア史をテーマにアクティブラーニングを取り入れた授業を実践した。日本語で書かれた最新の東南アジア通史をテキストとし、グループワーク形式でレジュメ作成およびディスカッションを行った。またグループ内および各グループ間での情報共有を円滑化するため、manabaなどwebclassの機能を最大限活用した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
漢文読解に関する教材作成	2022年～	漢文読解能力の習得のため、1.基本的な漢文法および句法の学習→2.訓点のついたテキストの読解→3.白文の読解の3段階からなる教材を作成した。
東南アジア通史に関する授業教材の作成	2022年～	古代から近代にいたる東南アジア通史の授業教材を、パワーポイント形式で作成した。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
19世紀後半，ベトナム阮朝による対ヨーロッパ使節派遣の再検討	単独	2023年12月	東南アジア学会(筑波大学)	多賀良寛	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2017年4月～		日本ベトナム研究者会議 会員	
2016年4月～		社会経済史学会 会員	
2013年4月～		東南アジア学会 会員	
2013年4月～		史学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	稲垣　忠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育現場へのインターンシップの実施・運営	2022年4月～	文学部教育学科2年次科目「学習支援実践（インターンシップ）」にて、仙台市内の小学校および宮城県内の小学校に学生を派遣し、子どもとの関わりや学習支援について学ぶ授業の運営を担当した。
ルーブリックの活用	2020年～	「研究・発表の技法」において、ラーニングコモンズが作成したライティングルーブリックを学生に紹介し、レポート作成の際に参照するよう指示した。また、成績評価においてライティングルーブリックの一部を活用した。「教育工学実習」では学生自身がルーブリックを作成する学習活動を取り入れた。
学習支援システム（eラーニング）の活用	2020年～	教材公開，レポートやコメントの収集等が行える学習支援（eラーニング）システムmanaba courseを利用し，情報提供の効率化と学習評価との統合、学生へのフィードバックの充実等を図った（担当全科目）
デジタルポートフォリオの活用	2020年～	教職課程履修学生の学習履歴を把握できる「manaba-folio」を用いて学習履歴に基づく学習支援や授業中の課題提出，指導を行った（教職実践演習）
参加型授業の実践	2020年～	ワークショップ、ポスターセッション等参加型の学習活動を取り入れ，学習者の主体的な参加と協働を促す指導を実施した（教育の方法と技術、教育方法、ICT教育論、情報教育論、教職実践演習、メディアリテラシー教育論）
2．作成した教科書、教材、参考書		
コラトリエライティングガイド	2024年3月	東北学院大学ラーニング・コモンズ発行 嶋田みのり・遠海友紀の執筆に対する協力として
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	①新規に2名の大学院生を迎えるため、修士論文の指導について特に計画的に取り組む ②eポートフォリオ「TG-folio」がはじまるため、ゼミ指導等で活用する ③五橋キャンパスの学習環境をいかした取り組みを実践する	
今年度の進捗状況	①については、修士論文の作成に向けて継続的な指導を行い、2名あわせて4件の学会・研究会での研究発表の成果をあげることができた ②については、学部1年生のチューター面談を中心に活用し、学生の目標把握等の成果を挙げることができた ③については、大学院および学部の教職課程の科目等で講義棟を活用した。また、五橋キャンパスのコラトリエライブラリーを活用したゼミ等を実施した	
来年度の進捗目標	①2名の大学院生が2年になるため、修士論文の完成に向けた指導を充実させる。学部3年、4年のゼミ生とのつながりを意識した指導を行う ②eポートフォリオが2年次まで本格運用となるため、目標設定・ふりかえりのほか、学習成果物（マイワーク）の状況把握等の活用を試みる ③2024年度後半より新しいLMS（学習管理システム）の試用がはじまるため、既存環境からの移行とともに新たな指導方法の開発を試みる	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
初等中等教育における現代の教育ニーズに対する学習環境研究の動向	共著	2024年3月	日本教育工学会論文誌，47(4)	稲垣 忠，池尻 良平，江木 啓訓，瀬戸崎 典夫，仲谷 佳恵，根本 淳子，三井 一希	pp.567--578

学習過程に関連づけた情報活用能力育成のための授業指標の開発と評価	共著	2023年8月	AI時代の教育論文誌, 5	小林祐紀, 秋元大輔, 稲垣忠, 岩﨑有朋, 佐藤幸江, 佐和伸明, 前田康裕, 山口眞希, 渡辺浩美, 中川一史	pp.60-67
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大会報告 課題研究Ⅱ:「『情報活用能力』の育成と捉え直しの可能性」	共著	2024年3月	教育メディア研究, 30(2)	前田 康裕, 稲垣 忠, 山口 好和, 小林 祐紀	pp.86
特集号「現代的教育ニーズと教育実践・教育技術」刊行にあたって	単著	2024年3月	日本教育工学会論文誌, 47(4)	稲垣忠	pp.539-541
大学生の生成AIの認識および態度とメタ認知的方略の使用頻度との関係	共著	2024年3月	日本教育メディア学会研究会論集(56)	大沼 宙生, 遠海 友紀, 嶋田 みのり, 稲垣 忠	pp.58-64
保護者世代に求められてきた情報リテラシーの変遷とGIGAスクール構想下に求められる情報リテラシー	共著	2024年3月	日本教育メディア学会研究会論集(56)	若林 雅子, 稲垣 忠	pp.69-76
カリキュラムマネジメントシステムによる教科を横断したカリキュラム改善の分析	共著	2024年3月	日本教育メディア学会研究会論集(56)	稲垣 忠, 松本 章代, 豊田 充崇, 後藤 康志, 泰山 裕	pp.77-84
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
情報化優良校を対象とした情報活用能力の認知および指導状況に関する調査	共著	2023年7月	日本教育メディア学会研究会論集, 53	稲垣忠, 中川一史, 佐藤幸江, 前田康裕, 小林祐紀, 中沢研也, 渡辺浩美	pp.30-35
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
AI時代の教育と学びを考える『体育科教育2023年12月号』	分担執筆	2023年12月	大修館書店	稲垣忠	pp.19-22
学習系・校務系を横断する学習eポータル『GIGAにとどまる学校、学校DXに進化する学校：ネクストGIGAの新しい学びを求めて』	分担執筆	2023年11月	教育開発研究所	稲垣忠	pp.34-43
授業外のDX（デジタル・トランスフォーメーション）を進めるために『英語教育2023年8月別冊』	分担執筆	2023年8月	大修館書店	稲垣忠	pp.82-83
情報活用能力とこれからの教育課程『学習情報研究2023年8月号』	分担執筆	2023年8月	学習情報研究センター	稲垣忠	pp.12-15
一人一台×クラウドを前提とした授業・学びをデザインする『教育展望, 臨時増刊 No.55』	分担執筆	2023年7月	教育調査研究所	稲垣忠	pp.96-101
探究的な学習指導におけるICTの利活用『視聴覚教育2023年6月号』	分担執筆	2023年6月	日本視聴覚教育協会	稲垣忠	pp.16-17
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
カリキュラムマネジメントシステムによる教科を横断したカリキュラム改善の分析	共同	2024年3月	日本教育メディア学会 2023年度第2回研究会(長崎大学)	◎稲垣忠, 松本章代, 豊田充崇, 後藤康志, 泰山裕	
教科横断的スキルの取得状況を比較できるカリキュラムマネジメントシステムの開発	共同	2024年3月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 174回研究発表会(オンライン), 2024-CE-174, 13	◎志賀奏翔, 松本章代, 後藤康志, 豊田充崇, 泰山裕, 稲垣忠	pp.1-8
データに基づく情報活用能力の カリキュラムマネジメントサイクルの開発	共同	2023年11月	日本教育メディア学会 第 30 回年次大会(関西大学高槻ミューズキャンパス)	稲垣忠, 後藤康志, 泰山裕, 豊田充崇, 松本章代	pp.32-35
教員と保護者が連携して児童の探究活動を支援する 情報共有プラットフォームの構築と評価	共同	2023年11月	日本教育メディア学会 第 30 回年次大会(関西大学高槻ミューズキャンパス)	三宅貴久子, 榊原央, 岩崎由,, 稲垣忠	pp.99-100
NHK for School API を用いた 視聴履歴可視化システムの開発	共同	2023年10月	第49回全日本教育工学研究協議会 全国大会(三沢市公開堂)	稲垣忠, 半田柊斗, 岡本恭介	pp.1-F-2(4P)

教育データ活用事例を整理するための枠組みの検討	共同	2023年10月	第49回全日本教育工学研究協議会 全国大会(三沢市公開堂)	佐藤靖泰, 長濱澄, 稲垣忠	pp.1-F-3(4P)
1 人 1 台端末の持ち帰り学習に対する保護者の意識	共同	2023年10月	第49回全日本教育工学研究協議会 全国大会(三沢市公開堂)	若林雅子, 稲垣忠	pp.2-F-2(4P)
探究学習における保護者サポーターを支える情報共有プラットフォームの構築と評価	共同	2023年10月	第49回全日本教育工学研究協議会 全国大会(三沢市公開堂)	榊原央, 三宅貴久子, 稲垣忠	pp.3-G-1(4P)
AI時代の情報活用能力を再考する	単独	2023年9月	第5回AI時代の教育学会年次大会・第8回日本アクティブ・ラーニング学会研究大会 合同大会(東京富士大学)	稲垣忠	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①カリキュラムマネジメントシステムの改善、モデル校における研究を継続し、成果を論文として投稿する ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携し、いくつかの成果を学会、雑誌等に投稿する ③学習環境に関する研究動向をレビューした論文を投稿する
今年度の進捗状況	①については、仙台市の小学校で年間を通した実証を行い、その成果を学会発表、研究報告等で公表することができた。 ②については、各地での教員研修をオンライン・対面で延べ1000名以上を対象に実施した。これらの研修に関する研究発表、雑誌記事等の執筆を行った。また、宮城県教育委員会、東京都教育委員会、茨城県教育委員会の調査研究・教材作成等のプロジェクトに参画した ③については、日本教育工学会の特集号論文「初等中等教育における現代の教育ニーズに対する学習環境研究の動向 」を投稿、採録された その他、書籍の執筆(分担執筆1冊)、論文採録(③含む2本)、雑誌への寄稿(5本)、学会発表・講演(7回)、研究会報告(4回)があった。
来年度の進捗目標	①2023年10月より内閣府SIP(戦略的イノベーション創造プログラム)において学習評価に関する研究を行うことになった。2024年度より研究員を雇用し、教育データを活用した学習評価に関する研究を推進する ②教育データ・生成AIの活用に関するプロジェクトを開始したため、関連する研究成果の発表・報告を行う ③引き続き各地の教育委員会、学校と連携した研究指導等を行う

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究 戦略的イノベーション創造プログラム	2023年度～2028年度	共同(研究代表者)	「デジタルツインを用いた個別最適な学び方・働き方の実現」(代表者 緒方広明・京都大学)の主たる共同研究グループとして実施
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2023年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年8月～	次期 SIP(戦略的イノベーション創造プログラム)課題候補「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」有識者
2022年8月～	日本教育工学会 編集委員会特集号編集長
2022年7月～	山形県小国高校「新時代に対応した高等学校改革推進事業」運営指導委員
2022年4月～	仙台市教育委員会確かな学力育成プラン検討委員会 副委員長
2022年4月～	仙台市教育委員会仙台市GIGAスクール推進協議会 委員長
2021年10月～	日本教育方法学会 会員
2021年8月～	文部科学省初等中等教育段階のSINET活用実証研究事業 委員
2021年6月～	経済産業省産業構造審議会臨時委員聖武流通情報分科会教育イノベーション小委員会 委員
2021年5月～	文部科学省「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員
2021年4月～	みやぎDUAL-COREハイスクールネットワークコンソーシアム 副委員長
2021年4月～	宮城県教育委員会個別最適な学びに関するモデル事業 アドバイザ
2021年4月～	教育メディア学会 研究委員会委員長
2020年7月～	一般財団法人ジャパンアートマイル 理事

2020年6月～	文部科学省委託事業 「ICT活用教育アドバイザー」の活用事業 アドバイザー委員
2020年4月～	日本教育工学会 評議員
2020年4月～	日本教育工学会 重点領域学習環境部会長
2019年6月～	文部科学省「デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」 副委員長
2019年5月～	日本教育情報化振興会情報活用能力の授業力育成事業 委員
2018年9月～	経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ 委員
2017年10月～	CRET（教育テスト研究センター）教育テストの評価・解説・活用研究 委員
2017年1月～	CRET（教育テスト研究センター） 教育テストの評価・解説・活用研究委員 委員
2012年4月～	仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」 有識者委員
2012年4月～	NHK 学校放送番組「歴史にドキリ」番組委員 委員
2012年4月～	教育メディア学会 理事
2010年7月～	仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

①ラーニングコモンズ副所長
②高大接続教育専門委員会委員
③FD推進委員
④学長特別補佐（教学改革担当）
⑤DX推進委員会 eポートフォリオ部会長
⑥MDASH専門委員会委員

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	加藤　卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育学入門演習の授業内容の改善と向上	2023年9月～	研究者としての書籍の読み方，レジュメの作成方法，プレゼンの仕方などについて演習を行い，レポートの構成方法や書き方について，記述力を向上させるワークシートを複数作成し，繰り返し学生に記述させることを通して，記述スキルを向上させている。また，プレゼンテーションのスライドに必要な基本的項目を明確にして詳細に指導を行い，プレゼンテーションの技能を的確に向上させている。
ICT教育実践の授業内容の改善と向上	2020年4月～	研究者や教員として，多忙な業務を効率的に行い，効果的な授業ができるよう，必要されるICTモラル・ICTスキルを修得させるようにしている。
初等教科教育法（算数）の授業内容の改善と向上	2019年10月～	初等教科教育法（算数）の授業において，新学習指導要領による幼児教育から高学年に至るまで算数の教育内容と指導方法について指導した。また，よくある学習のつまずきに対してどのように対処すればよいかを指導した。また，模擬授業を通し，指導案の作成力と実践的な指導力を育成した。
算数概説の授業内容の改善と向上	2019年4月～	算数の授業において，事前学修に進んで取り組ませ，幼児教育から高等教育に至るまで数学の系統を俯瞰できるように，広範な内容を指導した。
教員独自の学習活動に関する詳細なデータを集め，的確な評価を行っている。	2018年4月～	出席確認，授業への準備物，事前学修，発言などについて，授業中にバーコードリーダーを活用してデータを収集・蓄積し，形成的評価と指導に生かし，学生の努力を的確に反映する学期末評価を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)のイントラネットサイトの作成・運営	2019年5月～	「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)を欠席した受講生や後日さらに学習したい受講生が，自学・自習に取り組めるように，イントラネットサイトの作成・改訂に努め，学習環境の構築を図った。

現在の課題・目標	・教育学科1学年1G　35名のグループ主任としての学・生活指導 ・教育学科1学年，チューター8名の学生の修学・生活指導 ・教育学科2学年，チューター7名の学生の修学・生活指導 ・教育学科3学年，ゼミ生6名の学生の修学・生活指導 ・教育学科4学年，ゼミ生1名の学生の修学・生活指導 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実
今年度の進捗状況	・教育学科1学年1G　35名のグループ主任としての学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科1学年，チューター8名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科2学年，チューター7名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科3学年，ゼミ生6名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科4学年，ゼミ生1名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実を積極的に行った。
来年度の進捗目標	・教育学科1学年チューター〇名の修学・生活指導 ・教育学科2学年1G　35名のグループ主任としての学・生活指導 ・教育学科2学年，チューター8名の学生の修学・生活指導 ・教育学科3学年，ゼミ生3名の学生の修学・生活指導 ・教育学科4学年，ゼミ生6名の学生の修学・生活指導 ・教育学科4学年，ゼミ生1名の学生の修学・生活指導 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実 ・対面中心の授業形態で効果的な授業を高める。 ・教職実践演習，ICT教育実践，授業づくり実践Ⅰの講義をさらに充実させる。 ・採用試験対策講座を通して，学生の数学の問題解決力をさらに高める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
オクタモンドにおける正八面体の展開図の判別方法について	単独	2024年3月	数学教育学会 2024年度 春季年会(大阪公立大学)	加藤 卓	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・科研費取得のための研究の深化と業績の積み上げを図る。 ・教育現場との研究の連携を進める。
今年度の進捗状況	・新たな科研費取得のため，申請を行ったが，不採択であった。研究の深化と業績を積み上げ，2024年度での採択を目指す。 ・新型コロナが収束し，教育現場との連携を図ることが可能になったため，これまで以上の研究の連携を進めている。
来年度の進捗目標	・ICME15（4年に1度の国際数学教育学会）では，論文発表として採択されたため，業績を積み上げ，2024年度での科研費の採択を目指す。 ・教育現場との連携を，広域で行えるように働きかける。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年1月～2023年12月	2023年度 数学教育学会 秋季例会 実行委員長 企画立案・運営等
2020年3月～	数学教育学会 学会誌編集委員
2020年2月～	日本STEM教育学会 会員
2019年10月～	数学教育学会 幼稚園・小学校部会担当
2019年4月～	数学教育学会 代議員
2004年～	数学教育学会 正会員 会員
1998年7月～	遠隔数学実践教育研究会 企画立案・運営等

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	紺野　祐	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義形式科目の毎授業終末における小レポートの活用	2020年4月1日～	アクティブ・ラーニング型授業のひとつの展開として、講義形式の授業すべてにおいて，授業終末に manaba の「レポート」機能を活用して小レポートを書かせている。その内容をA4判プリント1枚程度にまとめ，翌週の授業冒頭で扱い，復習と発展的学習に役立てている。またこれは，学生個人の評価（関心・意欲・態度）にも反映される。
予習促進のための調べ学習「事典課題」の導入	2014年4月～	テキストを使用する講義においては、予習の確実な促進のために、テキストにおける語句の意味やその背景および関連する事項等について、辞書類やウェブを使用・利用した調べ学習「事典課題」を行わせている。その成果の写しを各セメスターで2回回収し、取り組み状況を確認したうえで、成績評価に組み込んでいる。
「道徳の時間」の授業のビデオ参観による授業づくりの理解の促進	2014年4月～	教職課程の授業「道徳教育研究」では、「道徳の時間」の授業づくりの要点を理解させるため、同授業のビデオを提示し、進行に合わせて解説を加えることで、学生による授業づくりの理解を促進している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①一時間の授業（講義）において、前時終末時の小レポートに基づく復習内容と当日・当該授業時の学習内容とをより有機的に連携させ、授業としての一体感を強める。 ②授業（講義）終末における小レポートについて評価上のルールを定め、受講学生にはそれを意識させた小レポート作成を求める。 ③授業（講義）において、概念や歴史に関する学習事項を適切に図式化して提示することで、学習内容の理解と定着をはかる。
今年度の進捗状況	①受講学生の小レポートに基づき毎時「コメントから」のプリントを作成し、その復習内容を当日・当該授業時の学習内容に関連させる導入を意識的に行ったことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ②受講学生が小レポートを作成する際のガイダンスをオリエンテーション時にていねいに行ったところ、形式的に問題のない小レポートが増加した。このことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ③授業（講義）では、作成した講義ノートをPDFファイル化し、MicrosoftのOneNoteを使用して投影した。この授業方法は受講学生に概して好評であり、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。
来年度の進捗目標	①授業（講義）においては、受講学生が即時的な学習内容を視覚的に把握しやすくするため、MicrosoftのOneNoteを用いた授業進行を基本とする。 ②授業（講義）においては、評価の観点別の点数配分を見直すことにより、受講生の学修成果のより公平な評価を試みる。 ③授業（演習）においては、受講学生の興味・関心に応じて、フィールドワークに基づく学習および卒業研究の作成を支援する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教育基本法第一条「教育の目的」に関する一考察：その解釈の歴史を踏まえて	単著	2024年3月	東北学院大学教育総合研究所，東北学院大学教育総合研究所報告集(24)	紺野　祐	pp.49-70
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
教育の目的は「人格の完成」および「国民の育成」（プラスアルファ）である：教育基本法改正（平成18年）以降の諸法令を踏まえて	単独	2023年8月	仙台教育人間学研究会　令和5年度定例会(長野県飯田市)	紺野　祐	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①教育人間学の新たな展開について，これまでの研究を単著としてまとめる。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究に着手する。
今年度の進捗状況	①2022年度までに4本の論文によってまとめた「『教育』の定義の分析と再構築に関する研究」について、昨年度設定した予定通り、その補遺的な研究論文「教育基本法第一条『教育の目的』に関する一考察：その解釈の歴史を踏まえて」をまとめることができた。このことから、上記の目標の一部は達成できた。 ②「自然主義」の概念について、本研究課題においてその意味および射程を確定するための資料収集を継続した。
来年度の進捗目標	①22年度内にひとつのまとまりを見た「『教育』の定義の分析と再構築に関する研究」であるが、さらなる補遺的な研究が必要であることが判明した。24年度は、教育概念の射程を確定させる必要から、「パイデイア」概念および「パイダゴーギア」概念を検討する。 ②「自然主義」の概念を確定するために、いっそうの資料収集を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年3月～	東北教育学会 会員
2023年9月～	東北教育哲学教育史学会 事務局長
2012年9月～	東北教育哲学教育史学会理事・編集委員 会員
2003年8月～	日本教師教育学会 会員 会員
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
文学部長（2021年4月～）

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	佐藤　正寿	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
良質なデジタル・コンテンツを生かした授業デザインの工夫	2023年～	学校教育に関わる良質なデジタル・コンテンツを適宜活用し、その内容を理解するだけでなく、得られた知見をディスカッションする授業デザインを工夫している。
個に応じた学習指導案作成・模擬授業づくりの取り組み	2023年～	「初等教科教育法（社会）」「授業づくり実践」において、一人一人との対話および指導案へのコメントをしながら、個に応じた学習指導案および模擬授業づくりに取り組んでいる。
受講生全員へのコメントによる学びのフォローの取り組み	2022年～	「初等教科教育法（社会）」「社会概説」「学級経営論」「学級経営・生徒指導実践」「学校経営・協働教育実践」「教育学演習」「卒業研究」において、毎回課している課題に対して受講生全員へコメントを行い、学びのフォローを行う。
学級における「場面指導」を想定した演習活動の取り組み	2022年～	「学級経営論」「学級経営・生徒指導実践」において、具体的に学級内で想定される場面指導について、演習形式でグループごとに発表し意見交流を行う。
実務家教員として小学校教員の経験を生かした取り組み	2020年～	「現代教職論」「学級経営論」「学級経営・生徒実践」「初等教科教育法（社会科）」において，小学校教員の経験をもとにした具体的な資料等を提示し，グループワークの助言に生かした。
視聴覚機器を用いた教材の提示	2018年～	視覚的効果を目的として，教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。
書き込み式テキストの作成	2018年～	全ての授業において，書き込み式テキストを毎回作成し準備をする。
参加型の講義	2018年～	ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ，学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。
講義のねらいと評価の明確化	2018年～	講義の冒頭に講義のねらいを提示し，本時間のゴールを的確に示し，終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。
学校現場のフィールドワークを生かした学び	2018年～	「現代教職論」「研究・発表の技法」等において，小学校での一日学校体験や授業参観等のフィールドワークを行い，その経験を事後のレポートにまとめさせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「教育方法とICT」共著　第7章 授業技術	2023年11月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
第7章 授業技術『教育方法とICT』	共著	2023年11月	学文社	高橋純，佐藤正寿	pp.88-100
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

社会科授業力アップ成功の極意 学びを深める必須スキル『社会科授業力アップ成功の極意 学びを深める必須スキル』	単著	2024年2月	明治図書出版	佐藤正寿	pp.1-136
社会科実践の追究『社会科実践の追究』	監修	2023年12月	東洋館出版	佐藤正寿他	pp.1-244
図解 社会の授業デザイン 子どもの問いを深める49の視点『図解 社会の授業デザイン 子どもの問いを深める49の視点』	単著	2023年6月	明治図書出版	佐藤正寿	pp.1-128
ゼロからわかる教材研究の流れとポイント『教材研究×社会科 実践でゼロからわかる超実践ガイド』	単著	2023年4月	明治図書出版	佐藤正寿	pp.12-21

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

小学校社会科教科書資料をもとにした和文化教育実践の可能性	単独	2024年2月	第20回和文化教育全国大会(オンライン)	佐藤正寿	pp.16
社会科で目指す「多様な学び方」が活きる個と協働の学び	単独	2023年12月	第9回日本授業UD学会全国大会(東京)	佐藤正寿	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年～	愛知県小牧市立村中小学校校内研究会指導講師 講師
2023年～	船橋市立薬円台南小学校校内研究会指導講師 講師
2022年12月～	仙台市立北六番丁小学校学校運営協議会 委員
2022年12月～	仙台市立七北田小学校学校運営協議会 委員
2022年12月～2023年11月	仙台市立将監小学校学校運営協議会 委員
2022年4月～	NHK学校放送委員（小学校5年社会科） 委員
2022年～	富山県小矢部市立蟹谷小学校校内研究会指導講師 講師
2022年～	岩手県岩泉町立岩泉小学校校内研究会指導講師 講師
2022年～2023年	奥州市立胆沢愛宕小学校校内研究会指導講師 講師
2021年12月～	仙台市立泉松陵小学校・松陵中学校学校運営協議会 委員
2021年～	北海道石狩教育研修センター 小学校社会科教育理論研修会 講師 講師
2021年～	社会系教科教育学会 会員
2021年～	日本カリキュラム学会 会員
2021年～	台北日本人学校校内研修会指導講師(台北日本人学校校内研修会) 講師
2019年～	NPO法人全国初等教育研究会セミナー講師(NPO法人全国初等教育研究会セミナー) 講師
2019年～	仙台市立北六番丁小学校校内研究会指導講師(仙台市立北六番丁小学校校内研究会) 講師
2019年～	日本教育情報学会 会員
2019年～	和文化教育学会 会員

2019年～	NHK学校放送番組（Eテレ「社会にドキリ」，メディア学習） 委員
2018年～	日本学級経営学会
2017年～	日本授業UD学会UDカレッジ 指導講師 企画立案・運営等
2017年～	日本授業UD学会
2016年～	日本教育工学会 会員
2016年～	全国社会科教育学会 会員
2016年～	日本社会科教育学会 会員
2015年～	岩手県立総合教育センター特別支援講座講師(岩手県立総合教育センター特別支援講座) 講師
2015年～	岩手県中学校授業力向上研修会（中学校社会・免許状更新講習）講師(岩手県中学校授業力向上研修会（中学校社会・免許状更新講習）) 講師

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	清多　英羽	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの実施	2023年4月1日～	
双方向の授業実践	2020年4月1日～	パワーポイントの動画を作成した。学生のレポートを講義ごとにフィードバックした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
連続公開講座「教育者フィヒテの憂鬱」の実施	2023年10月7日	
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生と双方向のやり取りをしながら講義運営を行い、個に応じた理解度を担保できる評価をつけること。
今年度の進捗状況	講義の最後にコメントを作成させ、次講義の冒頭でコメントをつけていることが評判がよい。
来年度の進捗目標	より一層学生が理解できるような講義運営を心がけたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
教材という観点からみた学校ビオトープの将来性についての学際的考察	単著	2024年2月	東北学院大学教育学科論集(6)	清多 英羽	pp.1-9
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	科研費の題目の研究をしっかりやりたい。
今年度の進捗状況	科研費が4年次計画の2年目だが、当初予定より遅れいている。
来年度の進捗目標	科研費の研究題目の研究遂行を努力したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	こども環境学会 会員
2023年4月～	東北教育哲学教育史学会 事務局会計
2019年8月～	全国学校・園庭ビオトープコンクール2019 補足調査員（日本生態系協会）委員
2013年7月～	日本こども学会 会員

2013年4月～	日本道徳教育学会 会員
1996年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	長島　康雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	村野井　仁	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
観点別評価の実施	2021年4月1日～	担当科目の評価に関しては，評価の観点ごとに評価規準（到達目標）を明示し，総合的な評価を行っている。教職科目、英語科目については課題ごとにルーブリックを作成し、形成的評価に活用している。
協同的学習の実施	2021年4月1日～	演習、英語科目および教職科目において，グループ活動を取り入れ，学生が主体的に協同学習を行う機会を作っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
高等学校用文部科学省検定教科書英語コミュニケーションCrossroads編集・執筆	2016年4月～	Genius English Communication I-III改訂版及びCrossroads English Communication I-III（大修館書店)の編集・執筆（編集代表）
講義資料ハンドアウトの作成	2013年4月1日～	担当するすべての科目において配付資料を作成し活用している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県気仙沼高等学校英語科研修会（講師）	2023年12月15日	英語を使いながら身につける言語活動実践と題したワークショップ形式の講演を行った。
宮城県角田高等学校令和5年度発信型英語教育拠点校事業公開授業及び講演会（講師）	2023年12月14日	
宮城県総合教育センター・東北学院大学令和5年度英語科研修会((講師)	2023年8月22日	
令和5年度一関第一高等学校高大連携講座（未来探究講座）講師	2023年7月3日	第二言語習得研究に基づく英語学習法と題した出張講義を行った。
仙台育英学園高等学校令和5年度Brush Up研修会講師	2023年5月23日	
文部科学省検定済教科書の編集	2020年4月1日～	小学校外国語検定教科書New Horizon Elementary English Course 1-2 及び中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3(東京書籍）の編集協力者、高等学校外国語（コミュニケーション英語I-III）検定教科書Genius English Communication改訂版I-IIIの編集代表を務めている。

現在の課題・目標	・講義・演習では一方的な知識注入型の講義ではなく，理解し，考え，そして伝える力を伸ばすよう協同学習的な活動を取り組んで指導方法を工夫している。 ・到達目標を明確に示し，妥当性の高い評価を行うようにしている。 ・学生の学ぶ意欲高めるため，教材・授業形態を工夫している。
今年度の進捗状況	・学生の授業評価結果から判断して，講義・演習での工夫は一定の成果を上げていることがわかった。 ・全ての科目においてある程度妥当性の高い評価を行うことができた。 ・学生の授業評価結果から判断して，学生の学ぶ意欲高めるための工夫は一定程度成果を上げていることがわかった。
来年度の進捗目標	・講義・演習において，理解し，考え，そして伝える力をさらに伸ばすよう指導方法を改善する。特に学生の自律性を高める支援をしていく。演習、卒業研究の質を高める。 ・到達目標を授業内容に合わせて再度見直し，さらに妥当性、信頼性、実用性の高い評価を行うようにする。 ・学生の学ぶ意欲をさらに高めるため，協同学習，プロジェクト型学習を取り入れて教材・授業形態を工夫する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
高等学校外国語科用文部科学省検定済教科書Crossroads English Communication II『高等学校外国語科用文部科学省検定済教科書 Crossroads English Communication II』	共著	2023年4月	大修館書店	村野井仁, Marcel Van Amelsvoort, 大田悦子, Lara Promnitz-Hayashi, 松尾美幸, 矢野賢, 前田昌寛, 西室雅央	pp.1-160
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1 第二言語習得に関する単行本出版企画を進める。 2 CLIL及び文法習得についての研究を進める。
今年度の進捗状況	1 第二言語習得に関する単行本出版企画を準備中である。 2 CLIL及び文法習得についての研究成果の発表準備をしている。
来年度の進捗目標	1 第二言語習得に関する単行本を執筆する。 2 CLIL及び文法習得についての研究成果をまとめ, 論文発表する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2019年～	大学英語教育学会(JACET) 東北支部副支部長
2018年3月～	小学校英語教科書New Horizon Elementary（東京書籍） 編集協力者
2016年～	高等学校検定教科書英語コミュニケーションI-III Crossroads（大修館書店）編集委員会 編集代表
2003年～	アジア英語教育学会 会員
2002年～	日本第二言語習得学会 会員
2001年～	文部科学省検定教科書中学英語New Horizon English Course（東京書籍） 編集協力者
1987年～	大学英語教育学会(JACET) 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

副学長（学務担当）
教学組織改編推進室長
ワンダーフォーゲル部部長

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	ロング　クリストファー	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義の工夫	2005年～	講義形式の授業において，学生の理解及び興味関心を高めるため，映像・動画などを取り入れたパワーポイントを作成するように工夫した。
学生の研究及び研究発表の指導	2005年～	個人又はグループによる独自の研究プロジェクト及び英語による研究結果発表の指導により，専門的な知識のみならず，学生の英語によるコミュニケーション能力の向上に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	ワークライフバランスを維持しながら、学生の教育に貢献すること。	
今年度の進捗状況	ワークライフバランスを維持することは難しいが、現在は、目標達成に努めている。	
来年度の進捗目標	ワークライフバランスを維持しながら、学生の教育に貢献すること。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
The expression of affection in Japanese: Implications for audiovisual translation		2024年2月	JALT Hokkaido	Daniel Dean,Christopher Long	
English expressions of ‘love’ in Japanese subtitles and dubbing		2023年7月	18th International Pragmatics Conference	Christopher Long	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	ワークライフバランスを維持しながら、専門分野に貢献すること。				
今年度の進捗状況	ワークライフバランスを維持することは難しいが、現在は、目標達成に努めている。				
来年度の進捗目標	ワークライフバランスを維持しながら、専門分野に貢献すること。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年～	Language in Society 査読委員
2017年～	Discourse, Context & Media 査読委員

2016年～	East Asian Pragmatics 査読委員
2016年～	Journal of Politeness Research 査読委員
2011年～	Journal of Pragmatics 査読委員
1998年～	社会言語科学会　会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当なし		
今年度の進捗状況	該当なし		
来年度の進捗目標	該当なし		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

ワークライフバランスを維持するため、「学内管理運営」への貢献を控えめにしている。

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	渡辺　通子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
国語科教育におけるアクティブラーニング型授業の工夫	2023年4月～	教員養成における国語科教育の在り方について、受講者が実践の場で活用できるようにするために、言語活動を組み入れる指導方法で実施している。国語科教育は母語を中心とする教科であり、言語が子供の認知能力や思考能力の育成に結びついていることを重視するためである。
アクティブ・ラーニング型の授業作り	2023年4月～	これまで進めてきたワークショップ型授業やグループごとの課題探究学習を継続して組み入れた授業づくりを心掛けた。また、15回のうち最低1回は、授業の事前学習や事後学修に資するようmanabaのプロジェクト機能を活用する会を設定した。2022年度より全面対面授業に戻ったが、一部受講生にはZoomによる受講があった。教室と遠隔地とで、同時進行で授業を進めることにはよりスムーズに進める工夫を要する。
学修意欲の喚起と主体的学修のための工夫	2023年4月～	大学提出のシラバスとは別に，日程表や進め方，レジュメ様式を提示した授業用のシラバスを作成し提示することで、受講生の主体的学修を促している。
manabaコースを活用した授業づくり	2023年4月～	manabaコースの活用は年度ごとに増えている。本年度は個別指導機能を活用することで、受講生とのコミュニケーションが増えた。但し、詳細な確認事項等はオフィスアワーで再確認している。 前々年度からの継続課題は、①正確・公正な出席の確認と、②評価対象としての提出物増加に伴う授業評価の公正性・妥当性・客観性をどのようにするか、まだどのようにして効率化を図るかである。
2．作成した教科書、教材、参考書		
言語活動中心　国語概説【改訂版】ー小学校教師を目指す人のために―　学文社	2022年3月30日	第13章　コミュニケーションの力【改訂】担当
新たな時代の学びを創る　中学校高等学校国語科教育研究	2019年9月26日	Ⅳ3－1－1「思考力、判断力、表現力を育てる授業作り　話すこと・聞くこと」執筆（2019．全国大学国語教育学会編　東洋館出版社）
国語科重要用語辞典	2015年8月	第4部「【歴史】57　話すこと・聞くことの指導」執筆（2015．高木まさき・寺井正憲・中村敏雄・山元隆春編、明治図書出版）
小学校教育課程実践講座国語	2017年12月15日	「7章2節　汎用的な言語能力の育成」執筆担当（2017．樺山敏郎編　ぎょうせい）
言語活動中心　国語概説ー小学校教師を目指す人のために―	2018年9月15日	初等教育に必要とされる日本語に関する基礎知識である科目「国語」について、小学校教員養成のためのテキストとして開発した。「13章　コミュニケーションの力」執筆担当（2018．岩崎淳・木下ひさし・中村敏雄・山室和也編、学文社）
『教職エッセンシャル』（学文社）	2013年8月20日	2013年度より新規開講の「教職実践演習」（4年次後期対象）に対応した教科書である。 Part4－2執筆担当。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
2023（令和5）年度 茨城県高等学校教育研究会表現部会 小中高等学校接続の視点から高校国語教育を考える―論理と文学と―	2024年3月27日	高等学校における国語教育の方向性について、教科カリキュラムの変更を取り上げ、義務教育との違い、高等教育へ接続する論理教育の在り方を説明した。その後、観点別評価のワークショップを実施した。文学教育については、漱石作品採択の経緯、及び推移を例に国語教育史に位置づけながら今後の見通しを述べた。
2023年　宮城県総合教育センター　専門研修 ①教科等に関する研修 小中高を通して育成する「話すこと・聞くこと」の資質・能力―小中高を見通した「話すこと・聞くこと」の授業づくり	2023年11月8日	「話すこと・聞くこと」を中心に、小中高等学校を見通した指導の在り方について述べた。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
第11回全国日語俳句大賞選者	2024年3月	
鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザー	2015年11月	小中一貫教育を推進していく上でのグランドデザイン構想についての助言をした。

第25回白鳥省吾賞審査員（小中学生の部）	2023年7月1日～2024年3月31日	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年7月～2024年3月	「第25回白鳥省吾賞」審査員
2015年11月～	鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザー 委員
2014年～	第16回～白鳥省吾賞審査員 委員
2013年4月～	読書学会 会員
2009年9月～	日本教育学会 会員
2002年4月～	日本教科教育学会 会員
2001年4月～	国語教育史学会
2001年4月～	コミュニケーション学会 会員
1998年4月～	早稲田大学国語教育学会 会員
1996年4月～	全国大学国語教育学会 会員
1995年4月～	日本国語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	大友　麻子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
参加型授業の実施	2018年4月～	・演習形式の科目はもちろん、講義形式の科目においても、ワークショップ型の活動を組み込むことにより、学生が主体的・対話的に学習できる機会を多く持てるように努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
2023年度小学校教員のための中学英語免許認定講習（英語コミュニケーション）	2023年7月22日	7月22日（土）・8月18日（金）、小学校教員を対象として、英語コミュニケーションの講習を計8コマ実施した。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
小学校教員のための中学英語免許取得認定講習コーディネーター	2022年1月～	
中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3（東京書籍）編集協力者	2020年4月1日～	
教員採用試験対策講座 英語Ⅰ	2020年～	中高英語の教員志望者を対象に、教採対策として「リーディング力の育成」の講座を行っている。
教員採用試験対策講座 英語Ⅱ	2020年～2024年	中高英語の教員志望者を対象に、教採対策として毎年計5～10コマの講座を行った。
宮城県中学校・高等学校英語科研修会	2018年～	宮城県教育委員会主催「中学校・高等学校英語科研修会」にて授業実践についての講評を行った。

現在の課題・目標	・学生とのコミュニケーションを大切にし、円滑な教育活動が行えるように努める。 ・授業形態や教材を工夫することにより、学生の学習意欲のさらなる向上を図る。
今年度の進捗状況	・チューターやゼミ担当教員としてそれぞれの学生と個人面談を行うなど概ね順調に進捗していると思われる。また、国際交流部副部長として、より多くの留学生を受け入れるべく、課題の解決に着手することができた。 ・学生の興味・関心に応じて自らが課題を設定し、意欲的に取り組めるように工夫することができた。 ・指定テキストだけでなく、学生の実態に合わせた教材を作成し、使用した。 ・学科の定員数が増えたことにより、授業の履修者数も増え、個々の学生へきめ細かなフィードバックを行うことが難しくなってきている。
来年度の進捗目標	・留学生の派遣と受入れがより活発に行われるよう、対策を講じる。 ・学生が理論と実践の有機的な繋がりをより明確に意識できるよう、講義の仕方を工夫する。 ・履修者数の多い授業においても、効果的・効率的にフィードバックできる方法を探る。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	認知言語学の枠組みにより日本語と英語の対照研究を進め、成果をまとめる。
今年度の進捗状況	今年度は絵本の中でも定型詩の絵本も題材として取り上げ、日本語と英語の比較対照を行った。
来年度の進捗目標	本年度までに収集した日英の絵本のデータ等を用いて、引き続き日英対照研究を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年12月～	表現学会 会員
2023年9月～	絵本学会 会員
2020年7月～	大学英語教育学会東北支部 紀要編集委員
2018年11月～	東京書籍　中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者 委員
2018年4月～	大学英語教育学会 会員
2018年～	Australian Linguistic Society 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1. 国際交流部副部長
2. 教職課程センター運営委員
3. キャンパス禁煙化推進委員

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	清水　遥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
東北学院大学2022年度教育功績等優秀教員表彰	2023年7月7日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
令和5年度高大連携事業　地域公開講座@石巻高校　講師	2023年10月17日	
連携協力協定に基づく「仙台イングリッシュ・キャンパス」	2023年～	
連携協力協定に基づく「 イングリッシュ・キャンプin美里 」	2022年～	
東北学院大学免許法認定講習	2018年6月1日～	中学校英語免許取得認定講習において講師を務めている。
宮城県小学校外国語活動・外国語研修会	2018年～	講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。
宮城県中学校・高等学校英語科研修会	2018年～	講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。

現在の課題・目標	①学生とのコミュニケーションを大切にし，学生からの質問，相談等に応じる。 ②到達目標に照らした評価を実施し，学生に対して説明責任を果たせるように努める。 ③地域連携協定に基づく小学生への外国語ボランティア事業を適切に運営する。
今年度の進捗状況	①manabaの個別指導やメール，対面での問い合わせに対して，迅速に対応することができた。 ②評価の割合についてガイダンスで丁寧に説明を行った。また，ルーブリックを示して，課題に対するフィードバックを行い，学生自身も確認できるようにした。 ③仙台イングリッシュ・キャンパスを初めて実施することができた。学生は日ごろ学んだことを実践する機会を得ることができた。また，仙台市の小学生に英語に触れる機会を提供することができ，一定の成果があったと考える。
来年度の進捗目標	①新カリにより，「児童英語概説」の受講者人数が増えるため，授業内容（主にパフォーマンステストの実施方法）と評価方法の調整を行い，到達目標に照らしてふさわしいものにする。 ②フィードバックが遅れた授業があるため，迅速に行う。 ③地域連携協定に基づく小学生への外国語ボランティア事業（仙台イングリッシュ・キャンパス，イングリッシュ・キャンプ in 美里）を継続し，学生への還元と地域貢献に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
英文読解に必要な知識・技能とは？―メタ分析による検証	単著	2024年3月	大修館書店,『英語教育』, 72(13)	清水遥, 星野由子	pp.35
小学校教科書の活動にはどのようなものがあるか：5領域別の分類とその特徴	共著	2024年1月	大修館書店,『英語教育』, 72(11)	清水遥, 星野由子	pp.24-25
外国語学習に関わる3つの感情の関係	単著	2023年10月	大修館書店,『英語教育』, 72(8)	清水　遥	pp.64
HLEが子どものL2習得に与える影響	単著	2023年6月	大修館書店,『英語教育』, 72(3)	清水　遥	pp.65
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表					
日本人英語学習者による複数文章読解問題の解答プロセス―発話プロトコルに基づく検証―	共同	2023年8月	全国英語教育学会第48回香川研究大会(香川大学)	土方 裕子, 星野 由子, 清水 遥, 小木曽 智子, 小室 竜也, 卯城 祐司	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	①代表者を務める科研を進める。 ②分担者として関わっている科研2件について, 共同研究を進める。
今年度の進捗状況	①代表者を務める科研については, 進捗がやや遅れている。 ②共同研究については, 国際誌に論文一本が採択された。また, 国内学会で口頭発表1件を行い, 論文執筆中である。
来年度の進捗目標	①代表者を務める科研を進め, データ収集を行う。 ②分担者として関わっている科研2件について, 共同研究を進め, 分担者としての役割を果たす。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 日本学術振興会 萌芽研究	2022年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 日本学術振興会 基盤研究 (B)	2022年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 日本学術振興会 基盤研究 (C)	2022年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	外国語教育メディア学会 会員
2021年4月～	東北英語教育学会 東北英語教育学会研究紀要宮城支部査読員
2018年6月～	日本児童英語教育学会 会員
2018年4月～	小学校英語教育学会 会員
2015年4月～	東北英語教育学会 会員
2007年4月～	日本言語テスト学会 会員
2007年4月～	大学英語教育学会 会員
2006年4月～	全国英語教育学会会員 会員
2006年4月～	関東甲信越英語教育学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	髙橋　千枝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	視覚的教材の提示方法等を工夫しながら学生にわかりやすい授業また学生が主体的に学びを深めることができるような授業を実施することを目標とする。ただし、「誰もが簡単に学べる」といったわかり易さではなく、学部水準の専門的学びとして学生が興味を持ち主体的に学ぼうとする力を導き出す授業を目標とする。
今年度の進捗状況	学生の授業調査では大部分が授業のねらいを達成できたと答えているため、目標は概ね達成できたと考える。しかしながらまだ授業の到達目標や意図が明確でない、また受講理由が「免許取得のため」という学生もいることから、今後も上記目標は継続していく。
来年度の進捗目標	現在の目標を引き続き今後の目標としても継続する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	一年間に一論文、一学会発表を目標に研究を進めている。
今年度の進捗状況	今年度は学術著書を1編執筆することができたが、共著等の関係により刊行は来年度になった。
来年度の進捗目標	今年度同様に論文一編の執筆および一学会発表を目標に研究を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～	臨床発達心理士認定運営機構有資格者支援特別委員会 委員
2021年6月～	日本臨床発達心理士運営機構スーパーバイザー資格委員会 委員
2018年4月～	仙台市保育スーパーバイザー事業 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	文学部　教育学科	職名	助教	氏名	松本　進乃助	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部指導支援	2021年5月22日～	仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部の楽器指導の支援
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
障害学における社会モデル観に基づく音楽学習 ―ＴＡＳモデルの実践における指導者と肢体不自由のある生徒の関わりに着目して―	共著	2023年11月	音楽の授業づくり ジャーナル	松本進乃助 荒木哲弥 川口隼司	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

経　済　学　部

経　済　学　科

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	アレイ　ウィルソン	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	伊藤　健宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
マクロ経済学入門の実践	2023年4月～	パワーポイントによる講義。講義用スライドに対応した穴埋め式の配布資料をmanabaで配布し、学生がノートを取りやすいよう便宜を図っている。復習用にmanaba経由でドリル問題を各回6問以上出題。すべてに詳細な解答例をつけ、復習しやすいように配慮している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
マクロ経済学入門の講義ノート	2023年4月～	マンキュー経済学Ⅱマクロ編の内容をベースにパワーポイントにて講義ノートを作成。同時に学生への配布資料と各回終了後に取り組み可能なドリル問題もセットで作成。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	担当講義用の講義ノート、配布資料、manabaで利用可能な復習用のオリジナル練習問題を新規にすべて製作する。
今年度の進捗状況	基盤となる各資料等は概ね作成することができた。
来年度の進捗目標	作成した資料等の改訂を図りつつ、学生がより効率よく経済学の知識を整理できるようにするための工夫を考えたい。また、manaba用のオリジナル問題をさらに充実させ、学生の学習時間をさらに増やせるようにしたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	改訂要求のあった論文の改訂作業を終え、再投稿すること。 また、現在取り組んでいる2つの研究課題の投稿に向け鋭意作業を続けること。
今年度の進捗状況	改訂要求をクリアし、論文を一つ英文雑誌に掲載することができた。 残る2つの研究課題についても、証明などの作業を継続中である。
来年度の進捗目標	作業中の研究課題のどちらか一つを英文誌に投稿すること。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	泉　正樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業論文集の作成	2022年～	4年生向けの演習において，卒業論文集を作成した。各自でテーマを選択し、中間報告会での検討を経て修正を施したのちに卒業論文集として執筆者に配布した。
授業理解の促進	2020年～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業終了時にはその回のまとめと次回の予告を行った。
学習事項の定着	2020年～	講義系の科目では、各単元の終了時にe-ラーニング・システム「manaba」を利用した「振り返り」を実施し、学習事項の定着を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業スライドの作成	2020年～	講義科目「資本主義経済入門Ⅰ・Ⅱ」で使用するテキストに準拠するパワーポイントスライドを作成した。
授業スライドの作成	2020年～2023年	TGベーシック科目「地球社会を生きる」において，授業中に使用するスライドを作成した。これは、超長期の観点から「グローバリゼーション」についての解説を行っているManfred B. Steger [2009] Globalization, Oxford University Press などを参考にしたものである。また、社会的再生産と市場についての基礎的な導入を行って、経済のグローバル化が意味することの理解を促すスライドを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①講義「資本主義経済入門Ⅰ・Ⅱ」の理解度を測定できる方策を考える。 ②演習系科目における効果的なレジュメ作成・発表の指導。 ③「地球社会を生きる」の教材の改善
今年度の進捗状況	①については、manabaを活用して、授業内で複数回の小テストを実施して成績評価を行なった。 ②LMSを活用して、受講者間での共同作業が行えるようにした。 ③については、現在、私自身が研究を進めている「グローバリゼーション」を捉えうる方法を紹介するスライドを作成した。
来年度の進捗目標	①については、成績評価の方法についてさらに検討を行う。 ②については、LMSを活用したレジュメの共同作成をさらに展開する。 ③については、2023年度をもって担当から外れるため、目標は設定しない。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
『資本論』の計量テキスト分析：価値・労働・資本概念を中心として	共著	2024年3月	社会科学論集，170	江原慶，結城剛志，泉正樹	pp.49-71
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
デジタルテキスト作成の一手法についての覚書：計算貨幣論の計量テキスト分析に向けて	単独	2023年8月	第77回経済思想研究会(東北大学川内キャンパス)	泉正樹	

『資本論』の計量テキスト分析：価値・労働・資本概念を中心として	共同	2023年5月	経済学史学会第87回全国大会 (専修大学生田キャンパス)	江原慶・結城剛志・泉正樹	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③計量テキスト分析に着手する
今年度の進捗状況	①については、関連文献を読み進めることができた。 ②については、関連文献を読み進めることができた。 ③については、ディスカッションペーパーを経済思想研究会（2023年8月20日：東北大学）で報告した。
来年度の進捗目標	①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③計量テキスト分析を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大塚　芳宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生アシスタントを活用したプログラミング指導	2023年4月1日～	カオス時系列解析の講義では、2023年度より学生アシスタント(SA)を2名雇用し、プログラミング指導の効率化を図った。
データサイエンスにおけるBYODの実践	2021年4月1日～	カオス時系列解析の講義では、近年、データサイエンス分野で普及されているPythonを実践形式で行った。履修者にはPCやタブレットを持ってきてもらい、その場で統計分析を行ってもらうものである。受講生が所有するPCのスペックに隔たりがないようにGoogle社が提供するColaboratoryを使用し、高度な統計分析を体感してもらう環境を整備した。
計量経済学Ⅰ・Ⅱ（データ解析・計量経済学）は講義資料，資料で用いたデータをeラーニングシステムmanabaで公開し，復習及び受講生が自宅学習できるよう環境を整備した.	2020年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
統計モデルによる景気分析	単著	2024年3月	景気循環学会，景気とサイクル，77	大塚芳宏	pp.60-66
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
令和インフレの特徴 ―品目別データによる分析―	単著	2023年8月	東京財団政策研究所 Review，041	大塚芳宏	pp.1-6
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
統計モデルによる景気分析	単独	2023年12月	景気循環学会(日本プレスセンター)	大塚芳宏	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年10月～2024年3月		エビデンスに基づく政策立案(EBPM)に資する経済データの活用 学術調査立案・実施	
2018年4月～2024年3月		東京財団政策研究所「リアルタイムデータ等研究会」メンバー (2018年4月～2019年3月)(東京財団政策研究所「リアルタイムデータ等研究会」メンバー(2018年4月～2019年3月))	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	嘱託教授	氏名	小沼　宗一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容の記憶への定着と授業理解の促進	2023年4月1日～2024年3月31日	「経済思想史入門」・「「経済思想史」を遠隔授業（オンデマンド授業）で実施した。毎回の授業の配布資料は次の2点。①授業内容：音声付きスライドの動画ファイル，②時間配分ファイル（PDF）。配布資料①・②は，Googleドライブにアップし，共有URLをmanabaのコンテンツへ提示した。スマホからでもストリーミング再生することができるように工夫した。コンテンツの公開は，授業日から5日後の正午までとした。オフィスアワーに代わり，manabaの個別指導機能を使用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～2023年4月	仙台地方裁判所委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	倉田　洋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の定着と授業理解の促進	2020年～	講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業を行った。授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、集中して見られるように動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答する、といった工夫を行い、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義動画	2020年～	経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」,「ミクロ経済学Ⅱ」の講義動画。Youtubeを用いて配信を行っている。
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義資料	2020年～	経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」,「ミクロ経済学Ⅱ」のパワーポイント教材。受講生には穴埋め形式の教材を配信し、受講中に完成してもらう形をとっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Inefficiencies in Firm Locations in Non-tradable Service Industries with Product differentiation	単独	2023年9月	13th International Conference “ECONOMICS OF GLOBAL INTERACTIONS”(Univerisity of Bari)	H. Kurata T. Ohkawa M. Okamura	
Corporate Environmentalism at Nash and Kantian Equilibrium	単独	2023年4月	2023 NCU Conference on Trade, Economic Growth, and Environmental Economics(National Central University)	H. Kurata N.V. Long	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科研費基盤(C)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		宮城県名取北高等学校　学校評議員会 学校評議員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	佐藤　純	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・学生が理解しやすいスライドの作成 ・多数のPDF化した資料やテキストの公開 ・教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立て	2020年4月1日～	オンデマンド授業であったこともあり、学生が理解しやすいスライドを100枚以上作成した。また、授業内容の理解を促進するためにPDF化した資料を多数公開した。その結果、学生のアンケートでは、「話がわかりやすかった」「授業内容が興味深かった」等のポジティブな評価を得ることができた。一方、授業と教科書の内容との関連性が希薄であるとの指摘も受けたため、教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立てにも鋭意努めている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
井上巽『金融と帝国Ⅱ－スターリング・ブロックの形成と展開－』	単著	2024年3月	西洋史学論集(61)	佐藤純	pp.101-103
1930年代イギリスの帝国外諸国に対する二国間通商政策――アルゼンチンとデンマークの事例――	単著	2023年12月	東北学院大学経済学論集(199)	佐藤純	pp.1-23
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
世界貿易のネットワーク[改訂版]『世界貿易のネットワーク(改訂版)』	単訳	2023年	創成社	佐藤純	pp.1-312
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	佐藤　康仁	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
responの活用	2018年～	ほぼ毎回、授業終了時にresponを利用して、授業内容のポイントや「まとめ」、疑問点などを提出させている（授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進）
manabaの利用	2017年～	2016年度から経済学部で導入されたeラーニング manabaを利用して，授業資料の公開や小テストの実施，質問用掲示板の設置などを行っている（授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進）
ウェブサイトでの授業内容の公開	2016年～	「加齢経済論」等，担当する授業の内容（シラバス，授業配付資料等）をウェブサイトに公開している（2016年度後期からは経済学部e-ラーニング「manaba」に移行）
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進	2013年～	毎回，授業開始時には前回授業内容の復習とその回の授業の概略を説明するとともに，授業終了時にはその回の授業内容のまとめを行っている
レスポンス・カードの利用	2013年～	毎回、授業終了時に、授業内容のポイントや質問等を書いてもらうことで、その回の授業内容の受講生（学生）の理解度を把握し、それを授業内容の改善につなげるとともに、次回授業時には質問に対する回答を行うことによって、授業内容の理解を深めるようにしている
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	①授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進 ②講義における成績評価方法の改善	
今年度の進捗状況	①manabaの小テスト機能を利用して、毎回の講義後にその日の講義内容に関する課題を課すことで理解度の確認を行った。また、次回授業の事前学修課題についても課した。manabaの講義コース上に毎回の講義資料を公開することで受講生は必要に応じて復習できるようになっている。 ②1回の試験による成績評価ではなく、manabaを活用することで、毎回の小テスト、事前学修課題、最終回（第15回）「まとめ」の試験を行い、総合的に評価することが可能となった。	
来年度の進捗目標	・授業最終回に実施する授業評価アンケートの結果をふまえて見直しを行う。 ・manaba、responのより効率的、効果的な活用をはかる。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
The Effect of Political Uncertainty and Political Lobbying『Modern Macroeconomics with Historical Perspectives』	分担執筆	2023年8月	Springer	Eriko Aihara, Tsuyoshi Shinozaki	pp.107-127
Intergenerational Inequalities and Policy Options for Achieving Generational Balance in Japan『Modern Macroeconomics with Historical Perspectives』	共著	2023年	Springer	Yasuhito Sato	pp.107
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Intergenerational Inequalities and Policy Options for Achieving Generational Balance in Japan	単著	2023年	Springer, Singapore, Modern Macroeconomics with Historical Perspectives. New Frontiers in Regional Science: Asian Perspectives, vol 67	Sato, Yasuhito	pp.107-127
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

新型コロナウイルスの感染拡大とその世代間格差への影響	単著	2024年3月	東北学院大学経済研究所紀要, 1	佐藤　康仁	pp.65-75

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

新型コロナウイルスの感染拡大とその世代間格差への影響について	単独	2023年12月	生活経済学会東北部会2023年度研究報告会(仙台)	佐藤　康仁	
吉田浩報告「2023年に改訂された「日本の将来推計人口」と公的年金の将来収支の変化について」へのコメント	単独	2023年9月	2023年第77回東北経済学会(岩手県立大学アイーナキャンパス)	佐藤　康仁	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①高齢化と世代間格差に関する研究 ②世代会計による日本の世代間不均衡の計測
今年度の進捗状況	新型コロナウィルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴う積極的な財政政策の採用（財政支出規模拡大）が世代間格差に与えた影響について、世代会計の手法を用いて分析した。この研究成果は、2023年12月の生活経済学会東北部会で報告されるとともに、2024年5月に熊本市で開催された日本経済政策学会第81回全国大会でも報告された。
来年度の進捗目標	より一層の研究の推進をはかる

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会　科学研究費補助金　基盤研究（C）	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年5月～	仙台地方裁判所委員会 委員
2021年10月～	多賀城市行政不服等審査会 会長
2013年10月～	宮城県消費生活審議会 副会長（2017年～）
2011年12月～	内閣府　経済社会構造に関する有識者会議　財政・社会保障の持続可能性に関する「制度・規範ワーキング・グループ」 世代会計専門チーム 委員
1996年10月～	生活経済学会　会員（2015年6月～2021年5月：理事。2019年6月～2021年5月：東北部会長）会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

経済学部長（2021年4月～現在）

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	篠崎　剛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド講義	2020年～	オンデマンド講義において，Zoomで録画をし，学生のフィードバックに出来る限り対応した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイント教材の作成	2014年4月～	国際経済学にて学ぶ内容を授業前に学生が予習できるようパワーポイント資料をHPにアップロードしている。
国際経済学の講義ノート	2010年4月～	国際経済学の講義ノートのパワーポイント教材。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
演習での懸賞論文への参加およびインターゼミナールへの参加	2020年～	
学内外のインターゼミナールへの参加	2017年～	学内での同学部，他学部のゼミまたは他大学とおこなわれるインターゼミナール（全国インターゼミナール大会）へ参加し，学生の成長に資する経験をさせるようにしている

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
The Effect of Political Uncertainty and Political Lobbying『Modern Macroeconomics with Historical Perspectives』	分担執筆	2023年8月	Springer	Eriko Aihara, Tsuyoshi Shinozaki	pp.107-127
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Symmetry-breaking and trade in neoclassical economies with domestic policies having diminishing effect to production scale	共著	2023年8月	Fulbright Review of Economics and Policy, 3(2)	Tsuyoshi Shinozaki, Makoto Tawada, Mitsuyoshi Yanagihara	pp.128-137
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
The effect of cultural consumption on modern economic growth path from human capital regime to cultural capital regime	共同	2023年6月	22nd International Conference on Cultural Economics(Bloomington, Indiana, USA)	Tsuyoshi Shinozaki, Anna Mignosa, Mitsuyoshi Yanagihara, Ishidoro Mazza, Minoru Kunizaki	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費（基盤C）「政治体制と長期の経済成長プロセスの整合性に関する研究」	2018年度～	共同(研究代表者)	本研究では，政治体制の違いが経済成長に与える影響について，経済成長経路上での政治体制（独裁主義から民主主義へ）の変容の在り方とその望ましさを明らかにするものである。そのため，初めの二年間において，経済成長モデルに基づく政治制度の変容の分析および政治家の振舞いに行動経済学的視点を導入した分析を行ったうえで，最終年度にこれらを統合し，より現実的な政策提案を行うことを目指す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年1月～	大槌町上下水道等審議会 審議委員
2021年9月～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2019年8月～	Association of Cultural Economics International 会員
2007年～	日本地域学会 会員
2007年～	生活経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	白鳥　圭志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	千葉　昭彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習3年生のエクスカーション実施	2016年～	いくつかのグループに分けて仙台市内の街なか（旧奥州街道・東北大学片平キャンパス・国分町通り・広瀬通り・一番町通り・壱弐参横丁など）を歩き、現地で町の成り立ちや変遷を解説
講義において，前回の内容の理解確認と評価方法の工夫	2010年4月～	地域経済論と経済立地論の講義で確認の小テストなどを行い、その次の講義で解答確認を行い、前回講義内容の理解の確認を行っている。また、その採点結果を年間評価に反映させる。 2020年度からは前期・後期ともに遠隔授業だったので、小テストを5回、レポート課題5回実施した
4年生演習卒業論文	2010年4月～	4年生では調査を踏まえた卒業論文の作成を義務付けている。なお，終了後は論集として編集・発行。
3・2年生の演習において1年間で10冊以上の書籍のレポートを提出させ，添削のうえ返却	2010年4月～	主に文献要約を行わせ，添削返却するが，それが一定水準に達するまで再提出を繰り返し，文献の理解が確実になるように指導する。なお，学生の多くがある程度充分な内容把握が出来るようになった段階で，自らの意見を論理的に記述するようなレポートへと課題内容を移行。
2・3・4年生演習合宿	2010年4月～	年間2回の合宿（春季および夏季に3泊4日）を2年生～4年生が合同で行い，3年生は夏にインゼミレポートの中間報告，3年生春は各自の卒論テーマの検討，4年生夏は卒論中間報告，4年生春は卒論報告を行う。また，合宿地周辺地域でのフィールドワーク・エクスカーション（2010年夏山形県山形市・2010年冬宮城県石巻市・2011年夏岩手県八幡平市および盛岡市・2011年冬福島県会津若松市および喜多方市・2012年夏岩手県花巻市）を実施。なお，合宿の日程・場所等については基本的には学生が企画・運営。 ただし、2020年度と2021年度はコロナの影響で合宿を行うことが不可能だったので、夏季休業中と春季休業中にそれぞれ2日間学内で上記のことを行った。
1年生総合演習Ⅰでのディベートトレーニング	2010年4月～	特に1年生後期に次年度以降の演習に備えて，ディベートを実施。「フリーターの是非」や「レジ袋有料化の賛否」「原発再稼動賛否」などの身近なテーマや社会問題を取り上げ，主張の論理性にウエートを置いて話をすることを指導。なお，それぞれの意見に対して論理的な反論も試みる。
1年生総合演習ⅠでDVD/VTRの活用	2010年4月～	経済学科に入学した新入生が必ずしも経済問題に強い関心を持っているわけではない。そこで，関心喚起を目的として時節を考慮したDVD/VTRを利用。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北自治研修所での講義	2014年8月～	東北の自治体中堅職員を対象とした中堅職員研修（各90分授業を10回）を行い、様々なアクティブラーニングの方法を通じて，各自治体の問題の所在や解決の方向性を検討。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

商業集積『日本の都市地理学研究』	共著	2024年3月	古今書院	千葉昭彦	pp.155-167
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
教養教育カリキュラム改訂の経緯とその意義 -東北学院大学における2023年度TGベーシック等の改訂を対象として-	単著	2024年3月	東北学院大学教育総合研究所，教育総合研究所報告集，24	千葉昭彦	pp.7-48
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
学都仙台コンソーシアムの成立の経緯と現在の活動状況	単著	2023年9月	北海道高等教育研究所，北海道高等教育研究所ニューズレター(24)	千葉昭彦	pp.2-13
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
災害レジリエンスと建設業	単独	2023年11月	地域経済学会第35回全国大会(札幌（北海学園大学）)	千葉昭彦	
自然災害論と災害レジリエンス	単独	2023年8月	経済地理学会北東支部例会(札幌)	千葉昭彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年5月～	みやぎ震災復興研究センター 代表
2021年11月～	日本地域経済学会 常任理事（連携・交流委員長）
2021年8月～	角田高校サマーカレッジ 農村の経済問題は農業で理解できるのか 講師
2021年7月～	東北学院榴ヶ岡高校 高大一貫教育説明会 講師
2021年6月～	東北地理学会 評議員
2021年3月～	東北学院高校プレカレッジ 地域経済入門 世界遺産登録と地域経済 講師
2020年4月～	日本地理学会 代議員
2015年11月～	日本地域経済学会 理事
2012年5月～	経済地理学会 編集委員
2012年5月～	学都仙台コンソーシアム企画部 部会長

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	舟島　義人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
受講生の理解度に応じた授業の実施	2020年4月～	e-ラーニング（respon）を活用して分からない点を確認し，受講者の理解が不足している点を重点的に講義している。
授業時間外の学習の促進	2020年4月～	授業の補足資料を学習支援システム（manaba course）を使って配布し，授業時間外の学習を促している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月～	講義形式の授業においても，学生が自ら考える演習の時間をとっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
マクロ経済学講義ノート	2023年4月	経済学部3・4年生向けのスライド
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①学生が数学を使って経済分析を行えるようになる。 ②大人数講義における学生の主体的な学びを促進する。
今年度の進捗状況	上記の目標①については，授業において，経済分析に必要となる数学を適宜解説した。 目標②については，e-ラーニング（respon）を活用することで，受講生各自が問題意識を持って受講できるように努めている。
来年度の進捗目標	上記の目標①については，受講生の理解度に応じて説明を工夫する。 目標②については，引き続きe-ラーニング（respon）のより効果的な活用方法を模索する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
How does economic policy uncertainty respond to permanent and transitory shocks?	単著	2024年1月	Bulletin of Economic Research, 76(1)	Yoshito Funashima	pp.267-282
Did the Japanese government's travel subsidy increase the number of hotel guests and infection during the COVID-19 pandemic?	共著	2023年9月	Economic Analysis and Policy, 79	Yoshito Funashima, Kazuki Hiraga	pp.1005-1025
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①論文“Media-created economic uncertainty”を学術雑誌に掲載する。 ②論文“Countercyclical uncertainty and recession announcements”を学術雑誌に掲載する。 ③論文“The role of renewable energy in energy-related uncertainty”を学術雑誌に掲載する。
今年度の進捗状況	上記の目標①～③について，いずれも査読付き学術雑誌に投稿中，または，投稿準備中である。
来年度の進捗目標	上記の目標①～③については，必要な改訂作業を行いつつ，査読付き学術雑誌に掲載されることを目指す。また、新たな研究テーマに着手する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～	共同(研究分担者)	本研究課題では，オープンマクロ経済学や国際金融論における様々なパズルを実証的かつ理論的に分析を行い，国際金融市場や貿易市場における諸問題の発生メカニズムを明らかにする。国際金融市場は，日々国際的な資本移動の自由度が増している一方で，それに関連した様々なパズルはまだ解決されていないのが現状である。本研究課題では，国際金融市場のパズルがどのようなチャンネルで発生し波及するかを，時系列・クロスセクションだけでなく周期軸からも明らかにする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～	個別(研究代表者)	新聞報道やツイッターなどのメディアのデータベースに基づき，経済政策の不確実性や経済的な感情を定量化する試みが精力的になされている。作成された指標を用いた実証分析では，経済政策の不確実性が高まることや経済活動に関する消極的な感情は，マクロ経済に負の影響を及ぼすことが指摘されている。本研究では，オールドメディアと近年急速に普及したソーシャルメディアの違いに着目し，マクロ安定化政策が経済政策の不確実性や経済的な感情に及ぼす影響を明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	嘱託教授	氏名	前田　修也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1980年～2024年	経済統計学会会員 会員
1977年～2024年	日本統計学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	板　明果	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金 公益財団法人鹿島学術振興財団　研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	宮城県行政評価委員会 委員
2018年4月～	宮城県行政評価委員会大規模事業評価部会 委員
2016年10月～	宮城県情報公開審査会 委員
2016年1月～	宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	稲見　裕介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	教育に携わるに当たって、 1．学生の能動的な取り組みを促すこと 2．丁寧に講義を行うこと を目標にしている。
今年度の進捗状況	今年度の進捗状況は以下の通りである: 1については、講義時間中に学生自ら問題を解く時間を設けた他、活発に質問がでたことから、進捗がみられた。 2については、昨年度や一昨年度と比較して、改善がみられた。
来年度の進捗目標	来年度を迎えるにあたり、 1について、さらに学生が主体的に取りめるよう講義方法を工夫する予定である。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	研究活動に関しては、主に、以下の三つのことに取り組んでいる: 1．Patent buyouts under incomplete informationの研究を進めること 2．Properties of the equilibrium revenues in buy price auctionsの改定作業を進めること 3．Buy price auctions with resale opportunitiesの研究を進めること
今年度の進捗状況	今年度の進捗状況は以下の通りである。 1については、論文の執筆作業を行っている。 2については、論文を国際学術雑誌に再投稿するため改定を行っている。 3については、国際学会で報告した。
来年度の進捗目標	来年度は、 1～3について、国際学術雑誌に投稿する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	小林　陽介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを活用した双方向型授業	2020年5月～	課題提出フォームに質問・感想欄を設け、manabaを通じて返答する。多かった質問・意見については次回授業時に紹介し、全体で共有・フィードバックを行う。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイント資料（オンデマンド型授業用）	2020年5月～	オンデマンド型授業用のパワーポイント資料。アニメーション機能を活用して学生が1つ1つじっくりと読み進められるように工夫している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生が現実の経済社会の動きに興味を持てるような授業となるよう心掛けている。
今年度の進捗状況	今年度は授業資料に時事的な内容を含めるよう意識した。
来年度の進捗目標	今年度の取り組みを継続するとともに、さらなる内容の充実に努めたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
グローバル金融危機後の米国シャドーバンクの動向	単著	2023年12月	日本証券経済研究所，証券経済研究(124)	小林陽介	pp.111-136
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
株式流通市場『図説　日本の証券市場　2024年版』	共著	2024年3月	日本証券経済研究所	小林陽介、二田朋幸	pp.52-71
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
大橋陽・中本悟編著『ウォール・ストリート支配の政治経済学』(文眞堂、2020年)	単著	2024年3月	東北学院大学　経済研究所紀要(1)	小林陽介	pp.77-81
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	グローバル金融危機（リーマンショック）後の米国金融の変化に焦点を合わせて研究を行っている。
今年度の進捗状況	今年度はグローバル金融危機後の米国シャドーバンクの展開について論文をまとめた。
来年度の進捗目標	来年度は米国債市場およびビットコインETFに焦点をあわせて研究したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年10月～2023年11月	経済理論学会 第71回大会準備委員

2022年4月～	経済理論学会 幹事
2021年～	証券経済学会 理事
2020年4月～	公益財団法人日本証券経済研究所 客員研究員
2019年～	証券経済学会 プログラム委員
2012年～	証券経済学会 会員
2010年～	経済理論学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	谷　達彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「小テスト」の実施	2023年～	授業内容の理解度を確認するため、授業時間内に「小テスト」を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業資料の作成	2020年～	授業毎にスライド資料を作成し、スライドに沿って授業を進めている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	授業内容の理解を深めるため、視聴しやすく分かりやすい授業資料を作成する。また、授業内容に対する関心を喚起し理解を深めるため、時事問題や身近な事例を取り上げる。	
今年度の進捗状況	毎回、パワーポイントで作成した授業スライドを配付している。関心の高い時事問題を取り上げ、授業内容との関連などについて説明している。	
来年度の進捗目標	課題・目標の達成に向けて引き続き授業内容やスライドの改善に取り組みたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『カナダの地方自治』	分担執筆	2024年3月	一般財団法人自治体国際化協会	谷　達彦	pp.66-77
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
メリーランド州の地方所得税：税率自主権をめぐる議論を中心に	単独	2023年10月	日本財政学会第80回大会(九州大学伊都キャンパス)	谷　達彦	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	①アメリカにおける地方所得税制度の現状と改革動向について事例分析を進める。②移民と財政の問題領域を検討し、「多様性に富んだ社会」における財政制度のあり方を考察する。				
今年度の進捗状況	①メリーランド州の地方所得税の制度および改革の展開について、政策決定過程に焦点を当て分析を進めた。その成果は日本財政学会第80回大会で報告した。②地方自治体による在留外国人住民支援の現状と課題について財政学の視点から検討を進めた。いくつかの自治体にヒアリング調査を実施した。				
来年度の進捗目標	研究成果を論文等により発表する。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2012年4月～	財務省財務総合政策研究所客員研究員 委員

2006年10月～	日本地方財政学会 会員
2006年4月～	日本財政学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	谷　祐可子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解確認の小テスト	2018年4月～	ほぼ毎回の授業（講義）の終わりに、内容確認の小テストを実施した。
学習事項の記憶への定着と授業理解の促進	2010年4月～	授業の冒頭で前回復習および今回概略説明を行ない、授業終了時に今回まとめを行なった。
演習レポート・論文の添削・返却・指導	2010年4月～	各演習の課題レポート等を添削・返却・指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義・演習で使用する補助教材の作成	2010年4月～	講義および演習で使用する補助資料・配付資料を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義内容の理解深化のために可能な限り新しい研究成果や情報も紹介する。 演習での主体的学習を促すために多様な実施方法を取り入れる。 授業時間以外でも学生とのコミュニケーションを図る。
今年度の進捗状況	講義内容を可能な限り更新している。 演習では輪読およびグループ発表などを実施している。 manabaの掲示板や個別指導機能等を利用している。 オフィスアワー等を利用している。
来年度の進捗目標	講義では学生の理解度に配慮した授業速度および内容にする。 演習では主体的学習を促すために多様な実施方法を継続する。 授業時間以外での学生とのコミュニケーション機会を随時もつ。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	幅広く研究交流する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。
今年度の進捗状況	持続可能な森林資源利用に関する先行研究等の収集およびデータ分析を継続している。
来年度の進捗目標	幅広い研究交流を継続する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	田野　穂	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
確認テストによる理解促進	2023年4月～	1年次配当科目「日本経済入門」では，テーマ別の確認テストを計4回課した。確認テストは用語問題と作文問題から構成され，前者をつうじて講義内容の理解を，後者をつうじて各自の関心のあるテーマの発見を促した。
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。	2022年4月～	3年次以降コース科目「日本経済論」と「日本産業論」では，講義内容の要点を示したレジュメを毎回配布した。配布資料において，受講生が口頭説明等を書き加えすように，余白を出来るだけ広くなるように工夫した。
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。	2022年4月～	2年次配当科目「日本経済入門」では，講義内容のポイントを示した穴埋め形式のレジュメを毎回配布した。とくに，初学者を念頭に置いて基本用語等を丁寧に説明するように工夫をした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
レポートの作成に関する教材を作製。	2022年4月～	総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル（レジュメの作成，読書，政府統計データベースの活用，レポートの作成）について説明した教材を適宜作成した。
レポートの作成に関する教材を作製。	2019年4月～	総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル（レジュメの作成，読書，政府統計データベースの活用，レポートの作成）について説明した教材を適宜作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
合同ゼミ	2024年2月27日～2024年2月28日	普段交流することの同年代の学生との知的交流を目的に尾道市立大学，阪南大学，武庫川女子大学と合同ゼミを2月27日（火）～28日（水）にかけて開催した。2月27日（火）は「地域の中小企業の取り組みと課題」をテーマに研究発表会を行った。28日（水）は学生の地域研究の一環として，学生によって作成されたコースで合同観光を実施した。
卒業生と現役生の交流会の実施	2023年7月	本学卒業生と現役学生の交流会の目的は，学生が（1）東北の実体経済への関心をもつことと，（2）キャリアデザインを具体化する機会を提供することである。本年度は2回実施した。 8月3日（木） 株式会社藤崎のマーケティング統括部シニアマネージャーと人事キャリア担当課長へのインタビュー。 10月16日（月） コープ東北店舗商品本部商品開発担当部長へのインタビュー。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年6月～2026年3月		北上市史編さん近現代部会 調査協力員	
2012年9月～		日本経営学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	松前　龍宜	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	宮本　拓郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度		公共調達は市場シェアが大きく、その中でも自治体が占める割合は高いが、自治体のグリーン購入・調達はあまり進んでいない。また、データの利用可能性の問題もあり、研究もあまり行われていない。本研究は、日本の全自治体の9割以上回答としている環境省のアンケート調査データを用いて、国際機関などにグリーン購入実施の強力な推進力として認識されているグリーン購入・調達に関する方針(策定)がどの程度グリーン購入・調達を促進するのかを明らかにする。また、方針策定などの取り組みと環境負荷削減効果・調達費用削減効果との関係性をデータ分析によって明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	吉田　惇	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	塩見　由梨	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
responを活用した双方向でのフィードバックの導入	2020年4月1日～	responを活用して教員→学生、学生→教員の双方向でのフィードバック機会を設定した。具体的には、教員→学生の取り組みとして、クリッカー機能を利用して学生がコメントや投票のかたちで意見を出す機会を多く用意し、それに対して次回の講義で教員からのリプライを行なっている。また、学生→教員の取り組みとして、アンケート機能を利用して教員独自の授業内容に関するアンケートを実施し、学生からの講義内容への希望や感想のフィードバックを得ている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の関心に合わせた講義内容の改善、演習科目において学生の発言を促進する工夫
今年度の進捗状況	昨年度の授業で実施したアンケートの結果を踏まえ、講義内容を一部修正した。今年度も同様にアンケートを実施したため、次年度のさらなる改良に役立てたい。演習科目では学生の積極的な発言を促すため、ディスカッションの時間を増やし、ディスカッションのやり方について指導を行った。
来年度の進捗目標	学生の関心に合わせて引き続き講義の内容を改善する。また、レスポンを用いた講義中のクイズ・質問の機会をこれまで以上に増やし、双方向に近い講義環境を目指す。演習科目では学生同士で話す機会を増やしたものの、学生間で発言の有無のばらつきが大きいため、より発言しやすい環境をつくる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『失われた〈重商主義〉の探求　ジェイムズ・ステュアートの商業・利潤・貨幣』	単著	2023年11月	白水社	塩見由梨	pp.1-214
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
合評会　塩見由梨『失われた〈重商主義〉の探求 ジェイムズ・ステュアートの商業・利潤・貨幣』（白水社、2023年）	単独	2024年2月	第78回経済思想研究会(東北大学河内南キャンパス)	塩見由梨	
H．翻訳（学術書や原典等）					
『万国の労働者、団結せよ！　マルクスと第一インターナショナルの闘い』	編訳	2023年10月	大月書店	結城剛志，柏崎正憲，塩見由梨，吉村信之	pp.1-464
I．特許					

現在の課題・目標	ジェイムズ・ステュアートに関するこれまでの研究成果をまとめ、出版に向けた準備を進める。
今年度の進捗状況	東京大学学術成果刊行助成を受けて、白水社より『失われた〈重商主義〉の探求』を出版した。本書については2024年3月2日に経済思想研究会で合評会を実施し、2024年3月28日にもSGCIME合宿研究会にて合評会を実施する予定である。
来年度の進捗目標	恐慌論研究の一環として、資本集中論の研究を遂行する。現在執筆中であるため、夏ごろに研究発表をした上で、年度内の学会誌への投稿を目指したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
情報処理センター委員、総合ネットワーク管理委員会、学科ガイド作成委員、学術研究会評議員			

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	白井　大地	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員独自の「学生による授業評価」を実施	2021年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」に加えて，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2012年～	Econometric Society 会員
2012年～	The Munich Personal RePEc Archive (MPRA), Editor 委員
2012年～	American Economic Association 会員
2006年～	日本経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	望月　理生	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・特に演習を受講する学生一人一人に対する，きめ細やかな対応 ・学生がより講義内容に興味関心をもてるようなトピックスやコンテンツの充実
今年度の進捗状況	・演習の受講生に対し，フィールドワークの進捗等の細やかな確認と助言を実施した ・興味関心を高めるため，歴史上の話題に触れる際，当時の写真や新聞記事等を引用し，身近なものとして触れる機会を提供した
来年度の進捗目標	・今年度の取り組みを継続するとともに，学生にとってより充実した教育を目指したい

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	第二次世界大戦後日本における東北開発に焦点を当て研究を進めている
今年度の進捗状況	団体史や企業史などの収集および史料の収集を行った
来年度の進捗目標	来年度は新産業都市建設促進法による新産業都市「仙台湾地区」の行政資料を収集し，研究会発表および学会発表を目指し，史料の整理検討を進める予定である

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年11月～	日本地域経済学会 編集委員
2023年9月～2023年11月	2023年度前期（4－9月期）景況調査 報告書執筆
2023年6月～	漁業経済学会 理事
2023年3月～2023年5月	2022年度後期（10－3月期）景況調査 報告書執筆
2020年3月～	経済地理学会 会員
2012年5月～	日本地域学会 会員
2012年3月～	漁業経済学会 会員
2011年11月～	日本地域経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

経　営　学　部

経　営　学　科

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	岡田　耕一郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。
授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の要点をプリントにまとめて配付している。 液晶プロジェクターを活用して、授業内容に関わる画像をスクリーンに投影している。
実践的な教育の提供	2021年4月1日～	ゼミにおいて，学生と介護サービス組織の人事考課を研究したのち，考課シートを開発し，介護現場で使用した。
ゼミレポートの添削	2021年4月1日～	論文作成スキルを向上させるため，演習のレポートを添削して返却した。
オフィスアワーの実施	2021年4月1日～	学生が講義の内容に関する質問をしたり，勉強方法の指導を受けるための時間を設定し，教育の質の向上に配慮した。
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最初に前回のまとめを説明している。
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年4月～	日本社会福祉学会 会員
2021年4月～	組織学会 会員
2021年4月～	日本経営学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	小野　慎一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	着任1年目である2023年度には、以下の点が課題・目標であった。 (1) manaba等の教育支援システムを活用した効果的な授業運営方法を確立する。 (2) 各回の講義内容や配布資料を、わかりやすく充実したものになるよう整備する。	
今年度の進捗状況	(1) 講義形式科目である「財務会計論Ⅰ・Ⅱ」「連結財務諸表論」では、manabaの小テスト機能を活用し、事前学習（予習課題）と事後学習（復習課題）を効果的に組み込むことができた。演習形式科目においても、manabaの個別指導コレクションやプロジェクト機能を活用した指導を実施できた。 (2) 指定したテキストに基づき、「財務会計論Ⅰ・Ⅱ」「連結財務諸表論」の講義内容や配布資料を整備することができた。ただし、学生の反応や難易度などを踏まえると、来年度はテキストを変更する余地があると感じた。	
来年度の進捗目標	(1) manaba等の教育支援システムを活用した授業運営方法をさらに改善する。 (2) 複数の授業科目において指定テキストの変更を予定しているため、新規のテキストに応じた講義内容・配布資料を整備する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
組替財務諸表を用いた企業ライフサイクルの識別	共同	2023年12月	日本経済会計学会 第4回秋季大会(北九州)	◎小野慎一郎, 椎葉淳, 村宮克彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 現在の科研費テーマに関する実証研究を進めて、学会大会で報告する。 (2) 次の科研費へ応募するためのテーマ決定に向けて、文献渉猟を行う。
今年度の進捗状況	(1) 2023年12月の日本経済会計学会第4回秋季大会において、「組替財務諸表を用いた企業ライフサイクルの識別」と題する報告を行うことができた。 (2) 当初の予定よりやや遅れているが、現在進行中である。
来年度の進捗目標	(1) 現在の科研費テーマに関する論文を執筆し、学外雑誌に投稿する。 (2) 新たなテーマに関するレビュー論文を執筆し、学内紀要に投稿する。 (3) 科研費（基盤研究(C)）に応募する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2019年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年5月～	日本経済会計学会（旧：日本ディスクロージャー研究学会） 会員
2015年10月～	日本経営財務研究学会 会員
2009年9月～	日本会計研究学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	折橋　伸哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
地場資本の中小企業の成長可能性と課題『東日本大震災復興研究Ⅶ　東日本大震災と原発事故は何を残したか』	共著	2024年1月	晃洋書房	折橋伸哉・遠藤憲子	pp.171-183
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2002年～	産業学会 会員
1997年～	国際ビジネス研究学会 会員
1997年～	組織学会 会員
1997年～	日本経営学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	小池　和彰	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	所得税法、消費税法、相続税法	
今年度の進捗状況	タックス・プランニング入門の出版	
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況	軽減税率				
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	齋藤　善之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
総合講座Ⅳ（おもてなしの経営学）では「みやぎおかみ会」との連携のもと宮城県内の旅館ホテルの女将および観光行政・業界から実務担当者を招聘する講義を実施している。（経営学部の複数の教員と共同で授業運営）	2009年～	2017年度の外部講師は、鈴木緑女将（はまなす海洋館・気仙沼市）、佐藤恵里女将（ホテル華乃湯・秋保温泉）、大沼安希子女将（旅館大沼・東鳴子温泉）、梶村和秀氏（宮城県経済商工観光部観光課長）、古津敬浩氏（JR東日本㈱営業部長）を招聘し講義を実施した。
演習（3年）では、地域の経営者らから聞き取り調査を実施している。その成果は報告書にまとめて刊行し、さらに市民向け報告会を実施している。	2000年～	学生が主体的に経営者らにマンツーマンで聞き取りを行い、これを活字化して報告書にまとめ、市民向け報告会で報告するアクティブラーニング型のゼミ活動である。
演習では地域の経営者に直接聞き取りをおこない、その結果を報告書にまとめて刊行している。	1999年～	地域の経営者に対し受講生がマンツーマン形式でライフヒストリーを聞き取り報告書にまとめる
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『『近江商人小谷屋の仙台店取締役 藤橋大治郎旅日記（道中諸用控）』』	単著	2023年11月	蕃山房	斎藤善之	pp.1-55
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	文化庁文化財審議会 委員
2020年～	塩竈市文化財審議会委員 委員

2018年～	宮城歴史資料保全ネットワーク 理事長
2008年～	NPO宮城歴史資料保全ネットワーク 会員
2006年～	東北史学会（理事） 会員
2001年～	海事史学会（理事） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	佐久間　義浩	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員独自の「学生による授業評価」を実施	2020年～	大学で実施する「学生による授業評価」に加えて，授業の効果の測定や改善点を明らかにするため，記名式の授業内容に関するアンケートを，すべての科目で実施している。
監査論におけるディスカッションの実施	2020年～	近年，発覚した粉飾について，粉飾決算企業の公表した内部調査報告書を題材として，粉飾の概要，粉飾を引き起こす要因，公認会計士のあり方，あるべきガバナンス制度の構築について，参加者全員でディスカッションを行い，監査のあり方や社会情勢に関心をもたせた。
演習等における新聞記事の報告	2020年～	各受講生が興味を持った日経新聞等の内容について，毎時間，報告をさせるとともに，その記事に関するディスカッションを参加者全員で行うことによって，社会情勢に関心をもたせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の精読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。
今年度の進捗状況	・演習参加者の希望に応じて，随時，進路指導等を行った。 ・『経営を見る眼』』の精読を行った。 ・監査制度の改定にあわせて，レジュメを改定した。
来年度の進捗目標	・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の精読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
参考資料1（1）『中小企業決算の透明性と信頼性　改善に向けた実証・理論・実務研究』	共著	2024年2月	同文舘出版	越智信仁・佐久間義浩・坂根純輝	pp.253-256
中小企業決算開示の信頼性等に関する質問票調査『中小企業決算の透明性と信頼性　改善に向けた実証・理論・実務研究』	共著	2024年2月	同文舘出版	越智信仁・佐久間義浩・坂根純輝	pp.95-132
第5章　安全性の分析　4　キャッシュ・フロー計算書を利用した分析『決算書分析の方法と論理【第5版】』	単著	2023年6月	ネットスクール出版	佐久間義浩	pp.63-68
営業費の記録と管理『エッセンス簿記会計　第19版』	単著	2023年4月	同文舘出版	佐久間義浩	pp.*-*
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Impacts of Mandatory KAM Disclosure on Audit Fees Focusing on Early Adopters in Japan	単著	2023年8月	2023 American Accounting Association Annual Meetingプロシーリングズ	Sakuma, Y.	pp.*-*
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
中小企業決算開示の信頼性等に関する実証研究：金融機関への質問票調査を通じて	共著	2023年10月	會計，204(4)	越智 信仁，佐久間 義浩，坂根 純輝	pp.396-410

中小企業財務報告の透明性改善に向けた多面的研究	共著	2023年9月	中小企業会計研究(9)	越智 信仁, 蟹江 章, 金子 友裕, 坂根 純輝, 佐久間 義浩, 関川 正, 中村 元彦, 橋上 徹, 林 隆敏, 松﨑 堅太朗, 弥永 真生	pp.43-46
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
課題研究委員会 最終報告 中小企業財務報告の透明性改善に向けた多面的研究	共著	2023年11月	中小企業会計学会 第 11 回全国大会 報告要旨集	越智信仁、蟹江章、金子友裕、坂根純輝、佐久間義浩、関川正、中村元彦、橋上徹、林隆敏、松﨑堅太郎、弥永真生	pp.26-27
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
日本企業の監査報酬の動向(2023年版)	共著	2023年5月	月刊監査役(749)	監査人・監査報酬問題研究会 町田 祥弘, 松本 祥尚, 林 隆敏, 佐久間 義浩, 髙田 知実, 堀古 秀徳	pp.40-57
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
Impacts of Mandatory KAM Disclosure on Audit Fees Focusing on Early Adopters in Japan	単独	2023年8月	2023 American Accounting Association Annual Meeting@Denver(Denver)	Sakuma, Y,	
The Effect of the Group Composition in an Audit Engagement Team on Modified Audit Opinions: Evidence from Japan	共同	2023年6月	The 9th International Workshop on Accounting & Regulation(Siena)	Tsunogaya, N., M. Kusano, Y. Sakuma	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	・監査人の情報提供機能を研究する。 ・監査報告書を収集する。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度の変遷を研究する。
今年度の進捗状況	・学会と研究会で報告した。 ・1950年代の監査報告書を一部収集した。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度に関する文献を収集した。
来年度の進捗目標	・論文にまとめる。 ・継続して監査報告書を収集する。 ・継続して財務諸表監査制度に関する文献を収集する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金(基盤研究C)	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年9月～	日本監査研究学会 課題別研究部会 構成員 会員
2021年9月～	中小企業会計学会 課題研究委員会 会員
2019年12月～	金融庁 公認会計士・監査審査会 公認会計士試験 試験委員
2016年12月～	総務省東北総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
AO委員 学術研究会評議員

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	菅山　真次	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
経営史の授業方法・評価の工夫	2014年4月～	授業中に毎回小テストを実施するか課題をだし、その結果のみで授業評価を行った。 定期試験は一切実施しなかった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	経営史学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	嘱託教授	氏名	鈴木　好和	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の部長としての指導を行った。	2020年4月1日～	ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年は、海岸の清掃や仙台駅のアルコール消毒などを行った。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
JPX日経インデックス400の有価証券報告書にみる労使関係	単著	2023年11月	東北学院大学経営学論集(21)	鈴木好和	pp.1-14
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『経営学入門：起業のためのテキスト』	単著	2023年5月	創成社	鈴木好和	pp.1-260
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
JPX400の有価証券報告書にみる労使関係	単独	2023年5月	日本経営学会(宮城県仙台市)	鈴木好和	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	根市　一志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
独自アンケートの実施	2022年4月1日～	授業の理解度を確認するための独自のアンケートを実施している。
授業評価の実施	2022年4月1日～	「授業改善のための学生アンケート」を実施している。
自発的に考えさせる。	2022年4月1日～	学修した基礎知識をどのように使うのか、練習問題等を通じて自発的に考えさせる。
効果的なプレゼンテーション	2022年4月1日～	人に自分の考えを理解させるための効果的なプレゼンテーションを考えさせる。また,それを指導する。道具としてマルチメディア機器を活用させている。
基礎知識を理解させ、定着させる。	2022年4月1日～	基礎知識をその科目の体系性を考慮し,できるだけ平易に説明している。さらに,説明後,例を示し,より理解を深めている。前回の講義で説明した内容の概略を講義の初めにもう一度簡潔に説明している。講義の終わりに理解したことをまとめさせている。
学修の必要性を理解させる	2022年4月1日～	専門体系における当該科目の位置づけと必要性を説明している。
テーマと目的を理解させる	2022年4月1日～	テーマの内容について,何を明確にしたいのか,目的をはっきりさせる。目的達成までの手順を論理的に考えさせ,それにしたがった問題を解決させる。
データの分析	2022年4月1日～	客観的な根拠を示すため、何を明らかにしたいのか、明確な目的を理解した上で、データ分析を行う。道具としてデータ分析ソフトウェアを使う。また、それを指導する。
データと情報の収集	2022年4月1日～	目的を達成させるために必要なデータや情報は何かを考えさせる。また,それを指導する。道具としてインターネットを活用している。
responの利用	2022年4月1日～	双方向の授業を行うため、responを利用している。
manabaの利用	2022年4月1日～	講義資料の配布、講義内容の理解度を確認するための小テストにmanabaを利用している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
統計学概論のテキスト	2022年4月1日～	統計学概論IおよびIIのテキストを作成し、学生に提供している。
講義用スライドの作成	2022年4月1日～	講義用のスライドを作成して講義内容の説明に十分時間を費やすようにしている。また,一部の講義スライドはWebからダウンロード可能にし,学生に提供している。
Web教材の作成	2022年4月1日～	講義内容の詳細な説明,講義の補足,教材の提示などを目的に作成している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①講義概要に記載した到達目標を達成できることを目標に掲げている。そのためには、なぜ当該科目の学修が必要なのか、講義内容がいかに重要なのか、自分で考える力を身につけることがいかに重要なのかを理解させることに重点を置いている。 ②新しい内容を取り入れる。 ③講義内容を理解するための具体的な例を考える。 ④テキストを改善する。 ⑤講義スライドを改善する。

今年度の進捗状況	上記目標①に関しては、その達成度を評価すると、授業で説明した内容を理解し、それをもとに自分の意見を述べることができている。自分の考えを発展的に応用できている。例えば、提出させたレポートをみると、内容を適切に考察し、きちんとまとめることができている。また、発展的な考えもみられる。ソフトウェアの操作だけではなく、結果の評価、考察ができている。小テストなどの成績も概ね良い。 上記目標②に関しては、現在の社会的な出来事など、新しい内容を考慮した説明はできていると思う。 上記目標③に関しては、具体的な例題の作成はできていると思う。 上記目標④に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。また、修得すべき知識として必要と思われる数学的内容を追加した。今年度は、授業内容が変わった科目のテキストを作成した。 上記目標⑤に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては、具体的な考え方や可能性を掘り下げて説明するようにこころがける。 上記目標②に関しては、継続していく。 上記目標③に関しては、継続していく。 上記目標④に関しては、必要に応じて改善を考える。 上記目標⑤に関しては、必要に応じて改善を考える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
気液2相式液体アルゴンTPCにおけるGEMでの増幅率評価	共同	2023年9月	2023電気関係学会東北支部連合大会(岩手県滝沢市)	川瀬悠太1、森田　歩1、壽　和幸1、坂下健2、長谷川琢哉2、笠見勝祐2、根市一志3、成田晋也1（1岩手大学、2KEK、3東北学院大学）	
気液二相式液体アルゴンTPCにおける光信号の特性理解	共同	2023年9月	2023電気関係学会東北支部連合大会(岩手県滝沢市)	森田　歩1、川瀬悠太1、壽　和幸1、坂下健2、長谷川琢哉2、笠見勝祐2、根市一志3、成田晋也1（1岩手大学、2KEK、3東北学院大学）	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①記号微分を応用して、非線形関数をデータにフィットするための汎用的なソフトウェア開発。 ②液体アルゴンTime Projection Chamberを用いた素粒子物理学のモンテカルロ・シミュレーション
今年度の進捗状況	上記目標①に関しては、継続して開発を行っているが、進捗はあまりない。 上記目標②に関しては、継続して開発を行っているが、進捗はあまりない。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては、継続していく。 上記目標②に関しては、継続していく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
経営学部長 体育会会長 体育会剣道部部長

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	藤　祐司	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・学生に対し、「課題をつくる」ことによって、知識獲得だけではなく、社会で求められる「考える力」「書く力」「計算する力」を涵養することを目指す。 ・manabaを通じて、双方向性の高い講義を行う。	
今年度の進捗状況	・多くの学生について、講義を経るごとに、課題に対する解答の質の向上が感じられた。	
来年度の進捗目標	・「考える力」「書く力」については向上が見られたが、「計算する力」についてはあまり検討を行わなかったので、統計分析等を通じた計算力の向上についても目を向けたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Novel R&D Capabilities as a Response to ESG Risks-Lessons From Amazon's Fusion of Diverse Knowledge	共著	2023年11月	International Journal of Managing Information Technology, 15(4)	Yuji Tou and Chihiro Watanabe	pp.1-22
Effectively Connect Acquired Technology to Innovation Over a Long Period	共著	2023年5月	International Journal of Managing Information Technology, 15(1/2)	Akira Nagamatsu, Yuji Tou, Chihiro Watanabe	pp.33-47
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
次世代の技術経営：脱炭素に向けたモノづくり力とグローバルサウスのDX起爆力の融合 - 日印ピア効果の追及によるモノづくり力とDX力の融合	共同	2023年10月	研究・イノベーション学会 第38回年次学術大会(オンライン開催(Zoom))	渡辺千仭, 藤祐司	
次世代の技術経営：脱炭素に向けたモノづくり力とグローバルサウスのDX起爆力の融合 - 台湾の対印モデルに倣う日本の次世代技術経営	共同	2023年10月	研究・イノベーション学会 第38回年次学術大会(オンライン開催(Zoom))	藤　祐司, 渡辺千仭	
教育現場におけるDXの発展段階に対応した課題の解明に向けた比較分	共同	2023年5月	日本経営システム学会全国大会(東海大学　品川キャンパス)	藤 祐司, 永松 陽明	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・本学への赴任を契機に、今までの研究蓄積を活用しつつ、新しい研究分野の開拓を行いたい ・他機関の研究者との共同研究を進める。				
今年度の進捗状況	・新しい研究分野については、今期の研究助成金の申請に採用されなかったことから見直しを検討している ・他機関の研究者との共著論文を執筆したことから、堅調に進んでいるといえる。				

来年度の進捗目標	・新しい研究分野については、見直しを検討し、新たな研究助成の申請を行いたい。 ・地域の中小企業との連携を実施し、研究を地域貢献につなげることを目指す。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年～	日本経営システム学会 評議員
2010年～	日本経営システム学会 会員
2004年～	研究・イノベーション学会 国際問題分科会 幹事
1998年～	研究・イノベーション学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	松岡　孝介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
経営と管理会計の模擬体験	2018年4月～	戦略マネジメント・ゲームあるいはビジネス・ゲーム21という教材を用いて，経営と管理会計を模擬体験できる授業を展開した。この授業では、学生たちは計画とコントロールという管理会計の中核的機能が，企業経営において非常に重要な役割を果たすことを実感することができる。
manabaを利用した授業資料の共有	2018年4月～	すべての授業で，授業資料をすべてmanabaにアップロードして，受講者が閲覧できるようにしている。また、少人数制の授業では、過去のゼミ活動の資料をGoogle for Educationで共有するようにしている。
事例を用いた理論と実践の関連付け	2007年4月～	会計学に関わる講義形式の授業では，必要に応じて，現在学んでいる会計技法を用いて実企業を分析するとどのような結果が得られるのかを示すために，事例を用いるようにしている。
計算方法の習得促進（2015年度以降はmanabaの小テスト機能を活用）	2007年4月～	会計学に関わる講義形式の授業では，書き込み形式の資料を用いて例題を学生と一緒に解くようにしている。その後、学生の力だけで練習問題を解いてもらうようにしている。2015年度以降は、練習問題はmanabaの小テストを活用して採点結果を公開、改善点を授業で毎回説明するようにしている。2020年度以降は、コロナでオンライン授業となったため、毎週の小テストに対する講評を配布するようにした。
プレゼンテーション能力とディスカッション能力の育成	2007年4月～	少人数制授業では，担当の学生によるプレゼンテーションを行ってもらい，具体的なアドバイスをするようにしている。また，プレゼンテーションの内容について学生同士で質疑応答をするようにして，ディスカッション能力の育成も図っている。
チーム作業の体験	2007年4月～	少人数制授業では，学生をいくつかのチームに分けて課題に取り組んでもらうようにしている。チームの力を発揮するためにはどのようにすればよいのかを体験してもらうことが狙いである。
2．作成した教科書、教材、参考書		
コストマネジメント論の講義資料	2015年4月～	コストマネジメント論は，できる限り先端の内容を学習するために，Hornglen et al. (2014) Cost Accounting 15th edsの内容をもとに講義資料を作成した。また、版が更新されるたびにその内容を反映させた。さらに，随所に日本企業の事例を盛り込むようにした。
特別講義（おもてなしの経営学）の講義資料（財務諸表分析，レベニュー・マネジメント，マーケティング・リサーチ）	2011年9月～	2011年度から2018年度までは帝国ホテルの事例を用いた経営分析について講義した。この資料はそれ以降も毎年、必要に応じて更新しながら利用した。2019年度はさらに塩釜の事例を用いたマーケティング・リサーチについて講義資料を作成した。また、2019年度および2020年度は、ホテルチェーンの事例を用いた価格設定についての資料を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	コストマネジメント論は、将来の戦略管理会計論への名称変更に備え、授業資料の充実を図る。 少人数制授業ではゲームを通じた実践的な管理会計教育を展開する。
今年度の進捗状況	コストマネジメント論は、多忙につき授業資料の大きな更新はままならなかった。 少人数制授業では、1年生向けの基礎演習で、ゲームを通じた実践的な管理会計教育を展開することができた。
来年度の進捗目標	コストマネジメント論は、2024年度は英語で開講することとなった。英語でも質を維持できるよう、慎重な授業展開を図る。 少人数制授業は、受講生が社会経験のほとんどない1年生向けの授業であったため、彼らは実務との関連がイメージしにくいようであった。実務との関連が意識できるよう、解説を行うように配慮する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
The Great East Japan Earthquake: Examining the entrepreneurial response of Okami-sans and the disaster management by Ryokans『Handbook on Tourism Entrepreneurship』	分担執筆	2023年	Edward Elger Publishing, 1	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Kohsuke Matsuoka	pp.1-2
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Uniting Accounting with Marketing in a Japanese Electrical Part Supplier	共著	2023年10月	Asia-Pacific Management Accounting Association 2023 Annual Conference Proceedings I	Kohsuke Matsuoka, Danture Wickramasinghe, Hiromune Ishii, Asumi Kawaguchi	pp.17-27
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
ブランド経験とカスタマージャーニーが観光客のエンゲージメントに及ぼす影響	単独	2023年10月	余暇ツーリズム学会 2023年度全国大会(流通科学大学)	◎松岡孝介	
Uniting Accounting with Marketing in a Japanese Electrical Part Supplier	共同	2023年10月	Asia-Pacific Management Accounting Association 2023 Annual Conference(Universitas Trisakti)	◎Kohsuke Matsuoka, Danture Wickramasinghe, Hiromune Ishii, Asumi Kawaguchi	
サブスクリプションビジネスのモデル化とその評価に関する研究（産学共同研究グループ最終報告）	共同	2023年8月	日本管理会計学会2023年度年次全国大会(東北工業大学)	◎青木章通, 岩田弘尚, 佐々木郁子, 高橋邦丸, 谷守正行, 松岡孝介, 宮崎琢磨	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	アクターネットワーク理論の研究は、Prof. Wickramasingheとの協議内容に基づいて修正を重ねていく。 セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューをさらに進める。2023年度中の投稿を目指す。 観光に関わるカスタマージャーニーの文献サーベイを進める。 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行う。
今年度の進捗状況	アクターネットワーク理論の研究は、事例について新自由主義と管理会計の関連から解釈できるか調査中である。 セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューを進め、投稿まで行った。 観光に関わるカスタマージャーニーの文献サーベイを進めることができた。 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行った。

来年度の進捗目標	アクターネットワーク理論の研究は、事例について新自由主義と管理会計の関連から解釈できるかさらに調査する。 セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、査読対応と出版を目指す。 観光に関わるカスタマージャーニーの文献サーベイを進め、投稿を目指す。 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
その他の補助金・助成金 日本管理会計学会産学共同研究グループ	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究では、事例研究を通して「収益管理会計」の構築を行う。収益管理会計は、顧客データを用いて収益分析を行い、マーケティング意思決定に役立てる。本研究は、収益管理会計を支える手法や概念を発展させ、原価計算に立脚する伝統的管理会計を補完することを目指す。具体的には、①収益形成過程の促進要因の分析、②収益バランスが安定成長に与える影響の検証、および③顧客生涯価値に基づく資源配分方法の構築を行う。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年2月～2024年2月	持続可能で信頼される観光地の構築に向けて―海外研究者に学ぶ― 運営参加・支援
2024年1月～	APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Japan Regional Chapters of APMAA Japan
2022年10月～	Asia-Pacific Management Accounting Association 会員
2021年5月～	一般社団法人 ICTマネジメント研究会 理事 理事
2019年12月～	一般社団法人ICTマネジメント研究会 学生小論文アワード 審査委員 運営参加・支援
2019年1月～	日本戦略MG教育学会 理事
2019年～2023年	『原価計算研究』の査読 査読
2016年4月～	余暇ツーリズム学会 会員
2007年10月～	日本原価計算研究学会 会員
2005年9月～	日本会計研究学会 会員
2003年9月～	日本管理会計学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

会計・ファイナンス実習室　室長（2023年9月から）

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	松村　尚彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習の授業でチームビルディングのためにアイスブレイクを取り入れた	2023年9月20日～2024年1月31日	ゼミ3年、研究・発表の技法、文献講読Ⅱなどの少人数の授業でグループワークを行う場合、学生が積極的に発言しないという課題があった。この課題を解決するために、第1回～第5回の授業の導入部分で、5分程度のアイスブレイクを取り入れることにした。それにより、以前よりもグループ内で学生が気軽に話せる雰囲気ができたと考える。
ゼミ3年でプロジェクト型の学習を実施した。	2023年9月20日～2024年1月31日	ゼミ生を4つのチームに分け（1チーム4人）、株式の投資判断を行うプロジェクトを実施した。経営分析、財務分析、株価の水準という理論的な知識を使って、実践的な課題を解決するという高度な学習ができたとともに、チームで一つのことをやり遂げることで、チームワークなどの人間関係スキルの向上にもつながった。
講義型の授業の構成上の工夫をした。	2023年4月1日～2024年1月31日	講義型の授業では、できるだけ①授業の概要、②基本知識の習得、③具体例による解説、④学んだ知識の適用という4つの要素を入れ、学生が90分の授業をなるべく退屈しないで聞くことができるように工夫した。 なかでも③の具体例による解説には特に力を入れて学生の理解と興味を喚起することを目指した。 たとえばファイナンスでは、投資アナリストと言われる人たちの予測の的中度がどの位であるのかを調べることで、（プロでも投資で高いリターンを上げるのは難しいという）効率的市場仮説を実感を持って理解できるようにした。 またファイナンスⅡでは、近年の円安の背景として日米の金利差があることだけでなく、日銀が大規模な金融緩和政策を是正することができない事情を投機筋が見透かして円売りを仕掛けてきたことなどを、具体的なデータに基づいて紹介した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．演習型の授業でより学生の参加を促せるようにする。 2．講義型の授業では構成の工夫や具体例を使った解説により、学生にとってより魅力的な講義にする。
今年度の進捗状況	1の課題について ・ゼミ、基礎演習、文献講読などの演習型の授業でアイスブレイクを導入することで、グループ内の親密度がまし、グループワークでも活発に議論できるようになった。 ・ゼミ3年で経営分析、財務分析、株価の水準などの理論的な知識を使って、実際に投資判断を行うプロジェクト型の学習を実施した。学生は授業以外の時間も使って課題に取り組むなど、ゼミ活動を積極的に行っていた。 2の課題について 講義型の授業では、できるだけ①授業の概要、②基本知識の習得、③具体例による解説、④学んだ知識の適用という4つの要素を入れ、学生が90分の授業をなるべく退屈しないで聞くことができるように工夫した。 なかでも③の具体例による解説には特に力を入れて学生の理解と興味を喚起することを目指した。 たとえばファイナンスでは、投資アナリストと言われる人たちの予測の的中度がどの位であるのかを調べることで、（プロでも投資で高いリターンを上げるのは難しいという）効率的市場仮説について、実感を持って理解できるようにした。 またファイナンスⅡでは、近年の円安の背景として日米の金利差があることだけでなく、日銀が大規模な金融緩和政策を是正することができない事情を投機筋が見透かして円売りを仕掛けてきたことなどを、具体的なデータに基づいて紹介した。
来年度の進捗目標	1．演習型の授業でより学生の参加を促せるようにする。 →更に効果的なアイスブレイクの方法を考える。 →他にも参加型の学びにつながるアクティビティを考える。 2．講義型の授業では構成や具体例による解説により、学生にとってより魅力的な講義にする。 →より一層授業の構成に工夫をこらす。 →学生にとって興味を持ちやすい具体例の素材を更に探していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書	
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	1.「資本主義はこれからどうなるのか」という大きなテーマを探求する。 →経済的な格差、環境問題など、資本主義が抱える問題を解決しようとする試みをリサーチする。 →大きなテーマなので学術的な成果に結びつけることは難しいが、これからの経済社会を考える上で重要なテーマなので、その成果は学生を中心に還元していきたい。 2. 合理的な資産運用のあり方に関する啓もう活動 →新NISAの導入により資産運用に関する注目が高まっているが、ファイナンスや行動経済学の視点からみて合理的な資産運用とはどのようなものかを探求していく。 →学術的な成果には結び付きにくくても、学生や社会人が健全な経済基盤に守られて生活していく上で重要なテーマなので、その成果は学生や社会人に還元していく。 3. これからの地域金融機関の経営について →人口減少による地域経済の衰退やフィンテックの脅威など、地域金融機関の経営環境は厳しさを増している。 →そのような中で特に宮城県の地域金融機関に焦点をあて今後の経営のあり方を探求していく。
今年度の進捗状況	1の課題について 図書館の冊子（Library Information）に柄谷行人『力と交換様式』の紹介をした。 2の課題について 老年期以降に、現役時代に形成した資産が尽きてしまうまでの期間＝資産寿命をいかに長くするかという比較的新しいテーマについて取組み、学生にその概要を紹介した。 3の課題について 七十七銀行の6人の行員とともに、七十七銀行が地方創生のために取り組んでいる事業について学生に紹介した。
来年度の進捗目標	1について レベッカ・ヘンダーソン『資本主義の再構築』、パーパス経営、ESG投資などについて探求していく。 2について 資産運用と行動経済学、資産寿命などのテーマについて更に深めていく。 3について 七十七銀行の頭取を招いた講演会を企画する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年9月～	日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員
2013年4月～	世界食料フォーラム・仙台実行委員 事務局委員
2001年4月～	日本ファイナンス学会 会員
1994年～	日本証券アナリスト協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	村山　貴俊	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを活用した講義の実践	2022年4月1日～	LMSを活用し、学生への資料配布のほか、毎回の出席管理および実力確認小テストの実施
アクティブラーニングおよびプロジェクト・ベースド・ラーニングに関するFDの実施	2021年～	経営学部のFD活動の一環としてALとPBLに関する実践例の報告。FD会議の主催と報告者の調整。
おもてなしの経営学での実践教育の展開	2008年～	宮城県の旅館ホテルと連携した実践教育。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
経営学部・研究FD会議の立ち上げと運営	2022年～	経営学部の教育FDに加えて、研究FDの立ち上げと運営も担当
観光に関する国際的な教育機会の提供	2020年～	南オーストラリア大学の研究者と連携して学生および市民に観光学を英語で学ぶ機会を提供
経営学部の遠隔授業実施に関するプロジェクトチームでの活動	2020年～	
FD NEWSの記事および活動報告の作成	2016年～	特色ある講義の1つとして経営学部ビジネスケース研究を紹介する記事を作成。ケース・メソッドという広く認められた教育方法の構成要件を挙げ、それらに要件に沿った講義を展開することの重要性を指摘。FD委員として経営学部のFD活動の報告書作成を担当。
ゼミナールでの観光調査および観光振興策の提案・実施	2015年～	JR小さな旅の企画と実施、塩竈市と共同でのアンケート調査。観光振興策の提案。武田の笹かまぼことの共同商品開発。塩竈スイーツマップの作成。石巻圏DMOの調査協力、蔵王町の観光地競争力調査など
『経営学部生のための学びのガイドブック』を用いた講義の実施	2015年～	「序章 本書の狙いと特徴」「第1章 レポート作成の技法」を用いて、読解・作文の技法、研究・発表の技法の講義を実施。
地域の企業に対する戦略提案	2008年～	地域企業に対してビジネスケース研究、ビジネスケース実習、ゼミナールなどを通じて戦略提案を行った。また、武田の笹かまぼこと連携して新商品の開発と販売も実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	矢口　義教	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
理論と実践に基づくアクティブラーニング	2020年4月1日～	経営学科講義科目「ビジネス・ケース実習」において、経営学理論の修得に基づく実践的な思考・分析・提案力を養い、地域企業や大手上場企業への実践的戦略提案を行っている。
復興マインドを形成するアクティブラーニング	2020年4月1日～	演習（3年）・（4年）において、CSRの観点から東日本大震災被災地の復興構想をプランニングする指導を展開している。アクティブラーニングを行うことで、受講生の復興マインドの涵養に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
企業の救援・復旧活動―震災と企業のCSRを考える―	単著	2023年9月	都市問題(2023年9月号)	矢口義教	pp.72-83
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
SDGsと企業経営（2）	単著	2024年1月	ESPO(616)	矢口義教	pp.10-11
SDGsと企業経営（1）	単著	2023年11月	ESPO(615)	矢口義教	pp.10-11
ビジネス・ケース　アサヒ飲料株式会社―東北支社における地域共創を中心にして―	単著	2023年11月	経営学論集(21)	矢口義教	pp.33-54
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年12月	社会福祉法人仙台市社会福祉協議会宮城野区事務所「令和5年度　宮城野区つながりづくり交流会～SDGsでつながろう～』講師兼ファシリテーター 講師
2023年9月	一般財団法人杜の都産業保健会「職員のためのCSR研修会」講師 講師
2020年4月～	社会福祉法人仙台市社会福祉協議会若林区社会福祉協議会委員（現在に至る）委員
2018年6月～	東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」講師（2020年6月）（東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」講師（2020年6月））
2015年9月～	日本産業経済学会 会員
2015年4月～	仙台市 仙台市コンプライアンス推進委員会 委員
2014年10月～	Society for Business Ethics 会員
2014年10月～	環境経営学会 会員
2014年4月～	日本経営倫理学会 会員
2013年8月～	事業承継学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	秋池　篤	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
動画の活用	2020年4月～	オンデマンド講義に併せてyoutubeにおける企業公式の動画の閲覧などを促すことによって、経営戦略論に関する理解を深めるようにしている。
図・表を活用しての理論・フレームワークの学習の促進	2019年～	例年通り、引き続き、経営戦略論の理論・フレームワークに関して文字のみならず、図や表を作成し伝えることを心掛けた。
オープンアクセス論文を活用してのフレームワーク理解の促進	2019年～	例年通り、経営戦略論の理論・フレームワークの学修を促進するため、各自オープンアクセス論文上に記載されているケースを読解し、理論・フレームワークを用いて解釈するという課題をこれまで数回実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	経営戦略論の理論・フレームワークの習熟
今年度の進捗状況	今年度も外部動画や外部資料を活用しつつ、コメントをもとに理論、フレームワークの習熟を図ることができた。
来年度の進捗目標	来年度は専任教員ではなくなるが、今後も現在の方向性をより洗練させていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Bothersome moderating effects of product knowledge and design acumen between product appearance and consumer purchase intention.	不明	2023年9月	2023JPIM Research Forum(New orleans)	Atsushi Akiike, Sotaro Katsumata, ◎Tohru Yoshioka-Kobayashi	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①デザイン戦略の検討 ②観光研究の進行
今年度の進捗状況	①デザイン戦略の検討については、ジャーナルへの投稿を進めている。 ②観光研究の進行については、質問票の作成などを進めている。
来年度の進捗目標	①デザイン戦略の検討については、論文の掲載を目指す。 ②観光研究の進行については、調査の実施を目指す。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究(B)	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年3月～	国際ビジネス研究学会 会員
2013年12月～	研究・技術計画学会(現:研究・イノベーション学会) 会員
2012年9月～	日本経営学会 会員
2012年6月～	組織学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	工藤　大介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		現在の教育上の課題としては，少人数演習における学生同士の議論をより活発化させるための，ファシリテート方略の確立にあると考えている。学生においては，授業や演習での議論・発言の機会・経験が少なく，不慣れであるため，及び腰となっている傾向が散見される。そのため，学生一人一人の考えを尊重し，闊達な議論を促していくための方略の確立や，授業計画の見直しを行っていく。
今年度の進捗状況		今年度は着任1年目であり，前期は大学における学生の傾向や，履修状況を把握することに時間を取られてしまった。後期は得られた学生の特性を元に，演習でのファシリテートの改善を試みたが，学生からの積極的な発言を引き出すにはまだ改善が必要だと考えられる。
来年度の進捗目標		来年度は演習や授業において，学生に対して心理的安全性が担保されていることを説明し，自由に意見や考えを表明してよい場であることの認識を高め，より闊達な議論に基づくアクティブラーニングが実施できることを目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
暴力的コンテンツの愛好とパーソナリティの関係性	共著	2023年	東海学院大学，東海学院大学研究年報，8	熊﨑汐音，工藤大介，李楊	pp.33-43
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
「風評被害」について考える：買い控えをする消費者の心理	単著	2023年	政策研究フォーラム，改革者，64(11)	工藤大介	pp.48-51
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
食品の健康効果に対する信奉と意思決定過程の関係 -フードファディズム促進要因に関する二重過程理論からのアプローチ-	共同	2023年9月	日本心理学会第87回大会(神戸国際会議場・神戸国際展示場)	◎工藤大介，李楊	
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下における消費者の購買行動に対する個人特性の影響	共同	2023年9月	日本社会心理学会第64回大会(上智大学)	◎工藤大介，李楊	
Trust in AI-based recommendations	共同	2023年7月	15th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology(Hong Kong, China)	◎Daisuke Kudo, Taiki Nobuta, Sorataka Ono, Yang Li	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		現在の研究活動における課題は，1つ目は科研費課題である「食品の健康効果の信奉」に関して，調査を進めていくと共に，前任校で行ってきた調査・実験データを論文化することである。また，2つ目は，研究データの学会や国際会議での発表を含め，一般向けの雑誌記事や書籍等，そして出張講義や講演において，サイエンスコミュニケーション活動・アウトリーチ活動を進めていくことである。		

今年度の進捗状況	今年度は若手科研費が採択されたため，課題の研究準備を行うとともに，複数の調査を実施し，学会・国際会議での発表も行った。論文化も進めており，来年度以降学術誌に投稿予定である。アウトリーチ活動に関しては，今年度は雑誌記事と書籍の執筆を行った。
来年度の進捗目標	来年度の研究活動については，論文の学術誌への投稿に重点を置いて進めていく。まず，共同研究の論文2本の国内学術誌への投稿を行うと共に，主著論文2本の国際誌への投稿を行っていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～	個別(研究代表者)	特定の食品・栄養の健康への影響を誇大に信奉する現象であるフードファディズムは，人々の生命・健康と直結することから，消費者の不合理な意思決定の中でも特に注目を要する行動である。しかし従来の研究は事例分析が中心であり，フードファディズムを引き起こす心理的メカニズムへの検討は黎明期に過ぎない。定量的アプローチの土台であるフードファディズムの信奉度の測定法の開発や，影響要因の因果関係の特定など，喫緊な課題が多数存在している。本研究では，意思決定研究における消費者の不合理な購買意思決定の研究手法から出発し，フードファディズム発生に至る心理的メカニズムを検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年5月～	日本心理学会 若手の会幹事
2022年5月～	日本消費者行動研究学会 会員
2021年12月～	日本人間行動進化学会 会員
2017年4月～	産業・組織心理学会 会員
2014年4月～	Asian Association of Social Psychology 会員
2013年7月～	Society for Personality and Social Psycholog 会員
2012年4月～	日本心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当せず。		
今年度の進捗状況	該当せず。		
来年度の進捗目標	該当せず。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

学内では総合ネットワーク管理委員会委員他4つの委員会に所属し，各業務に携わってきた。他にはオープンキャンパスでの出張講義や，入試委員を担当した。

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	古賀　裕也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Does mandatory quarterly reporting induce managerial myopic behavior? Evidence from Japan	共著	2023年7月	Finance Research Letters, 56	Koga Yuya,Yamaguchi Tomoyasu.	pp.104142
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
四半期開示の義務化が経営者の会計的裁量行動に与える影響	共著	2023年12月	商学論纂, 65(3-4)	山口朋泰、 古賀裕也	pp.47-81
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Discretionary reclassification and value relevance: Evidence from unrealized gains and losses on available-for-sale securities in Japan	共同	2024年1月	AAA 2024 International Accounting Section Midyear Meeting(Atlanta)	Koga Yuya, Nedate Akihiro	
Discretionary reclassification and value relevance: Evidence from unrealized gains and losses on available-for-sale securities in Japan	共同	2023年11月	The 20th Annual Conference of the Asian Academic Accounting Association(Khon Kaen, Thailand)	Koga Yuya, Nedate Akihiro	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2024年度		本研究課題では、日本の金融業を除く上場企業を対象に、メインバンクによるガバナンスが企業の近視眼的行動（managerial myopia）にどのような影響を与えるかを検証する。メインバンクを中心とする融資やモニタリングは日本の伝統的な制度的特徴としてあげられた。しかしながら、日本企業の所有構造は大きく変化しており、メインバンクの機能が弱体化しているといわれている。本研究では、メインバンク制に着目し、企業の近視眼的行動への影響を時系列で観察する。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	棚橋　則子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学んだ理論の実践（日経STOCKリーグへの参加）	2016年4月～	演習（3年）では，前期で学んだ会計・ファイナンス理論と財務・株価データを分析するためのプログラミング（R言語）を実践するために，後期には日本経済新聞社主催・野村ホールディングス特別協賛の株式投資コンテスト「日経STOCKリーグ」に参加している。2023年度は1チームが参加したが，一次審査を通過することができず残念な結果であった。また，毎年，他学部や他大学と合同ゼミを行っており，聞き手に伝わるプレゼンテーションを検討したり，他人の発表に対して建設的な質問やコメントをしたりと，合同ゼミを通じて社会人に必要なスキルの向上も図っている。
学習意欲のある学生に対する個別対応	2016年4月～	演習を履修している学生から，さらに発展した内容を学びたいという要望があった場合に，授業時間とは別に学習機会を設け，学生の学習機会を失わないようサポートを行っている。また，大学院への進学に関する相談にも応じている。
知識を定着させるための授業設計	2016年4月～	講義形式の授業では，毎回の授業の冒頭で，前回学んだ分析手法に関するミニテストを実施し，授業後には授業内容確認テストに取り組むことで，知識を定着させる仕組みを構築している。また，授業内で計算演習を行う際には，教室内をくまなく巡回し，悩んでいる学生がいたら声がけをするなど，学生が直面している疑問点をそのままにしないよう即座に対応できるようにしている。また，研究・発表の技法や演習などの少人数授業では，リアクションペーパーを導入し，教員と学生間の双方向のやり取りを行っている。具体的には，毎回の授業の振り返りを行うとともに，学生の疑問点・学習上の悩みなどを即座に把握し，対応している。
実際に企業が公表している財務諸表を教材として使用	2016年4月～	授業内で行う分析では，計算しやすいように作られた架空の財務諸表を用いるのではなく，実際に公表されている連結財務諸表（2023年度はキユーピー株式会社の連結財務諸表を使用）を用いて行うことで，教科書の内容を抽象的に学ぶのではなく，現実との接点を得ることができるように授業を設計している。
会計初学者を想定した授業構成とオンデマンド教材の工夫（会計学入門）	2016年4月～	会計学入門（1年次必修科目）受講者のほとんどが会計初学者であるため，簿記を一切使わず，なるべく学生がイメージしやすい身近な話題から話を始め，毎回の学習トピックへと繋げることを意識している。また，前回の授業の内容が身についたどうかを確認するための「ミニテスト（授業の冒頭に実施／期間中は何度でも受験可）」と，授業の内容をしっかりと理解できているかどうかを確認するための「授業内容確認テスト（授業後に実施）」を実施することで，知識の定着を図る仕組みを構築した。さらに，新型コロナウイルスの影響により，授業がオンデマンド方式になったことから，前述の授業の構成に加え，会計上の取引がよりイメージできるように，図やイラストを多く用いた動画を作成した。対面授業となった現在でも，授業の構成は変えず，オンデマンド教材を作成した際に使用していたスライドを用いて授業を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	継続して担当している授業については，これまで行ってきた様々な改善点に加えて，より柔軟な授業構成や現在の学生に合わせた対応を行うことで，よりブラッシュアップされた教育を実施する。 今年度，新たに担当した授業については，授業内での学生の様子，テストの結果などを参考に，来年度に向けて授業内容の改善を行う。

今年度の進捗状況	昨年掲げた目標すべてにおいて，ある程度は達成できたと考えている。 1）演習科目では，受講生に対して問いかけを何度も行い，自らの頭でしっかり考える環境を構築する。 今年度は，受講者全員にテキストの内容をまとめたうえで，疑問点を事前に出してもらい，授業ではまずテキストの内容についての問いかけを行い，受講者の理解度を確認したうえで，疑問点を中心に授業を行った。 2）新たに担当する授業において，効果的なmanabaの使い方を検討する。 簿記という授業の特性上，学習効果を上げるようなmanabaの効果的な使い方はなかなか難しく感じた。授業内での学生の様子を見ていても，問題を解く際には紙やワークブックに書いている学生が大多数であった。学習内容も多いため，各自の復習用にmanabaに問題を設定しても，結局，消化不良になると感じた。来年度は，他の使い方を検討したい。 3）1年が終わったら，新たに担当した授業の振り返りを行い，再度，授業構成などを検討する。 今年度の反省などをふまえ，再度授業構成などの検討を行い，来年度のシラバスに反映させた。
来年度の進捗目標	1）演習系の科目（主に「基礎演習」「総合演習」）では，受講生に対して何度も問いかけを行い，自らの頭でしっかり考える環境を構築する。 2）manabaの効果的な使い方を検討する。 3）担当した授業の振り返りを行い，再度，授業構成などを検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在取得している科研費の研究を進めるとともに，次の科研費へ応募するためのテーマを見つけ，応募に向けた準備を行う。
今年度の進捗状況	昨年掲げた目標のうち，2についてはある程度達成できたと考えている。 1）現在取得している科研費の研究を進める。 ほとんど進めることはできなかった。 2）次の研究テーマに関するサーベイ論文を執筆し，投稿する。 現在進めており，2024年5月に投稿する予定である。 3）科研費へ応募する。 延長申請を行ったため，応募しなかった。来年度は応募する予定である。
来年度の進捗目標	1）次の研究テーマに関するサーベイ論文を執筆し，投稿する。 2）現在取得している科研費の研究を進める。 3）科研費へ応募する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究課題の目的は、①日本の会計情報を用いて会計ベータ値を推定し、それがCAPMや3ファクターモデルなどのファクターベータよりもリターンの説明力を有するのか、②会計ベータ値を推定する際、全上場企業の集約利益ではなくマクロ経済指標を用いた場合でもリターンの説明力を有するのか、の2点を明らかにすることである。 本研究課題の特徴は、会計ベータ値の推定の際に、①日本特有の経営者予想情報を用いる点、②全上場企業の集約利益の代わりに日本全体のマクロ経済指標を用いる点、である。本研究は、経営者予想利益や実績利益などの会計情報を用いて推定した会計ベータ値の有用性を示すことで、ディスクロージャー制度に対する政策的な含意を有する。また、誰でも入手可能な会計情報を用いた新たなリスク指標を提示することで、証券投資を行う投資者やアナリストに対して有益となる実証的証拠を提示する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年9月～	日本会計研究学会機関誌編集委員会 幹事
2018年9月～	東北防衛局入札監視委員会 委員
2013年9月～	日本会計研究学会 会員
2012年6月～	日本経済会計学会（旧 日本ディスクロージャー研究学会） 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

美術部顧問

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	窪田　嵩哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事例・研究の紹介	2020年～	理論やフレームワークの学修を促すため、理論やフレームワークに対応する事例を紹介した。また、学習した理論が近年の研究でどのように扱われているかを紹介し、より深い学修に触れ、興味を持つことができるよう工夫した。
学生が主体となってビジネスプランを考えることを中心とした授業の設計	2020年～	学生が主体となり、いちからビジネスプランを作成するよう、授業を設計・運営した。授業では実際に学生がインタビュー調査を行うなど、学生自身が収集した情報をもとにビジネスプランを作っていく過程が体験できるようにした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ビジネス・リサーチ実習　授業資料の作成と改善	2020年～	
起業論Ⅱ　授業資料の作成と改善	2020年～	
起業論Ⅰ　授業資料の作成と改善	2020年～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2023年度		予算管理などの管理会計システムの導入と利用の状況は、各企業によって様々である。先行研究は、その違いを経営者の年齢や学歴、性格などの特性によって説明することを試みている。しかし、経験的証拠の蓄積には地理的な偏りが存在し、その知見は地域を超えた一般性を持つとは言い難い。そこで本研究は、日本企業を対象に質問紙調査を実施する。日本企業を対象とした質問紙調査から、経営者の特性と管理会計システムの導入・利用との関係を明らかにするのが、本研究の目的である。調査データの統計的解析を通じて、先行研究の理論的基礎について、日本での適用可能性を検証することができる。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	堀　治彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
クラウド型グループウェアを活用した講義運営	2022年4月～	G Suiteなどを活用し、教材であるPowerPoint形式のファイルなどの共有や学生とのコミュニケーション、研究や学習の進捗管理などのマネジメントを統合的に運用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Microsoft PowerPointを使用した講義資料の作成及びWeb会議システムを利用した授業の動画作成、Google forms等を使用した課題の作成。	2022年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	専門教育科目の充実
今年度の進捗状況	着任して2年が経過し、専門科目及び基礎科目についてはシラバス記載の通り遅滞なく講義を進めることができた。 とりわけ、専門科目については、高度専門職や公務員を志望する学生の期待に応答するメニューを提示することができたうえ、進路実績も良好となった。 大学院担当も始まり、専門的な講義負担が増加しているが、こちらも大学院生の期待に応える内容を展開している。
来年度の進捗目標	次年度は大学院負担が増加するが、専門知識の提供について質的な部分での維持向上を目指す。 また、講義資料のブラッシュアップや各履修者の潜在的ニーズをより掘り起こすことができる講義の用意を継続するである。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
現代税務会計論〈第7版〉『現代税務会計論〈第7版〉』	共著	2024年3月	中央経済社, 7	成道 秀雄監修, 坂本雅士編著, 髙橋絵梨花, 上松公雄, 渡邉宏美, 東条美和, 岩井恒太郎, 津島由佳, 堀治彦, 神尾篤史	pp.180-224
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
[研究ノート]暗号資産に関する情報交換制度に関する覚書	単著	2024年2月	東北学院大学経営研究所, 東北学院大学経営学論集(22)	堀治彦	pp.1-13
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
◆特集2 トピックで考える租税法 5 BEPS包摂的枠組み――国際課税	単著	2023年9月	有斐閣, 法学教室(517)	堀治彦	pp.54-56
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
通達と公正処理基準との関係についての一考察―支払保険料における逆基準性の観点から―	共同	2023年12月	2023年度12月 保険学セミナー（大阪）(AP大阪淀屋橋)	宮崎裕士, 堀治彦	

「事業体とグローバル・ミニマム課税―多様な事業体の判定を中心とした検討」	単独	2023年10月	税務会計研究学会 第35回全国大会(神戸大学)	堀治彦	
How Japan Reacted to Changes in International Taxation: Focusing on the Responses of Japanese Companies	単独	2023年8月	Tax Research Seminar on International Taxation with Japanese Researchers Thomson House at McGill University(Thomson House at McGill University)	Haruhiko Hori	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	国際課税の研究及び企業課税に関する研究の推進
今年度の進捗状況	昨年度と課題・目標は同じであるが、特筆すべき進捗として、科研費の若手研究に研究代表者として採択され、基盤研究Cにも研究分担者として採択された。これらの採択に基づき、研究報告などを加速させている(本年度の学会発表などを参照のこと)。
来年度の進捗目標	上述の科研費の採択項目に加え、次年度開始の基盤研究Cの研究課題も研究分担者で採択されたことから、採択課題の精力的な推進が向こう数年にわたって予定される。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年12月～2024年1月	仙台法務局 登記簿等の公開に関する事務 評価委員会 評価委員会 委員
2023年6月～	International Fiscal Association YIN(Young IFA Network) Co-representative of Japan branch
2022年6月～2023年5月	日本学術振興協会 理事(財務担当、法務担当)
2021年～	日本税法学会 会員
2021年～	租税法学会 会員
2020年～	国際取引法学会 会員
2016年～	税務会計研究学会 会員
2012年～	International Fiscal Association 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	森下　俊一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
グループワーク主体のゼミ発表(3年次演習、研究・発表の技法、基礎演習)	2023年4月1日～	1，2，3年次のゼミはグループワーク中心に学年に合わせて段階的に進めている。1年次(基礎演習)はテキストに沿って、2年次(研究・発表の技法)はテーマを与え、3年次は自分自身のグループでテーマを考え、グループでの議論を交え、受講者が主体的に取り組めるよう指導している。授業の初めに教員が、今日の授業の主旨と解説、調査の指針を与え、それ以降は、グループで話し合いながら課題を進める。授業の最後には各グループで、その日の成果や進捗を発表してもらう。授業後は各受講生が、その日の学びを振り返り、manabaに入力するよう指示している。その受講者のコメントを一つひとつ読み込み、次回以降の授業に活かせるよう参考にしている。
卒業論文作成を見据えた個人指導とゼミ発表(4年次演習)	2023年4月1日～	経営学部で4年間学んだ集大成として本ゼミ(演習)では、卒業論文の提出を課している。前期は、研究の背景と目的、先行研究レビュー、調査研究方法、実調査、考察、まとめなどのプロセス毎に、その方法を解説している。その後で、各自の調査研究の状況を簡潔に報告してもらう。後期は、過去の先輩方の卒業論文をレビューし、論文とはどのようなものか、論文の書き方などを解説するとともに、前期同様、受講生各自の調査研究の報告をしてもらう。また、受講者個別に面談し、卒業論文で悩んでいることの他、就活についても話を聞く機会を設けている。
授業科目(サービス経営論、観光経営論)における理論と事例(ケーススタディ含む)を交えた講義と演習	2023年4月1日～	授業においては、その科目の理論だけではなく、必ず該当する実践事例を交えて解説している。まず、今日の授業のテーマに関わる実企業などで行われた実践事例を前半紹介する。その後で、後半は、その事例を踏まえて、理論的な解説を行う。授業中に各自の演習時間を設け、今日の事例の他に受講生各自が知っている事例を挙げ、受講生自身の言葉で、その事例の理論的解説を行う。このように理論と実践、および、教員による解説と自分自身による事例を繰り返すことにより、受講生の理解を深めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業(サービス経営論、観光経営論)、演習(4年次演習、3年次演習、研究・発表の技法）科目でのオリジナル教材の作成	2023年4月1日～	授業(サービス経営論、観光経営論)、および、演習(4年次演習、3年次演習、研究・発表の技法）科目において、毎回オリジナル教材を作成し、事前に授業科目はmanabaを通じて、演習科目は当日受講生に配布している。受講生にはノートやメモを取ることに終始するより、教材の一部を空欄にして授業中にキーワードを埋めるなど、授業や演習に集中してもらうような教材内容を工夫している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	本年度が本学着任1年目のため、全てにおいて初めてのことばかりであった。本学での教育・研究面での仕組みや流れを1年間通じて把握することを目標とした。
今年度の進捗状況	自己評価としては、おおむね把握できていると思う。
来年度の進捗目標	新たに授業科目が2つ増えるが、引き続き受講者の為になる授業を心がけたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
訪日外国人観光客の口コミ分析による旅館の魅力と類型化	単著	2023年12月	日本経営診断学会論集，23	森下俊一郎	pp.69-75

Customer satisfaction with tangible and intangible services of ryokans and hotels in the Japanese lodging industry	単著	2023年11月	Journal of Global Tourism Research, 8(2)	Shunichiro MORISHITA	pp.117-124
宿泊業におけるサービスの工業化による人と機械の最適化	単著	2023年9月	工業経営研究, 37(2)	森下俊一郎	pp.3-16
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
接待飲食業における疑似恋愛のサービスマネジメント―花街の芸舞妓、旅館の女将、航空会社の客室乗務員の人材と 組織マネジメントの比較を通じて―	単著	2023年11月	東北学院大学 経営学論集, 21	森下俊一郎	pp.15-32
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
旅館における外国人観光客の満足・不満足の要因と背景の相違	単著	2023年12月	日本観光研究学会全国大会学術論文集, 38	森下俊一郎	pp.323-326
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
接待飲食業における接客サービスの価値共創と闘争の知識マネジメント	単独	2024年3月	サービス学会 第12回 国内大会(筑波大学(東京キャンパス))	森下俊一郎	
旅館における外国人客と日本人客の 満足・不満足の要因と背景の相違	単独	2023年12月	第38回日本観光研究学会全国大会((文教大学)	森下俊一郎	
A Case Study of New Value Creation through Service Innovation in the Japanese Lodging Industry	単独	2023年12月	2023 TTRA Asia Pacific Annual Chapter Conference(Sejong University, Seoul, South Korea)	Shunichiro MORISHITA	
宿泊業の業態別による顧客満足および不満の要因と背景	単独	2023年11月	日本経営システム学会第71回（2023年秋季）全国研究発表大会(東北大学)	森下俊一郎	
宿泊業における新たなサービスの工業化 ― スーパーホテルと変なホテルの事例分析と比較を通じて―	単独	2023年8月	工業経営研究学会第 38 回全国大会(九州産業大学)	森下俊一郎	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業(基盤C)	2019年度～2024年度	個別(研究代表者)	インバウンド訪日観光客が満足する旅館でのおもてなしとそのマネジメント(19K12570)

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年10月～2023年10月	カスタマーハラスメントで宿泊拒否が可能に(NHKラジオ「Nらじ」) コメンテーター
2022年1月～	International Conference on Sustainable Tourism Management (ICSTM) Technical Program Committees
2020年4月～	日本観光研究学会 会員
2017年4月～	日本経営診断学会 会員
2015年12月～	サービス学会 会員
2004年8月～	日本経営システム学会 会員
2004年6月～	工業経営研究学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
本年度は、知的財産委員会、および、生協代議員の会議に学部の代表ととして出席した。 また、夏のオープンキャンパスでは学部の模擬講義を担当した。

2023年度

所属	経営学部　経営学科	職名	講師	氏名	板橋　慶明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
時事問題や国際情勢の検討も含めて、ミクロとマクロの両面からアプローチ（経営心理学Ⅱ）	2021年9月～	経営心理学Ⅱでは、リーダーシップや意思決定（情報の流れを含む）を主に扱っているが、これらのトピックと関連している時事問題や国際情勢もときどき取り上げ、ミクロ的視点とマクロ的視点の両面からアプローチして理解・考察できるようにサポートしている。
経営心理学の理論と実践書の内容との関連についての取り組み（経営心理学Ⅰ）	2021年4月～	授業で経営心理に関する理論を扱うともに、経営や組織の心理などに関係した実践書の内容にも取り組んでもらい、両者の間の関連性などについて検討・考察する機会を提供している。これにより、理論と実践の両面から経営心理を理解できるようになるようサポートしている。
学生に対する（学習や大学生活に関する）個別相談	2020年9月～	大学における学習や大学生活について相談を必要とする学生に対して（オフィスアワーの枠とは別に）個別相談に応じている。自分が望んでいることと現状を確認し，目的達成の障害となっている事柄がある場合には，それについて共に考え，大学生活について適切な意思決定をし，行動を起こすことができるようサポートしている。
発表担当グループによる円滑な演習進行を促進するためのサポート	2020年9月～	3，4年向け演習（ゼミ）において発表担当のグループが円滑にゼミを進行させ，ディスカッションを活性化することができるよう，ゼミ時間外に担当グループとのミーティングの時間を設けることによって，アドバイスやサポートを提供している。
読解・作文の技法及び研究・発表の技法において，人間性の理解に資すると思われる幅広い視野からのアプローチをとった。	2020年5月～	学科共通の内容に加えて，人と組織に関して様々な視点から深く理解できるように，カウンセリング的視点（カウンセリング・マインド），思春期の子供のコーチング，多様性の理解（異文化理解）といった多彩な内容を取り入れ，現代組織と現代社会において必要とされる人間性の理解と育成に関係した能力を高めることに資する内容とした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・マネジメントにおける心理的現象に関わる複数の要因に配慮しながら注意深く考える能力を高めてもらえるよう努力する。重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に適用して考えることを促す。情報の偏り等についても注意を向けてもらう。 ・レポート提出に関して，剽窃・盗用、コピペなどがよくないことを理解してもらい、自分の力で取り組むよう指導する。 ・現代の学生に対応するために必要な理解（学生相談等に必要な理解）を深める。相談を必要とする学生に積極的に対応する。 ・コロナ下での授業の効果的なやり方について、模索・検討する。

今年度の進捗状況	・2年配当講義科目の試験を採点する際には、重要な概念を用いながら注意深く考える能力に重点をおいて評価している。今年度も、前期科目（経営心理学Ⅰ）の試験をレポート試験としたが、課題本に取り組むことを必須とし、（選択肢の中から選んだ）課題本の内容と授業の内容を結びつけながらレポートを作成するよう要求した。よく考えた内容のものやオリジナリティの見られるレポートもあり、提出されたレポートは、全般的に見て、一定の水準に達していた。しかし、深みのある分析や考察をしているレポートは比較的少数にとどまったように見られる。授業の予習・復習に十分な時間をかけているかについては、ばらつきがあったように見られるが、よい取り組みをした学生については、考える能力と創造性を伸ばすのにある程度役立ったものと見られる。後期科目（経営心理学Ⅱ）は、試験として、論述の筆記試験を行った。その中で理論的構造を理解しながら自分の知識や考えをまとめる力を発揮してもらった。また、情報のバイアスや偏りに関する理論を実際の現象や事例に当てはめて社会における情報の偏りや流れの不自然さを検討してもらう努力もしたが、筆記試験でこれをうまく行うことができた学生は比較的少数にとどまった。参考資料に十分な時間をかけて取り組んでもらう必要があると見られる。 ・内容が濃い専門科目の単位取得に苦しむ学生もいるので、今後とも専門科目にしっかり取り組む必要性を伝えながら講義を進めることとする。 ・今年度も、前期の経営心理学Ⅰのレポート試験において、（ネット等からの）剽窃・盗用の件数は、少数に限られた。剽窃・盗用について、参考資料や実際の事例なども紹介しながら注意喚起を行ったので、それがある程度効果を発揮したと思われる。今年度の特異な現象としては、単純にネットから盗用するのではなく、生成AIを用いて作成した文章を使用するというケースが、極少数ではあるが、見られた。このようなケースでは、根拠不明の議論や関連性のうすい議論を展開したりする傾向が見られたので、注意喚起したい。 ・今年度は、新型コロナ対応による遠隔授業が発生しなかったので、新型コロナによる影響はあまりないようにみられたが、感染（インフルエンザを含む）による欠席者が増加した時期があった。遠隔授業の部分がなかったので、これに関係した問題は発生しなかったが、対面授業での出欠確認では、やや困難があった。respon による出欠確認には、限界があるように感じられる。 ・比較的長期にわたって体調を崩す学生がいたので、面談による相談等によって対応した。
来年度の進捗目標	・引き続き複数の重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に理論を適用して考えることがきるようになるよう指導する。社会における情報の偏りについても、理論を参考にしながら検討してもらうようにする。 ・剽窃・盗用についての注意喚起を継続し，これらの発生を低く抑える。生成AIについても注意喚起する。 ・相談を必要とする学生に積極的に対応し、学生への対応能力を高めていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・マズローの理論やそれと関係したマネジメント理論や心理学理論についてリサーチを進める（リサーチを進める環境を整える）。 ・上記と間接的に（直接・間接的に）関係している現代の若者（学生）の心理について理解を深める。時事問題や国際情勢の流れの中で、理論の役割等について考えて行きたい（情報の流れと偏りに注意を向けつつ）。 ・リサーチにおいて必要となる英語能力を高い水準に維持する。 ・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などに関して、状況を改善する。
今年度の進捗状況	・今年度も体調管理がやや困難となり、授業以外の事柄が、なかなか進展しなかった。自身の体調管理も含めて、研究・生活環境を十分に整えて、何とかリサーチ等のための安定的状態を回復したいところである。 ・現代社会の心理的動向について、情報操作や管理の影響も含めて、ある程度調べることができた。時事問題や国際情勢とそれらの背景にある心理的傾向などについても、ある程度情報を収集することができた。 ・英語のリスニングについては、テレビ番組やオンラインサイトなどを利用してブラッシュアップの継続をある程度できた。文献読破については、限られた程度しか進めることができなかった。

来年度の進捗目標	・自身の体調管理や安定した生活・研究環境の確保などについて、状況を改善し、自身の生活・研究環境の回復を行い、リサーチを前進させる環境を整えたい。 ・現代社会や現代の若者（学生）を理解するための思想や理論について調べることを続けたい。また、時事問題や国際情勢にも目を向け、時代の流れと理論との関係について考えて行きたい。また、現代社会における情報の流れと偏りについても検討し（続け）たい。 ・英語のリスニングの機会をふやすとともに，文献読破量もある程度確保したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1997年9月～	日本経営学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	宋 元旭	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		昨年度には介護休業のため、授業を行うことができなく、学生に授業内容や教え方が認知されていないと考えられます。1、2年生の授業をメインに行うので、学生とコミュニケーションを取りながら、学生が大学に求めるものを把握し、自分の授業内容と教え方を認識してもらうことを目指します。
今年度の進捗状況		今年度には介護休業のため、授業を持つことができず、教育活動を行うことができませんでした。
来年度の進捗目標		今年度には介護休業のため、授業を行うことができなく、学生に授業内容や教え方が認知されていないと考えられます。1、2年生の授業をメインに行うので、学生とコミュニケーションを取りながら、学生が大学に求めるものを把握し、自分の授業内容と教え方を認識してもらうことを目指します。 次年度からは流通論に興味を持つ学生が演習に多く応募するようにしたいと思っています。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標		今年度には長年抱えていた博士論文を終わらせることができたので、博士論文の論文化や出版を指導教員との相談の上、行っていきたいと思っています。 また、博士論文に注いでいた時間を投入できる新しいプロジェクトを立ち上げたいと思っています。			
今年度の進捗状況		今年度には介護休業のため、研究活動における大きな進歩はありませんでしたが、以下のことを行いました。 まず、博士論文の執筆を行い、2月に東京大学で論文審査を受け、無事博士号を取ることができました。 次は中国のバッテリー産業の現地調査を行いました。南京と成都の2か所で約1週間現地企業を訪問しました。バッテリー企業の代表格であるCATLやトラックメーカー、工業団地の材料企業やベンチャー企業などに伺い、企業の説明を受けました。 最後に韓国政府団体が行うモノづくり研修に参加し、参加企業とインストラクターの改善活動を観察し、日本流の改善活動が如何に韓国で受け入れられるかを確認しました。日本のものづくり改善ネットワークで行われた韓国の改善活動報告会にも参加し、今後の日韓の改善コラボレーションプロジェクトにも携わることができるようになりました。		

来年度の進捗目標	来年度には以下のようなプロジェクトを行いたいと思っています。 ①中国のバッテリー産業調査 今年度行った中国のバッテリー産業調査に基づき、共同研究者と一緒に内容をまとめ、海外学会での発表を行います。学会は6月末にヨーロッパで行われるEUROMAで、既に学会発表を申し込み、アクセプトを受けております。発表までに内容を固め、学会で今後のコメントがもらえるようにします。 ②韓国モノづくり研修研究 今年度に引き続き、来年度にも韓国の政府団体と日本のものづくり改善ネットワークが行う韓国のものづくり改善活動に参加します。時期が合わない可能性もありますが、できるだけ参加し、日韓のインストラクターの共同改善活動がどのように行われるかを観察します。また、外部組織を使った改善活動として韓国のモノづくり研修をとらえ、定量分析を行おうと思っています。 ③スマートフォン開発と企業間関係研究 今年度はデーターベース化を目指しましたが、できませんでした。来年度にはデーターベース化を完成し、定量分析を行った上で、学会発表ができるようにしたいと思っています。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年7月～	国際ビジネス研究学会 会員
2011年3月～	組織学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

AO面接委員（任期なし）、経営学部親和会幹事（着任年順）、ハラスメント相談員（任期2年）、「授業改善のための学生アンケート」実施委員（任期2年）、TGGV150担当者

教員業務・活動報告

法　学　部

法　律　学　科

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	阿部　未央	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自主的な学習を促すための工夫	2022年4月1日～	テストのフィードバックとして、択一・論述問題のポイント解説を行うとともに、成績優秀者の論述を参考答案として公表している。
学生の参加意欲を高める工夫	2022年4月1日～	特に演習では学生の希望を授業内容に反映させているほか、学生同士・学生教員間のコミュニケーションを図る機会を多く設けている。他大学との合同ゼミを通じて、論理的思考力、プレゼンテーション能力、質疑応答への対応力、チームワーク力などを鍛えている。
授業内容の理解を促すための工夫	2022年4月1日～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習を行い知識の定着を図るとともに、大事な点をレジメ・パワーポイントで強調して説明することで、学生の理解を高める工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の論理的思考力、コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を高める工夫をする。
今年度の進捗状況	演習ではグループディスカッションやグループディベートを取り入れることで、学生の主体性・積極性を促すことができた。5大学の合同ゼミでは、人数が多いながらも学生たちがチームワークよく、中身の濃い報告・質疑応答を行うことができ、それらをサポートした。
来年度の進捗目標	来年度も上記目標達成に向け継続して実施する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	非正規雇用、メンタルヘルスおよび労働組合についての研究を継続して行う。
今年度の進捗状況	非正規雇用の「同一労働同一賃金」、「無期転換制度」「無期転換後の労働条件」に関して、資料収集、論点の整理、裁判例の検討を行い、東北社会法研究会にて報告し、論文を執筆した。 精神障害の労災認定に関して東北社会法研究会で報告し、論文を執筆した。英文の論文も執筆中である。労働組合に関する研究も行い、論文を執筆し公刊することができた。
来年度の進捗目標	非正規雇用、メンタルヘルスに関する労災認定基準について、比較法を含めて今後も継続して研究を行っていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年2月	外部講師 大原学園山形校 講師
2023年10月～	宮城県地方労働審議会 公益委員
2023年4月～	宮城県高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会 委員（会長）
2021年4月～2024年3月	仙台市都市計画審議会 委員
2020年12月～2023年6月	厚生労働省精神障害の労災認定の基準に関する専門検討会 委員
2019年～	外部講師 個別労働紛争解決研修会 講師
2016年4月～	山形県行政不服審査会 委員（副委員長）
2015年3月～	山形県労働委員会 公益委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・（全学）就職キャリア支援委員
・（全学）AO面接委員
・（全学）科研費申請アドバイザー
・（法学部）法学部点検・評価委員会委員
・（法学部）法学部改革FD委員会委員
・（法学部）基幹構想委員会委員
・（法学部）キャリアアップ支援委員
・（法学部）広報委員

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	石垣　茂光	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
小テストの実施	2019年4月1日～	前期は200名前後の受講者に対して、5～6回小テストを行い、採点をした上で解説を付して返却した。 後期も、5回の小テストを実施し、解説をmanabaに掲載するとともに、点数を付して返却した。
独自の授業評価アンケートの実施	2018年4月1日～	授業効果を図るため、manabaを用いて、理解したこと、いまだ不十分な個所をあげさせ、次回の授業において解説をするなど、授業に反映させている。また、授業感想等を自由記述させることによって、学生がどのようなことを考えているかを知り、それに答えたり、新たな工夫をするなどしている。
レジュメの配布	2018年4月1日～	毎回分のレジュメを作成し、事前にmanabaに掲載をしている。また、そのレジュメに記載されている練習問題について事前に考えさせ、授業で解説をし、manabaで今一度解答を書かせ、理解度を確認をしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	井上　義比古	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス公開講座講師 （単位互換提供科目）「社会情勢論」	2008年4月1日～	
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	遠藤　隆幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
フィールドワークおよび合同ゼミ合宿の実施	2023年8月28日～2023年8月30日	大阪経済大学刑事法ゼミとの合同合宿において、法と社会的養護の協働に関する検討会を行った。また大阪において、フィールドワーク実習を行った。
卒論作成とその準備	2023年4月1日～2024年2月1日	卒論作成に向けて、勉強会および合宿を実施した。またその成果を公開の卒論発表会で公表した。
manabaを介した双方向授業の実践	2020年～	manabaを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をmanabaにリンクし収集を指示した。また、適宜チャットツールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
中川淳＝小川富之『家族法　第3版』（法律文化社）第5章　婚姻の解消―離婚	2023年10月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	家族法立法の現状を批判的に検討する
今年度の進捗状況	社会的養護を法学的に分析するというゼミを開講し、他大学との合同ゼミに結実した。また、それを踏まえたフィールドワークを実施することができた。
来年度の進捗目標	今年度の成果を踏まえ、学会における学生コンペ出場を目指したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
第5章　婚姻の解消ー離婚『家族法（第3版）』	共著	2023年10月	法律文化社	中川淳＝小川富之編	pp.65-83
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	(1)社会的養護と民法理論の接合 (2)相続選択法制の比較法的検討
今年度の進捗状況	教科書を除いて、研究業績と評価できるものを公刊することはできなかった。他方で、国内における団体後見ヒアリングおよびドイツPflegefamilieの検討は比較的進み、それは来年度または再来年度公刊予定の論考に結実することになると思われる。
来年度の進捗目標	国内法人後見の調査をさらに進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 科学研究費基盤研究（c）	2019年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年1月	未成年後見制度について(未成年後見に関する研修会) 講師
2023年7月～2024年6月	日本学術振興会特別研究員等審査会 専門委員
2022年4月～	社会福祉法人宮城県社会福祉協議会運営適正化委員会 運営監視合議体委員長代理
2020年12月～	中国山東省青島市仲裁委員会 外国人仲裁員
2019年4月～	仙台弁護士会懲戒委員 委員
2011年～	比較法学会 会員
2008年～	日本私法学会 会員
2005年～	日本社会〈家族と法〉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
学務部主任

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	大窪　誠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・事前にレジュメを教育支援システム（マナバ）に掲載し、授業で使用する。毎回の授業後に小テストを実施し、約5回の小テストごとに、解説を教育支援システム（マナバ）に掲載する。	2023年4月1日～2024年3月31日	・事前にレジュメを教育支援システム（マナバ）に掲載し、授業で使用する。毎回の授業後に小テストを実施し、約5回の小テストごとに、解説を教育支援システム（マナバ）に掲載する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
レジュメ、小テスト問題、小テストの解説、レポート課題、事例問題、事例問題の解説。	2023年4月1日～2024年3月31日	債権法各論Ⅱ（法学部）、民法Ⅰと民法Ⅱ（経済学部）のレジュメ、小テスト問題、小テストの解説。法曹養成実習Ⅱの事例問題と事例問題の解説。演習二部、と基礎演習Ⅰのレジュメ。リーガルリサーチのレジュメ、レポート課題、解説。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	今年度をもって退職するため、教育活動に関する現在の課題・目標はない。
今年度の進捗状況	今年度に担当した債権法各論Ⅱ、法曹養成実習Ⅱ、演習二部、基礎演習Ⅰ、リーガルリサーチ（以上、法学部）、民法Ⅰ、民法Ⅱ（以上、経済学部）のレジュメ、講義科目の小テスト問題と小テストの解説、または，レポート課題（事例問題等）と解説を作成した。
来年度の進捗目標	今年度をもって退職するため、来年度の進捗目標はない。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
20世紀初頭のドイツにおける状態債務説の通説化とライヒ裁判所による受容－学説の展開と判例形成の過程でエルトマンが果たした役割『社会の多様化と私法の展開（小野秀誠先生古稀記念論文集）』	共著	2024年2月	法律文化社	大窪誠	pp.412-426
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
不動産譲受人による不動産の賃貸後に不動産譲渡人が不動産譲渡契約について無効主張・取消し・解除をした場合における賃貸借をめぐる法律関係 －ドイツにおける「賃貸土地・賃貸住居の取得者による『賃貸人たる地位の承継』否定 論」を参考にして－	単著	2024年2月	東北学院大学学術研究会，東北学院法学(84)	大窪誠	pp.1-47
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・不動産賃貸借に関する諸問題を検討し、論文を完成させる。

今年度の進捗状況	以下の①②の論文を公表し、③の論文の再校を終えた。 ①「不動産譲受人による不動産の賃貸後に不動産譲渡人が不動産譲渡契約について無効主張・取消し・解除をした場合における賃貸借をめぐる法律関係－ドイツにおける『賃貸土地・賃貸住居の取得者による『賃貸人たる地位の承継』否定論』を参考にして－」東北学院法学84号（2024・2・16）1～47頁。 ②「20世紀初頭のドイツにおける状態債務説の通説化とライヒ裁判所による受容－学説の展開と判例形成の過程でエルトマンが果たした役割」滝沢昌彦ほか編『社会の多様化と私法の展開』（小野秀誠先生古稀記念論文集）（法律文化社、2024年2月20日）412～426頁。 ③「契約上の地位の移転」『債権法改正講座』所収予定（日本評論社。
来年度の進捗目標	①「契約上の地位の移転」『債権法改正講座』所収予定（日本評論社）を公表する。 ②賃貸不動産の譲渡をめぐる法律関係を扱ったドイツ最高裁判所の判決を整理する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1989年～	日本私法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

①全学関係
・法学研究科法律学専攻主任
・学術研究会評議委員会委員
・教員資格審査委員会委員

②法学部関係
・法学部点検・評価委員会委員
・法学部改革FD委員会委員
・法学部基幹構想委員会委員
・東北学院法学編集委員
・法学部キャリアアップ支援委員会委員
・AO面接委員
・卒業試験実施委員会委員

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	菊地　雄介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習支援システムmanabaのレポート機能を使った各回授業内容の概略レポート提出による学修事項定着の促進	2021年4月1日～	
学習事項の定着確認と全体的な授業計画との関連性の明示	2015年4月1日～	毎回の授業の冒頭に前回の授業内容を要約して説明し、また学期全体の授業計画進行の流れと関連づけて説明することで、各回の授業の位置づけを逐一確認させる。
異なる授業項目の下で共通する事項を意識化させることによる相互参照的学習の活用	2015年4月1日～	以前の関連する授業回の説明をあえて引き合いに出し、相互参照的な効果を意識させることで、教育項目の多角的な学習を可能にするよう工夫している。
各学期授業計画の明示と各回授業進行予定の具体的な説明	2013年4月1日～	各学期の冒頭に各回授業計画の進行予定を詳しく順を追って説明し、学生の自主学習が円滑に進捗するよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
中央大学法学部通信教育課程の宮城支部学習会における講師を務めた。	2023年7月22日	学習会テーマ「会社とは何か、持分会社と株式会社はどのように異なるか、持分会社に含まれる3種類の会社はどのように異なるか」
仙台法務局職員中等科研修（会社法）講師	2023年7月19日～2023年8月2日	仙台法務局研修センターにおいて法務局職員中等科研修（会社法）全16回の研修講師を務めた。

現在の課題・目標	① 教師として何を教えるかより、受講生が何を学ぶことができたかを毎回の授業テーマとして意識する。 ② 授業の進行について行けない受講生が出ないよう各授業回の連携関係を毎回の冒頭で確認するとともに、manabaのレポート機能を活用して受講生に各回の重要事項まとめを記録させることで、各回の事後学修に繋げさせるようにする。 ③ 学生から提出された授業記録としてのレポートに対しては、必要に応じて講評によるフィードバックを施し、学力形成の蓄積を図るようにする。 ④ 講義形式の授業でも、可能な限り多くの学生に語りかけ、反応を確かめることで、理解度や理解困難な箇所を推し量るよう努める。 ⑤ 法律科目の授業で六法を持ち合わせない他学部生のために、スマホやタブレットによる「e-Gov」（電子政府の法令検索）システムの活用を促し、教科書の記述と法令上の根拠とを照らし合わせる習慣の涵養を図る。
今年度の進捗状況	①②　毎回の授業の冒頭と終了時に、各回の授業内容と前回まで及び次回からの授業内容との接続関係について簡略に説明することで、各授業回の内容理解について連続性を持たせるよう工夫する。 ③　提出レポートの講評に際しては、各自のレポート内容に応じて具体的な指摘事項をかなり詳細に提示し続けている。 ④　受講している学生の表情や動きに目を配り、理解度や疑問点等の把握に努める。 ⑤　授業終了時の簡易レポートに参照条文の情報を盛り込ませ、事後学修の成果を盛り込んだ自習ノートにその内容を貼り付けさせることで、学修事項を視覚的にも意識させるようにしている。
来年度の進捗目標	①②　教育支援システムmanabaのレポート機能を活用して、各授業回の終了時に小レポート「本日の重要ポイントまとめ」を作成させ、毎回の授業後に行われる事後学修への接続を意識させることで、各自が毎回の授業で得た学修事項について自己確認の機会を与える。 ③④　従来からの努力を継続する。 ⑤　授業に臨む際にPCやタブレット・スマホ等の情報機器を必須のものと明示して、教科書や参考文献の活字情報と、授業で得た口頭情報、情報検索で得られた電子情報を総合的に活用する習慣を身につけさせる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	① 自ら編集と執筆にあたる会社法教科書のアップデート作業に向けた準備を進める。 ② 会社法分野の論文テーマに関する掘り下げを続ける。 ③ 自ら多数の対象条文について執筆を担当した会社法コンメンタールのゲラ出校を待って校正作業を済ませ、刊行にまでこぎ着ける。 ④ 研究者としてのスタート時からの研究テーマである取引決済システムの法について、手形小切手制度がその任を終えた現在において、体系的なシステム再構築の発想を深化させる。
今年度の進捗状況	① 法改正の状況と判例形成の現状について一定の成果を得た。 ③ 出版社からの校正ゲラ到達が遅れていたが、2023年12月に出版社から初校ゲラが届けられ、その校正作業を完了した。 ②④ 検討継続中である。
来年度の進捗目標	① 担当編集者の長期休暇により滞っている編集作業を秋には再開させ、年度内に改訂作業の大枠と新たな執筆陣および執筆担当の割り振りについて出版社との間で合意を取りまとめる。 ③ 第2校のゲラ到着を待って、すべての執筆・校正作業を完了させ、年度内の第3版発行を実現させる。 ②④検討作業を継続する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年10月～	社会保険診療報酬支払基金宮城審査運営協議会 委員
2022年10月～	社会保険診療報酬支払基金宮城審査運営協議会委員 運営参加・支援
2018年4月～	東北イノベーション人材育成コンソーシアム運営会議 委員
2018年4月～	東北大学出版会評議員会 評議員
2014年10月～	日本海法学会理事 会員
2014年10月～	東北地方社会保険医療協議会宮城部会 委員・部会長
2014年10月～	日本海法学会会員 会員
2014年10月～	東北地方社会保険医療協議会 委員・会長
1999年4月～	東北大学商法研究会 会員
1987年7月～	現代企業法研究会（名古屋大学内） 会員
1987年7月～	現代企業法研究会会員（名古屋大学内）（現代企業法研究会会員（名古屋大学内））
1984年10月～	金融法学会会員 会員
1983年4月～	日本比較法研究所（中央大学内） 嘱託研究所員
1983年4月～	日本比較法研究所嘱託研究所員（中央大学内）（日本比較法研究所嘱託研究所員（中央大学内））
1981年10月～	日本私法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

学長特別補佐（コンプライアンス担当）、内部質保証委員会委員、大学財政専門委員会小委員会委員、学校法人東北学院公益通報者保護委員会委員、基幹教員制度構築委員会委員、体育会洋弓部顧問として、学内各組織の管理運営に当たった。

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	木下　淑惠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業準備、予習の促進	2022年10月1日～	空欄を設けた授業用レジュメを授業前日までにmanabaを通して配付し、授業の準備と予習を促している。
学習した事項の整理と記憶への定着、授業理解の促進	2020年9月～	講義科目では、毎回、授業のはじめに、その回の全体の構成と達成目標を明示する。授業の最後には、その回の要点まとめを行い、さらに、その回の復習としてふりかえりの小テストを行う。また、次の回の冒頭で、前の回の小テストについて詳しく解説する。また、配付レジュメには空欄をところどころ設け、意識的な学習と復習を促している。
学習した事項についての知識の定着	2020年4月～	講義科目では、半期に3～5回、それまでの複数回の講義内容について小テストを行っている。解答時には各自のノートを振り返ることにより、自らの知識を再確認する機会としている。また、小テスト終了後に重要ポイントの解説を行うほか、必要に応じて多くの受講生が間違えた問題について、次の回の冒頭であらためて解説している。
授業理解の促進	2020年4月～	込み入っていて理解しにくいと考えられる事柄については、その時期のニュースと関連づけて説明するほか、写真や図表を用いたり、また、実例を紹介するなど、できるだけ具体性をもたせた解説を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①すべての授業で、学習した事項の整理と定着を促進する。 ②すべての授業で、担当教員の講義による座学以外の要素を取り入れる。 ③講義科目を中心に、学習後一定期間を経た事項の復習を促進する。
今年度の進捗状況	①授業終了時のまとめは毎回行ったが、十分な時間をとれないことがあった。 ②演習科目だけでなく、講義科目においても、ところどころで受講生に参加させる機会を設けることができた。 ③講義科目で、単元の節目に行う復習の小テストでは、次の回の冒頭に、重点項目と誤答の目立った問題について、解説をし、復習を促した。
来年度の進捗目標	①授業全体の時間配分に留意し、まとめの時間を一定程度確保できるようにする。 ②講義科目では、受講生の参加が授業の流れを止めてしまうことのないよう、この2つを両立させるようにする。 ③ひきつづき、小テストの後に、重点項目に加え、受講生の理解の実態を踏まえた解説を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①スウェーデンの福祉国家成立についてまとめる。 ②スウェーデンの女性環境についてまとめる。 ③地域活性化策の基本的な枠組みと課題を整理する。

今年度の進捗状況	①福祉国家の類型における北欧の福祉国家の特徴について、整理した。 ②関連する資料を収集・整理し、少し読み込みを始めた。 ③関連する新しい資料の収集と整理を行った。
来年度の進捗目標	①スウェーデンの福祉国家成立に関連する資料を収集・整理する。 ②ひきつづき、資料の読み込みを進める。 ③新しい資料をもとに、今日の基本的な枠組みと課題をまとめる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年～	北ヨーロッパ学会 理事
2017年～	宮城県国民健康保険運営協議会 委員
2016年～	宮城県後期高齢者医療広域連合　情報公開・個人情報保護審査会 委員
2015年～	宮城県議会　情報公開審査会 委員
2002年～	北ヨーロッパ学会 会員
1998年～	日本比較政治学会 会員
1997年～	日本政治学会 会員
1996年～	日本行政学会 会員
1996年～	日本公共政策学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	黒田　秀治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングおよび双方向授業の実施	2021年4月～	manabaを用いることによって、工学部でのTGベーシック「市民社会を生きる」では，テーマの設定，予習の励行，グループごとの討論と結論の取り纏めによって，学生の能動的学修を促すように努めた。
詳細なプリントの作成と論点整理	2020年4月27日～	国際法Ⅰ、同Ⅱの講義では、すでに学習した国内法の知識と関連づけながら，国際法と国内法の異同，国際法の規範的分類および国際先例などを提示したプリントを配付し，授業の進捗と理解の定着という二律背反的な講義課題の調整を図った。
学生の関心を惹起させるテーマの選択と学内施設の利用	2020年4月27日～	「演習一部」および「演習二部」では，可能な限り受講者の意思を尊重し，先例やテーマの選択は彼らに委ねる一方で，随時相談に乗り，レポートの添削を行うなど，受講生の自主性と適切な指導とのバランスをとることを心がけた。
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月27日～	国際法Ⅰ、同Ⅱ、および国際経済法の講義では、冒頭で前回の復習と概略を説明し，年間を通じた講義のタイムスケジュールの中で，当日の授業の位置づけを理解させるように努めた。
英米文献を読むための基礎的作法・文献渉猟方法の学習	2020年4月27日～	「外国書購読」では，英米文献を購読する過程で，日本と異なる独特の引用スタイルや文献渉猟方法を教授し，英語・法律学の学習のみならず，英米文献の学習のためのリテラシーの教育に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張型講義での学科紹介および模擬授業の講師	2023年8月25日	2023年度東北学院高校大学訪問プログラムで法律学科の紹介と「国連の集団安全保障とウクライナ問題」と題する模擬授業の講師を行った
出張型講義での学科紹介および模擬授業の講師	2023年7月29日	東北学院大学夏のオープンキャンパスで法律学科の紹介と「国連の集団安全保障とウクライナ問題」と題する模擬授業の講師を2度行った。

現在の課題・目標	1.すべての授業で,学士課程における必要性という観点から,達成目標を見直す。 2.授業時間外でも学生とのコミュニケーションを重視し,学生からの相談・質問に真摯に対応する。 3.次年度担当の「市民社会を生きる」の「講義ノート」を作成する。
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1.H.L.A.Hart の理論を使用して整序した主権免除および国際法律行為の研究 2.国際法から見た国家の主権的行為の規制の態様の研究 3.国際投資法と国際人権法との交錯に関する論文をまとめる。 4.仲裁判断例を通じて考察する、国際投資法と一般国際法の抵触と競合の整序
今年度の進捗状況	1.上記目標①については，資料を集めている。 2.上記目標②については，最近手を付けたばかりで,進捗がなかった。 3.上記目標③については，ほぼすべての資料を集めた。 4.上記目標④については、資料を集めている。
来年度の進捗目標	1.上記目標①について，視点を変え、法源論の観点からの研究にとりかかる。 2.上記目標②について，資料の収集を完成する。 3.上記目標③について，近年の進展に留意し、さらに資料を収集し、論文をまとめる。 4.上記目標④については、資料を収集し、最近の動向を分析する論文を執筆する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	近藤　雄大	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ内模擬裁判の実施	2023年10月19日～2024年1月11日	ゼミ生の学力向上を目的として演習一部で模擬裁判を実施した。ゼミ生に民事の事案を提示し、原告班、被告班、裁判官班に分かれ、それぞれの役割に応じて準備をし、授業日を公判期日として事件ごとに議論を行った。最終日に裁判官班のメンバーが判決文の読み上げ、最終的な勝敗を決することになった。
レポートおよび最終試験の講評	2023年4月14日～	2回の中間レポートおよび最終試験の「採点基準」と「解答例」を作成し、それをもとに講評を行った。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2023年4月14日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2022年4月11日～	最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2022年4月11日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
学習した内容の定着を図る	2021年4月11日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2021年4月11日～	2回の小レポートおよび最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2020年5月7日～	最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2020年5月7日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2023年4月14日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2021年4月11日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2020年5月7日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
公務員試験等対策勉強会の実施	2023年10月6日～2023年12月16日	3年生向けに公務員試験等を目指す学生を対象に勉強会を実施した。後期に実施し、債権法分野を中心とした。将来的な公務員試験や各種資格試験の合格を目標として問題演習および解説を行った。
TKCフォローアップ講座　民法Ⅱ（債権法）講師	2023年9月25日～2024年1月25日	法学部で実施しているTKCフォローアップ講座で民法の債権法分野の講師を務めた。毎月テーマを設定し、公務員試験の過去問の検討と解説を動画配信した。毎回10問の小テストを実施し、復習を行うことにより、知識の定着と合わせて解法テクニックの向上を図った。
ランチョンセミナーの企画および講師	2020年11月25日～	法学部主催のランチョンセミナーを今年も引き続き実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。

現在の課題・目標	・授業の理解を深めるために，イメージしやすい具体例をあげて説明するように心がける。 ・アクティブ・ラーニングの要素をできる限り取り入れる。 ・評価に不満や疑義のある学生に納得してもらうために，採点基準を明確化し，それに基づいて不満や疑義のある学生に対して十分な説明を行う。 ・演習Ⅰ・Ⅱは連続受講してもらうことにより，卒業までの2年間にわたり単位修得，就職など学生生活全般について相談や指導を行う。 ・将来の目標達成のために意欲ある学生の学習をサポートし、モチベーションの維持を図るため継続的に勉強会を実施する。
今年度の進捗状況	・関係図や補足資料を配布するなどして、学生が具体的なイメージを浮かべて考えられるような工夫をした。 ・2回の中間レポートおよび最終試験の採点基準とそれについての解説をmanaba上で公表した。その上で評価に疑問のある学生については，manabaを利用して採点基準をもとに詳細な解説を記した回答を交付し、その中でなぜその点数なのかを説明した。その結果，ほとんどの学生は納得していた。 ・本年度の卒業生は，全員が演習Ⅰと演習Ⅱを連続受講し，ほとんどの学生が進路を決定して卒業することができた。残念ながら卒業が決まらなかった学生については、卒業までできる限りサポートしていく。また，新4年生もほとんどが連続受講する予定であり，単位修得や就職活動の相談に応じている。 ・学生のキャリアアップおよび将来の目標達成に向けた基礎固めとなるように公務員試験対策の実践的な練習として勉強会を開催した。
来年度の進捗目標	・一部の学生からは難しかったとの声もあったので，分かりやすいとの評価が多くなるように，具体例を用いてイメージしやすく，また分かりやすい説明をしていく。 ・次年度以降も，本年度と同様の対応を続けていく予定であるが、採点基準についてはより明確化し，学生への説明が分かりやすくなるようにする。 ・法学検定試験をはじめ各種資格試験への合格者が増加するように、勉強会の実施のみならず個別の進路相談や学習相談にも応じるようにする。 ・新3年生への履修指導を4月中に実施し，単位修得についての意識を高め，また就職についての具体的なイメージをもたせる。また，新4年生には引き続き単位修得と就職活動についてのフォローをする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・法学部での共同研究プロジェクトを進める。 ・一部無効に関する論文を執筆する。
今年度の進捗状況	・先に発表した論文に続く内容の論稿を執筆するために、必要な裁判例や評釈類を収集した。 ・今までに執筆した論文以降について発表された論文などのフォローを始め，資料の収集を始めたので進捗があった。
来年度の進捗目標	・今回の論稿の続きとなる内容についての論文作成を目指し、資料収集や検討をおこなう。 ・年度内に論文を公表できるようにする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2008年1月～	日本消費者法学会 会員
2004年4月～	比較法学会 会員
2004年4月～	日本私法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	齋藤　誠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年4月～	公立大学法人宮城大学外部委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐々木　くみ	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	授業の予習と復習をリアルタイムに行わせるため，manabaのドリル機能を利用して，ほぼ毎週，予習問題を合格点に達成するため繰り返し解答させ、また、復習問題に全10回解答させた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
日評ベーシックシリーズ『憲法Ⅰ［第2版］』『憲法Ⅱ［第2版］』（日本評論社）	2021年～	問題を噛み砕き，平易な語りかけをすることで，憲法の基礎知識について初学者でも理解できることを目指している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校への出前授業の講師を務めた	2023年11月7日	福島の相馬高校の生徒に対して，妊娠中絶の自由を素材に，大学での憲法の勉強と高校までの憲法の勉強の違いについて実感してもらう授業を行った。

現在の課題・目標	①専門科目「憲法」の授業について，学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ②授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし，講義に関する学生からの様々な相談に応じる。
今年度の進捗状況	①については，manabaの復習問題のドリルと小テストの解説の時間を増やした。 ②については，manabaの「個別指導」とメールで学生とコミュニケーションをとり，ある程度の進捗がみられた。
来年度の進捗目標	①専門科目「憲法」の授業について，学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ②授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし，講義に関する学生からの様々な相談に応じる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
令和2年最大判と違憲審査の担い手	単著	2023年4月	有斐閣，有斐閣OnLine	佐々木くみ	pp.1
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①「個人の解放者としての主権国家の役割」について再考する。 ②司法権の在り方について研究する。
今年度の進捗状況	①については、関連する研究会に出席し、研究を深めることができた。 ②については、研究論文を執筆した。
来年度の進捗目標	①「個人の解放者としての主権国家の役割」について再考する。 ②身体の所有という概念について研究する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年10月～		全国憲法研究会 運営委員	
2018年4月～		宮城県労働委員会委員 委員	
2016年5月～		全国憲法研究会 会員	
2015年10月～		多賀城市情報公開・個人情報保護審査会委員 委員	
2000年10月～		憲法理論研究会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
①公務員試験・連携講座小委員 ②基幹構想委員 ③ハラスメント相談員 ④広報委員 ⑤改革FD検討委員 ⑥点検評価委員 ⑦学生委員 ⑧東北学院大学学術振興会　機関誌部会準備委員会 委員			

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	佐藤　英世	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
レジュメの作成と授業評価	2020年4月1日～	講義科目である「行政法総論Ⅰ」、「行政法総論Ⅱ」、「法曹養成実習Ⅲ」、「日本法と外国法」について、学生が理解を深めることができるようにレジュメを作成し、配布している。行政法総論Ⅰ・Ⅱでは、レジュメをWeb上でも公開している。また、法学部の演習科目、大学院の担当科目を含め、すべての担当授業で授業評価を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材の作成と配布	2018年4月～	講義科目については、教材を作成し、学生に配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
法務省矯正局仙台矯正管区における2019年度任用研修課程法務教官応用科研修での講義	2024年1月9日～2024年1月10日	国民の権利利益を保護する諸制度

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『行政法の基本〔第8版〕』	共著	2023年4月	法律文化社	北村和生，佐伯彰洋，佐藤英世，高橋明男	pp.119-345
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年7月～	仙台市個人情報保護審議会 委員
2021年3月～	多賀城市入札監視委員会 委員長

2020年8月～	宮城県個人情報保護審査会 委員
2020年2月～	大崎市都市計画税検討会議 会長
2017年4月～	亘理町入札監視委員会 委員長
2013年4月～	柴田町固定資産評価審査委員会 委員長
2007年5月～	白石市情報公開・個人情報保護審査会 委員長
2004年4月～	東北弁護士連合会弁護士任官候補者推薦委員会 委員
2003年10月～	大崎市情報公開審査会 委員
1985年4月～	日本公法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐藤　優希	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ論文集の製作	2020年4月1日～	演習一部では判例研究論文，演習二部ではゼミ論文の執筆および提出を単位修得の要件としている。とくに演習二部では，卒業論文としてボリュームある論文を執筆させ，報告会・討論会をしたうえで、ゼミ論文集にすることで，法学部で学んだことの集大成ができるよう丁寧な指導を心掛けている。本年度も演習二部ゼミ生全員が論文執筆し，ゼミ論文集「東北学院法学研究第10号」を発行した。
民事模擬裁判の実践	2020年4月1日～	裁判官，原告，被告に分けて，該当当事者のみに証拠等の資料を配布し，口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し，裁判傍聴をした後で，民事裁判で行われる答弁書の作成，主張，証拠の提出，判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。
演習におけるフィールドワークの導入	2020年4月1日～	裁判傍聴や裁判所見学などを行い，裁判実務に対する理解を高める助力を行っている。
演習におけるディベートの実施	2020年4月1日～	演習においては，時事問題や法律問題について，報告者のレジュメによる報告に基づき議論を行うことで，報告の仕方や効果的なプレゼン方法を学び，ディベート力を向上させるための実践練習を行っている。
manabaのフル活用	2020年4月1日～	manabaを通じて，レジュメおよび資料を配布し，小テスト機能やレポート機能を利用して，小テストおよび論述形式の課題小テストを実施した。
講義ノートの作成	2020年4月1日～	講義および演習では，毎回講義ノートを作成し，授業進行速度の適否や学生の理解度などを記録することにより，授業の改善を図っている。
小テスト問題による授業理解の定着	2020年4月1日～	毎回の講義の最後に司法試験問題や司法書士問題から授業のまとめとなる問題を作成し、小テスト問題を実施した。講義時間のまとめとして小テストを行い、その回の中で小テスト問題の解答および解説を加えることにより，学生自身が講義内容をどれだけ理解できたかを確認することができる。できなかった部分についは、復習させることで知識の定着を図っている。
事例を多用した講義による授業理解の促進	2020年4月1日～	丁寧に授業を行えるよう心がけており、具体的事例を多用し説明することで，抽象的な法律学を身近に感じさせるなど，理解を深める工夫を行っている。
講義動画と詳細なレジュメの配布による授業理解の促進	2020年4月1日～	講義内容の重要ポイント，判例の解説，小テスト問題をまとめた詳細なレジュメも作成し、manabaにアップして，授業理解の促進を図る工夫を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
民事執行法・保全法のテキスト資料	2023年4月1日～	民事執行法法・保全法の講義時に使用するテキストを作成中である。執筆したものをPDFにして、テキスト資料として、レジュメと共に授業の数日前にmanabaでアップしている。授業では、このテキスト資料とレジュメを使って、講義をしている。
民事執行法・保全法の講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の前に，講義内容の重要ポイント，板書の図解をPDF化したもの，判例，小テスト問題をA4で10枚ほどにまとめたレジュメをmanabaにアップする。予習をしてもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。
民事訴訟法Ⅰ・Ⅱの講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の前に，講義内容の重要ポイント，板書の図解をPDF化したもの，判例，小テスト問題などをB A4で10枚ほどにまとめたレジュメをmanabaにアップしている。予習をしてもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
体育会ライフル射撃部部長としての指導	2020年4月1日～	体育会ライフル射撃部の部長として，サポートおよび教育面での指導を行っている。

現在の課題・目標	・学生にわかりやすく理解しやすく講義を提供するため、判例や図を多用したレジュメを作成する。 ・『民事執行法・保全法』の授業テキストを作成する。 ・ゼミでは・学生とのコミュニケーションの時間を多くとるようにし、学業面だけでなく就活などさまざま相談にも応じられるようにする。
今年度の進捗状況	・上記の目標について、ある程度の進捗がみられた。 ・とりわけ『民事執行法・保全法』の授業テキストの作成は8割方進んだ状況にある。
来年度の進捗目標	・上記の目標について、到達できるよう意欲的に進めていく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・子の引き渡しについての研究論文を執筆し、完成させる。 ・国際的な子の引き渡しについての研究のために、他の専門領域の研究者との共同研究を進める。
今年度の進捗状況	・上記の目標について、基本的な資料収集ができた。
来年度の進捗目標	・上記の目標について、さらに資料収集を進めて、研究内容を執筆し、論文をまとめて、研究誌に発表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年4月～	民事手続法研究会会員 委員
2004年4月～	九州法学会会員 会員
1999年4月～	日本民事訴訟法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	陶久　利彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		（1）教養教育科目としては「法学」を担当する。今年度は遠隔授業ゆえ、ウエブ上で講義録を公開し、課題を提出してもらい、最終的にはレポートで成績評価をする。目指すのは、一方で法的思考法の基本を学ぶことであり、他方で日本の実定法の基本を押さえることである。授業の振り返り・課題提出・動画閲覧をうまく絡み合わせたい。 （2）専門科目「法哲学Ⅰ、Ⅱ」については、Ⅰで生命倫理の諸問題を扱い、Ⅱで出生後の個人から社会的存在への成長を「個人の脆弱性」という視点から整理し、法的世界へと誘う。 （3）演習科目にあっては、1年次に身の回りの事柄への関心を高めることを目指し、2年次から4年次にかけては、資料探索や読解法、判例の読み方、小論文の書き方などを修得する。同時に、グループ活動と積極的な議論の応酬が実現できるようにしたい。
今年度の進捗状況		（1）遠隔授業の「法学」については、比較的熱心に課題に取り組んだ受講生が多かった。 （2）専門科目については、前期こそ15名～20名程度の出席者があったが、卒業単位を修得した学生は後期の授業には履修登録を取り消してしまい、意図していたアクティブラーニングは殆ど実施できなかった。ただ、最終レポート提出者は法哲学の問題設定を理解しながら、自説を明確に展開していた。 （3）演習科目については、1年次の基礎演習Ⅰを除き、履修生はほぼ熱心であり、グループ学習が活発に行われた。特に3年次の演習履修生からは学外施設見学への要望が出され、裁判所と少年院を訪れる機会をもった。コロナ後の授業の在り方が、従前のそれに少し戻りつつあることを実感した。
来年度の進捗目標		（1）教養教育科目としては「法学」ではなく、旧カリの「市民社会を生きる」を担当する。授業ノートを新しくし、個人・家族・各種共同体・国家・国際社会といった順で、市民社会と関連した現代の諸問題をアクティブラーニング手法を中心に扱う予定である。身近な問題に関心を持ち、特に法的観点に意識を向けることを目指す。 （2）「法哲学Ⅰ」はこれまでの生命倫理ではなく、法哲学の教科書で扱われている諸問題を概観することとした。学部のカリキュラムからすると、法学部生として押さえておいてほしい知識と思考法を考える機会が少ないと思われるからである。「法哲学Ⅱ」は、ここ数年の内容をさらに深めたい。 （3）演習科目の内容と目指す方向は、ここ数年と変わらない。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
ルールへの違和感？	単著	2024年2月	東北学院法学(84)	陶久利彦	pp.113-138
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	大きく2つを研究課題としてきた。1つは法学方法論であり、2つは生命倫理特に「出生前診断と中絶」である。双方について論文として何らかの形を残したい。				

今年度の進捗状況	今年度は2つの論文を執筆した。1つは、かなり前に市民向け公開講座で扱った「ルール観」をもう一度検討するというものである。「ルールへの違和感？」と題して『東北学院法学』に掲載した。刊行は2024年2月である。ここでは、授業実践から見られる学生のルール観を題材にし、抑々ルールを前面に出す思考の一種の奇妙さを指摘しようとした。 もう1つは、「障害胎児を引き受ける親の責任」と題する小論である。酒匂教授古稀記念論文集に寄稿した。刊行は次年度早々の予定である。この小論では、出生前診断で障害のあることが分かったときに当事者がその子を引き受ける責任がないのか、という視点から問題に接近しようとした。通常は、当事者の自己決定権によってすべてが片付けられてしまうが、そこに当事者の「責任」を論じる余地がないかどうかを検討しようとしたのである。特にハンス・ヨナスの責任論を参考にしたが、最終結論にまでは至っていない。次年度以降の課題となる。
来年度の進捗目標	(1) 今年度秋ごろに、『法哲学事典』編集委員を引き受けた関係上、次年度はその仕事に従事する。編集作業の傍ら、私の執筆項目が「法的三段論法」なので、これをテーマとする論文を書く予定である。 (2) 他方で、「出生前診断と中絶」に関連する論攷がだいぶ蓄積されてきた。書籍刊行を目指して問題を洗い直し、原稿を書き溜めたいと考えている。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1977年11月～	日本法哲学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	辻田　芳幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概　　要
1．教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
シラバスの充実	2021年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。
小テストの実施	2021年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2021年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2021年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2021年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2021年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
manabaの積極的利用	2021年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
小テストの実施	2019年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2019年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2019年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2019年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2019年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
シラバスの充実	2019年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。
manabaの積極的利用	2019年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
小テストの実施	2017年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2017年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2017年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2017年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2017年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
シラバスの充実	2017年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。

manabaの積極的利用	2017年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
法学講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。また，社会問題をときには数値で理解できるように，統計を示して説明している。さらに，法学初学者である受講生が法学により親しめるように，レジメの一部を空欄にし受講者自身が記入しながら学習できるようにしている。
知的財産法2講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
知的財産法1講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
法学講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。また，社会問題をときには数値で理解できるように，統計を示して説明している。さらに，法学初学者である受講生が法学により親しめるように，レジメの一部を空欄にし受講者自身が記入しながら学習できるようにしている。
知的財産法2講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
知的財産法1講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
映画の公開とその脚本の公表権	単著	2024年2月	東北学院法学(84)	辻田芳幸	pp.93-111
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
1996年6月～	工業所有権法学会会員 会員
1994年10月～	日本私法学会会員 会員
1992年5月～	著作権法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	冨田　真	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年7月～	日本民主法律家協会 理事

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	中村　雄一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業レジュメの全面改定（とくに「刑法総論Ⅰ及びⅡ）	2021年4月1日～	2年ぶりに担当した「刑法総論Ⅰ」及び「同Ⅱ」につき、レジュメを全面改定した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	宮川　基	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
刑法総論Ⅰ・Ⅱでレジュメを作成した。	2023年4月～2024年1月	
2．作成した教科書、教材、参考書		
拙著『高校の教科書で学ぶ法学入門〔第2版〕』（ミネルヴァ書房）を刊行した。	2024年3月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『高校の教科書で学ぶ法学入門［第2版］』	単著	2024年3月	ミネルヴァ書房，第2版	宮川基	pp.1-212
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	判例評釈を執筆をする。
今年度の進捗状況	判例評釈の執筆を進めている。
来年度の進捗目標	選挙活動の自由妨害罪に関する論文を執筆する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年12月～	東北弁連弁護士任官候補者推薦委員会 弁護士任官候補者推薦委
2023年5月～2024年3月	宮城刑務所視察委員会 視察委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	横田　尚昌	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
大学と職業との接続を意識した授業	2017年4月1日～	法律の基礎概念をしっかりと理解していれば，社会に出てから複雑な問題に直面しても，法的思考をもって的確に解決する道筋がつけられるはずである。このことを念頭に，基本的な法律知識を繰り返し履修生に説明し定着を図る。毎回の授業では，必ず前回に行った授業の内容を振り返る。そして全体の中で今何を学んでいるのか，その位置づけを明確にする。
授業に対する学生の反応への対応	2017年4月1日～	授業の内容や進め方については，折に触れて学生から寄せられた生産的な意見や要望を真摯に受け止め改善に努めているが，未だ不十分なところ多々あることを自覚しPDCAサイクルを意識してメリハリのある授業の工夫をする。
講義のポイントを説明する。	2017年4月1日～	教科書中のどの部分に力点をおいて講義するのか，また省略する個所についてはその理由を明確にする。 その科目で学ぶ内容の組立て方が履修生にわかるように工夫する。
基本的な知識が理解できていないために、出された問題を不必要に難しく考えすぎて、収拾がつかなくなる場合が少なくないことを示す授業	2017年4月1日～	難しいことを事細かに覚えるのではなく、根幹となる概念や用語をしっかりと身につけることによって体系的理解が深まることに気づいてもらえる授業の工夫をする。
演習二部履修生（4年生）による就活体験談	2017年4月1日～	3年生以下の演習では，就職先を決めた4年生に就活体験談を語ってもらう時間を設けて，企業は大学生活のどの点に着目しているのか、また今後の大学生活をいかに過ごしていくべきかについて、受講生各人が自らに考え直すきっかけ作りをする。
授業に対する学生の反応への対応	2015年4月1日～	授業の内容や進め方については，折に触れて学生から寄せられた生産的な意見や要望を真摯に受け止め改善に努めているが，未だ不十分なところ多々あることを自覚しPDCAサイクルを意識してメリハリのある授業の工夫をする。
足下の基本的知識がわかっていないために理解が進まない場合が少なくないことを示す授業	2015年4月～	難しいことを事細かに覚えるのではなく、根幹となる概念や用語をしっかりと身につけることによって体系的理解が深まることに気づいてもらえる授業の工夫をする。
2．作成した教科書、教材、参考書		
菊地雄介ほか著『レクチャー会社法（第3版）』（2022年，法律文化社）「第4章 株式」を分担執筆	2022年4月25日～	菊地雄介ほか著『レクチャー会社法（第3版）』（2022年，法律文化社）「第4章 株式」を分担執筆
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出前授業	2023年11月7日～2023年11月7日	福島県立いわき光洋高等学校にて出前授業

現在の課題・目標	・担当科目の授業においては，基本概念を念入りに説明する方向性は維持しつつも，もっと端的にメリハリのある説明の仕方を工夫する。 ・学生が授業について来くることができないのか，ついて来ようとしないのかを見極める工夫（小テストやアンケート）を試みながら，効率の良い授業が行えるように努める。 ・学生らが，彼らなりに一生懸命勉学に励もうとしている姿勢のあることを酌み取る努力を通して，どのような学生も決して侮ることの出来ない優れた面があることへの認識を深める。併せて，学生らにも，他人を見下したり小馬鹿にしたりするのは，自分に自信が持てないことの裏返しであることを，わかってもらえるようにする。
今年度の進捗状況	・毎回の授業ごとに達成目標を設定し、これを授業の冒頭で示す。その際、今日学ぶことが一体どこでどのように役立つのかを具体的に説明する。そして、基本となる概念と知識のポイントをしっかりと理解してもらえるように解説を行った。 ・授業のわかりやすさ等については，各論点の解説の際に、まず結論を先に示し、なぜそのような結論が導かれるのかを説明していくという順序で行う工夫をした。また、レジュメを充実させた。 ・就職をめぐる学生からの相談については懇切に対応したが，よい内定先が得られたというのは、ひとえにその学生自身の心構えと努力によるものであって、教員の指導の成果によるものではないことを認識するように努めた。 ・組織の中で同僚の信用を低下させるような悪口を言っていると、組織力が低下し競争力が鈍ってしまうことを（主としてゼミ生に）折に触れて話した。

来年度の進捗目標	・学生が，授業の内容を体系的に理解できるようにするために、基本概念の定着を促す工夫をさらに行う。 ・レジュメを充実させる。 ・授業にかんする学生からの質問や要望について懇切に対応することはもとより，折に触れての学生との話し合いを通じて、学生が能動的な学修のスキルを身につけていけるような授業および演習の運営の在り方について考えていく。 ・就職活動については，しっかりとした学生生活を送ることがしっかりとした就職につながることを学生に理解させる仕方を工夫する。また、学生が社会的に自立しようとする動機づけの機会をなるべく多く提供できるように努める。 ・たとえば学生が企業の採用面接を受けたときに、もし授業の内容について質問があっても、学生が端的にその要点が答えられるようにするべく、ポイントの明確なメリハリのある授業の提供に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
・がん保険における給付事由と責任開始前条項 ・（傷害定額保険契約）保険約款に定める「対象となる不慮の事故」 ・（傷害定額保険契約）故意または重大な過失による免責『『保険法の実務と理論Q＆A』』	分担執筆	2023年6月	保険毎日新聞社	保険法の実務と理論研究会	pp.382-421
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・傷害保険における保険金支払要件である事故の偶然性，外来性および急激性の相互関係について考察する。 ・最近、各社各様に改定が進められている生命保険契約の災害関係割増特約約款について考察する。 ・判例・通説は，第三者のためにする生命保険契約の保険金受取人は，その指定がなされるのと同時に保険金請求権を同人固有の権利として原始取得すると解するが，その保険事故発生前における保険金請求権とはどのような法的性質を有するのかについて考察する。 ・第三者のためにする生命保険契約における対価関係について考察する。 ・疾病保険をめぐる諸問題とりわけ不正請求の類型とその対策について検討する。 ・保険契約締結時の告知義務違反と詐欺行為との関係について考察する。 ・会社法の株式の規定に係る裁判例の解釈について検討する。
今年度の進捗状況	・故意による事故招致と事故の偶然性との関係および疾病による死亡と事故の外来性との関係について、最判平成19年7月6日の判例解釈によれば、何が事故を発生させた作用（直接原因）であり，その作用を惹起した理由（間接原因）は何かというがまず問題となる。この点につき、錯綜する学説の対立を整理しつつ、被保険者に傷害をもたらした事象(出来事)を直接原因とし、その事象がなぜ発生したのかの原因を間接原因として位置付ける試みを様々な事案に即して検討した。 ・生命保険契約の災害関係割増特約約款の改正が、保険事故の定義やその性質に影響を及ぼす可能性があると考えられる点について裁判例にあらわれた具体的な事例に即して検討した。 ・保険契約者（要約者）から保険金受取人（受益者）に対して対価関係上何が移転するのかについて、第三者のためにする生命保険契約と一般の第三者のためにする契約との違いについて整理を進めることができた。 ・がん保険契約における告知義務違反の特殊性について、90日不担保条項が必ずしも不実告知の対処方法として有効とは言い難い側面のあることを検討した。
来年度の進捗目標	・傷害保険金請求権成立の要件要素である保険事故の偶然性と外来性との関係について、被保険者の傷害の直接原因と間接原因との区別に着目して考察する。 ・保険契約の射倖契約性の観点から，保険事故発生前の保険金請求権の法的性質について更に考察を進める。 ・第三者のためにする生命保険契約における対価関係の性質について、最近の学説にたいする検討を進める。 ・疾病保険（入院保険）における告知義務の特殊性について検討する。 ・会社法の株式の規定に係る裁判例の解釈と学説の流れについて，整理し考察する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	高浜　智輝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向型授業	2023年4月1日～	少人数の授業では、学生全員が発言する機会を設けることを意識した。具体的には、発表者の学生に質問するだけでなく、他の学生にも意見を求めることにより学生全員が集中して授業に臨むよう取り組んだ。
電子資料・パワーポイントを用いた授業	2023年4月1日～	manabaを通じてパワーポイント資料を事前配布し、学生が手元で資料を確認しながら講義に臨めるように工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義科目で使用するレジュメ・資料等の平易化
今年度の進捗状況	今年度担当した講義科目である租税法Ⅰ・Ⅱについてレジュメ・資料を作成したが、相乗り科目の性質上経営学部の学生への配慮の観点から、現在のものよりもわかりやすい言葉で作り直している状況である。 演習科目については、3コマ1サイクルの形でグループワーク課題を設定し、学生が数多くの社会的問題について学習する機会を設けている。
来年度の進捗目標	平易にしすぎても学生のためにはならないため、学生の様子・回収したコメントを確認しながら適切な難易度のレジュメ・資料の作成を行う。 演習科目については課題の適切性について確認したうえで、グループワークを実施する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
アメリカ合衆国における災害に対する税制上の対応について	単著	2024年2月	東北学院法学(84)	高浜智輝	pp.49-92
外国パートナーの持分譲渡益におけるたな卸資産部に対する課税上の取扱い～Indu Rawat v. Commissioner T. C. Memo 2023-14の検討を中心に～	単著	2023年12月	国際商事法務, 51(12)	高浜智輝	pp.1601-1606
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
東京地判令和4年11月30日判例秘書L07732724	単独	2024年3月	第944回租税判例研究会(オンライン開催)	高浜　智輝	
税務行政執行共助条約に基づく保全共助要請により実施した保全差押処分の適法性－東京地判令和4年11月30日判例秘書L07732724の検討－	単独	2024年1月	国際取引法学会金融税制部会(オンライン開催)	高浜智輝	
外国パートナーの持分譲渡におけるたな卸資産部分から生じた利益に対する課税上の取り扱い －Indu Rawat v. Commissioner T.C. Memo 2023-14の検討を中心に－	単独	2023年10月	国際取引法学会金融税制部会(オンライン開催)	高浜智輝	

H. 翻訳(学術書や原典等)	
I. 特許	
現在の課題・目標	事業体課税に関する諸問題について諸外国の議論と比較法的に検討した論文を執筆する。 その他租税法に関連する諸問題について検討し論文を執筆する。
今年度の進捗状況	2023年度は上記の課題に関連した論文が国際商事法務12月号に掲載された。また、獨協法学にも掲載が予定されている(2024年4月予定)。 上記の課題とは直接関連しないが、東北学院法学84号にアメリカ合衆国における災害税制関連の論文が掲載された。
来年度の進捗目標	上記の課題目標から引き続き事業体課税に関する論文の執筆・投稿を目指す。他の諸問題については、税務行政執行共助条約に関する判例評釈を完成させるほか、租税条約の濫用や複数の言語で記述された場合の解釈等の論文を執筆する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2022年10月～	租税法学会 会員
2021年4月～	国際租税協会 会員
2020年9月～	国際取引法学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	玉井　裕貴	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
全国合同民事訴訟ゼミナールへの参加	2022年～	演習一部・二部において「全国合同民事訴訟ゼミナール」へ参加した。他大学との報告・議論を通じて、学生のモチベーションや学修意欲が大きく高まった。引き続き、大会参加を前提としたゼミ運営のあり方を模索している。
反転授業の実施	2022年～	「リーガル・リサーチ（法学部生入門）」では、講義内容を確実に身につけてもらうため、事前予習用の教材と教科書を用意し、反転授業を実施した。受講生の理解促進、また、上級学年になってからの学修に資するものとなっていることを期待する。
学習内容の理解促進と興味関心を高める。	2021年～	報道等で話題となった事件や、教科書事例などを多用し、概念や制度の理解の促進を図っている。また、法技術的側面の強い内容の説明に際しては、ビジュアルでの資料提供の方法を工夫したり、学生がメモをする上での留意点などを説明した上で解説を行うなど、精確に理解することができるよう工夫している。また、各単元終了毎に復習問題を作成・配信し、各自自習できるような工夫を行った。
入門講義における興味・関心の喚起	2021年～	「リーガル・リサーチ（法学部生入門）」では、法学学習をスタートさせる学生がスムーズに学習を進行させることができるよう、上級生がつまづいている内容についてインタビューを行った上で、それを重点的にフォローする形で、講義を構築した。 「民事手続法入門」では、学問分野の全体像を示すという講義目的に加え、3年次以降の関連科目にスムーズに取り組むことができるよう、言葉の定義などは、特に入念に講義するようにし、多くの受講生が着実にステップを踏むことが出来るよう留意した。また、モデルケースや、訴状サンプル、フローチャートなどを多用し、受講生の興味・関心を喚起することに努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
『民事手続法入門ー講義ノートー〔第3版〕』（自費出版、2023）	2023年9月～	
『リーガル・リサーチー法学学習メソッドを学ぶー』（自費出版、2023）	2023年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①学生とのコミュニケーションを充実させ、講義へフィードバックさせる。 ②学生が興味・関心を持つような授業の設計変更を行う。 ③演習科目の実践内容をより充実させる。
今年度の進捗状況	①多様な学生との交流機会に恵まれ、学生ニーズの把握と講義への反映が大きく進んだ。 ②反転授業の実践などを通じて、授業運営の方向性を大きく変えた。 ③専門演習では、外部大会へ出場するなど、大きな進展が見られた。
来年度の進捗目標	①オフィスアワーの充実などを通じて、学生の教育活動に活かす。 ②今年度に引き続き、学習内容の見直しに努め、教材の刷新につなげる。 ③大会出場を見据えた形での授業の再構築を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

事業再生プロセスにおける裁判所関与のあり方 ードイツの裁判外再建手続における「モジュール」構想に示唆を受けて『民事手続法と民商法の現代的潮流 ー中島弘雅先生古稀祝が論文集ー』	単著	2024年3月	弘文堂	玉井裕貴	pp.655-681
倒産手続上の機関『プロセス講義倒産法』	共著	2023年12月	信山社	加藤哲夫＝山本研	pp.66-80

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

事業再生プロセスにおける裁判所関与のあり方ードイツの裁判外再建手続における「モジュール」構想に示唆を受けてー	単独	2023年5月	第93回日本民事訴訟法学会大会(沖縄)	玉井裕貴	
事業再生プロセスにおける裁判所関与のあり方ードイツの裁判外再建手続における「モジュール」構想に示唆を受けてー	単独	2023年4月	第194回早稲田大学民事手続判例研究会(東京)	玉井裕貴	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①主たる研究分野に関する論文を公表する。 ②対外的な研究者との学術上の交流を進める。 ③研究領域の拡大・強化を図る。
今年度の進捗状況	①学会報告を実践し、好意的な評価を得た。 ②全国規模の研究会に積極的に参加し、研究活動の人的広がりを大きく広げた。 ③主たる研究テーマについて大きな進捗が見られた。別テーマでの執筆依頼を受ける結果となった。
来年度の進捗目標	①主たる研究テーマについて、引き続き定点観測を行い、次の論文に備える。 ②今年度以上に、研究会に積極的に参加し、研究をすすめる。 ③これまで集積した資料を分析し、成果につながるよう研究を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年2月	ドイツにおける裁判外再建手続等に関する意見交換 助言・指導, 情報提供
2019年4月～	利府町 個人情報保護審査会委員
2019年4月～	利府町 情報公開審査会委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	内藤 裕貴	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
利益相反取引にあたる他社株式の取得と取締役の裁量	単著	2023年10月	速報判例解説 新・判例解説Watch(33)	内藤裕貴	pp.127-130
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
ドイツにおける透明性登録簿による実質的支配者の開示	単著	2024年2月	東北学院大学法学政治学研究所紀要(21)	内藤裕貴	pp.15-46
【ドイツ】大量保有報告義務および透明性登録簿で実質的支配者を開示	単著	2023年9月	金融法務事情(2217)	内藤裕貴	pp.19-23
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2023年度	(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	仙台北税務署 国税モニター
2019年5月～	日本海法学会会員 会員
2016年4月～	日本私法学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	羽田　さゆり	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ活動において学習させる工夫	2020年4月1日～	基礎演習Ⅰ Ⅱ・演習一部において、学生が発表を行う前に事前に時間をかけて説明をし，レジュメの例を示し模擬発表も行うことによって、発表すべき内容や方法について理解を深めさせるように努めている。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	レジュメを毎回作成している。授業の冒頭にその回の概略を記載して示し，前回の復習を必ず行い，レジュメの最後には，授業終了後にその回のまとめを自習できるよう穴埋め式の箇所を設けている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義用レジュメ・動画	2020年4月1日～	担当講義のレジュメを作成し、パワーポイントによるスライドを動画にして毎回作成し上映している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学科説明会・模擬講義	2024年3月19日	東北学院榴ケ岡高等学校大学訪問プログラムにおいて、学科の説明と模擬講義を担当した。
高校への出張講義	2023年10月11日	秋田県立大曲高等学校において、「若者のインターネットトラブルと法」と題して出張講義を行った。
公務員講座の講師	2023年9月20日～2024年1月20日	法学部主催「国家試験・公務員試験受験講座」の「フォローアップ講座・民法1」の講師を務めた（全5回）。

現在の課題・目標	1、分かりやすいレジュメを作成するとともに、パワーポイントを用い講義の効果を高める。 2、オンライン学習に適した内容・実施方法・成績評価方法を工夫する。 3、演習における学生への対応を適切に行う。
今年度の進捗状況	1については、レジュメ配布・パワーポイント動画の工夫を昨年に引き続き行い、昨年度以上に問題なく講義を実施することができた。pdfファイルに入力欄を設けることにより、学生の印刷コストを減らすことができたのが今年度における成果といえる。他方で出席をとった後に退席をしようという学生の姿が見られ、対策をとる必要を感じた。 2については、昨年度の取り組みを基本的にそのまま引き継いだが、全体的に単位取得率・成績共に下がった。特に1年生については、新カリキュラムにおける新科目（民法入門など）における学びをつなぐ工夫がもう一段必要であったと反省している。 3については、近年続いた「手を焼く学生と優等生」という図式が崩れていることを踏まえい、グループワークを取り入れるなど、総じて理解度が低い学生への対応という形で工夫を行った。
来年度の進捗目標	1について。レジュメ・スライドの工夫は一定の評価を得ているようであり今後も継続する。出席を複数回採ることで、出席確認後の体積を減らす工夫も行うこととする。 2について。引き続き、学生の学習環境の変化に合わせて、学力向上につながるような講義方法を工夫する必要がある。オンラインで提供される教材をもっと活用する方向で具体的な方法を検討する。 3について。3年次の演習においてグループワークを取り入れたことはそれなりに効を奏したように思う。学生の様子に注意しながら、学修効果を高める工夫を重ねたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
リフォーム工事請負契約等と説明義務－－水回り「レスキュー商法」の問題を念頭に『先端消費者法問題研究－研究と実務の交錯－』	単著	2024年2月	民事法研究会，3	今津綾子，小笠原奈菜，男澤拓，小野寺友宏，窪幸治，栗原由紀子，鈴木裕美，高橋大輔，中里真，古川佐智絵，向田敏，山崎暁彦	pp.101-123
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	1、消費者問題研究を進める。 2、「震災と子ども」研究を進める。 3、「葬儀・祭祀に関わる契約トラブルの研究をする。
今年度の進捗状況	1については、「リフォーム工事請負契約等と説明義務」の論文の発表にこぎつけたが、なお検討しきれなかった課題は多い。欧州の同種の問題を参考に、さらに検討を深めていきたいと考えている。 2・3については、研究的に行き詰まり、論文執筆が滞っているところである。2については現状が動かないこと、3については現状が動きすぎていることで悩んでいる。いずれについても研究の角度を変えることが必要であろう。
来年度の進捗目標	1、2、3のいずれも研究を継続し、論文の執筆を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年5月～	仙台市社会福祉協議会・契約締結委員会 委員（学識経験者）
2021年1月～	宮城県青少年問題協議会 委員
2019年11月～	日本政治法律学会会員（理事） 会員
1996年10月～	日本私法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教務委員
教職課程センター所員
「授業改善のためのアンケート」実施委員
研究環境改善推進委員会

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	松浦　陽子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業における小テストによる理解度の確認（講義科目）	2023年4月～	これまでに蓄積した小テストを毎週実施し、知識の確認と定着を促した。その解説を授業内に行い、理解度を確認した上で授業を進めた。小テストに基づく評価を導入することにより、それぞれの学生の理解度に応じた教育と評価ができるよう配慮している。
演習二部における卒業レポート指導とゼミの記録集への記録	2023年4月～	演習二部においては、学生個々人の国際法研究を深めるために、卒業レポートの作成を指導し、完成させた。最終的には、ゼミの記録集に、卒業レポートの表紙及びQRコードを記録した。
英語学習の成果としての翻訳の作成（外国書講読）	2022年4月1日～	「外国書講読」において学生の英語学習の成果を翻訳としてまとめた。
学習発表の機会を通した4年間の研究の意識化（演習科目）	2021年4月～	一つの論点や事例研究について，文献講読とプレゼンテーション・ディベート・ディスカッションなどの学習発表を組み合わせることにより，研究を深め，かつ，参加者同士の議論を促している。これらの作業をとおして、基礎演習ⅠおよびⅡでは基本的な専門教育の土台を作り、演習一部では国際法事例研究、演習二部では各自の興味に合わせた国際法研究を進めた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進（講義科目）	2021年4月～	授業の冒頭で前回の学習とのつながりを確認し，新たな項目へと進むことにより，学習事項の学問的位置づけを明らかにする。その上で学習事項を時事問題や卑近な例に例えて説明することで，記憶への定着と理解の促進を図っている。今年度は特に、responの機能を用いて、授業内でアンケートをとり、それについて国際法の視点で解説することで、各回の理解を促進する機会を増やした。
レジュメ配布による学習事項の確認（講義科目）	2021年4月～	半期の授業内容に関するレジュメをmanaba上にアップロードし、学生がいつでも使用可能な状態にした。レジュメは、参考文献を参照できるように注を付し、学ぶ意欲のある学生が自発的に学習しやすいよう配慮している。また，時事問題を積極的に取り入れ，新たな国際問題を国際法の視点で学習できるよう配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
小テストの作成およびその解説の公表	2023年3月～	授業科目において知識とその理解度の確認および知識の定着に寄与するため、小テストを作成した。また、その小テストに関し、manabaをとおして、あるいは授業内に、解説を行った。
講義で使用するレジュメ等	2020年4月～	レジュメには毎回の講義概要を掲載し，重要項目を穴埋めにするなどの工夫をしている。また，毎年情報を更新し、脚注を付けて典拠および参考文献を明示することで、学生が主体的に調べやすいよう配慮している。このレジュメはmanaba course上で配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
仙台高等学校における出張講義	2023年4月27日	国際刑事裁判から学ぶ法学入門

現在の課題・目標	①授業やゼミでは，わかりやすく，かつ，学術的意味のある説明を心がける。また、一次資料を重視し、資料（客観的事実）と評価の区別を学生に学ばせる機会を多く設ける。 ②学生の学問への主体性を引き出すために，授業方法を工夫する。 ③授業時間外での学生との学習に関するコミュニケーションのため，オフィスアワーにかかわらず学生の相談に乗る。manaba courseの効率的な利用をさらに進める。
今年度の進捗状況	①については、一次資料を多く使用した配布資料を作成・更新し、学生に学ばせる機会を持つことができた。 ②については、2023年度オープンキャンパスを利用し、学生に研究内容をポスター発表させる機会を設けた。 ③オフィスアワーにかかわらず、研究室には学生が訪ねてきて、専門書を貸したり、質問に答えたりすることができた。今後もこういう機会を大切にしたい。
来年度の進捗目標	①教科書を始めとして専門書などの書籍を読ませる読書会を開催するなど、学生が学術書に触れる機会を増やしたい。 ②一次資料を重視し、虚心坦懐に学生に判断させる授業を今後も心掛けたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
＜研究ノート＞健康が義務になるとき ― 国際法的視点からの感染症対応及び個人の尊重	単著	2023年9月	日本評論社, 法の科学(54)	松浦　陽子	pp.175-183
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	① 国際法における災害支援を研究する。 ② 国際法上の感染症対応における国際人権法の課題を研究する。
今年度の進捗状況	①については、法学部共同研究プロジェクトにおいて、論文を提出した。2024年度に公表される見通しである。 ②については、2023年『法の科学』第54号で研究ノートとして公表した。また、関連する問題について資料収集及び分析を継続している。
来年度の進捗目標	①について、論文を公表する。 ②については、新たな課題に関する研究ノートが2024年度9月頃に公表される予定である。さらに研究を進め、論文として公表したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年1月	少年司法と国際準則 講師
2023年9月～2023年9月	被収容者処遇の国際準則 講師
2023年9月～2023年9月	法学概論 講師
2023年7月	被収容者処遇の国際準則 講師
2023年5月～2023年6月	法学概論 講師
2018年～	国際法協会日本支部 会員
2012年～	日本国際経済法学会 会員
2000年～	世界法学会 会員
1999年～	民主主義科学者協会 法律部会 会員
1999年～	国際法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

法学部広報委員会（Jura編集委員）
法学部基幹構想委員会委員
法学部改革FD検討委員会委員
法学部共同研究プロジェクトメンバー

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	講師	氏名	井坂　正宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	講師	氏名	塚原　義央	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・なるべく分かりやすい授業を心掛ける。 ・授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。	
今年度の進捗状況	・上記目標については、授業評価アンケートでわかりやすいとの回答が一定程度見られることから、ある程度の進捗がみられた。 ・オフィスアワーを設定した。	
来年度の進捗目標	・今年度授業で得た成果をもとに、授業内で用語を整理するなどより細かく説明を施す。 オフィスアワー以外でも、学生と接する機会を設ける。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
D.41,1,63,3一用益権を設定された奴隷が見つけた埋蔵物の帰属について	単独	2024年3月	日本ローマ法研究会　第7回大会(京都大学)	塚原義央	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・博士論文の書籍化を完成させる。 ・ローマ法における埋蔵物の研究をまとめる。				
今年度の進捗状況	・博士論文の書籍化については、出版社とも細かく連携を取り、進捗があったといえる。 ・埋蔵物の研究についても、日本ローマ法研究会第7回大会で報告するなどして進捗があったといえる。				
来年度の進捗目標	・博士論文の書籍化については、年内に完了する。 ・埋蔵物の研究については、論文をまとめる。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	日本ローマ法研究会 会員
2011年4月～	法制史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
東北学院大学博物館運営委員	

2023年度

所属	法学部　法律学科	職名	講師	氏名	松原　俊介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習内容の定着	2021年4月～	毎回の講義で復習問題を掲載し、次の講義の初めに解説を行った。また、manabaを用いて複数回小テストを実施して、記憶の定着を図った。
講義に関するアンケートの実施	2021年4月～	定期的にmanabaを用いてアンケートを実施して講義に対する要望を聞き、講義に反映させることを心掛けた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義レジュメの作成	2021年4月～	毎回の講義で教科書を補うレジュメを配布した。レジュメには空欄をもうけることでオンデマンド授業への参加を促した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
判例解説：①大阪地判令和4・6・20判時2537号40 頁・②東京地判令和4・11・30判時2547号45頁――同性間の婚姻を認めていない民法及び戸籍法の諸規定の憲法適合性	単著	2024年2月	勁草書房，家事法の理論・実務・判例7	松原俊介	pp.88-97
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
短答式試験［憲法］解説	単著	2023年12月	日本評論社，司法試験の問題と解説2023	松原俊介	pp.22-29
G．学会における研究発表					
同性婚訴訟の憲法的考察	単独	2024年2月	「国家と法」研究会（第24回）（琉球大学千原キャンパス）	松原俊介	
同性婚訴訟の憲法的考察	単独	2024年1月	第79回公法系勉強会(中央大学駿河台キャンパス)	松原俊介	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

工　学　部

機械知能工学科

電気電子工学科

環境建設工学科

情報基盤工学科

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	魚橋　慶子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
機器運用資料の提示によるシステム制御工学教育	2019年9月20日～	工学部機械知能工学科3年生対象「システム制御工学」の授業において，システム制御理論を実際に利用し機器を動かす様子を説明した資料を，何度か履修者へ提示した。計算や公式の応用を理解できるよう，工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
教育実習生への訪問指導	2023年5月31日	
理数基礎教育センター相談員	2023年4月～	

現在の課題・目標	●本学で初めて担当する「確率統計学」の教材研究と授業展開を行う。 ●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行う。 ●「微分積分学Ⅰ・Ⅱ」の予習・復習を多くの履修者へ促し、、学力向上を図る。
今年度の進捗状況	●前任校で通年開講していた確率統計学の授業を、本学の担当学科では半期のみ開講・担当した。ほぼ同一の内容を半分の時間に圧縮して授業を行ったため、履修者の理解が不十分な点があった。 ●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行った。 ●「微分積分学Ⅰ・Ⅱ」の予習・復習を多くの履修者へ促し、学力向上を図った。
来年度の進捗目標	●授業内容を精選したり、予習・復習の指導を工夫したりしながら、「確率統計学」の教材研究と授業展開を行う。 ●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行う。 ●「微分積分学Ⅰ・Ⅱ」の予習・復習を多くの履修者へ促し、学力向上を図る。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	●年度あたり1回は，研究集会で口頭発表を行う。 ●年度あたり1回は，査読付き論文誌へ研究論文を投稿する。 ●今年度得た成果を来年度の研究へ反映させる。
今年度の進捗状況	●「学内における管理運営に関する諸活動」で忙しく、研究集会で口頭発表を行えなかった。しかし前年度に複数回実績があるため、年度あたり平均1回は口頭発表を行っている。 ●「学内における管理運営に関する諸活動」で忙しく、査読付き論文誌へ投稿できなかった。しかし前年度に複数回実績があるため、年度あたり平均1回は査読付き論文誌へ掲載されている。 ●昨年度得た成果や、今年度参加した学会・研究集会から得られた結果を元に、新たな研究を構想した。

来年度の進捗目標	●年度あたり1回は，研究集会で口頭発表を行う。 ●年度あたり1回は，査読付き論文誌へ研究論文を投稿する。 ●今年度得た成果を来年度の研究へ反映させる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本音響学会東北支部評議員 会員
2021年10月～	日本音響学会 会員
2021年1月～	計測自動制御学会代議員 会員
2016年9月～	日本女性医学学会 会員
2012年3月～	日本数学会幾何学分科会拡大幹事 会員
2007年4月～	システム制御情報学会 会員
1998年6月～	日本数学会 会員
1997年4月～	日本応用数理学会 会員
1996年12月～	計測自動制御学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1. 理数基礎教育センター　相談員
2. 工学部機械知能工学科長

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	小野　憲文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「メカノデザイン工作演習I・II」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年～	本講義のうち、機械製図の内容をWeb上に掲載した。この電子教材には、3D動画も含まれており、学生は視覚的に対象物を確認することができる。
「熱流体解析工学」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年～	本講義の内容はすべてWeb上に掲載されている。この電子教材には，流れに関する静止画および動画が含まれており，学生は視覚的に流れの計算方法や計算結果を確認することができる。これは，式の誘導・展開を中心とする数値流体工学の講義とは一線を画するものである。また，流れの計算を行うプログラムも本ページに掲載されており，学生は授業中にそれをダウンロードし，動かすことができる。2020年度からはグーグルアプリに対応し、より効果的な学生の自学が期待できる。
「基礎流体工学」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年～	本講義に関するWeb（電子）教材を用いた学習環境は、数値計算・動画生成ソフトが含まれており、これにより学生のより一層の学習効果の向上が見込まれる。また、2020年度から、グーグルアプリを利用した学習環境も構築し、学生の自学補助に役立つことが期待できる。
「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年～	担当している「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」は全て自作のWeb（電子）教材を使用して授業を進めている。主な内容はコンピュータリテラシーとC言語の入門に関するものである。2020年度から全項目学外からもから閲覧可能となった。また、グーグルアプリへの対応を強化した。さらに、今年度は「プログラミング基礎」の学外学習の大幅な強化をはかった。
卒業研究による総合的成果を担当学科目に反映させる教育研究の実施	2020年～	学科科目「卒業研究I,II」において「流体工学分野における学習環境の開発」に関する指導を行ってきた。これは，学部4年生が開発することによって自分が学びたい部分・未修得な部分をその開発教材に反映できるという特色を持っている。卒研生が主体となって作成した教材を担当科目の授業中に使用し，受講学生への学習効果や学生の声をフィードバックすることによって更なる教育環境・教材の改良をはかる教育研究を実施している。今年度は特に数値熱流体工学の学習環境整備をさらに充実させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.学生が自主的に予習・復習できる環境に関しWebを中心に構築・進展させ、アクティブラーニングも視野に入れる。 2.演習科目に関して学生の理解度・解答作成速度などに対応できる課題の作成・出題を行う。 3.すべての授業において学生とのコミュニケーション増大の方策を練り実践する。
今年度の進捗状況	1.1年生の科目「プログラミング基礎」「メカノデザイン工作演習II」について、自作教材を随時改良した。 特に五橋キャンパス移転による学習環境の変更に対して大幅な変更を行った。 2.「基礎流体工学」、「熱流体解析工学」においてWebでの学習環境に改良を施した。 また、五橋キャンパス移転による学習環境の変更に対して適宜変更を行った。 3.「機械知能工学実験II」については新たな実験室に設置した新規作製実験装置である「ポンプの性能試験装置」に関して整備を行い、想定された結果が得られるようになった。
来年度の進捗目標	1.学生からのフィードバック（理解しずらい点）を鑑み授業内容、教材の修正に常に努める。 2.授業形態によっては、学生とのやり取りが不十分であるため、事前事後の来室(電子メールでの問い合わせを含む)、manabaの個別指導機能等に対応し、さらに発展させる。 3.学生が授業外に学習できる環境をさらに整備する（Web教材、双方向的）。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	1.産学官連携につながる熱流体機械関連制御技術・環境をさらに整備する。 2.新たな流れの数値解析手法とその結果表示方法、流れの可視化方法についての環境構築を行う。 3.室内の空調および電子機器の冷却に関わる研究について新たな手法および知見を得る。 4.大気圧プラズマの基礎的研究環境を整え、進展させる。
今年度の進捗状況	1.企業との研究については双方向に更に検討している段階である。 2.新たな熱流体計算・実験環境の構築を整えてきている。 3. 実質的に利用価値のあるハード・ソフト開発を行うことができた。 4.最新の結果については、講演会・報告書で発表済または発表予定である。
来年度の進捗目標	1.産官との連携を継続するとともに新たな領域への拡大をさらに模索する。 2.未公表の技術・開発物を精査し、改良を加えて公開可能とする。 3.新規収集データ・手法について、順次発表するための時期・場所・方法を検討し、実践する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1.大学院工学研究科機械工学専攻主任
2.大学院工学研究科研究推進委員長

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	梶川　伸哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業研究ゼミの開催	2020年4月1日～	卒業研究の各学生担当テーマとその進行状況の相互理解、および問題解決策を議論する目的で週一回実施している。(オンラインと対面の併用)
映像を用いた授業内容の解説	2020年4月1日～	4年次の「ヒューマンマシンインターフェイス」の授業において、映像資料を用いた解説を行い、理解と興味の向上に努めている。また、身近な機器を取り上げ、そのインターフェイスの良し悪しについての調査とプレゼン，ディスカッションの場を設けている。
Webを利用したレポート課題	2020年4月1日～	3年，4年次に開講される「制御工学」「システム工学」において，Webを利用した課題提示と回収を行ない，学習状況の把握と学習習慣の定着に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
学生実験資料の作成	2020年4月1日～	機械知能工学実験Ⅰ、Ⅱのテーマである「表面筋電位の計測」、「ロボットの制御」で使用する解説資料を作成し，使用している。(Web上で公開)
授業補助資料の作成	2020年4月1日～	「制御工学」「システム工学」「ヒューマンインターフェイス」の授業で使用する補助資料を作成し，使用している。(今年度はWebを介した配布)
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
ロボットハンド動作が人に与える印象	共同	2023年9月	日本人間工学会第64回大会(千葉市（千葉大学))	◎小池志織，竹田佑瞳	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究（c）	2022年度～	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年9月～		東北防衛局入札監視委員会 委員、委員長（2022～）	
2013年～		みやぎ高度電子機械人材育成センター 運営委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	加藤　陽子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
論述式演習問題（レポート課題）の実施	2021年4月1日～	講義に関連する課題について論述する事により、講義内容を多角的に理解する事を目的とする。
関連研究の紹介	2021年4月1日～	
演習問題の提示による理解度の促進	2021年4月1日～	講義内容のポイントを確認する演習問題に取り組む事により、受講者の理解度を促進する
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学力差に対応した講義構成として、理解に高い学力を要する箇所と然程の学力を要しない箇所の双方を含むと同時に、学力の高低に依らず、講義内容の全容が把握できるようにする事。
今年度の進捗状況	各講義の合格率が90%を超えていた事から、講義内容が十分理解されたものと考える。
来年度の進捗目標	紹介する学術論文を増やす事により、受講者の自主学修を促す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Active Contraction in the Stable Mechanical Environment of the Tunic of the Ascidian, Halocynthia roretzi, a Polysaccharide-Based Tissue with Blood Circulatory System	単著	2023年11月	Polymers, 15(21)	Yoko Kato	pp.
Histological Properties of the Chorionic and Basal Plates and Maintenance of the Mechanical Environment in the Human Placenta	単著	2023年11月	Childbirth - Clinical Assessment, Methods, and Management	Yoko Kato	pp.123-135
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	胎盤関連、マボヤ血球細胞の運動、共に進めると同時に、それらの結果を論文、もしくは、書籍として発表する事を目標とする。
今年度の進捗状況	各テーマに関連する結果を、学術書籍の章と学術論文として出版した。
来年度の進捗目標	学術書籍の章、学術論文の執筆を行うと同時に、新しい研究テーマを開始する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年8月～2023年8月	一般社団法人　日本キチン・キトサン学会 評議員
2010年3月～	一般社団法人　日本キチン・キトサン学会 会員
2010年2月～	CSJ 会員
2009年12月～	ASME 会員
2009年12月～	ACS 会員
2008年7月～	ASCB 会員
2007年5月～	ISJ 会員
2002年1月～	SPIE 会員
2001年5月～	IEEE 会員
2001年3月～	JSMBE 会員
1997年7月～	JSME 会員
1996年6月～	JCA 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	城戸　章宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習プリントの作成による復習効果の向上への取り組み	2006年4月～	
学生フォーミュラ大会，モーターショウへの参加を通じたモノづくり教育の実践	2003年4月～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
自動車関連の最新動向の調査資料	2017年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	測定誤差の考え方に難がある学生が多数みられるので，エクセルを使った統計計算の有効活用を周知する．
今年度の進捗状況	学生実験の第一回目授業で誤差についての課題に取り組ませた．
来年度の進捗目標	測定誤差についてもう少し踏み込んだ内容の演習を実施したい．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
車体運動時の車載型近赤外偏光分光センサによる路面μ定量化手法の構築と冬季路面への応用	共著	2023年7月	日本雪工学会論文集，39(3)	城戸章宏，岩間大舗，金子友海，北川浩史，長沼要，竹澤聡	pp.1-9
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	学生フォーミュラマシンの製作では，マンパワーの不足が課題であるが，マシンを完成させて今年度大会に出場を果たすのが目標である． アンモニアエンジンの研究では，ディーゼルエンジンの入手が課題である．
今年度の進捗状況	学生フォーミュラマシンの製作では，各種書類を期限内に提出し，大会参加の目途がつきつつある． トヨタ自動車（株）様からディーゼルエンジン搭載の車両を寄贈頂けることになった． 実験用エンジンとして，多賀城キャンパスのディーゼル発電機の取得を希望している．
来年度の進捗目標	学生フォーミュラマシンの製作では，来年度に向けて戦闘力の高いマシンの製作を目標とする． ディーゼル発電機およびディーゼル車両を入手し，アンモニアエンジン研究を加速させる．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年4月～	一般社団法人日本雪工学会 会員

1991年4月～	公益社団法人自動車技術会 会員
1984年4月～	一般社団法人日本機械学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	TGUフォーミュラークラブ部員の勧誘活動を強化して，部員を拡充させ，フォーミュラマシンの製作を加速させる．		
今年度の進捗状況	8月末の大会参加のため，マシンの製作に励んでいる．		
来年度の進捗目標	スケジュール管理を徹底させて余裕のあるマシン製作を実施する．		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
産学連携推進センター副センター長としての職務を全うする．

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	熊谷　正朗	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンラインホワイトボードを併用した遠隔授業と事後学修用記録の保存提供	2020年5月1日～	講義の遠隔化にともない、以下のスタイルを採用した。 講義の資料はオンラインホワイトボードであるmiro.comのサービス上に構築し（科目よって、従来のスライド資料ベースの配布PDFの貼り付け、従来板書型＋講義ノート公開型科目では、ある程度の骨格部分を用意）、講義中（オンタイム）では、この画面をZoomで中継しつつ、そこに書き込みながら解説をするスタイルとした。これは「消えない黒板」であり、講義前から学生が内容を直接見ることができるURLを提示（Zoom画面から消えても、直接開けば任意の場所が講義中にも確認できる）、講義後も年度末まで保存した。また、自分の手元に再構成できるデータの提供もした。アンケートによれば、講義の録画の提供も含め、事後学習にかなり活用されていた。加えて、前回までの内容をコピーして今回の内容のスタートとすることで、複数回にわたる内容でも扱いやすいなど、講義する側にも利点は多い。 講義は対面に戻ったが、このスタイルはそのまま踏襲しており、講義中、講義前後に受講者が活用している。
専門科目の必修化に伴う講義内容の抜本的見直し	2015年4月～	カリキュラム改訂に伴い、以前は「ほぼ全員履修」の選択と「2/3程度の学生が履修」の選択だったメカトロニクス2科目が必修となったことから、2015年に抜本的な見直しを行った。コンセプトは「専門科目としてのメカトロニクスから機械の教養としてのメカトロニクスへの移行」であり、全員が学び、かつ全員が必要水準に達することの実現を目指した。そのためには枝葉の理論よりは総合的な知識とセンス獲得を優先した。また講義スタイルも従来の板書主体から変更し、毎回決まったフォーマットでのスライド16枚(A3用紙1枚にカラー縮刷して配付)＋重要点などを板書で補足するようにした。配付付きスライド化により、写真を含むビジュアルな資料が提供できるようになったこと、意欲ある学生は板書に気を取られることなく講義内容をメモしていけるなど、狙い通りの効果を得た。上記同様、資料はWEBでも配付している。 なお、資料配付をするノートを取らなくなる可能性が高いが、本科目ではノートのチェックを成績評価に加えており、ほぼ全員が何らかの形（配付資料へのメモ含む）でノートを取っている。 後述の企業技術者向けのメカトロニクスセミナーとの相互運用で内容の修正は続けている。 他の科目への展開については、一部本科目の評価方式を適用しつつ、現状で検討中である（おもに時間確保が課題）。
講義ノートのオンライン化とWEBでの一般公開	2003年9月～	以前の授業評価アンケートにて［字が読めない］［図が書き写せない］との指摘があり，その対応策として講義ノートをWEB上で作成し，公開することとした。復習などの他，病欠などの際の補填にも活用できる。現在，学外からも膨大なアクセスがあり，他大学の教員からも活用されている形跡がある。電子情報化したことで修正も容易となった。 ※2003年9月～継続
テスト・レポート電子処理システムの開発および運用	2003年9月～	膨大な量の小テスト，レポート，単位の実質化に伴う復習シートの，試験の答案での集計業務の省力化，ミスの低減，データ保存を目的として，処理システムを開発した。独自のマークシートを開発し，それをスキャン，解析することで集計を行う。これにより，プレゼン系科目の学生同士の相互評価にも対応できた。 ※2003年9月～継続（2020以降は提出オンライン化で利用停止中）
2．作成した教科書、教材、参考書		
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー	2011年1月18日～	メカトロニクスセミナーの実施のために作成した資料，教材は講演終了後に研究室WEBページで提供しており，一般からも利用できる。 現時点で27+1回分，延べ1500ページを超える資料となっている。 ※2011年1月18日～継続

オンライン講義ノート	2003年9月～	担当する4講義（および旧担当あわせて11科目）の講義ノートをWEB上で作成し，公開している。これにより受講学生の自習，病欠に於ける欠損などを穴埋めすることが可能となったほか，外部からの参照も多く，社会貢献ともなっている。本報告執筆時点で総計700万回の参照があり，“マニピュレータ”“座標変換”などの主要キーワードをネット検索した際にトップクラスの上位に表示される（一般にネットにおける評価が高いことを示す）。そのほかに公開している技術情報と含め，1日平均500人程度の利用者がある。 ※2003年9月～継続
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
中学生の特別授業受け入れ（工学に関わる啓蒙活動（コラボ授業）多賀城市立東豊中学校）	2023年8月28日	
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー（仙台市地域連携フェロー活動）	2011年1月18日～	社会活動である仙台市地域連携フェローの活動の一環として，地域のエンジニアのためのメカトロニクスの総合セミナーを企画し，仙台市産業振興事業団を会場に実施している。開発業界においては，自分の専門性を高めることも重要ながら，幅広く技術的知識をもつことが大事であり，周囲の分野との連携のためにも「隣も知る」ことが大事である。その観点から，「技術的雑学」を提供することを目的に様々な講演を行ってきた。本学卒業生も聴講に来ることがある。同内容を地域の企業にも出張講座している(のべ30回以上)。また、ここで確立した講義スタイルを学科科目の講義にも応用している。 ※2011年1月18日～
ロボット教育特別コースの設置（ロボット研究会）	2005年1月～	機械知能工学科ではロボットに関する講義はいくつかあるが，ロボット関連技術は座学では到底学べず，実践が必要である。一方で，卒業研究の時点で学ぼうとしても時間は足りない。そこで，積極的意欲をもった，配属前の1～3年生以下の学生を募集し，研究室への出入り，工具等の使用を許可し，消耗品も一部提供することで，自らロボットを学ぶ機会を提供することとした。これまでに，ロボットコンテストに参加して上位入賞したほか，希望者が研究室に正式に配属となり，技術習得の段階をすぐに越えて本題に入るなど，大きな効果が得られている。このコースを分析し，教育論文にもまとめた。 ※2005年1月～継続（コロナ禍で活動低下中、2023年度に復活作業を開始して数名が実験室に来ている）
出前授業の実施	2003年～	高校・高専からの依頼に応じて，出前授業を行った。テーマは［ロボットをつくる］であり，ロボットの基礎の講義とともに，高校における科目が如何に意義のあるものかを説いた。
知能ロボットコンテストの運営	2000年～	毎年仙台市で6月に開催されている知能ロボットコンテストの運営に深く関与している(2011年は震災の影響で10月開催)。過去に実行委員長も4回務めた(直近は2018年)。本コンテストは中学～大学生の参加が多く，ロボット技術教育の効果もある大会であり，現に，本大会の参加者の中から優れたエンジニアも育っている。上記ロボット研究会も主たる目標は本大会への参加である。 ※2000年1月以前より継続 ※2020,21年度は開催を模索したがコロナ禍で断念

現在の課題・目標	●この20年間の教員としての取り組みを通して、一通りの技術教育のフォーマットを得るに至ったが、現状では「ある程度意欲を持つ者」「かなり意欲を持つ者」には効果が認められるものの、「意欲のない者」「関心のない者」に対しての効果が薄い。担当分野は、現在では機械技術の必須分野であるため、興味ある者を伸ばすことだけにとどまらず、後者に対しても必要知識を身につけさせる必要があり、この改善が必要である。一つには興味をより持ってもらうことであるが、ある程度は強制的に学ばせるための手法の検討も必要と思われる。 ●単位の実質化に伴う、予習復習のエビデンスのある実施形態準備。 ●遠隔授業で導入したオンライン方式の良い点の対面授業への活用（常時ハイブリッド対応・講義映像の提供など） ●講義ノートページのインタラクティブ化、具体的には簡単な練習問題の提示や計算練習を可能とするような改修。 ●技術的専門知識の普及啓蒙および獲得支援。 ●引越の影響が未だに残る。2023年は自身のことよりも全学の学務部副部長として移転・新課程などに関わる業務に時間を優先したこともあって、まだ引越作業が完了していない。

今年度の進捗状況	●コロナ禍の対応で多くの時間を要したことで本来の目標についての進捗はほぼ無かったが、2年前に遠隔化対応のため新たに導入したオンライン併用型の講義スタイルの完成度をあげ、概ね安定した。全員対面の授業でも遠隔システムを使うことで画面の拡大提供、録画提供などが可能となった。毎回の講義で実施するための安定性向上と新キャンパスへの対応を行った。 ●カリキュラム変更に際して、メカトロニクス講義の大幅変更を行い、8年目として継続して様子を見ているが、内容面では安定したと考えられる。他の科目もオンライン化時にコンテンツに修正を加えているが、それも安定を見た。 ●単位の実質化に伴う復習の方式として「講義の中で重要であったと考える図とその説明を3点まとめる」を実施し，理解の促進と苦手な者への学修機会の二つの面で一定の成果を得ている。受講者からは、授業評価アンケートなどでも好評価を受けている。この復習とあわせて予習も行うように誘導しており、本年度は3科目で実施した。ただ、復習に比べて予習の程度が弱く感じられた。 ●サーバの更新作業は始めているが、大きめのソフトウエア開発を行う必要があり，その時間を確保できていない。また、先にレポート類のオンライン提出・採点・閲覧システムの構築が必要と考えている。 ●啓蒙活動については，ここ数年間，仙台市地域連携フェロー・仙台市地域企業課題解決マイスターとしての活動を通して，かなりの成果をあげているほか，主に自治体、産業界に種々の貢献を果たしている。企業への出前も継続して実施している。 ●2023年度より全学教養教育科目である「課題探究演習」の担当を始めた(2023年度はコーディネータも務めた)。本科目では文系学部の学生を含めて、3次元設計と3次元プリンタによる実習を提供し、目立った成果が得られた。
来年度の進捗目標	●2024年度特例事項：引越の影響からの立て直し（2023年度に完了しなかった） ●2024年度特記事項：学科長(予定)兼学務部副部長(予定)兼3年グループ主任（および宛職管理科目）という過負荷状態でも教育の質を維持する ●2024年度特記事項：教学系システムの2025年度更新に向けて、課題の検証と移行方法について調査検討を行う。 ●全体の見通し背景：科目内容についてはほぼ安定したが、担当科目の変更による講義内容の調整を引き続き行う。 ●2020年度に導入したオンラインホワイトボード型の講義を対面授業で実施、ハイブリッド化するための効率化を進める。特に教室ハイブリッドする場合の展開・撤収の迅速化を図る。 ●実質化の手法については今年度の方式を継続するほか、予習の実効性向上を検討する。従来は紙での回収であり、昨年度はPDF提出としたがその手段の効率化を図る。 ●上記について、学生諸君の自習を促す教育面のIT支援が必須となるため，その実装を進める。 ●技術的専門知識の啓蒙活動についてはこれまでの水準を維持する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
身の回りに見つけるメカトロ雑学 第121回～第132回『プラントエンジニア（雑誌）』	単著	2023年	公益社団法人日本プラントメンテナンス協会	熊谷正朗	pp.各号による-各号による
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
遊星歯車型差動駆動操舵機構を用いた全方向移動車の開発	共同	2023年12月	計測自動制御学会東北支部 第346回研究集会(山形大学 米沢キャンパス)	中田竜輔，熊谷 正朗	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	●2022年度に採択された科研費の、玉乗りロボットの動特性の測定に関する機器開発と実測を本格化させる。これを通してメカトロニクス関連の技術の発展に貢献すること。現時点では教育および大学運営業務に重点を置いており(置かざるを得ない)、研究とのバランスをどのようにするかは課題である。 ●開発した技術成果の学内外への還元の方法。

今年度の進捗状況	●本年度も学内用務に多くの時間を割かざるを得なかったため，研究に回せる時間が大幅に減り、進捗は芳しくない。とくに、キャンパス移転、引越による影響が多大であった。 ●学生原案による卒業研究では種はできているが、それを学術レベルまで育てるには至っていない。 ●現状では学会等での学術発表にとどまっており、広く一般業界向けへの提示が不十分である。技術の総論的な面は地域連携フェロー活動、および学外から依頼の技術講演を通して地域への還元を行っている。 ●研究発表にはつながりにくいが、パイプオルガン模型の開発を行っている。 ●研究の根幹に関わる(現時点で公表すべきではない)ものではない、製作した要素技術などについては、SNSを通じて比較的高頻度に紹介し、関心を得ている。
来年度の進捗目標	●球面誘導モータの開発は科研費の支援期間終了後も効率改善に挑む。 ●科研費研究への取り組み。 ●パイプオルガンの開発は引き続き継続する。 ●教育コンテンツを有するサーバのリプレイスとコンテンツ管理の改善を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	仙台市地域企業課題解決マイスター（マイスター）
2023年4月	仙台市地域企業課題解決マイスター……仙台市の委嘱を受け，産学連携の補助事業に参加，地域連携フェローから通算で30社以上の中小企業への御用聞き訪問，「基礎からのメカトロニクスセミナー」の開催(27回＋特別編1回＋企業への出前授業型実施多数)など （2023/4 制度変更）助言・指導
2023年	宮城県および仙台市のICT，メカトロニクス関連分野の民間企業向け補助金の審査委員（非公開） 補助金申請の評価・審査を行った。
2023年	知能ロボットコンテスト運営委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

●学務部 副部長（多賀城、工学部，2022年度）
●学務部 副部長（全学，2023年度）
●課題探究演習（2023年度新規TGベーシック科目）のコーディネータ、立ち上げ作業

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	斎藤　修	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
大学院博士（前期）課程学生の講義用資料の作成	2023年4月1日～2024年3月31日	
授業内容理解のための添削指導	2023年4月1日～2024年3月31日	
オープンキャンパスおよび工学部祭の研究室公開	2023年4月1日～2024年3月31日	
卒業研究ゼミの開催	2023年4月1日～2024年3月31日	
学生による相互評価の実施	2023年4月1日～2024年3月31日	
学生による授業評価の実施	2023年4月1日～2024年3月31日	
授業内容充実のためのプリント作成	2023年4月1日～2024年3月31日	
チュータおよびオフィスアワーによる学生への指導	2023年4月1日～2024年3月31日	
実験において専門知識の内容理解のためのプリント作成、添削指導およびプレゼンテーション方法の指導	2023年4月1日～2024年3月31日	
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年4月		社団法人　精密工学会東北支部商議員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	星　朗	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
毎回の講義の内容に関して，復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより，自学自習する習慣を付けるようにしている。	2021年～	「基礎熱力学」，「応用熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」において，毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を，自学自修してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説するとともに，宿題を回収・評価している。
講義の最後に，その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz（小テスト）を実施している。	2021年～	「基礎熱力学」，「応用熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において，講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては，「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
その日の講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を，A4 用紙1枚の両面に印刷したプリントを毎講義において用意している。また，講義資料をmanaba上に公開している。	2022年4月～	「基礎熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」において，講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題をA4 用紙1枚に纏めて，毎時間に配布するようにしている。「応用熱力学」，「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」については，講義資料および講義で扱う例題をmanaba上に公開しており，自ら予習・復習できるようにしてある。
その日の講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を，講義資料としてmanaba上に公開している。	2020年4月～	「基礎熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」，「応用熱力学」，「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」において，講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開しており，自ら予習・復習できるようにしてある。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
日本機械学会2023年度年次大会において，「太陽熱動力化のためのフレネルレンズによる集光・集熱装置の検討」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2023年9月4日	
日本機械学会2023年度年次大会において，「潜熱蓄熱材を利用する熱電発電システムの提案」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2023年9月4日	
日本機械学会2023年度年次大会において，「低温度熱源利用スターリングエンジンの性能試験」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2023年9月4日	
4．その他教育活動上特記すべき事項		
日本機械学会　技術と社会部門主催「第16回　新☆エネルギーコンテスト」において学生のアイディアを投稿し、株式会社アルトナー賞を受賞した。	2023年10月21日	

現在の課題・目標	①卓上ミニ実験，測定器などの実物に触れることを通して，体感的に講義内容に興味を持ってもらい，理解度を深めてもらうようにする。 ②毎回の講義で実施するQuiz，自学自習のためのHome Work等を充実させる。
今年度の進捗状況	上記目標①については，メインの実施科目である「基礎熱力学」が対面授業となったが、新キャンパスの講義室の構造上から実施には至らず残念な結果であった。大学院講義「応用熱工学特論」では、少人数で対面授業が可能であったため、実物を用いたミニ実験を行うことができた。 上記目標②については，通常の対面授業が実施されたことから、例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を講義資料として配布することで、理解力の向上に繋がったものと思う。さらに，manaba上に講義資料や講義中の例題・解答などを公開したことにより，予習・復習の自学自修ができるようになったものと考える。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては，良い成果に繋がることが期待されるので，AV機器を効果的に活用して大講義室でも実施可能な新しい教材を準備するなどして，内容をさらに充実させていきたい。 上記目標②に関しては，予習・復習も含めた形で自学自習できるHome Workの充実を，さらに図っていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
垂直軸風車における風レンズの効果	共同	2023年12月	日本機械学会技術と社会部門講演会(神奈川)	◎星　朗, 林　匡太	
潜熱蓄熱材を利用する熱電発電システムの提案	共同	2023年9月	日本機械学会2023年度年次大会(東京)	◎野村 亮太, 星朗	
太陽熱動力化のためのフレネルレンズによる集光・集熱装置の検討	共同	2023年9月	日本機械学会2023年度年次大会(東京)	◎木村 悠人, 星　朗	
低温度熱源利用スターリングエンジンの性能試験	共同	2023年9月	日本機械学会2023年度年次大会(東京)	◎本田 渉悟, 星朗	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	①外部研究者との共同研究, 外部資金の調達などを目指す。 ②1編/年の学術論文の発表, 1回/年の国際会議発表を目標とする。 ③地域に根ざした研究テーマを模索する。				
今年度の進捗状況	上記目標①については, 外部研究者との共同研究に着手し, 外部資金の調達に至った。 上記目標②については, 1編の学術論文が採択された。国際会議発表は学内業務ならびに講義が多忙のため, 残念ながらできなかった。 上記目標③については, 鳴子の温泉旅館との共同研究も中断している。				
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては, 企業との共同研究を継続予定である。 上記目標②に関しては, 学術論文、ならびに国際会議での発表を計画している。 上記目標③に関しては, 新規テーマを開拓していきたい。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2023年4月～	日本伝熱学会 東北支部長
2017年4月～	日本技術史教育学会 会員
2017年4月～	日本冷凍空調学会 会員
2016年12月～	日本機械学会 フェロー
2016年6月～	宮城県工業高等学校学校評議員(宮城県工業高等学校学校評議員)
2008年6月～	自動車技術会 フェロー
1990年4月～	日本太陽エネルギー学会 会員
1990年4月～	自動車技術会 会員
1990年4月～	日本伝熱学会 会員
1990年4月～	日本機械学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	松浦　寛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMS（Moodle）を活用したeラーニングシステムの構築（機械設計学，機構学，機械知能工学実験1）をおこなった．	2020年4月～	資料の円滑な配布が可能となった．学内からのアクセスのみ対応できる出席管理を可能とした．予習復習課題の提出を時間単位で把握でき，提出内容をソフトでコピー＆ペーストチェックソフトを使うことでコピペ率を出すようにしたことで成績上位者と下位者で明らかな相関が得られた．これらを教育系学会で発表した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Mutagenicity assessment of high-power 1.6-THz pulse laser radiation	共著	2023年7月	Photochemistry and Photobiology, 1(3)	Midori Shirato, Yuma Takida, Taro Kanno, Hiroshi Matsuura, Yoshimi Niwano, Hiroaki Minamide, Keisuke Nakamura	pp.146-157
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
野生動物による農作物被害防止のためのWi-Fiセンシングにおける深層学習を用いた物体位置推定	共著	2024年1月	電子情報通信学会 情報理論研究会	森島 佑，鈴木 利則，小倉 振一郎，松浦 寛	pp.IT2023-66-IT2023-66
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
熱可塑性樹脂砥石の現状と将来展望	単著	2023年5月	精密工学会誌，89(5)	松浦　寛	pp.363-366
G．学会における研究発表					
野生動物による農作物被害防止のためのWi-Fiセンシングにおける深層学習を用いた物体位置推定	共同	2024年1月	電子情報通信学会技術研究報告 IT2023-66(宮城県仙台市)	◎森島佑，鈴木利則，小倉振一郎，松浦　寛	
廃炉作業を目的とした「ワイヤー駆動式ロボットアーム」の研削加工	共同	2023年8月	砥粒加工学会(よなごコンベンションセンター BIGSHIP)	千賀颯斗，松浦寛	
砥粒付着方法を変更した不織布砥石の研削性能評価	共同	2023年8月	砥粒加工学会(よなごコンベンションセンター BIGSHIP)	南條健人，井上慶星，佐々木拓巳，内海俊祐，松 浦寛，相澤崇史	
加工機に取り付け可能な熱可塑性樹脂砥石の開発	共同	2023年8月	砥粒加工学会(よなごコンベンションセンター BIGSHIP)	菅原颯斗，櫻田陸人，松浦寛	

グループワークの構成条件と環境の変化による学習成果の影響	共同	2023年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(つくば国際会議場)	千賀颯斗・櫻田 陸人・櫻井 風花・松浦 寛	
学力差に対応した機械設計学のアクティブ・ラーニング研究	共同	2023年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(つくば国際会議場)	南條健人・井上慶星・佐々木洸斗・松浦寛	
講義形態変化の影響と機械設計製図課題による学習成果比較	共同	2023年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(つくば国際会議場)	菅原颯斗・鈴木大貴・松浦寛	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2014年～	精密工学会東北支部 商議員
2014年～	精密工学会 精密工学会東北支部 商議員 会員
2011年～	一般社団法人光産業技術振興協会 戦略技術策定委員会委員 委員
2008年～	一般社団法人光産業技術振興協会 JIS規格 光受動部品標準化部会 委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2023	東北大学川内キャンパス	2023年7月	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	矢口　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義における教育研究等の質の向上や改善のために，以下の2項目について，前年度における授業評価の評点を上回るように努力する． ① 担当授業科目（2年生～3年生） ② 卒業研究指導（4年生）
今年度の進捗状況	今年度の前期については，すべての授業科目において，講義アンケートの評価が，前年度を上回った．しかし，後期については評価アンケートの母数が非常に少なく，評価を下げた科目もあった．
来年度の進捗目標	後期で評価を下げた科目について，綿密に講義内容をチエックして次年度の講義に臨むとともに，現在評価を下げた理由を自己分析している．ただし，アンケートの母数が昨年の1/3以下のうえ，自由記載欄への記入が全くなくなり，自己分析も困難な状態である．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在，以下の内容に関する研究をメインに行っている ① 新たな振動型磁気アクチュエータの動作原理の確立 ② アクチュエータを構成する振動コンポーネントの非線形振動解析 ③ 位相制御型アクチュエータの開発 ④ 電磁振動ポンプの開発 ⑤ 管外検査用アクチュエータシステムの開発
今年度の進捗状況	上記①～④のアクチュエータおよびポンプにおいて，本年度の進捗状況は，約50％である．更に⑤のアクチュエータシステムについては，1％未満となる．
来年度の進捗目標	次年度は①から④までのテーマについての完成度を80％まで，⑤のアクチュエータシステムについては，試行錯誤で実機を試作し，完成度を50％程度まで引き上げたい．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	岡田　宏成	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実験実習科目における誤差評価の指導	2023年	1年生対象の自然科学実験ファンダメンタルズにおいて誤差評価に関する指導を行うため，誤差に関するスライドを作成しレクチャーを行った．また，各実験テーマにおいて，得られたデータを最小二乗法を用いて誤差評価を行う課題を新しく作成した．
実験実習科目における新規実験テーマの立ち上げ	2023年	1年生対象の自然科学実験ファンダメンタルズにおいて，金属の電気抵抗測定に関する実験テーマを新規に立ち上げた．実験に使用する器具を自作し，装置類を組み上げるとともに，実験テキストやスライドの作成を行った．
復習演習のオンライン化	2021年～	
予習レポートのオンライン化	2021年～	
実験課題のオンライン化	2020年～	自然科学実験ファンダメンタルズの物理学実験テーマに関するスライドと動画を作成して，オンタイム/オンデマンドでの受講を可能にした．
講義ノートのスライド化	2020年～	オンライン授業に対応するために講義ノートをスライド化した．それに伴って図や表も追加してより充実した講義内容に改善した．
manabaを利用したオンライン学修	2020年～	manabaの小テスト，ドリル機能を利用して講義内容の予習復習を促すための課題の提出を行った．
工学基礎教育センター利用の促進	2020年～	小テストなどの成績が不振な学生に対し，工学基礎教育センター学習相談コーナーを利用する補習レポートを課した．
レポートのプレゼンテーション化	2020年～	毎回の講義内容に関するレポート課題を，書画カメラやプロジェクターを用いたプレゼン形式で評価した．そのための課題内容や評価方法を前年度の方法より改善した．
復習用のパワーポイント資料の作成	2020年～	プロジェクターを使用した復習用パワーポイント資料を作成して，毎回の講義の冒頭で，前回の講義内容を視覚的に復習した．
予習・復習を促すための講義毎の課題の作成とその評価	2020年～	今回の講義内容に関する復習問題と，次回の講義内容に関する予習問題をレポートの課題として毎回提出した．講義の冒頭で復習問題の解説を行い，予習問題に沿った内容で講義を進めた．
2. 作成した教科書、教材、参考書		
実験科目における新規実験テーマの教材作成	2023年	1年生対象の自然科学実験ファンダメンタルズにおいて，新規実験テーマである「物質の電気抵抗測定」を立ち上げ，「オームの法則」や「電気抵抗と電気抵抗率」を理解するための実験器具，「金属と半導体の電気抵抗の温度係数」を実測するためのプローブを自作した．また，実験指導を行うためのテキストやスライドを作成した．
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院大学・多賀城市連携市民公開講座での講演	2023年	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
三元系Fe-Mn-Ga合金におけるHeusler相の相安定性	共同	2024年3月	日本金属学会(東京理科大学葛飾キャンパス)	山内達寛, 岡田宏成	
Fe-Mn-Ga合金のFe-rich組成における結晶構造特性と磁気特性	共同	2024年3月	日本金属学会(東京理科大学葛飾キャンパス)	北原壮太, 岡田宏成	
三元系Fe-Mn-Ga 合金におけるFCC相の相安定性と磁気特性	共同	2023年9月	日本金属学会(富山大学五福キャンパス)	山内達寛, 岡田宏成, 梅津理恵	
Phase Stability and Magnetic Properties of Fe-Mn-Ga Alloys with FCC Structure	共同	2023年8月	IcAUMS 2023(Bali, Indonesia)	Tatsuhiro Yamauchi, Hironari Okada, Rie Y. Umetsu	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2023年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2008年～	日本高学力学会 会員
2004年～	日本磁気学会 会員
2003年～	日本物理学会 会員
1999年～	日本金属学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	佐瀬　一弥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
プレゼン動画作成による全受講者参加型オンデマンド発表会	2021年9月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	「人間工学」におけるデジタルファブリケーションの活用	
今年度の進捗状況	人間工学の授業において、持ちやすさをテーマにした使いやすいものづくりに取り組ませることを目指し、3Dプリンタを用いた形状作成とそのユーザ評価を授業内で行った。	
来年度の進捗目標	「人と機械工学」の内容修正と学生参加を促す授業運営の実践	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Development of Machine Learning-Based Assessment System for Laparoscopic Surgical Skills Using Motion-Capture	共著	2024年1月	Proceedings of the 2024 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Koki Ebina, Takashige Abe, Lingbo Yan, Kiyohiko Hotta, Madoka Higuchi, Naoya Iwahara, Jun Furumido, Masafumi Kon, Sachiyo Murai, Yo Kurashima, Shunsuke Komizunai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Taku Senoo, Nobuo Shinohara, Atsushi Konno	pp.Paper TueAK1.1
Wearable High-resolution Haptic Display Using Suction Stimuli to Represent Cutaneous Contact Information on Finger Pad	共著	2023年	IEEE Transactions on Haptics, 16(4)	Natsumi Morita, Akio Ichijo, Masashi Konyo, Haruki Kato, Kazuya Sase, Hikaru Nagano, Satoshi Tadokoro	pp.687-694
Proposal of Simulation-Based Surgical Navigation and Development of Laparoscopic Surgical Simulator that Reflects Motion of Surgical Instruments in Real-World	共著	2023年	International Journal of Automation Technology, 17(3)	S. Shibuya, N. Shido, R. Shirai, K. Sase, K. Ebina, X. Chen, T. Tsujita, S. Komizunai, T. Senoo, A. Konno	pp.262-276
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

型取りによる指モデル作成と寸法誤差評価	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	小野寺 玲偉、細谷 悠真、加藤 明樹、佐瀬 一弥	
腹腔鏡手術支援のための臓器特徴点を用いた臓器モデル位置合わせ	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	薄井 浩生、渋谷 紗也華、海老名 光希、佐瀬 一弥、陳 暁帥、小水内 俊介、安部 崇重、辻田 哲平、妹尾 拓、的場 光太郎、近野 敦	
実践的な腹腔鏡手術訓練における機械学習を用いた術者技量評価システムの開発	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	晏 凌波、安部 崇重、海老名 光希、今 雅史、堀田 記世彦、渡辺 雅彦、七戸 俊明、樋口 まどか、村井 祥代、小水内 俊介、辻田 哲平、佐瀬 一弥、陳 暁帥、妹尾 拓、篠原 信雄、近野 敦	
内視鏡下副鼻腔手術における SHAP を用いた手術技量の分析	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	山田 海俊、鈴木 正宣、宮路 洸、海老名 光希、佐瀬 一弥、辻田 哲平、陳 暁帥、安部 崇重、小水内 俊介、中丸 裕爾、妹尾 拓、本間 明宏、近野 敦	
指先 SED 分布実時間計算のための 3 次元指モデルの開発	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	加藤 明樹、佐瀬 一弥、永野 光、昆陽 雅司	
HMD 装着時における MR 流体を用いた遭遇型力覚提示	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	渡邊 弘毅、佐瀬 一弥、辻田 哲平、安孫子 聡子	
超音波医用画像を用いた手術支援システムのための腫瘍を伴った腎臓ファントムの製作に関する検討	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	加藤 萌喜、陳 暁帥、佐瀬 一弥、辻田 哲平、小水内 俊介、近野 敦、岡 和彦	
血管吻合訓練における手の動作解析と熟練度の判別	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	庄司 大朗、陳 暁帥、小渡 亮介、近野 敦、辻田 哲平、佐瀬 一弥、小水内 俊介、岡 和彦	
腹腔鏡手術訓練における tsfresh および SHAP を用いた機械学習モデルに基づく技量解析	共同	2023年12月	第24回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(新潟)	海老名 光希、安部 崇重、晏 凌波、堀田 記世彦、樋口 まどか、古御堂 純、岩原 直也、今 雅史、倉島 庸、村井 祥代、小水内 俊介、辻田 哲平、佐瀬 一弥、陳 暁帥、妹尾 拓、篠原 信雄、近野 敦	
バーチャルリアリティにおけるやわらかな触覚提示	単独	2023年10月	第 66 回自動制御連合講演会, OS：やわらかなデザインがもたらす未来のインタラクション(仙台)	佐瀬一弥	
腹腔鏡手術ナビゲーションの開発を目的とした臓器重畳表示のための自動位置合わせ	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	小林 吉文, 陳 暁帥, 近野 敦, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 小水内 俊介, 岡 和彦	
指先のSED分布を計算する触覚分布シミュレータ	共同	2023年9月	第28回日本バーチャルリアリティ学会大会(東京)	佐瀬 一弥, 加藤 明樹, 一條 暁生, 昆陽 雅司, 永野 光	

MR流体遭遇型力覚提示装置における道具操作に対する非接触時追従性評価	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	渡邊 弘毅, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 安孫子 聡子	
指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	一條 暁生, 昆陽 雅司, 加藤 明樹, 佐瀬 一弥, 永野 光, 田所 諭	
指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	昆陽 雅司, 森田 夏実, 一條 暁生, 佐瀬 一弥, 永野 光, 田所 諭	
内視鏡下副鼻腔手術におけるtsfreshを用いた機械学習による技量評価	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	山田 海俊, 鈴木 正宣, 宮路 洸, 海老名 光希, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 陳 暁帥, 安部 崇重, 小水内 俊介, 中丸 裕爾, 妹尾 拓, 本間 明宏, 近野 敦	
腹腔鏡手術訓練のためのオンサイトトレーニングシステム開発	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	海老名 光希, 安部 崇重, 晏 凌波, 堀田 記世彦, 倉島 庸, 村井 祥代, 樋口 まどか, 今 雅史, 小水内 俊介, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 陳 暁帥, 妹尾 拓, 篠原 信雄, 近野 敦	
実践的な腹腔鏡手術訓練における手術器具動態計測による手術手技解析	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台)	晏 凌波, 安部 崇重, 海老名 光希, 今 雅史, 堀田 記世彦, 渡辺 雅彦, 七戸 俊明, 樋口 まどか, 村井 祥代, 小水内 俊介, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 陳 暁帥, 妹尾 拓, 篠原 信雄, 近野 敦	
MR流体を用いた遭遇型力覚提示装置における接触開始可能範囲の拡張	共同	2023年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2023(名古屋)	渡邊弘毅, 佐瀬一弥, 辻田哲平, 安孫子聡子	
指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現 第6報:パラレルリンク型力覚ディスプレイとの統合	共同	2023年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2023(名古屋)	一條暁生, 永野光, 森田夏実, 昆陽雅司, 佐瀬一弥, 田所諭	
触覚分布提示のための指変形シミュレーションにおける寸法個人差の影響	共同	2023年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2023(名古屋)	佐瀬一弥, 小野寺玲偉, 加藤明樹, 森田夏実, 永野光, 昆陽雅司	
実践的な腹腔鏡手術訓練技量解析のための計測データ補正処理の検討と特徴量算出	共同	2023年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2023(名古屋)	海老名光希, 安部崇重, 晏凌波, 堀田記世彦, 今雅史, 樋口まどか, 古御堂純, 岩原直也, 小水内俊介, 倉島庸, 菊地央, 松本隆児, 大澤崇宏, 村井祥代, 辻田哲平, 佐瀬一弥, 陳暁帥, 妹尾拓, 篠原信雄, 近野敦	
機械学習を用いた内視鏡下副鼻腔手術の技量評価	共同	2023年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2023(名古屋)	山田海俊, 鈴木正宣, 宮路洸, 海老名光希, 佐瀬一弥, 辻田哲平, 陳暁師, 安部崇重, 小水内俊介, 中丸裕爾, 妹尾拓, 本間明宏, 近野敦	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	触覚提示技術の基礎研究と応用展開。特に手指における時空間的な皮膚感覚の提示についての研究について、指の解剖学的構造を考慮した実時間変形シミュレーションを実施する。また、データ駆動の圧力分布レンダリング手法の開発にも取り組む。
今年度の進捗状況	簡易的な3次元指解剖学モデルを作成し、有限要素法による実時間変形シミュレーションを実現した。計算の妥当性を評価しているところである。データ駆動レンダリングについては、データ収集システムの改善を行った。圧力分布の推論アルゴリズムの開発については、着手し始めたところである。
来年度の進捗目標	指変形計算の妥当性評価、および、圧力分布推論アルゴリズムの開発。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2021年度～2023年度		

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年3月	ラヲ防災Daysにて出展。
2024年2月	東北学院幼稚園にてサイエンス体験教室を実施。
2023年12月	サイエンスデイ in 多賀城 2023 にて体験講座出展。
2023年7月	学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2023にて体験講座出展。運営参加・支援，実演
2023年6月～2023年6月	第35回知能ロボットコンテスト2023 運営補助。
2020年1月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 幹事
2018年3月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 委員
2018年1月～	計測自動制御学会 触覚部会 委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	濱西　伸治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北文化学園大学　知能情報システム特別講義 「スポーツバイオメカニクスの最前線」	2023年5月11日	

現在の課題・目標	コロナ禍を契機に導入されたオンライン授業と対面授業の長所を活かした講義を展開するための工夫を行う。
今年度の進捗状況	単独での担当講義である「福祉機械工学」（機械4年生対象）では，15回の講義を全て対面で行ったが，毎回の講義終了時のレポート課題は全てmanabaおよびresponでの提出とした。課題内容はいずれも「明確な回答がない問題に対し，学んだ知識を用いてどのようにアプローチしたか」を評価した． 翌週の講義冒頭で回答内容を（提出者を伏せる形で）受講者全員で共有したことは，学生に自身と異なる考え方やアプローチに気付かせ，それらの多様性を学ばせる意味で非常に有効であった． 実際，その教育効果は，授業アンケートにより極めて高い評価であったことからもうかがえる．
来年度の進捗目標	対面授業で実感した上記の手法を，オムニバス形式で担当予定のオンライン授業にも取り入れてみたい．オンデマンド授業となるため，学生の反応がリアルタイムに得られない難しさがあるが，同科目を履修する多数のクラスに同じ講義動画を用いるのではなく，あるクラスのレポートの回答内容を反映させた講義動画を別のクラスに公開することで，講義そのものに新鮮さが生まれ，高い教育効果が期待できると考える．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
ワイヤレス筋電センサーを用いたゴルフスイングの筋肉動作解析	共同	2024年3月	第22回日本電気生理運動学会・第10回計測自動制御学会電気生理研究会(東京都目黒区)	浅野陸，濱西伸治，◎中瀬博之	
剣道難聴予防のための高機能サポーターの提案	単独	2023年9月	第55回　日本武道学会(横浜市)	◎濱西伸治	
新生児から高齢者まで快聴LIFEを －福祉・医療・スポーツへの応用－	単独	2023年8月	日本音響学会聴覚研究会(仙台市)	◎濱西伸治	
アメリカンフットボール用衝撃低減サポーターの提案	共同	2023年6月	日本機械学会 第35回バイオエンジニアリング講演会(仙台市)	◎三浦 拳也，浦須内祐二，青木良浩，村越道生，萩山竜馬，濱西伸治	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 中耳の各部位のパラメータ（ヤング率や密度など）を変化させて，実際の新生児における動特性と同様の結果となるように解析を行う． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポータの提案」 アメフト用のサポータについては，東北大学アメフト部ヘッドコーチの助言・協力を得ながら，ヘルメットに組み込む予定である．また，剣道用のサポーターについては，濱西が発起人となり立ち上げた，強豪大学の監督・指導者とともに『未来の剣道に関する研究懇話会』を引き続き継続し，情報交換を行う． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 モデルの各部位のパラメータ（ヤング率・粘性）と耳管開放症の重症度との関係を明らかにする．
今年度の進捗状況	「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 実際の新生児の外耳・中耳動特性に近い特性をシミュレーションにより実現することに成功した． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポータの提案」 アメフトのヘルメット用のサポータについては，3Dプリンターにより試作したサポーターをヘルメットに装着して打撃実験を行い，高い衝撃低減性能を実現することに成功した．これらの成果は学会にて発表した．また，剣道用のサポーターについては，「蜘蛛の巣」の形状をした全く新しいサポーターを考案・試作した．優れた衝撃低減性能を持つことから，特許を出願した．（特願2023-215194） 加えて，濱西が発起人となり立ち上げた『未来の剣道に関する研究懇話会』は医学関係者と学識経験者も加えた形で2023年度は2回開催した． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 これまで本研究室で取り組んでいた「有限要素法による鼻咽頭モデル」と組み合わせることにより，「鼻咽頭・耳管モデル」の構築に成功した．各部位のパラメータ（ヤング率・粘性）と耳管開放症の重症度に加え，飲み込み動作に困難と伴う嚥下障害の重症度についても解析が可能となった．
来年度の進捗目標	「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 上記の成果を論文としてまとめ，投稿する予定である． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポータの提案」 上記の進捗状況で述べたような優れた衝撃低減性能を有するサポーターは，スポーツ界に与えるインパクトが非常に大きく，特許取得を進めながら国内外に広く公表することで，近い将来のスポーツ関連企業との共同研究・開発の可能性を探っていきたい． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 本研究室で開発し，現在は東北大学病院で使用されている上記装置から得られたデータと，モデルによるシミュレーションとの比較により，装置の有用性およびモデルの妥当性を検討したい．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～	個別(研究代表者)	頭部に繰り返し激しい衝撃が加わるコンタクトスポーツにおいて，多数の難聴患者が報告されている．これまでの私たちの取り組みにより，その原因は長年にわたり頭蓋骨に過大な骨導が伝わることにより発症する可能性が非常に高まってきた． 私たちはこのような難聴を「コンタクトスポーツ難聴」として新たに定義・提唱し，その発症メカニズムを打撃実験およびシミュレーションにより解明することを試みる．また，我々が独自に開発した衝撃低減サポーターに，過大な骨導を検知・警告する機能を付加し，練習や試合時にヘルメット等に装着することで脳震盪を未然に予防する次世代型サポーターの開発を試みる．

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2003年4月～	日本機械学会　バイオエンジニアリング部門 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	五橋キャンパスへの移転後も工学部剣道部として活動を継続することにしたため，体育会剣道部の協力を得ながら，稽古場所の確保を図る．		

今年度の進捗状況	体育会剣道部をはじめとした関係者の協力により，五橋キャンパス移転後も，週1回，土樋キャンパスの地下道場にて，工学部剣道部として稽古を継続している．ただし，これまで工学部剣道部が例外的に認められていた東北学生剣道連盟（学連）主催の大会参加は，五橋キャンパス移転により「1大学1組織」の原則に則って，移転以降は認められなくなった．そこで，学連ではなく，一般の剣道団体として青葉区剣道連盟に新規に加盟することにより，学連主催以外の各種の剣道大会に参加できることとなった．11月に開催された青葉区民スポーツ祭では団体3位に入賞した．
来年度の進捗目標	工学部剣道部としては，各種大会で上位入賞を目指す． また，濱西個人としては，剣道7段の合格を目指す．
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	李　淵	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
講義説明資料の改善	2021年4月1日～	
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
銀ナノ粒子積載した不織布の導電性向上に関する研究	単独	2023年9月	日本機械学会 2023年度年次大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	李 淵	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	北條　智彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Fe-5Mn-0.1C中Mn鋼におけるリューダース帯伝播中の階層的不均一変形：その場走査型電子顕微鏡観察	共著	2024年2月	鉄と鋼, 110(3)	小山元道, 山下享介, 諸岡聡, 楊志鵬, Rama Srinivas Varanasi, 北條智彦, 川崎卓郎, ステファヌス ハルヨ	pp.205-216
Effect of Stretch-forming on Hydrogen Diffusion Behavior in High-strength Steel Sheet	共著	2023年11月	ISIJ International, 64(4)	Hayato Nishimura, Saya Ajito, Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Ken-ichi Fujita, Yuki Shibayama, Hiroshi Kakinuma, Eiji Akiyama	pp.637-644
In situ visualization of misorientation-dependent hydrogen diffusion at grain boundaries of pure polycrystalline Ni using a hydrogen video imaging system	共著	2023年11月	Acta Materialia, 263	Hiroshi Kakinuma, Saya Ajito, Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Eiji Akiyama	pp.119536
超高強度 TRIP 型マルテンサイト鋼板のスポット溶接引張せん断強度に及ぼす水素の影響	共著	2023年11月	鉄と鋼, 110(3)	北條智彦, 長坂明彦, 若林龍生, 田畑千早, 近藤陽太, 小笠原一真, 柴山由樹, 秋山英二	pp.171-183
Effect of Thermomechanical Rolling on Mechanical Properties of TRIP-Aided Steel Sheet	共著	2023年11月	Materials Science Forum, 1105	Junya Kobayashi, Taichi Kimura, Shun Kudo, Genta Kojima, Tomohiko Hojo, Shigeru Kuramoto, Goroh Itoh	pp.153-158
Hydrogen Embrittlement Property of a 1.5 GPa Dual-Phase Steel Evaluated Using U-bending Test: A Comparison with Tempered Martensitic Steel with Identical Tensile Strength	共著	2023年10月	ISIJ International, 64(4)	Shuya Chiba, Motomichi Koyama, Tomohiko Hojo, Saya Ajito, Yuki Shibayama, Rama Srinivas Varanasi, Eiji Akiyama	pp.706-713

中Mn鋼とTRIP型ベイニティックフェライト鋼の応力，塑性ひずみ分配挙動と残留オーステナイトのマルテンサイト変態挙動	共著	2023年10月	鉄と鋼，110(3)	北條智彦，小山元道，熊井麦弥，周 宇涛，柴山由樹，城鮎美，菖蒲敬久，齋藤寛之，味戸沙耶，秋山英二	pp.227-240
Unstable stress-triaxiality development and contrasting weakening in two types of high-strength transformation-induced plasticity(TRIP) steels: Insights from a new compact tensile testing method	共著	2023年10月	Journal of Materials Processing Technology，322	Takashi Matsuno，Taiki Fujita，Tomoko Matsuda，Yuki Shibayama，Tomohiko Hojo，Ikumu Watanabe	pp.118174
残留オーステナイトを含有する中Mn複合組織鋼の高速変形特性	共著	2023年10月	鉄と鋼，110(3)	興津貴隆，北條智彦，諸岡聡，宮本吾郎	pp.260-267
引張変形中その場中性子回折を用いた0.15C-5Mn鋼 における残留オーステナイトと加工誘起マルテンサイトの役割のその場観察	共著	2023年9月	鉄と鋼，110(3)	山下享介，諸岡聡，ゴンウー，川崎卓郎，ハルヨステファヌス，北條智彦，興津貴隆，藤井英俊	pp.241-251
Effects of Partial Replacement of Si by Al on Impact Toughness of 0.2%C-Si-Mn-Cr-B TRIP-Aided Martensitic Steel	共著	2023年6月	Metals，13	Koh-ichi Sugimoto，Yumenori Nakashima，Junya Kobayashi，Tomohiko Hojo	pp.1206
Hydrogen-induced delayed fracture in a 1.5 GPa dual-phase steel via coalescence of surface and sub-surface cracks	共著	2023年5月	Metallurgical and Materials Transactions A，54	Rama Srinivas Varanasi，Motomichi Koyama，Yuki Shibayama，Shuya Chiba，Saya Ajito，Tomohiko Hojo，Eiji Akiyama	pp.2989-2997
Al-10%Zn-2.5%Mg-1.6%Cu合金の引張特性に及ぼすひずみ速度と内在水素の影響	共著	2023年5月	軽金属，73(5)	北條智彦，菊池護，脇裕之，秋山英二	pp.218-222
Environment-assisted cracking of AZ31 magnesium alloy in a borate buffer solution containing ammonium thiocyanate under various potentials	共著	2023年4月	Corrosion Science，218	Saya Ajito，Tomohiko Hojo，Motomichi Koyama，Sachiko Hiromoto，Eiji Akiyama	pp.111195
オパールフォトニック結晶膜の色調変化-ひずみ関係の定量評価および複雑形状試験片への適用	共著	2023年4月	鉄と鋼，110(3)	周宇涛，楊志鵬，小山元道，味戸沙耶，北條智彦，不動寺浩，秋山英二	pp.311-320
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Fe-5Mn-0.1C中Mn鋼における損傷発達の支配因子：マルテンサイト変態の影響	共同	2024年3月	(一社) 日本鉄鋼協会　第187回春季講演大(東京)	小山元道，周宇涛、北條智彦	
超高強度 TRIP 型複合組織鋼板の温間 V 曲げおよび水素脆化特性に及ぼす C・Mn 量の影響	共同	2024年3月	(一社) 日本鉄鋼協会　第187回春季講演大(東京)	青木想，長坂明彦，古平大，田畑千早，北條智彦	
超高張力鋼板のスポット溶接性に及ぼす水素の影響	共同	2024年3月	(一社) 日本鉄鋼協会　第187回春季講演大(東京)	近藤陽太，長坂明彦，小笠原一真，若林龍生，田畑千早，北條智彦	

ナノインデンテーション部 3 次元結晶方位像を用いた Dual Phase 鋼ナノスケール不均一変形挙動 の分析	共同	2024年3月	日本機械学会 中国四国学生会第54回学生員卒業研究発表講演会(鳥取)	田中健太, 越知孝介, 松野崇, 浜孝之, 北条智彦, 渡邊育夢	
超高強度鋼板のスポット溶接引張強度に及ぼす水素の影響	共同	2023年12月	令和5年度　日本鉄鋼協会北陸信越支部・日本金属学会北陸信越支部連合講演会(福井)	若林龍生, 田畑千早, 長坂明彦, 近藤陽太, 小笠原一真, 北條智彦	
超高強度TRIP鋼板のV曲げ水素脆化評価法	共同	2023年12月	令和5年度　日本鉄鋼協会北陸信越支部・日本金属学会北陸信越支部連合講演会(福井)	田畑千早, 若林龍生, 長坂明彦, 青木想, 古平大, 北條智彦	
中 Mn 鋼の変形特性に及ぼすひずみ速度の影響	共同	2023年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第186回秋季講演大会(富山市)	興津貴隆, 北條智彦, 諸岡 聡, 宮本吾郎	
放射光 X 線回折による中 Mn 鋼の応力, 塑性ひずみ分配と残留オーステナイトの変態挙動の解析	共同	2023年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第186回秋季講演大会(富山市)	北條智彦, 小山元道, 城鮎美, 齋藤寛之, 秋山英二	
Fe-5Mn-0.1C 中 Mn 鋼のリューダース変形における階層的塑性変形	共同	2023年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第186回秋季講演大会(富山市)	小山元道, 山下享介, 諸岡聡, 北條智彦	
鉄鋼材料中の水素の拡散・固溶に与える変形の影響	共同	2023年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第186回秋季講演大会(富山市)	味戸沙耶, 張笑銘, 柿沼洋, 北條智彦, 小山元道, 秋山英二	
TRIP型マルテンサイト鋼板の機械的特性に及ぼす圧延温度の影響	共同	2023年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第186回秋季講演大会(富山市)	小島元太, 松井璃音, 小林純也, 倉本繁, 伊藤吾朗, 北條智彦	
デジタル画像相関法による低合金TRIP鋼板の引張挙動とひずみ誘起変態挙動の解析の検討	共同	2023年8月	2023茨城講演会(茨城県日立市)	尾林和将, 小島元太, 服部克己, 深作隼也, 小林純也, 北條智彦, 倉本繁, 伊藤吾朗	
Mf点付近での温間圧延により作製した超高強度TRIP型マルテンサイト鋼板の機械的特性	共同	2023年8月	2023茨城講演会(茨城県日立市)	松井璃音, 小島元太, 服部克海, 深作隼也, 小林純也, 北條智彦, 倉本繁, 伊藤吾朗	
TRIP型ベイニティックフェライト鋼板の機械的特性に及ぼすγ相域再加熱の影響	共同	2023年8月	2023茨城講演会(茨城県日立市)	河西篤史, 小島元太, 服部克海, 深作隼也, 小林純也, 北條智彦, 倉本繁, 伊藤吾朗	
温間圧延と等温保持を施したTRIP型焼鈍マルテンサイト鋼板の機械的特性	共同	2023年8月	2023茨城講演会(茨城県日立市)	Syakila Nor Alia binti Syarifuddin, 深作隼也, 服部克海, 小島元太, 小林純也, 北條智彦, 倉本繁, 伊藤吾朗	
有限要素シミュレーションによるせん断加工部遅れ破壊応力閾値の解析	共同	2023年6月	(一社)日本塑性加工学会2023年度塑性加工春季講演会(東京)	上田裕也, 松野崇, 浜孝之, 北條智彦, 興津貴隆, 高村正人	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	石上　忍	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『室内環境の事典：快適で健康な暮らしを支える科学』	分担執筆	2023年9月	朝倉書店, 1	石上 忍 他	pp.184-185
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Measurement of antenna gain for conical monopole antenna with double-Boltzmann tapered-line	共著	2023年12月	2023 Asia-Pacific Microwave Conference	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Shigeki Minegishi	pp.144-146
球電極対のESD に伴って発生する過渡電界強度の距離特性	共著	2023年10月	電子情報通信学会, 電子情報通信学会論文誌B, J106-B(10)	川又 憲, 石上 忍, 藤原 修, スローカ ヤン	pp.639-645
Measurement of Impulsive Electromagnetic Field Caused by ESD Using A Folded Long-Hexagon Antenna and It's Transient Characteristics	共著	2023年9月	2023 International Symposium on Electromagnetic Compatibility - EMC Europe	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.1-4
Measurement of Radiation Patterns for Ultra-Broadband Folded Long-Hexagon Antenna	共著	2023年9月	2023 International Symposium on Electromagnetic Compatibility - EMC Europe	Shinobu Ishigami, Keita Kobayashi, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori	pp.1-6
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
これからのEMC	単著	2024年1月	科学情報出版, 電磁環境工学情報EMC, 36(9)	石上　忍	pp.30-30
EMC測定・試験のポイント 1. 今更, 人に聞けないEMC用語解説 インピーダンスマッチング	単著	2023年11月	科学情報出版, 電磁環境工学情報EMC, 36(7)	石上　忍	pp.96-98
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
独立成分分析による電磁雑音波形抽出の基礎検討	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学　常三島キャンパス)	石上　忍, 相澤　舞, 川又　憲, 髙橋　直央	
IECにおける電磁両立性標準化の動向報告(1)	単独	2023年7月	電子情報通信学会　環境電磁工学研究会(東京都港区　機械振興会館)	石上　忍	

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2023年10月～		情報通信審議会 情報通信技術分科会　電波利用環境委員会 主査代理	
2020年4月～		情報通信審議会　情報通信技術分科会　CISPR/A作業班 主任	
2019年4月～2023年9月		情報通信審議会 情報通信技術分科会　電波利用環境委員会 委員	
2017年11月～		電気学会 電磁環境部会　委員	
2017年11月～		IEC SC77B国内委員会 委員長	
2016年4月～		国立研究開発法人情報通信研究機構　協力研究員（2018年4月より　特別研究員）非常勤職員	
2015年9月～		IEC ACEC国際委員 委員	
2015年9月～		IEC ACEC国内分科会 分科会長	
2015年1月～		静電気学会	
2011年8月～		CISPR/A エキスパート 委員	
2006年3月～		IEC TC77 WG13(作業部会)エキスパート 委員	
2006年3月～		電磁環境両立性標準化委員会(IEC TC77国内委員会) 幹事	
2003年1月～		電気学会	
1992年1月～		IEEE(米国電気電子学会)	
1991年4月～		電子情報通信学会	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	岩谷　幸雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年5月～	日本音響学会2020年秋季研究発表会　遠隔開催実行委員長 会員
2020年1月～	Chair of IEEE SPS Sendai chapter 委員
2019年5月～	日本音響学会理事 会員
2017年3月～	仙台市環境影響評価審査会委員 委員
2015年10月～	国際計量研究連絡委員会　音響・超音波・振動分科会委員 委員
2014年5月～	情報処理学会東北支部運営委員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	大場　佳文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向授業への取り組みと定常的な学習の保持の試み	2023年4月1日～2024年3月31日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．日頃から学生に勉強させる癖・講義中に理解させる癖をつけさせる． 2．わかりやすい講義を提供する． 3．いつでもどこでも学生の質問に答える．
今年度の進捗状況	1．については，中間テストを適宜行うことでその対策を施した．進捗はなくはないが、期待しているほどではない。 2．については，すべての講義において，学生がその講義に興味・関心・必要性を感じてくれるように，また，できるだけやさしく理解できるように，多方面から話題を抽出し，学生が理解しやすい別のものに置き換えるなどして講義内容を理解してもらえるよう努めた．進捗状況は未知数。 3．については，案外，「質問しやすい先生」と見られているのかも知れない．このためか，講義終了後にその場で質問に来る学生が比較的いる。“進捗はあった”と思う．
来年度の進捗目標	1．については，勉強不足・理解不足の学生がまだ多くいると思われるため，次年度も引き続き継続していくつもりである． 2．については，現在，この路線を変更することは考えていないので，次年度も継続． 3．については，次年度も継続．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1．新規のチューナブルラットレース回路に関して研究を行っており，整理し論文にまとめる． 2．新規の2周波整合回路に関して行っている研究を，整理し論文にまとめる．
今年度の進捗状況	1．については，結果を整理し、論文として執筆中． 2．については，結果を整理し、今後、論文投稿を検討中．
来年度の進捗目標	従来までに提案されていない、新しい伝送回路を提案したい．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1996年6月～	電気学会会員 会員

1987年5月～		電子情報通信学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	小澤　哲也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	さらに基礎的知識の獲得を目指した卒業研究の指導。 さらに反復演習による理解度の向上。 もっと学生とのコミュニケーション時間を増やし学生の意識高揚に努める。
今年度の進捗状況	学生本人の主体性を最重要視して卒業研究の指導および発表練習を実施している。 学生の進路等についても相談に応じている。 多くのオンデマンド講義資料を完成させている。
来年度の進捗目標	さらにオンデマンド講義資料を充実させる。 就職活動中の学生に対し、適切な助言を与える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	磁気センサを応用した電磁探傷計測システムの開発。 高電圧高電界を応用した植物の成長速度促進システムの開発。
今年度の進捗状況	磁気センサを応用した電磁探傷計測システムの開発の分解能の改善。 高電圧高電界を応用した植物の成長速度促進システムの開発を着手し始めた。
来年度の進捗目標	磁気センサを応用した電磁探傷計測システムの開発の分解能をもっと改善する。 高電圧高電界を応用した植物の成長速度促進システムの開発をもっと着手する。 磁性流体を用いた減衰機構をもっと開発。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年7月～2023年7月	大気が不安定「落雷」に注意！避難はどこが安全なのか専門家に聞いてみた(Nスタみやぎ)
2020年4月～	電気学会東北支部役員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

入試委員
電気電子工学科4年　グループ主任
就職キャリア支援委員

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	郭　海蛟	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生実験における工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	私が担当する学生実験は学生一人毎に実験装置がある。実験に進めると個々の進み具合が異なります。いままで学生がトラブルになると私が対応したが、今年はまず早めに進めた学生に対応してもらってから私が対応することを試みた。これにより早めに進めた学生は他人が何故トラブルが起こったなのか、どう対処すべきかについての勉強となる。
演習科目における工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	演習科目の場合、課題を与えて、そして解説を行うだけではなくて、解いてもらう途中に解くプロセスについて少しずつヒントを与えて結果を導くように工夫しました。最後に解説の時、その解くプロセスが如何に重要かについて丁寧に解説を行う。これにより、ただ今の問題を解くだけではなくて、解くプロセスに従っていけば他の問題も解ける可能性が高まる。
新校舎での対面授業における工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	初めての新校舎の教室における対面授業で、教室には前のスクリーン中間の大型モニターが設置されている。しかし、前のスクリーンにレーザーポインターを指しながら説明しても、中間の大型モニターにそのポインターが見えないから後列の学生達は分かりにくくなる。それで書画カメラを使って、置いてあるPPTの上にポインターを指しながら説明すれば、両方の画面とも見えるので、後列の学生達にも見やすくなった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	今年度から新しいキャンパスで対面で行うこととなり、新しい教室の中では中間位置に大型モニタが設置されている。従来のように前面のスクリーンにPPTを映してレーザーポイントを指しながら説明する場合は中間のモニターにはレザーポインターが指す場所が映らないから後列の学生達はわかりにくくなる課題がある。このような課題を改善し、より学生達にわかりやすくする工夫することを目標とする。
今年度の進捗状況	上記の課題を改善するために、新しい教室にある書画カメラを利用することにした。その上に指しながら説明すれば、前面のスクリーンと中間のモニタにも同時に見えるようになり、後列の学生達にも見やすくなった。また、書画カメラは黒板前と前列の蛍光灯を同時に消した場合は書画カメラの色が不安定となり、見にくい場合もあったが、書画カメラのマニュアルを見ても解決方法が見つからない。解決しないと見にくくなり授業の効果にネガティブの影響を与える。いろいろと試行錯誤の結果、前列の蛍光灯を消した場合、装置の台の明かりが薄くなり書画カメラの写しが不安定になりやすいことを突き止めたので、それを改善したら問題を解決した。できれば演壇には小さい電気スタンドがあれば有難く思う。
来年度の進捗目標	近年では指定試験で成績を評価するに加えて、普段の習得程度についても評価に加わる評価方法も多くみられる。f今年度にもレポートの評価について重みを増して評価するように試みたが、しかし指定試験の成績と普段レポートの成績との差がかなりある学生が少なくないことがわかった。この原因分析と改善する方法を探ることを目標としたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

A New Sinusoid Current Control Method of Brushless DC Motor(BLDCM) Based on Internal Model Principle	単独	2023年12月	2023 3rd International Conference on Frontiers of Electrical Power & Energy Systems (EPES 2023)(China)	Haijiao Guo	
四次繰返し制御系の初期応答改善法（最適な方法の試み）	共同	2023年9月	電気関係学会東北支部連合大会(岩手県立大学)	小薗井　陽彦、郭　海蛟	
風力発電におけるSRGの多極化による効果についての検討	共同	2023年9月	電気関係学会東北支部連合大会(岩手県立大学)	尾形亮太、郭　海蛟	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	1. 高次繰返し制御について、初期応答の改善が難しいことが課題であり、その課題を改善する方法を開発することを目標とする。 2. SRGを用いる風力発電システムにおける効率に関する研究 3. 低風速時に、SRGを用いる風力発電に関する研究
今年度の進捗状況	1. 上記1について、我々が提案した高次繰返し制御方法では初期応答の改善効果があることを明らかにした。国内の大会にて発表した。。 2. 上記2について、極数が異なると効率のよい範囲が異なることがわかり、風速の範囲に応じてそれに適した極数を選んだ方が効率の良い発電ができる。その成果を国内の大会に発表した。 3. 上記3について、速度制御に用いたPIのゲインを上手く調整すれば、2.5m/sのような低風速時でも安定的に発電できた。国内外の大会に発表する予定。
来年度の進捗目標	前年度の課題を更に発展すると共にその成果を国内と国外にアピールを行う予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年～	計測自動制御学会東北支部運営委員会顧問 会員
2012年～	SICE エネルギー・環境システム制御技術調査研究会委員 委員
2010年～	IEEE　Senior Member 委員
1995年～	IEEE

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	加藤　和夫	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
高校への出前授業の講師	2023年12月5日	水沢工業高等学校にて，「工学の技術でからだを見る」と題する授業を行った。
高校への出前授業の講師	2023年12月4日	盛岡南高等学校にて，「工学の技術でからだを見る」と題する授業を行った。
工学に関わる啓発活動の講師	2023年8月28日	東北学院大学工学総合研究所，および多賀城市教育委員会が主催の工学に関わる啓発活動において「からだの電気をみてみよう」と題したコラボ授業の講師を務めた。

現在の課題・目標	① 講義受講生の理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特にBYODを使った魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において，受講者が楽しく，興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 企業の研究員との研究発表やディスカッションを通して実社会との交流を深める教育を行う。
今年度の進捗状況	① 講義時間外に復習・予習課題を課し，講義内容の理解の定着を促すなど進捗が見られた。また，今年度はBYODを使った教材の開発を行うことができたため進捗が見られた。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において，新たな工学実験教材の開発・改良を行うことができたため進捗が見られた。 ③ 今年度は都合により企業の研究員との交流ができず，進捗は見られなかった。
来年度の進捗目標	① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特に今年度に引き続きBYODを使った教材の更なる改善を行い，魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 今年度に引き続き高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において，受講者が楽しく，興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 大学院生への教育・指導において，共同研究を行っている他大学，他分野の教員を交えての研究発表やディスカッションを通して，大学院生自身の専門分野に加え他分野の知識を深める教育を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Evaluation of the optimal averaging number during event-related potential estimation	単著	2023年	東北学院大学工学部研究報告，57(1)	Kazuo KATO	pp.2
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
認知機能を用いた精神負荷における θ 波出現の検討	共同	2024年3月	2024年電子情報通信学会総合大会(広島)	◎森田 大貴，加藤 和夫，金 惠鎭，金 義鎭	
機械学習を用いた2者択一式ブレイン・マシン・インターフェースにおけるエラー出力時の脳波判別	共同	2023年9月	生体医工学シンポジウム2023(熊本)	◎荒 翔太，加藤 和夫，門倉 博之，石川 敦雄	

背景に空間周波数特性を有する画像を配置した潜在的連合テスト遂行時における自発脳波の時間周波数解析	共同	2023年9月	生体医工学シンポジウム2023(熊本)	◎前田 蒼日, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	
視覚探索時における動きがある目標刺激の速度パラメータを変化させたときの視線軌跡の検討	共同	2023年9月	生体医工学シンポジウム2023(熊本)	◎紺野 圭吾, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	
異なる難易度の課題に対する精神的負荷の検討	共同	2023年9月	2023年度電気関係学会東北支部連合大会(岩手)	◎森田 大貴, 加藤 和夫, 金 惠鎭, 金 義鎭	
機械学習による動きがある目標刺激に対する視覚探索時の視線軌跡の評価	共同	2023年5月	第62回日本生体医工学会大会2023(名古屋)	◎紺野 圭吾, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	
刺激画像の背景に空間周波数画像を配置した潜在的連合テストに伴う事象関連電位	共同	2023年5月	第62回日本生体医工学会大会2023(名古屋)	◎前田 蒼日, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	
ブレイン・マシン・インターフェースに用いる先行刺激とエラー出力に対する事象関連電位	共同	2023年5月	第62回日本生体医工学会大会2023(名古屋)	◎荒 翔太, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を実施する。 ② 視覚探索時の視線軌跡の測定を行い, 機械学習の手法を用いて無意識的な探索の有無について検討する。 ③ エラー関連電位を用いたブレイン・マシン・インターフェースのシステム開発を進める。
今年度の進捗状況	① 視空間が観察者の大脳神経活動へ与える影響に関する研究を実施し, 学会発表を行った。また同テーマで論文を執筆し, 査読付き論文として学会への投稿を行った。 ② 動きがあるターゲットに対する視覚探索時の視線軌跡の測定を行った. このデータに対し機械学習の手法を用いて無意識的な探索の有無について検討し, 学会発表を行った。また同テーマで論文を執筆し, 査読付き論文として学会への投稿を行った。 ③ ブレイン・マシン・インターフェースのシステム開発を進め, 学会発表を行った。また同テーマで論文を執筆し, 査読付き論文として学会への投稿を行った。
来年度の進捗目標	① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を継続して実施する。来年度は, 新たな実験タスクを導入・実施することにより, 新しい知見を得ることを試みる。 ② 生体情報計測に基づき情動に関する研究を実施する。 ③ 生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究C)	2020年度～2024年度	共同(研究代表者)	空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価を行う.

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2016年8月～	国際複合医工学会 会員
2016年8月～	国際複合医工学会 評議員
2006年～	日本人間工学会 会員
2001年3月～	電気学会 会員
2000年5月～	日本生体磁気学会 会員
1999年～	日本磁気学会 会員
1994年10月～	電子情報通信学会 会員
1994年～	生体医工学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	川又　憲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
電気電子工学実験ⅠおよびⅡ，さらに電気機械設計製図の課題内容について改訂を行った。	2023年4月1日～2024年3月31日	電気電子工学の体系化された講義，演習，さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と，学習効果の向上に向け，当該分野のカリキュラム・マップの整備を継続して行っている。本年度は，2年生向け電気電子工学実験ⅠおよびⅡ，さらには4年生向け電気機械設計製図の課題内容について改訂を行った。
より効果的な知識定着をおこなうため，学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている．本年度は演習および実験系の科目において，自学による予習・復習課題の設定を行う。	2020年4月1日～	授業における学習内容，課題を持ち帰り，日常的に自主学習が行われるよう，授業システムの整備を継続して進めている．課題は，なるべく学生が取り組みやすいように工夫し，第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2020年度においては，動画によるオンデマンド授業資料の作成を行い，本年度ではこれらの資料の改訂を行い，より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。
学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため，専門分野の演習課題に対する取り組みの機会，ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ，確実な知識定着を図る。	2020年4月1日～	アクティブラーニングの一環として，演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え，板書による解法のプレゼンテーションを行わせ，他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて，より効果的な知識定着を行えるよう務めている．また，実験・実習系科目にける主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている．演習科目では，学生の問題解法力を向上させるため，効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し，オンデマンドにて公開した。
情報工学分野の体系化された講義，演習，さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と，学習効果の向上に向け，情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を行っている。	2020年4月1日～	体系化された情報通信工学分野において，知識伝達型の講義科目と，基礎問題の解決能力を身につける演習科目，さらには課題解決力を身についける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って，各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎Ⅰ，Ⅱならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し，カリキュラムと内容の整合の確認，改善点の抽出，次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
電気電子工学実験ⅠおよびⅡ，電気機械設計製図の教材資料の改訂	2023年4月1日～2024年3月31日	電気電子工学の体系化された講義，演習，さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と，学習効果の向上に向け，当該分野のカリキュラム・マップの整備を継続して行っている。本年度は，2年生向け電気電子工学実験ⅠおよびⅡ，さらには4年生向け電気機械設計製図の課題内容について再検討を行い強化するとともに，教材資料の改訂を行った。
情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ，Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの構築	2020年4月1日～	3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において，実験導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った．さらに，開講一年目にて実験課題の整備，実験指導書の作成，レポートの管理法などについて，授業の構築作業と実施を行った。また，本年度は実験に関する動画資料の作成を行い，実験指導の補助資料を充実させた。
情報基盤工学科科目「通信工学基礎Ⅰ，Ⅱ」に関する講義資料の整備と改訂	2020年4月1日～	「通信工学基礎Ⅰ」および「通信工学基礎Ⅱ」において，講義資料の整備を行った．さらに，内容の見直しを行い，資料の改定作業を継続して進めている。また，通信工学基礎演習Ⅰについては，演習解法に関する動画資料の作成を行った。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
早期入学試験合格者に対する専門教育導入資料の作成	2023年4月1日～2024年3月31日	入学前教育課題として専門教育への導入資料の作成
講義科目および実験科目に関する動画資料の作成	2020年4月1日～	感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため，各担当科目の動画配信資料の作成を行った。

ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用	2020年4月1日～	必修等の主要科目への出席を促すため，授業への出席をとることとしている。この際，学生証のバーコードをリーダーで読み取り，PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し，運用している。これにより，長期欠席者へのアラームや，出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Measurement of antenna gain for conical monopole antenna with double-Boltzmann tapered-line	共著	2023年12月	2023 Asia-Pacific Microwave Conference	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Shigeki Minegishi	pp.144-146
球電極対のESD に伴って発生する過渡電界強度の距離特性	共著	2023年10月	電子情報通信学会，電子情報通信学会論文誌B，J106-B(10)	川又 憲，石上 忍，藤原 修，スローカ ヤン	pp.639-645
Measurement of Impulsive Electromagnetic Field Caused by ESD Using A Folded Long-Hexagon Antenna and It's Transient Characteristics	共著	2023年9月	2023 International Symposium on Electromagnetic Compatibility - EMC Europe	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.1-4
Measurement of Radiation Patterns for Ultra-Broadband Folded Long-Hexagon Antenna	共著	2023年9月	2023 International Symposium on Electromagnetic Compatibility - EMC Europe	Shinobu Ishigami, Keita Kobayashi, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori	pp.1-6
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
独立成分分析による電磁雑音波形抽出の基礎検討	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学 常三島キャンパス)	石上 忍，相澤 舞，川又 憲，髙橋 直央	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」委員 会員
2020年4月～	電気学会基礎・材料部門 電磁環境技術委員会 会員
2009年4月～	電気学会 基礎・材料・共通部門 電磁環境技術委員会1号委員 会員
2006年4月～	日本学術会議電気電子工学委員会URSI分科会「電磁波の雑音・障害」小委員会（URSI-E委員会） 委員，2022-2024副委員長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	金　義鎭	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年～	映像情報メディア学会　※ 東北支部庶務幹事
2010年4月～	映像情報メディア学会　※ 会員
2008年～	コンピュータ利用教育学会 会員
2006年～	教育システム情報学会 会員
1998年～	電子情報通信学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	呉　国紅	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
東北学院大学電気電子工学実験（Ⅲ）(Ⅳ）試験	2023年11月～2023年12月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
第21回 東北地域研究交流会にて講演	2023年11月6日	東北学院大学の電気電子工学科における電力・エネルギー分野での教育研究の取り組みについて説明した
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・授業中に学生とのコミュニケーション時間を増やすこと ・授業時間以外で学生とのコミュニケーションの機会をもっと多く作ること ・自分の研究室所属以外の学生達とのコミュニケーションも増やすこと ・アクティブラーニングの実施拡大 ・授業のためのDX技術の活用
今年度の進捗状況	・特に専門科目のよう講義では、学生がそもそも持っている知識の少ないため、積極的に質問したり、発言したりすることが少ない傾向がある。これを考慮して、授業中に学生が答えやすい質問を用意し、状況に応じて教員のほうが学生に答えさせる対策などを講じて、授業の雰囲気を活発させる努力をした。 ・学生主催のイベント、スポーツ大会、合宿に積極的に参加し、また食堂や学校活動の場において、主動的に学生と会話交流を行い、学生の心情・考えなどを理解することを努力している。 ・Manabaの活用や配布資料のディジタル化を活用している
来年度の進捗目標	今までに学生に評価された点を継続しつつ、更に学生との接触する機会を作ること。 DXやAI技術の更なる導入及び活用を図ること。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
ハイブリッドマイクログリッドシステムにおける電圧安定化協調制御 に関する実験検討	共著	2024年1月	東北学院大学工学研究報告書, 57(1)	五十嵐隼斗、呉　国紅	pp.1-6
多端子自励式HVDC構成の洋上風力送電システムにMMCを適用した場合の安定運転特性の比較検討	共著	2024年1月	東北学院大学工学研究報告書, 57(1)	小室　陸、呉　国紅	pp.7-14
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
ハイブリッドマイクログリッド実験システムを用いた母線電圧の安定化効果に関する検討	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学)	五十嵐 隼斗 呉 国紅	
半導体直流遮断器を適用した洋上風力発電システムの直流送電回路事故時の電気特性に関する検討	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学)	長南　英樹 呉　国紅	
PMSG及び直流集電方式採用の多端子自励式HVDC洋上風力送電システムの安定運転に関する研究	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学)	小室　陸 呉　国紅	

BWOAとDEアルゴリズムを用いたマイクログリッドの最適経済運用計画手法に関する研究	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学)	髙野 光二 呉 国紅	
太陽光発電が導入された配電系統におけるトランスレスSTATCOMによる不平衡電圧補償効果の検討	共同	2024年3月	令和6年電気学会全国大会(徳島大学)	田村 祐介 呉 国紅	
An Experimental Study of Voltage Stabilization on Hybrid Microgrid System	共同	2023年8月	電気学会東北支部連合大会(岩手県盛岡市)	Hayato Igarashi Guohong Wu	
A Study of Steady-state Operational Characteristics of Multi-Terminal HVDC_Light Offshore Wind Power System with PMSG and AC Power Collection	共同	2023年8月	電気学会東北支部連合大会(岩手県盛岡市)	Riku Komuro Guohong Wu	
DFIG 風力発電機を用いた自励式 HVDC 構成の洋上風力発電システムに関する検討	共同	2023年8月	電気学会東北支部連合大会(岩手県盛岡市)	長南 英樹 呉 国紅	
マイクログリッド最適運用計画における DE と MILP 手法の比較検討	共同	2023年8月	電気学会東北支部連合大会(岩手県盛岡市)	髙野 光二 呉 国紅	
5段構成トランスレス STATCOM による配電系統電圧補償効果の検証	共同	2023年8月	電気学会東北支部連合大会(岩手県盛岡市)	田村 祐介 呉 国紅	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年4月～2024年3月	日本パワーアカデミー 運営委員会委員
2022年4月～2024年3月	パワーアカデミーPA運営委員 運営参加・支援
2018年12月～	IEEE Tran. On Smart Grid論文審査委員会 委員
2018年9月～	IEEE Tran. On Sustainable Energy論文審査委員会 委員
2017年10月～	IET Generation, Transmission & Distribution論文審査委員会 委員
2017年4月～	International Tran. on Electrical Energy Systems論文審査委員会 委員
2016年8月～	東北学院大学工学総合研究所中学校啓発活動 講師, 実演
2016年8月～	日本電気学会上級会員 会員
2015年11月～	IEEE Senior Member 会員
2012年8月～	International Journal of Smart Grid and Clean Energy 委員会 編集委員会委員
2011年8月～	International Journal of Science and Engineering 委員会 編集委員会委員
2009年8月～	電気学会東北支部連合大会実施委員会 パネル司会・セッションチェア等
2007年11月～	日本電設工業協会と教職員・学生の懇談会 情報提供, 運営参加・支援
2006年8月～	電気学会電力・エネルギー部門YPC審査委員 会員
2005年8月～	電気学会電力・エネルギー部門論文誌審査委員 会員
1996年4月～	日本電気学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
グローバル教育センター長 国際交流部長	

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	佐藤　文博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔講義に関する効果的な手法	2020年～	オンデマンド，オンライン講義における特性を最大限に利用した，学習意欲を高める工夫を行っている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
連続中継送電コイルを利用したEV用走行中非接触給電システムに関する検討	共著	2023年	電気学会論文誌A（基礎・材料・共通部門誌），143(4)	齋藤陽，大石勇太朗，宮原敏，佐藤文博，松木英敏	pp.173-179
漏洩磁界低減コイル接続構成に関する検討	共著	2023年	電気学会論文誌A（基礎・材料・共通部門誌），143(7)	横澤将貴，小嶋久斗，佐藤文博，宮原敏，松木英敏，稲田賢，佐々木秀	pp.251-257
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
細胞培養を想定した培養シャーレ管理システムのデバイスと温度管理に関する基礎検討	共同	2024年3月	令和6年東北地区若手研究者研究発表会(郡山)	城前りりか，原唯，横澤将貴，佐藤文博，伊藤修	
Study on Wireless Power Transmission System for Real-Time Telemetry of Mouse Activity and Body Temperature	共同	2023年10月	68th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM)(Dallas, Texas)	Tatsuki Omori, Fumihiro Sato, Yoshiki Furuya and Syu Sasaki	
Design of continuous repeater power transmission coil for wireless power transfer system for EVs with consideration of vehicle deviation	共同	2023年10月	68th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM)(Dallas, Texas)	A. Saito, Y. Oishi, S. Miyahara, F. Sato, H. Matsuki	
動物実験を想定した生体情報取得装置へのワイヤレス給電に関する基礎的検討	共同	2023年9月	令和5年電気学会基礎・材料・共通部門大会(愛媛)	大森達貴，佐藤文博，古屋善紀，佐々木秀	
EV走行中非接触給電システムにおける中継コイルを利用した送電側コイル構成に関する検討	共同	2023年9月	令和5年電気学会基礎・材料・共通部門大会(愛媛)	齋藤陽，大石勇太朗，宮原敏，佐藤文博，松木英敏	

自立航行ローンを想定したワイヤレス双方向給電システム構築に関する基礎的検討	共同	2023年9月	令和5年電気学会基礎・材料・共通部門大会(愛媛)	大石勇太朗, 横澤将貴, 宮原敏, 佐藤文博, 相良健一, 佐々木秀	
小型電動モビリティとワイヤレス給電の運用に関する電気的特性の検討	共同	2023年9月	令和5年電気学会基礎・材料・共通部門大会(愛媛)	小嶋久斗, 横澤将貴, 佐藤文博, 宮原敏, 伊藤修, 松木英敏	
都市部における電動小型モビリティの社会実装を想定したワイヤレス給電適用に関する研究	共同	2023年8月	令和5年電気関係学会東北支部連合大会(岩手)	小嶋久斗, 横澤将貴, 佐藤文博, 宮原敏, 伊藤修, 松木英敏, 稲田賢, 安部拓馬	
AGV移動中給電における周囲漏洩磁界低減用キャンセルコイルシステム構築に関する検討	共同	2023年8月	令和5年電気関係学会東北支部連合大会(岩手)	横田賢佑, 横澤将貴, 佐藤文博, 相良健一, 佐々木秀	
Study of a Cancellation Coil for Reducing Magnetic Field Leakage in Contactless Power Transfer in Motion	共同	2023年5月	International Magnetic Conference (INTERMAG) (Sendai,Japan)	M. Yokosawa, F. Sato, S. Miyahara, H. Matsuki, K. Inada, T. Abe and S. Sasaki	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

受電装置、実験動物生体情報取得装置及び実験動物生体情報取得システム	特許7270257	2023年4月27日	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	電気設備学会東北支部役員 会員
2011年4月～	国土交通省宮城ブロック総合委員 委員
2010年～	照明学会東北支部幹事 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	嶋　敏之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
ナノテクノロジー工学に最先端技術を理解するための自学自習時間を取り入れた	2021年4月1日～	3年生向けの講義において，次世代薄型ディスプレイ(FPD)のスタンダードになりうる薄膜作製技術についての理解を深めるため、Webにより調査させ、分析させた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	予習・復習を行っていない学生が大半を占めるが、如何に授業の内容を理解させるかの習熟度の向上を目指している。BYODも取り入れ、リアルタイムで学生の反応を感じ講義に活かす工夫を行っている。
今年度の進捗状況	コロナ禍がほぼ収束し、対面での講義に移行したが、対面に不慣れな学生の対応も考える必要がある。そのため、BYODにより、双方向コミュニケーションが取れるようアクティブラーニングを行った。
来年度の進捗目標	講義では出来る限り学生とコミュニケーションがとれるように、積極的な姿勢で行い、マンツーマンで常に対応できる研究室の学生には満足度が向上できるようにさらに務める。しかしながら、全学的にオンライン講義も開始したことから、工夫して双方向でやり取りが可能なアクティブラーニングを取り入れたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Enhancement of Coercivity for Sm(Fe-Co)12-B Thin Films by Introduction of Sm Seed Layer,	共著	2024年3月	Journal of Magnetic Society Japan, 48	Y. Mori, S. Nakatsuka, S. Hatanaka, M. Doi and T. Shima	pp.17-20
Increase in coercivity for Sm(Fe-Co)-B thin films due to diffusion of Al element from cap layer	共著	2023年7月	Journal of Magnetic Society Japan, 47	Y. Mori, S. Hatanaka, M. Kambayashi, S. Nakatsuka, K. Hirayama, M. Doi and T. Shima	pp.103-107
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Cu添加によるSm(Fe-Co)12-B薄膜の磁気特性の向上	共同	2024年3月	日本金属学会2024年春期(第174回)講演大会(東京理科大学葛飾キャンパス)	森 裕一, 中塚 奏賀, 伊藤 慎吾, 土井 正晶, 嶋 敏之	
Nbシード層導入によるSm(Fe-Co)薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年3月	日本金属学会2024年春期(第174回)講演大会(東京理科大学葛飾キャンパス)	中塚 奏賀, 森 裕一, 土井 正晶, 嶋 敏之	
Cr及びCuの複合添加によるSmCo5薄膜の保磁力向上	共同	2024年3月	日本金属学会2024年春期(第174回)講演大会(東京理科大学葛飾キャンパス)	三浦 勇人, 村形 幸作, 土井 正晶, 嶋 敏之	

Suppression of soft magnetic phase formation and refinement of crystal orientation in Sm(FeCo)-B thin films by introducing a seed layer	共同	2023年12月	Advanced Materials Research Grand Meeting (MRM2023, IUMRS-ICA2023)(Kyoto, Japan)	Y. Mori, S. Nakatsuka, S. Hatanaka, M. Doi and T. Shima	
Enhancement of coercivity for microfabricated Sm(Fe-Co) dot arrays with Sm seed layer	共同	2023年11月	he 11th International Conference on Advanced materials and Processing (PRICM11)(Jeju, Korea)	S. Hatanaka, Y. Mori, S. Nakatsuka, S. Ito, M. Doi, T. Shima	
Effect of additive elements on the crystal structure and magnetic properties for L10 Mn-Ga thin films	共同	2023年11月	The 11th International Conference on Advanced materials and Processing (PRICM11)(Jeju, Korea)	Y. Miura, T. Yokoe, M. Doi and T. Shima	
Enhancement of coercivity for Sm(Fe-Co)-based thin films through the infiltration of the elements	単独	2023年11月	The 11th International Conference on Advanced materials and Processing (PRICM11)(Jeju, Korea)	T. Shima	
Smシード層導入による粒界拡散Sm(Fe-Co)12-B 薄膜の保磁力向上	共同	2023年9月	第47回日本磁気学会学術講演会(大阪大学 豊中キャンパス)	森裕一, 中塚奏賀, 畑中辰汰朗, 土井正晶, 嶋敏之	
シード層導入によるSm(Fe, Co)薄膜の構造と磁気特性	共同	2023年9月	日本金属学会2023年秋期(第173回)講演大会(富山大学五福キャンパス)	中塚奏賀, 森裕一, 土井正晶, 嶋敏之	
Sm(Fe-Co)正方形ドット配列パターンの高保磁力化	共同	2023年9月	日本金属学会2023年秋期(第173回)講演大会(富山大学五福キャンパス)	畑中辰汰朗, 中塚奏賀, 伊藤慎梧, 土井正晶, 嶋敏之	
Fe2+xMn1-xGey合金の作製とその磁気特性	共同	2023年9月	日本金属学会2023年秋期(第173回)講演大会(富山大学五福キャンパス)	渥美 広倫, 土井 正晶, 嶋 敏之	
元素添加によるSmCo5薄膜の構造と磁気特性	共同	2023年9月	日本金属学会2023年秋期(第173回)講演大会(富山大学五福キャンパス)	三浦 勇人, 横江 翼, 村形 幸作, 土井 正晶, 嶋 敏之	
軽元素添加FeMnGa薄膜の格子伸長による磁気特性の変化	共同	2023年9月	日本金属学会2023年秋期(第173回)講演大会(富山大学 五福キャンパス)	横江翼, 土井正晶, 嶋敏之	
Exploring coercivity limit in SmFe12-based thin films	共同	2023年9月	27th International Workshop on Rare Earth and Future Permanent Magnets and their Applications (REPM 2023) (Birmingham, United Kingdom)	H. Sepehri-Amin, Y. Mori, A. Bolyachkin, Y.K. Takahashi, T. Ohkubo, K. Hono, T. Shima	
Suppression of the formation of soft magnetic phase for Sm(Fe-Co)12-B thin films by introduction of seed layer,	共同	2023年9月	27th International Workshop on Rare Earth and Future Permanent Magnets and their Applications (REPM 2023) (Birmingham, United Kingdom)	Y. Mori, S. Nakatsuka, M. Kambayashi, S. Hatanaka, M. Doi and T. Shima	
Structure and magnetic properties for Fe-Mn-Ga thin films by additive elements	共同	2023年8月	The 6th International Conference of Asian Union of Magnetics Society 2023 (IcAUMS 2023)(Bali, Indonesia)	T. Yokoe, M. Doi, T. Shima	
Improvement of coercivity for microfabricated Sm(Fe-Co)-B square dot array patterns	共同	2023年8月	The 6th International Conference of Asian Union of Magnetics Society 2023 (IcAUMS 2023)(Bali, Indonesia)	S. Hatanaka, Y. Mori, M. Doi, T. Shima	
Enhancement of coercivity in anisotropic Sm(Fe-Co)12-B thin films through the grain boundary diffusion with Al element,	共同	2023年8月	The 6th International Conference of Asian Union of Magnetics Society 2023 (IcAUMS 2023)(Bali, Indonesia)	Y. Mori, M. Kambayashi, M. Doi and T. Shima	
Effect of additive elements on the crystal structure and magnetic properties for FeMnGa thin films	共同	2023年5月	Intermag 2023(Sendai)	T. Yokoe, M. Doi, T. Shima	

Effect of Cu addition on the crystal structure and magnetic properties for Mn-Ga thin films	共同	2023年5月	Intermag 2023(Sendai)	Y. Miura, M. Doi, T. Shima	
Increase in coercivity of Sm(Fe-Co)12-B thin films by diffusion from trench side	共同	2023年5月	Intermag 2023(Sendai)	S. Hatanaka, Y. Mori, M. Doi, T. Shima	
Achievement of high coercivity for Sm(Fe-Co)-B thin films by appropriate heat treatment after Al deposition	共同	2023年5月	Intermag 2023(Sendai)	Y. Mori, M. Kambayashi, M. Doi, T. Shima	
Suppression of the formation of soft magnetic phase in Sm(Fe0.8Co0.2)12-B thin films by introducing Sm seed layer	共同	2023年5月	Intermag 2023(Sendai)	S. Nakatsuka, Y. Mori, M. Doi, T. Shima	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	研究活動を行うのに十分な時間を確保するのが非常に難しいと感じている。また、エビデンスを残すための事務手続きが多いと相変わらず感じている。何とか上手に教育活動との両立を目指したい。これまで、大学院生の家計の負担軽減ならびに研究に集中できるように外部資金から出来る限り謝金として学生に拠出している。五橋キャンパスへ移転したことから研究環境の再構築を行い、学生の基礎学術レベルの向上を図ると同時に、出来る限り多くの研究成果を残す努力をする。
今年度の進捗状況	コロナ禍がほぼ収束したが、燃油サーチャージの高騰により容易に国際会議へ出席するのが困難になった。そのため、外部資金確保のために精一杯努力している。
来年度の進捗目標	研究活動の活性化のために、対外的な共同研究活動の再開する。また、注目に値すべき成果が得られるようにを努力を継続的に行う予定である。また、移転に伴う研究環境の整備を行い、出来る限り多くの研究成果を残す努力を引き続き行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究 データ創出・活用型マテリアル研究開発プロジェクト	2022年度～2030年度	共同(研究協力者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本金属学会 東北支部理事
1990年4月～	日本金属学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当せず。		
今年度の進捗状況	該当せず。		
来年度の進捗目標	該当せず。		

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

工学研究科長、研究環境改善推進委員会委員、その他各種委員

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	土井　正晶	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	杤　修一郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年1月～	日本鉄鋼協会 会員
2009年10月～	IEEE (IEEE Magnetics Society) 会員
2001年5月～	応用物理学会 会員
1996年～	日本磁気学会 会員
1995年7月～	電気学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	原　明人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
スライドと板書による理解度の向上	2023年4月1日～2024年3月21日	スライドと板書による理解度の工場
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Vertical p-Channel Poly-Ge TFT for CMOS Application on Glass Substrates	共著	2023年10月	IEEE Explore, https://ieeexplore.ieee.org/abstract/document/10264931	Kotaro Kusunoki, Kosei Suzuki, Sho Suzuki and Akito Hara	pp.178-179
CMOS Inverter with High-k 4-Terminal Poly-Si TFTs on Glass Substrates	共著	2023年10月	IEEE Explore, https://ieeexplore.ieee.org/abstract/document/10264939	Kaisei Nomura, Akito Hara	pp.180-181
Performance Variation With Changes in Ultrathin Ge Film Thickness of Self-Aligned Double-Gate Cu-MIC Low-Temperature Poly-Ge TFTs on Glass Substrates	共著	2023年4月	IEEE Explore, doi.org/10.1109/EDTM55494.2023.10103105	Sho Suzuki; Akito Hara	pp.---
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
プラスチック上のダブルゲートp-ch Cu-MIC poly-Ge TFT およびCMOSインバータ実現可能性の検討	共同	2024年3月	第71回応用物理学会春季学術講演会(東京都市大学)	栗原義人、鈴木 翔，土屋俊之、奥山哲雄、原明人	pp.23p-12K-13
ガラス基板上LSIに向けた異種半導体Complementary TFTの開発	共同	2024年3月	第71回応用物理学会春季学術講演会(東京都市大学)	伊藤 悠人、永吉 輝央、鈴木 翔、原 明人	pp.23p-12K-12
ガラス基板上の縦型4端子poly-Si 薄膜トランジスタ	共同	2024年3月	第71回応用物理学会春季学術講演会(東京都市大学)	鈴木康聖、楠浩太朗、原明人	pp.23p-12K-11
ガラス基板上の4端子縦型poly-Si薄膜トランジスタのpHセンサ応用	共同	2024年3月	生体医歯工学共同研究拠点　研究会(東京医科歯科大学)	鈴木康聖、新田誠英、原明人、田部井哲夫	
ガラス基板と貼り合わせたプラスチック上のダブルゲート多結晶ゲルマニウム薄膜トランジスタ	共同	2024年3月	東北地区若手研究者研究発表会(日本大学工学部)	栗原 義人，鈴木翔，原明人	pp.YS-22F12
ガラス基板上の疑似CFETに向けた異種半導体の自己整合三次元集積	共同	2023年12月	応用物理学会東北支部学術講演会(岩手)	永吉 輝央、伊藤 悠人、鈴木 翔、原 明人	

銅による金属誘起結晶化を用いた縦型構造p-ch poly-Ge薄膜トランジスタの特性	共同	2023年12月	応用物理学会東北支部学術講演会(岩手)	楠 浩太朗、鈴木 翔、鈴木 康聖、原 明人	
CMOS Based on Self-Aligned Cu-MIC Double-Gate Poly-Ge TFT on Glass Substrates	共同	2023年12月	THE INTERNATIONAL DISPLAY WORKSHOPS, 2023(新潟 朱鷺メッセ)	Sho Suzuki and Akito Hara	pp.301
Four-Terminal Poly-Si Vertical TFTs on Glass Substrates	共同	2023年12月	THE INTERNATIONAL DISPLAY WORKSHOPS, 2023(新潟 朱鷺メッセ)	Kosei Suzuki, Kotaro Kusunoki and Akito Hara	pp.305
Development of 4-terminal polycrystalline silicon thin-film transistors with high-k gate dielectric on glass substrates and their application as pH sensors	共同	2023年11月	The 8th International Symposium on Biomedical Engineering International Workshop on Nanodevice Technologies(Hiroshima University)	Masahide Nitta, Akito Hara and Tetsuo Tabei	
ガラス基板上の疑似CFETに向けたSiとGeを利用した自己整合三次元集積	共同	2023年11月	薄膜材料デバイス研究会(京都)	永吉 輝央、伊藤 悠人、鈴木 翔、原 明人	pp.09a-O01
500℃プロセスによって形成したDG Cu-MIC poly-Ge TFTによるCMOSインバータ	共同	2023年11月	薄膜材料デバイス研究会(京都)	鈴木 翔、原 明人	pp.10a-O01
ガラス基板上の4端子縦型多結晶シリコン薄膜トランジスタ	共同	2023年11月	薄膜材料デバイス研究会(京都)	鈴木 康聖、楠 浩太朗、原 明人	pp.09a-O01
ガラス基板上に400℃プロセスで形成した p-ch ダブルゲートCu-MIC poly-Ge薄膜トランジスタ	共同	2023年9月	第84回応用物理学会秋季学術講演会(熊本)	鈴木 翔, 原 明人	pp.20p-B201-6
ガラス基板上に形成された4端子poly-Si TFTのVth制御性に対する結晶品質の影響	共同	2023年9月	第84回応用物理学会秋季学術講演会(熊本)	伊藤悠人, 永吉輝央, 野村海成、原明人	pp.20p-B201-5
Double gate thin-film transistors on glass substrates	共同	2023年4月	IEICE SDM2023-16(沖縄), vol. 123, no. 8,	Akito Hara, Kaisei Nomura, Akihisa Nagayoshi, Masahide Nitta, Syo Suzuki, Yuto Ito	pp.59-62

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
その他の補助金・助成金	2023年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究C	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	応用物理学会 東北支部 幹事
	応用物理学会
	電子情報通信学会
	日本表面真空学会
	日本物理学会

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
セミコンジャパン 2023	東京ビックサイト	2023年12月～2023年12月	東洋紡(株)のブースにて、東洋紡様が開発したプラスチック上に作製した薄膜トランジスタを展示

現在の課題・目標	

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
理数基礎教育センター　センター長	

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	桑野　聡子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義におけるアクティブラーニング的学習方法の試み	2020年5月～	実験実習講義において、実験動画を作成し、さらにmanabaにおける実験内容の振り返りテストを作成した。このことにより受講生に授業として動画を視聴するだけでなく、テストに回答する為に、動画を複数回に渡り確認させることで学習効果を深めさせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
自然科学実験ファンダメンタルズ　改訂版第7版（東北学院大学工学部）について、学生が予習・復習しやすくなるように、実験動画に加え、オンラインによる小テスト、講義解説を行った。	2020年5月～	予習・復習テストの課題を出すことで、円滑な修学に繋げた。また、それらのテストの解説を実験内容の解説に加えて、説明した。加えて、基礎化学演習などの他の関連科目の講義において、当実験講義についての内容を解説することで、実験における予習・復習が円滑に進む様にした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	シドニー大学における化学実験教育について、実験実施項目や教育理念等を学んだ。現地では化学関連の学部初年度生、化学に関連しない学部初年度生、ハイレベルコースの3つのコースについて実施されている実験を見学することが出来た。学生の意欲・成績に合わせた専門性を高める教育方針を、ジェネラル教育をモットーとしたメルボルン方式と比較することで、本学における教育方針や実験の難易度に関して、次年度以降における参考とした。
来年度の進捗目標	シドニー大で学んだ化学実験項目について、さらに理解を深め、本学での実験講義に反映出来るように実験項目を検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Urethane-Water-Cellulose Composite: Improving Mechanical Properties of Urethane-Based Photorucable Resin for Stereolithography 3D-Printing	共同	2023年11月	2023 MRS Fall Meeting & Exhibit(Boston)	◎Akira Kudo, Atsuya Fujita, Kazuya Eguchi, Kota Matsuhashi, Kota Toyama, Takeharu Yoshii, Dmitri Valentinovich Louzguine, Hirotomo Nishihara, Mingwei Chen, Satoko Kuwano	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	チタン系ナノワイヤーの成長メカニズムの解明。

今年度の進捗状況	シドニー大学においてチタン系ナノワイヤーのイオン交換相互作用および原料の構造解析について、現地スタッフとの共同研究により、詳細を調査した。また、透過型電子顕微鏡を中心としたEELS, EDS、XPSの使用方法や試料の作製方法についても技術や知識を身につけることが出来た。
来年度の進捗目標	帰国後も引き続きシドニー大学との共同研究を実施することで、ナノワイヤーの新しい機能について、研究を推進させる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年2月～	日本物理学会 会員
2009年9月～	日本表面科学会会員 会員
2008年5月～	日本金属学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	佐々木　義卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
初年時基礎科目における学習支援	2023年4月～2024年3月	工学部1年生の必修科目である微分積分学や線形代数学の授業において、毎時、授業時間の1/3程度は理解を深めるための演習時間に設定している。この時間を利用して直接指導を行うとともに、学生の理解度の把握にあたった。また、授業時間外にも適時時間を設けて学生の学習サポートを行ったり、復習用の教材を整備することで、学習内容の定着・深化に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の習熟度把握に努め、とりわけ学習支援が必要な学生に適時指導を行うことで学力向上を図る。
今年度の進捗状況	演習の時間を通じて、学生の習熟度把握ができるようになってきた。また、復習する機会を増やすように、毎時ホームワークの教材を提供するなどして、学生の学修内容の定着を図っている。一方、授業内容と受講生の基礎知識との間のギャップも見えてきており、改善していく予定である。
来年度の進捗目標	授業内容を精査するとともに、学生の学力向上に適う教材を作成する。適切な復習・予習が行える機会・環境を整備していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Evaluation of functional relation formula for the Clausen and Glaisher functions and multiple L-values	共著	2023年9月	Springer, Lithuanian Mathematical Journal, 63	Yayoi Nakamura, Yoshitaka Sasaki	pp.382-395
The tangent symmetry of the multiple zeta-function	単著	2023年6月	Springer, The Ramanujan Journal, 62	Yoshitaka Sasaki	pp.141-160
Evaluation of multiple zeta values for various limiting processes at non-positive integers	単著	2023年5月	Springer, Research in Number Theory, 9(38)	Yoshitaka Sasaki	pp.1-25
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・種々の多重ゼータ関数の整数点における特殊値の性質の解明 ・多重ベルヌーイ数および関連するゼータ値の性質の解明 ・ゼータMahler測度を通じた多重ゼータ値の性質の解明
今年度の進捗状況	・Youngの関数に付随するゼータ値の明示公式や双対性を解明した。 ・多重ベルヌーイ多項式に対応する関数の関数等式を証明した。 ・多重Mahler測度と多重T値の関係を解明した。
来年度の進捗目標	・多重Mahler測度と多重サイン関数、代数曲線に付随する多重ゼータ値の関係の解明

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2006年10月～		日本数学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
・授業改善のための学生アンケート実施委員 ・教職課程センター運営委員 ・eポートフォリオ部会 ・工学部敬和会幹事			

2023年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	鈴木　仁志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自然科学実験ファンダメンタルズ　物理実験　金属の電気抵抗　実施試験	2023年4月1日	自然科学実験ファンダメンタルズ　物理分野の実験　金属の電気抵抗装置立ち上げ、実施試験を行った
2．作成した教科書、教材、参考書		
21世紀のキーテクノロジーを学ぶⅡテキスト	2022年7月21日～	電子顕微鏡で目に見えない物質の形態、構造を調べてみよう　～回折現象を用いた物質の解析～
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
理数基礎教育センター報告書　相談員報告	2024年3月	2023年度新カリキュラムに導入された授業「ベーシック物理学」の受講生の成績推移について、分析して報告を行った。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
工学基礎教育センター相談員	2020年4月1日～	講義の分からない学生に対する補助教育業務　週1コマ
電気電子工学科グループ主任	2019年4月1日～	

現在の課題・目標	学生の物理学の学習を支援し、2年次以降の専門科目についていけるように学力をつけてもらう。
今年度の進捗状況	全面的に対面授業が再開されることで、学生の反応を直に感じられるようになり、授業進度、予習問題・宿題の難易度調整等を効果的に行うことができるようになった。
来年度の進捗目標	「ベーシック物理学」など2年目となる新科目の内容確立を行う。授業を通して学生に物理学の理解と、物理学の知識を道具として身に着けられる教育を目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
V-SiO系粒子の形態と構造に関する研究	共同	2024年3月	日本物理学会2024年春季大会（オンライン）	◎鈴木仁志，大泉優真，高橋涼太	
Ni-Si系，Ni-SiO2系粒子の形態と構造に関する研究	共同	2023年12月	第52回結晶成長国内会議(ウィンクあいち)	◎鈴木仁志，小宮健悟	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・彗星状粒子の成長機構に関する仮説の定量的評価法を検討する。 ・彗星状粒子が生成される系の探索を行う。 ・物質間の蒸気圧差から、粒子成長環境の議論を進める。 ・彗星状粒子成長機構を薄膜成長に適用した場合の研究を進める。 ・新型電子顕微鏡の慣熟を早期におこない、研究活動の促進を行う。

今年度の進捗状況	・Au-SiO系、Au-S系薄膜に彗星状粒子成長機構と同様の現象が起こるか実験を行った。 ・Mg-SiO2系、Al-SiO2系、Au-SiO2系、V-SiO2系、Sc-SiO2系に対して粒子の形態観察を行った。 ・Mg-Si系、Au-Si系、Sc-Si系、V-Si系に対して粒子の形態観察を行った。
来年度の進捗目標	・彗星状粒子成長機構に関する仮説の定量的評価法を検討する。 ・Mg-SiO2系、Mg-SiO系彗星状状粒子の元素分析、高分解能観察を行い、粒子形態の解析を行う。 ・宇宙起源物質粒子成長について検討する。 ・金属-SiO系薄膜を用いて彗星状粒子成長機構と同様の現象が起こるか実験を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2022年度～2023年度	共同(研究分担者)	ガラス基板上ではpoly-Si TFTやpoly-Ge TFTが有効である。これらを安価かつ簡単なプロセスで3次元自己整合集積する。本申請では、この課題に対し、代表者が背面露光技術を用いて独自開発してきた4T n-ch poly-Si TFT技術やDG p-ch poly-Ge TFT技術を更に発展させ、背面露光によるゲート自己整合技術により、異種TFTの3次元自己整合集積を実現する。これにより、安価ガラス基板上で低価格・低消費電力・高集積デバイスを実現するための基礎技術を確立する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年9月～2023年9月	日本物理学会第78回年次大会（2023年）領域9学生優秀発表賞審査委員 審査・評価
2009年2月～	日本地球惑星科学連合会員 委員
2008年～	中学生対象　工学に関する啓発活動 講師
2003年6月～	日本結晶成長学会員 会員
2000年1月～	日本物理学会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

工学総合研究所副所長、理数基礎教育センター副所長、理数基礎教育センター相談員、電気電子工学科入学前教育担当、教育の質保証及び改善小委員会委員、工学部総務委員会広報・ホームページ・オープンキャンパス担当、プレースメントテストテスト物理作成・採点・クラス分け担当、自然科学実験ファンダメンタルズ（電気電子、環境建設）取りまとめ

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	李　相勲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1. 構造力学Ⅰおよび演習，構造力学Ⅱ，地震工学Ⅱ，環境工学設計製図などほとんどの担当科目に，図や画像等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れた。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示した。また，個々の課題等の意図を学生に伝えた。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。-->特に構造力学Ⅰおよび演習と構造力学Ⅱにおいてこまめに小テストや課題出題を行い学生の理解度を確認している。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。--> 全担当教科について授業中のところどころに質問があるか確認している。また，授業街ではmanabaの個人指導を通して，もしくは直接研究室に来てもらい質問に対する回答を行っている。
来年度の進捗目標	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。--> 引き続き現在行っていることを実施する。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。-- >引き続き現在行っていることを実施する。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。-->引き続き現在行っていることを実施する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Self-Healing Performance Evaluation for Concrete Beams with Artificial Inner Tunnel and Repair Agents by Non-Destructive Testing	共著	2024年2月	Springer, RILEM Bookseries(Smart & Sustainable Infrastructure: Building a Greener Tomorrow), Vol 48	Sanghun LEE, Sanjay PAREEK	pp.827-842
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

転がり免震における緩衝材による残留変位低減効果	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	鳴海 有咲, 今野 倖太朗, 李 相勲	pp.I-27
サーマルカメラによる鋼材の塑性歪における温度上昇に関する研究	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	佐藤 優大, 今野 倖太朗, 李 相勲	pp.I-19
塩害および凍害による RC床版の複合劣化に対する測定システムの構 築	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	吉田 慎悟, 小松 柊希, 李 相勲	pp.I-11
塩害及び凍害による RC床版の複合劣化の振動測定に関する解析的研 究	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	比内 彩音, 李 相勲	pp.I-10
プレストレストコンクリート梁に対する自己修復システムの適合性検討	共同	2024年3月	令和 5 年度 土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	安達慎哉, 門脇良樹, 渡邉 楓, 李 相勲	pp.I-6

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	1. PCコンクリートに対する実験を共同研究にて行い、自己修復システムの構築と利用可能な非破壊検査手法を検討する。前年度RCはりに対する自己修復システムの研究成果を論文集に発表する。 2. 振動台実験を通して転がり免震システムを検討する。キーワードは調和振動および充填材である。
今年度の進捗状況	1. PCコンクリートに対する実験を共同研究にて行い、自己修復システムの構築と利用可能な非破壊検査手法を検討し、一定の成果を得た。その成果を土木学会東北支部技術研究発表会にて発表した。また、前年度のRCはりに対する自己修復システムの研究成果を論文集に発表した。 2. 振動台実験を通して転がり免震システムを検討し、振動台実験をプロセスを取得した。また、実験の成果を土木学会東北支部技術研究発表会にて発表した。
来年度の進捗目標	1. 前年度に引き続き追加のPCコンクリートに対する実験を共同研究にて行い、自己修復システムの構築と利用可能な非破壊検査手法を検討する。前年度の成果を論文集に発表する。 2. 振動台実験を通して転がり免震システムを検討する。キーワードは地震動入力・充填材である。また、前年度の成果を論文集に発表する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～2023年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	途上国の組積造建物耐震化に向けた滑り免振機構の開発と社会実装基盤の整備

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	建築学会 会員
2015年10月～	土木技術奨励賞選考委員会委員 委員
2012年～	コンクリート教会 会員
2010年4月～	非破壊検査協会 鉄筋コンクリートの非破壊検査試験部門委員会 幹事
2010年～	非破壊検査協会 会員
2006年4月～	韓国防災学会 会員
1999年4月～	土木学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	井川　望	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	石川　雅美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1）コンピュータプログラミング	2020年4月～	1）全15回の授業のうち11回の課題を与え，提出状況を確認している。 2）課題については，授業時間中に20分程度の時間を与えて，学生自身が考え理解する機会を設けた。 3）授業開始時に，前回の課題の解説を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
橋台におけるデジタルツインモデルの構築	共同	2024年3月	土木学会東北支部技術研究発表会2023(岩手県)	大場千裕，青木佑介，長谷川隆一，東川佳弘，石川雅美	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年12月	インフラメンテナンス国民会議　市区町村長会議 パネリスト，コメンテーター
2023年12月	インフラメンテナンス国民会議　マッチングイベントin 山形を主催 出演，編集長
2023年7月～2023年7月	インフラメンテナンス国民会議　マッチングイベントin仙台を主催 出演，コメンテーター，司会，編集長，助言・指導
2023年7月	第3回JCI-TCI Workshop Chair Man

2023年4月～2026年3月	日本コンクリート工学会　年次学術講演会実行委員長 会員
2022年5月～	土木学会 会員
2022年5月～	土木学会 東北支部副支部長
2022年3月～	日本コンクリート工学会 コンクリート工学年次大会委員
2021年4月～	日本コンクリート工学会
2021年4月～	日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会委員長
2019年4月～	国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会　副委員長 副委員長
2019年4月～	国土交通省　東北地方整備局　樋門等健全度評価検討委員会　委員 委員
2019年4月～	国土交通省 東北地方整備局 宮城ブロック総合評価委員会　委員 委員
2018年5月～	公益社団法人 日本コンクリート工学会　マスコンクリートのひび割れに関する調査委員会　幹事長 会員
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議　東北フォーラム　フォーラムリーダー 委員
2017年5月～	公益社団法人　日本コンクリート工学会　マスコンクリートソフト普及委員会　幹事 会員
2017年4月～	ダム工学会　会員 会員
2016年4月～	公益社団法人 プレストレストコンクリート工学会 会員 会員
1981年～	公益社団法人 日本コンクリート工学会　フェロー会員 会員
1981年～	公益社団法人 土木学会　正会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	櫻井　一弥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実施プロジェクトへの学生参加による建築実務教育	2022年4月～	実際に進んでいる建築やまちづくりのプロジェクトに学生を参加させることにより，講義や演習で学んだ内容が実社会でどのように活用されているか学習させる機会を積極的に設けている（主に卒論生や大学院生が対象）。
少人数対話方式（エスキース）による学生の自主的な建築作品制作の促進	2022年4月～	学生が提案する建築空間（図面や模型）に対して，一対一での対話方式（エスキース）によるデザインの高度化を図るとともに，自主的な制作を促すような指導を行っている。
施工中の現場見学，完成した建物の見学による都市・建築の現場感覚の涵養	2022年4月～	施工中の建物や完成した後の建物の見学会などを行い，三次元空間のスケール感を涵養する講義・演習を行っている。
建築初学者に対する建築教育の効果的な導入に関する工夫	2022年4月～	初等教育で全く触れる機会のない建築やデザインに関する興味と理解を深めるため，画像・映像などのビジュアル資料や模型による講義・演習を心がけている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県知事指定建築士技術講習の講師	2022年4月～	宮城県建築士事務所協会の依頼に基づき，建築士に対するCPD事業の一貫として開催された知事指定講習の講師を務めた。
一級建築士定期講習の講師	2022年4月～	建築士法で3年に一度の受講が義務づけられている一級建築士の定期講習において，建築技術教育普及センターの依頼に基づき年に数回の講師を務めた。
建築家の講演会等に対する学生の積極的な参加促進	2022年4月～	仙台市内などで開催される，一般向けの建築関連講演会やセミナーに学生を積極的に参加させ，社会との接点を増やすよう指導している。

現在の課題・目標	1）図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3）授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1）図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを積極的に導入した。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝えた。 3）一方向の開設とならないよう注意して講義を進めた。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進めた。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保した。
来年度の進捗目標	1）来年度も図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3）授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
有限会社SOY source建築設計事務所（紹介記事）『ジャパンブランドコレクション2024　宮城・山形版』	その他	2023年12月	サイバーメディア	櫻井一弥, 太田秀俊, 安田直民	pp.94-95
「特集　今こそコラボ　鶴ヶ谷団地、東北学院大とマップづくり」（紹介記事）『「特集　今こそコラボ　鶴ヶ谷団地、東北学院大とマップづくり」（紹介記事）』	その他	2023年4月	仙台経済界, 仙台経済界　2023　5-6月号	70.櫻井一弥、菅原敏之	pp.18頁-19

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）
G. 学会における研究発表
H. 翻訳（学術書や原典等）
I. 特許

現在の課題・目標	1）建築家として，社会的に意義ある建築作品を生み出し，地域の発展に寄与する。 2）デフォレスト館の保存修復に向けた活動を積極的に行う。 3）地方公共団体の公共施設整備にかかる審査員などを積極的に引き受ける。
今年度の進捗状況	1）いくつかの建築作品を関連雑誌等に発表することができた。 2）デフォレスト館の保存活用基本計画に関する調査を実施することができた。 3）いくつかの自治体の委員を任命され、実施することができた。
来年度の進捗目標	1）建築作品の設計を積極的に行い，然るべき方法で発表する。 2）デフォレスト館の保存修復に向けた活動を積極的に行う。 3）引き続き東北地方を中心に地方公共団体の公共施設整備に積極的に関わる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年7月～	宮城県収用委員会 委員
2020年7月～	登米市指定管理者選定委員会 委員
2019年5月～	宮城県大河原町大規模事業評価委員会 委員
2015年5月～	NPO法人　とうほくPPP・PFI協会 理事
2014年10月～	宮城県多賀城跡調査研究委員会 委員
2014年4月～	日本建築家協会東北支部役員　事業委員会 委員長
2013年4月～	日本建築学会東北支部　建築デザイン教育部会
2012年4月～	管理建築士定期講習 講師
2012年3月～	せんだいデザインリーグ　卒業設計日本一決定戦　審査員(せんだいデザインリーグ　卒業設計日本一決定戦)
2011年4月～	日本建築家協会東北支部宮城地域会　事業委員会 委員長
2010年5月～	一級/二級/木造建築士　定期講習 講師
2010年4月～	仙台建築都市学生会議　アドバイザリーボード　アドバイザー(仙台建築都市学生会議　アドバイザリーボード　アドバイザー) 助言・指導
2009年10月～	公益社団法人　日本建築家協会 会員
2004年7月～	日本建築学会　司法支援建築会議運営委員会　調査研究部会
2002年4月～	日本建築学会東北支部　建築デザイン教育部会
2000年5月～	日本インテリアコーディネーター協会 会員
2000年4月～	日本建築学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

みやぎボイス2023	せんだいメディアテーク1階　オープンスクエア	2023年9月	シンポジウム
縦の家	宮城県	2023年8月	日本建築家協会,「JIA建築年鑑2022-2023」, 公益社団法人日本建築家協会, pp.74-75, 2023.8
現在の課題・目標	1）建築家の地位向上と地域の発展のために, 学外活動を積極的に行う。 2）建築作品の賞には積極的に応募する。		
今年度の進捗状況	1）シンポジウムなどを通して, 学外での活動を行うことができた。 2）いくつかの賞に応募した。今回は選外となった。		
来年度の進捗目標	1）シンポジウムや展覧会等には積極的に参加するとともに, 自ら企画を行う。 2）建築作品に関する賞には積極的に応募する。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1）学校法人東北学院　理事長特別補佐（キャンパス整備担当）
2）東北学院大学キャンパス整備推進本部　委員
3）東北学院文化財委員会　委員
4）デフォレスト館保存活用計画策定委員会　委員長
5）同WG　委員長
6）博物館運営委員会　委員

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	鈴木　道哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義内容を理解できているか確認させる時間・機会を設ける。	2020年～	授業でこまめに小テストを行いこれに伴い毎回の授業の復習の動機付けを行い、学生自身に自分の理解度を確認させる。
多様な評価方法を採用する。	2019年～	期末試験による評価の比率を下げ、小テスト、レポート課題など多様な評価方法を実施する。
学習の動機付けを行う。	2019年～	建築分野で当該の知識がなぜ必要となるかを積極的に授業で解説していく。
2．作成した教科書、教材、参考書		
建築設備	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
建築設備計画	2021年～	独自に授業教材を作成するとともに、設備設計演習課題及び解答を作成して、授業に取り入れ理解度アップを図っている。適宜、最新情報に更新していく。
建築環境工学	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
建築環境計画	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。（継続） 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。（継続） 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.に関して：ヒートポンプの仕組みなどの解説などに動画を活用した。また配布資料の図をわかりやすく改変するなど理解度向上に努めた。 2.に関して：初回に到達目標を説明した。また建築士の出題を例題として用いて、どのレベルまで到達すれば良いかを理解させた。 3.に関して：manabaの個別指導機能を活用し、成績が振るわない学生に指導した。またmanabaで学生からの質問に適宜、回答した。
来年度の進捗目標	1.に関して：継続して講義内容に関係する図や動画を活用して理解度を高めていく。 2.に関して：継続して授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3.に関して：継続して、manabaの機能を利用して双方向のコミュニケーションに努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表					
東北地方におけるZEBを目指した中規模オフィスの研究 その6: 運用の改善活動と効果検証	共同	2023年9月	日本建築学会(京都)	山本 昌芳 / 成田 政杜 / 長田 真一郎 / 川村 聡宏 / 大塚 俊裕 / 鈴木 道哉	
東北地方におけるZEBを目指した中規模オフィスの研究 その7: 改善活動に対する執務環境アンケートとエネルギー消費量実態	共同	2023年9月	日本建築学会(京都)	成田 政杜 / 山本 昌芳 / 長田 真一郎 / 川村 聡宏 / 鈴木 道哉	

H. 翻訳(学術書や原典等)	
I. 特許	
現在の課題・目標	各種の複合用途建物のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施していく。
今年度の進捗状況	物販店舗と集合住宅の複合用途建物のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施した。
来年度の進捗目標	2023年度と異なる複合用途施設のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2019年4月～	日本建築学会東北支部 環境部会 委員
1996年4月～	日本建築学会LCA評価小委員会委員 会員
1996年4月～	空気調和衛生工学会会員 会員
1993年4月～	日本建築学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動
2023、24年度 入試委員

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	武田　三弘	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実験用の動画や写真撮影を行い、疑似体験できるようなパワーポイントによる講義の実施	2020年4月1日～	専門科目（コンクリート工学，鉄筋コンクリート工学，コンクリートメインテナンス工学）については材料や機械，劣化現象などイメージが出来ないものが多いため，写真や動画などを多く取り入れ，理解力の向上に努めた。
最新の情報を取り入れたパワーポイントの作成	2020年4月～	講義内容については、毎年最新の情報を取り入れてパワーポイントを作成している。
コンクリート技士・主任技士試験の問題を用いた小テストの実施	2015年9月～	講義後の小テストには，コンクリート技士・主任技士の試験問題で出題された問題から関係する箇所をピックアップした問題を出題している。卒業後，この資格試験を受験する際には，大いに役に立つ内容となっている。
一問一答のクイズ形式による学習内容の確認	2010年4月～	講義の冒頭で，前回までの講義の中で重要な事項を質問し，答える形式を繰り返し，記憶に定着させる事を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Acoustic Emission and Related Non-destructive Evaluation Techniques in the Fracture Mechanics of Concrete, Fundamentals and Applications Second Edition, WOODHEAD PUBLISHING SERIES IN CIVIL AND STRUCTURAL ENGINEERING	2020年11月～	MASAYASU OHTSU,etc.: Acoustic Emission and Related Non-destructive Evaluation Techniques in the Fracture Mechanics of Concrete, Fundamentals and Applications Second Edition, WOODHEAD PUBLISHING SERIES IN CIVIL AND STRUCTURAL ENGINEERING,2020.11
閲覧資料の作成（コンクリートメインテナンス工学）	2020年4月1日～	コンクリートメインテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況のため，自ら講義資料を作成し、それをGoogle上で閲覧できるようにしている。
講義内容の復習のための課題の作成（コンクリート工学，課題1～13）	2019年4月6日～	各講義内容の復習として課題（コンクリート技士・主任技士）を出し，その内容について添削・説明した.
配付資料の作成（環境建設工学実験）	2018年4月9日～	コンクリート実験における報告書の書き方や実験方法について書かれた教材を作成し配付している。特に耐力計算用の精算書の作成や，コンクリートの応力ーひずみのデータを準備し，エクセルを使用したグラフ作成なども実施している。
演習問題の作成（14回分，線形代数学）	2018年4月9日～	講義中に行った内容の課題を出題し，復習を兼ねて演習問題を解く課題を14回分準備している。翌週解答を行い，間違った課題に関しては再度解き直しをやり，正解するまで解かせるような工夫をして理解力に努めている。
コンクリート工学の教科書として「コンクリート工学［第3版］」を発行した。	2017年9月～	大塚浩司，武田三弘，小出英夫，阿波　稔，子田康弘：コンクリート工学［第3版］，朝倉書店，2017.9
鉄筋コンクリート工学のため「新版 鉄筋コンクリート工学［第2版］」を発行した。	2016年4月～	大塚浩司，小出英夫，武田三弘，阿波　稔，子田康弘：新版 鉄筋コンクリート工学［第2版］，技報堂出版，2016.4
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
令和5年度育成会進路講演会にて「魅惑のコンクリート」の講演を行った。	2023年6月28日	宮城県名取高等学校定時制育成会の依頼により，令和5年度育成会進路講演会にて「魅惑のコンクリート」のタイトルで、宮城県名取高等学校多目的教室にて講演を行った。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生橋梁模型コンテストの審査委員長を努める。	2018年8月～	国土交通省東北地方整備局東北技術事務所が実施している「高校生橋梁模型コンテスト」の審査委員長を2018年から担当し，参加した高校生の作品に対して様々な講評を行っている。
JABEEアンケートや講義中に行ったアンケートにおける学生からの意見に対応している。	2018年4月9日～	線形代数学では，「課題の提出時に部屋にいない事が多い」に対して部屋にいる時間帯を知らせたり，コンクリート工学では「計算方法が知りたい」に対しては，講義の前に板書で解答を示すなど対応している。

JABEEアンケートにおける「分かりやすい講義に努めた教員」のアンケートで一位となり、現在も継続中。	2016年4月13日～	本学科ではJABEEを受審しており，環境建設独自にJABEEアンケートを行っており，その中で，「分かりやすい講義に努めた教員」というアンケートで一位となった．なお，昨年度は二位，一昨年は一位であった．

現在の課題・目標	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 →これについては十分に対応できているものと考えている。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 →目標や評価基準は第一回の講義で説明しており，試験前にも再度確認の意味を込めて説明を実施している。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 →講義中に何度か質問について確認しているが，講義後に質問に来るケースが多い状況。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 →講義以外ではmanabaを使用して随時質問を受け付けている。
来年度の進捗目標	以下の項目について継続して取り組む 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
RC床版に発生する水平クラックの要因に関する基礎研究	共著	2023年7月	一般社団法人　日本コンクリート工学会，コンクリート工学年次論文集，Vol.45(No.1)	松田 伸隆，武田 三弘	pp.652-657
X線造影撮影法による実コンクリート構造物を想定した強度推定に関する基礎研究	共著	2023年7月	一般社団法人　日本公益社団法人日本コンクリート工学会，コンクリート工学年次論文集，Vol.45(No.1)	鴇 泰幸，武田 三弘	pp.1306-1311
樋門構造物の鋼材腐食がひび割れ幅および耐力に与える影響	共著	2023年7月	一般社団法人　日本コンクリート工学会，コンクリート工学年次論文集，Vol.45(No.1)	髙橋 祐樹，武田 三弘	pp.676-681
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
PCグラウト充填不足部における空隙量の計測方法に関する検討	共著	2023年10月	公益社団法人　プレストレストコンクリート工学会，プレストレストコンクリート工学会第32回シンポジウム論文集	大村 信暁，青山 敏幸，諸橋 克敏，武田 三弘	pp.305-308
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

養生および非破壊検査の異なるコンクリート表層の品質評価	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	押野 羅南, 武田三弘, 大友鉄平, 岡本光弘, 一反田康啓, 小梁川修司	pp.V-16
簡易透気試験を用いたコンクリート測定深さに関する研究	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集(岩手大学)	小角神月, 武田三弘	pp.V-15
湿度が土間コンクリート表面に発生する色むらに与える影響	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	海沼飛鳥, 安野雅也, 大野陽希, 武田三弘	pp.V-11
コンクリートの溶脱による劣化がX線造影撮影法を用いた強度推定に及ぼす影響	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	鴇 泰幸, 武田三弘	pp.V-14
表面温度履歴がRC床版におけるコンクリートと鋼材の付着に与える影響	共同	2024年3月	令和5年度土木学会東北支部技術研究発表会(岩手大学)	松田 伸隆, 進藤 史也, 武田三弘	pp.V-9
コンクリートのコア直径がX線造影撮影法による強度推定に及ぼす影響	共同	2023年9月	令和5年度土木学会全国大会78回年次学術講演会(広島大学)	鴇 泰幸, 石井 暉, 武田 三弘	
コンクリートの二酸化炭素吸収量の測定方法に関する基礎研究	共同	2023年9月	令和5年度土木学会全国大会78回年次学術講演会(広島大学)	海沼飛鳥, 武田 三弘	
高温環境下における繰り返し載荷が RC 床版の水平クラック発生に与える影響	共同	2023年9月	令和5年度土木学会全国大会78回年次学術講演会(広島大学)	松田 伸隆, 武田 三弘	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	今年度の研究目的は, 1.コンクリートの色むらに関する研究 2.道路橋コンクリート床版の水平ひび割れの発生メカニズムに関する研究 3.X線造影撮影法を用いた強度推定に関する研究 4.簡易透気試験を用いたコンクリートの表層品質評価に関する研究 について研究を行ってきた。
今年度の進捗状況	今年度は, 上記の研究テーマに対して実験を行い, 土木学会全国大会には3編, コンクリート工学会年次学論文発表会に2編, 土木学会東北支部技術研究発表会に5編の論文発表を行うことが出来た。
来年度の進捗目標	来年度の研究目的はまだ最終的な結論までには至っていないため, 今年度に引き続き, 1.コンクリートの色むらに関する研究 2.道路橋コンクリート床版の水平ひび割れの発生メカニズムに関する研究 3.X線造影撮影法を用いた強度推定に関する研究 4.簡易透気試験を用いたコンクリートの表層品質評価に関する研究 について研究を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年2月～2026年1月	公益社団法人日本コンクリート工学会「選挙管理委員」委員
2023年12月～2024年11月	一般社団法人日本非破壊検査協会2024年度秋季講演大会実行委員会実行委員 委員
2023年6月～2025年5月	・公益社団法人日本コンクリート工学会「役員候補推薦・調整委員会」委員
2022年11月～	一般社団法人 非破壊検査協会 会員
2022年10月～2024年9月	・公益社団法人日本コンクリート工学会「助成金検討委員会」委員
2022年10月～2024年9月	公益社団法人日本コンクリート工学会 助成金検討委員会委員 委員
2021年8月～2023年6月	公益社団法人日本コンクリート工学会 学会賞選考委員会委員 委員
2021年6月～2023年5月	公益社団法人日本コンクリート工学会東北支部 支部長
2021年6月～2023年5月	公益社団法人日本コンクリート工学会理事会 理事
2020年8月～	東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会委員 委員
2020年8月～	東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会 委員

2020年4月～	東北地方整備局総合評価委員会専門部会委員 委員
2018年8月～	高校生橋梁模型コンテスト審査委員長 委員長
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員
2016年7月～	松島町入札監視委員 委員
2015年9月～	国土交通省東北地方整備局道路ドクター 委員
2014年3月～	宮城県コンクリート診断士会会長 委員
1999年9月～	東北学院大学工学部TGしびる会事務局長 委員
1989年4月～	公益社団法人　日本コンクリート工学会 会員
1989年4月～	公益社団法人　土木学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

就職キャリア支援部長として，企業対応や学生の為の就職説明会の開催など，就職キャリア支援部とは別に個別に実施している。

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	恒松　良純	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	①景観計画における補助制度の実情に関する研究 ②景観まちづくりに関する色彩基準に関する研究 ③図書館建築における空間構成と計画に関する研究 ④土樋キャンパス周辺の街路景観に関する研究 ⑤図書館建築における避難に関する研究	
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	①景観計画における補助制度の実情に関する研究 ②景観まちづくりに関する色彩基準に関する研究 ③図書館建築における空間構成と計画に関する研究 ④土樋キャンパス周辺の街路景観に関する研究 ⑤図書館建築における避難に関する研究				
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年12月～	多賀城市都市計画マスタープラン策定協議会 委員
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 副部会長

2022年12月～	仙台市景観総合審議会 屋外広告物部会 部会長
2022年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　空間研究小委員会 主査
2021年10月～	女川町　都市計画審議会 副会長
2021年4月～	日本建築学会　東北支部 常議員
2018年12月～	宮城学院女子大学　非常勤講師
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員
2015年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　委員 会員
2014年4月～	日本建築学会　建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員
2012年4月～	建築計画委員会　空間研究小委員会 委員(2012年4月～2018年3月:幹事・2019年4月～2022年3月:出版WG主査・2022年4月～:小委員会主査)
2012年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会 委員
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局　東北地方道路研究会(国土交通省東北地方整備局　東北地方道路研究会)
2008年4月～	日本建築学会　東北支部　建築計画部会 委員
2007年4月～	日本建築学会　東北支部　建築計画部会　部会員 会員
2006年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　空間研究小委員会 会員
2002年4月～	日本建築学会　建築計画委員会 空間研究小委員会 委員
2000年11月～	人間・環境学会会員 会員
1995年4月～	日本建築学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	中沢　正利	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
「プログラミング応用」	2023年4月～2023年8月	学生が独自に予習できるように，エクセルVBAの使い方の授業テキストをpdf資料として配付した。
「構造力学Ⅲ」	2023年4月～2023年8月	学生が独自に予習できるように、構造力学問題集を作成して配付した。総ページ数30P程度。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	①講義中の機会を見ては実務の話をし、その際には実例写真や参考となる動画を見せるようにしている。 ②計算を要する課題を与えるようにしており、間違えた場合は計算精度を高めるために復習させることにしている。 ③授業の開始時にシラバスのコピーを配付して説明をしている。また、授業時以外にもメイルによる質疑応答を推奨し、レポートの再提出などを通して指導を継続している。
来年度の進捗目標	以下の項目についてより一層努力する。 ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。また、ネット上のURLを与えて、自習学習を促す。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
トラス・トポロジー最適化と構造周期性を考慮したモジュール橋の最適パネル形状	共著	2024年3月	土木学会，構造工学論文集，70A	近広雄希・小池透之・水野翔太・中沢正利	pp.1-11
地震時の地盤変動を想定した強制変位が主構に作用した場合のワーレントラス橋の損傷に関する数値解析的検討	共著	2023年9月	土木学会，土木学会論文集，79(13)	千田知弘、中沢正利、若槻直暉、馬越一也、松井友希	pp.1-15
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。
今年度の進捗状況	①学会の研究委員会に顧問として参加し、Zoomによる委員会及び幹事会の運営に協力した。 ②学会活動の成果を論文集に投稿し、シンポジウムで発表した。

来年度の進捗目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 ②引き続き、学会の研究小委員会に参加して、研究を継続する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～2025年3月	土木学会構造工学委員会「災害時の緊急架設を目的とした緊急仮設橋に関する調査研究小委員会」顧問
2023年2月～2024年3月	「特殊橋梁の設計に関する技術検討会」 助言・指導
2022年5月～2024年4月	ネクスコエンジ東北支社「更なる耐震補強検討会」 コメンテーター, 助言・指導
2020年8月～	日本鋼構造協会　土木鋼構造診断士専門部会委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

副学長（点検・評価担当）

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	嘱託教授	氏名	中村　寛治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
最新の環境問題の情報資料を利用した説明	2020年4月1日～	NHK等で放映される環境問題の内容、および新聞記事を加え、知識と現実問題のリンクを重視した講義を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業の配布資料の改訂	2020年4月1日～	情報リテラシー、環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学Ⅱの配布資料を見直し、オンライン授業で理解しやすいように手直しをした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1.担当している環境分野の3つの講義について，計画通りに進めた。 2.担当講義の開始時に，成績評価の基準を伝えた。 3.定期的に，学生に質問を行って，確認した。また，質問に答えた。
来年度の進捗目標	1.現行の目標を継続する。 2.現行の目標を継続する。 3.現行の目標を継続する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Bacterial Survivability on Grazing Can Be Affected by Co-Existing Other Bacteria Having Some Grazing Resistance	単独	2023年6月	ASM Microbe 2023(ヒューストン テキサス州)	中村　寛治	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	現在受託中の科研費テーマの研究計画に沿って成果を出す。
今年度の進捗状況	現在受託中の科研費のテーマについて成果を出し，論文投稿を行った。現在は審査中。

来年度の進捗目標	現在受託中の科研費テーマで，さらに新しい成果を出し，論文投稿を行う。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2017年8月～		多賀城市水道事業運営委員会　委員 委員	
2016年5月～		東北地方整備局新技術活用評価会議　委員 委員	
2005年4月～		環境バイオテクノロジー学会　会員 会員	
2005年4月～		土木学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	韓　連熙	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
独自テキストの作成	2023年4月1日～	必要と考えられる教科には，独自の試料を作成し，配布している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2023年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業中は説明した内容を含む問題を提示し，理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。
ビジュアルな授業	2023年4月1日～	授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに，レポートを提出させ，これを評価することで修学状況を把握し，アドバイスを与える。
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施	2023年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを，毎年度実施している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業中は説明した内容を含む問題を提示し，理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施	2020年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを，毎年度実施している。
独自テキストの作成	2020年4月1日～	必要と考えられる教科には，独自の試料を作成し，配布している。
ビジュアルな授業	2020年4月1日～	授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに，レポートを提出させ，これを評価することで修学状況を把握し，アドバイスを与える。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「自然科学実験ファンダメンタルズ」のおける実験テキスト作成	2023年4月1日～	「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。
「化学」における教材プリント作成	2023年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「環境の化学」における教材プリント作成	2023年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「自然科学実験ファンダメンタルズ」のおける実験テキスト作成	2020年4月1日～	「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。
「環境の化学」における教材プリント作成	2020年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「基礎化学演習」における教材プリント作成	2020年4月1日～	様々な化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善 ●講義中の学生とのコミュニケーション ●学生の学習（予習・復習）のチェック ●（学科教育目標） 1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。	

今年度の進捗状況	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善について：見やすいパワーポイント作成とわかりやすい例題を増やす。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて：学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習（予習・復習）のチェックについて：開始から5分程度に前回の学習内容のまとめを説明，終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明する。 ●環境の化学では、二酸化チタンを用いた光触媒の有機物分解の過程を説明した。現在に、二酸化チタン系の光触媒の生活用品の利用についても説明を行った。 ●授業中の重要スライドを自分でまとめさせる宿題を課し、修得した知識を学生自身が確認できるようにした。また、そのとき分からなかった点も書かせ、授業中に回答するようにした。 ●授業毎の重要なポイントを到達目標と関連付けて説明を行い、学生自らは到達目標のみならず、さらに応用可能な部分などについて考えるよう促した。
来年度の進捗目標	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善について：最新データの追加。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて：学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習（予習・復習）のチェックについて：授業開始5分程度に前回の学習内容のまとめの説明と宿題の確認、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明すると共に予習・復習の課題を設けて説明を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	●液中プラズマにおけるヒドロキシラジカルの生成に関する研究を進める。 ●抗酸化作用に関する研究を進める。 ●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究を進める。 ●生物膜製作の基礎的研究を進める。
今年度の進捗状況	●液中プラズマにおけるヒドロキシラジカルの生成に関する研究について：電圧増幅器を用いて高電圧による水中プラズマを発生させ、p-CBAの減少量からヒドロキシラジカルの生成について検討と測定実験を行った。 ●抗酸化作用に関する研究について：強力な活性酸素除去能力を持っていると言われているポリアミン（スペルミジン）を用いて活性酸素反応（フェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応）に添加し、その効果の確認を行った。 ●様々な上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について：近年開発された上水用の凝集剤を用いて水質（濁度など）実験を行った。 ●生物膜製作の基礎的研究について：沖縄県などで火山活動で発生した軽石を用いて生物膜の担体として応用可能かについて基礎的な研究を行った。
来年度の進捗目標	●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について：近年開発された高塩基度のポリ塩化アルミニウムを用いて様々な添加物が存在する原水に対しての効果を色度や濁度、アルカリ度などの測定による検討を行う。 ●水中プラズマを用いて水中添加物による水の性質変化に関する研究を行う。 ●抗酸化作用に関する研究について：抗酸化作用の物質（植物由来の抽出物）をフェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応に添加し、その効果について検討を行う。 ●生物膜に関する研究について：軽石以下の吸着性のある様々な材料について基礎的な研究を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年4月～	日本水道協会 委員

2012年4月～	日本環境化学会会員 会員
2009年8月～	日本オゾン協会会員 委員
2006年6月～	土木学会会員 会員
2003年4月～	電子スピンサイエンス学会会員 会員
1999年4月～	日本水環境学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
1. 東北学院大学知的財産審査委員会委員会 2. 環境建設工学専攻主任

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	宮内　啓介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
予習・復習の時間の設定	2020年～	授業終了後に復習問題をmanabaにて公開し、授業の復習時間を設定した。また、次の授業を受けるための予備知識をつけるための予習問題も同様に公開した。正答率が悪い問題があったときは、考え方の動画をmanabaにて公開した。
独自の授業アンケートの実施	2019年～	15 回の授業の終わりに、全学で実施す るアンケートの他に独自のアンケートを 実施して授業の効果を確認し、次年度 の授業実施の参考にしている。
授業担当者会議の開催（自然科学実験ファンダメンタルズ）	2019年～	毎学期終了後に、他学科担当の非常勤講師も含めて話し合いの場を持ち、授業の進め方やテキストの改訂について話し合っている。
学生から質問・感想を集めて回答する	2019年～	毎回の授業終了時にresponを用いて授業の振り返りをおこない、同時に質問・感想を集めて、質問・感想とそれに対する回答のプリントを作成してmanabaで公開し、必要に応じて次の授業でコメントした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
自然科学実験ファンダメンタルズ	2019年～	1年生の教養科目の教科書。必要に応じて改訂している。
「先端の科学と技術」プリント	2019年～	1年生の教養科目用プリント
「環境生物工学」プリント	2019年～	3年生の専門科目用プリント
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1．新聞記事や動画を取り入れた。 2．基準はシラバスにて明示し、初回の授業及びその後数回の授業で伝えた。目標はシラバスおよび初回の授業で伝えた。課題に関しても、都度伝えることができた。 3．授業の終わりに質問や感想を必ず書かせ、それらをまとめて、コメントをつけて公開した。コメントを読まないと答えられない問題を復習問題に出すことで、コメントを読ませるようにした。
来年度の進捗目標	1．引き続き、最新の知見を紹介しながら、学びと社会の関わりについて意識させる。 2．引き続きこちらの意図を何回も伝える。 3．引き続き同様のことを行いたい。が、せっかく培ったmanabaのシステムが大学の都合で使えなくなる、ということで、非常に迷惑している。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Degradation of DDT by γ-hexachlorocyclohexane dehydrochlorinase LinA.	共著	2023年12月	Bioscience, biotechnology, and biochemistry, 88(1)	Kafayat Olaide Yusuf Habibullah, Ren Ito, Leonardo Stari, Kouhei Kishida, Yoshiyuki Ohtsubo, Eiji Masai, Masao Fukuda, Keisuke Miyauchi, Yuji Nagata	pp.123-130
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	データをまとめて論文を書く
今年度の進捗状況	できていない。
来年度の進捗目標	データをまとめて論文を書く

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(海外連携研究)	2023年度～2025年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究C	2018年度～	個別	ヒ素高蓄積植物モエジマシダ根圏で亜ヒ酸酸化活性を担う新規亜ヒ酸酸化細菌の解析
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））	2017年度～	共同(研究代表者)	東南アジア・南アジアにおけるヒ素汚染地下水の生物学的浄化方法の開発

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	多賀城市環境審議会 会長
2013年6月～	環境バイオテクノロジー学会理事 会員
2012年1月～	日本微生物生態学会会員 会員
2012年1月～	Assistant Editor of Microbes and Environments 委員
2011年8月～	日本生物工学会北日本支部委員 会員
2007年3月～	ゲノム微生物学会会員 会員
2006年4月～	土木学会会員 会員
2004年1月～	アメリカ微生物学会会員 会員
2000年4月～	環境バイオテクノロジー学会会員 会員
1996年4月～	日本生物工学会会員 会員
1994年1月～	日本農芸化学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	山口　晶	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
研究室学生の小野田ケミコ現場見学会の引率	2023年12月22日	内川流域災害復旧施設外(その2)工事 住 所：宮城県伊具郡丸森町沼ノ下地内 研究室学生が教育内容と現場での関連を学ぶために現場見学会を企画し実施した。
試験直前まとめ演習の実施	2014年4月～	期末試験直前にまとめの演習を課し，これまでの講義の復習を行わせている。
小テストの実施	2005年4月～	複数回小テストを行うことで，学生の理解を促している。
土木学会東北支部技術研究発表会の学生の参加	2001年3月2日～	土木学会東北支部主催の技術研究発表会に参加し，卒業研究の内容を，学生に発表させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
交通工学　オンライン講義資料，穴埋めノート，小テスト問題作成	2021年4月～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分，小テストの作成
測量学I　講義内容の穴埋めノートの作製と配布，パワーポイントによる遠隔講義の実施	2020年4月1日～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分
地盤力学I　講義内容の穴埋めノートの作製と配布，パワーポイントによる遠隔講義の実施	2020年4月1日～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分
地盤力学I　演習プリント	2014年4月～	演習プリント13回分，まとめプリント1回分
測量学I　演習プリント	2014年4月～	演習プリント9回分，まとめプリント1回分
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
工学総合研究所　工学に関する啓発活動	2023年8月28日	中学生に対して地盤災害の概要を講義した

現在の課題・目標	卒業研究については、昨年度と同様に学生が社会に出た後に困らないように、仕事の進め方を意識しながら指導を行うことを目標とした。特に自分の考えを述べられること、ゴールを意識した研究スケジュールを立てることなどができる学生になるように指導を行った。また、講義については，学科の教育改善目標を意識して講義を行った。 今年度の学科の教育目標は、下記の通りであった。 1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。

今年度の進捗状況	卒業研究においては、実際の仕事を意識しながら指導を行ったが、自分で考えて動ける学生がほとんであった。ただし，指導を丁寧にやりすぎたためか，論文の訂正や発表原稿の作成，発表練習などを自主的に行う学生がほとんどおらず，指示通りにやっていれば充分という雰囲気を作ってしまったようである。その点は反省点である。ただ，細かい指示をしなければ学生自ら動くようになるかというとそういうわけでもないので，自ら発表練習や論文の訂正などを行えるような意識づけ方法について，今後検討する必要があると思っている。 1については、 昨年度に引き続き、図や画像を多く使った講義をすることができたので、ある程度達成できたと感じている。研究発表の技法や工学基礎演習IIでは，地盤災害の動画などを取り入れて，感覚的に地盤災害を理解できるように工夫した。レポート等でも学生が理解している様子が確認できた。また，自治体等の委員会で経験した事例を支障が出ない範囲で実際の事例として学生に紹介することができた。 2についても、学生に説明し、疑義が生じないように注意した。manaba等での質問があったときは，なるべく丁寧な回答を心がけた。 3については、授業終了後に質問に来る学生がほぼ毎回いるので、質問しやすいようなコミュニケーションはある程度できていると思う。また，質問や問題等の間違いの指摘などをした学生には、加点することにしており、学生が質問・指摘しやすいように心がけている。昨年度もそうであるが，小テストなどで問題や解答の不備や間違いを指摘されることがあった点は，反省点である。manabaで実施した小テストの解答説明には充分な時間がさけなかったことも反省点である。
来年度の進捗目標	今年度と同様に、上記の学科の教育目標を頭に入れながら講義をおこなっていきたい。 年度初めに学科の教育改善目標が新たに設定されるので、そちらも引き続き意識しながら講義を行う予定である。 来年度は，キャンパス移転により時間割が大幅に変わり，専門科目が午後に集中することとなった。そのため，時間的余裕が若干少なくなる。また，今年度から地盤力学IIの講義も加わる。この新しい講義についても講義を進めながら内容や進行速度を調整していきたいと考えている。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	今年度も地盤改良の企業との共同研究として，共回り現象に関する研究・配合試験の標準化に関する研究を実施した。多くの研究成果があり，総合的にまとめる作業を実施したいと考えていた。また，レストム工法研究会の共同研究も継続していきたい。
今年度の進捗状況	共回り現象に関する研究・配合試験の標準化に関する研究成果がそれなりにあるため，これらを総合的にまとめる作業を実施したいと考えていたがそこまで至らなかった。多くの成果があるため，まとめる作業を今後も続けていきたい。また，レストム工法研究会の共同研究については実施し，昨年度はコーン指数により処理土として利用できることを確認し，今年度は一軸圧縮強さを確認した。ほぼ満足できる研究成果を得ることができた。
来年度の進捗目標	来年度も地盤改良の企業との共同研究として，共回り現象に関する研究・配合試験の標準化に関する研究を実施していきたい。また，これまでの研究成果についてまとめる方向に勧めたいと思っている。また，レストム工法研究会の共同研究も継続している。次の段階として，処理後に解きほぐしを行い，再度供試体作製をした時の一軸圧縮強さの検討を考えている。また，レストム工法については積極的に外部に発信するなどして研究成果を世間に発表していきたいと考えている。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年8月	工学総合研究所　工学に関する啓発活動 講師
2023年～	仙台市宅地保全審議会　技術専門委員会 委員長
2022年12月～	宮城県環境審議会 委員
2022年6月～	地盤工学会 選挙管理委員
2022年～	レストム工法研究会 技術アドバイザー
2020年4月～	富谷柔道スポーツ少年団　団長
2019年11月～	スポーツ少年団認定指導員
2018年6月～	地盤工学会 代議員
2017年～	仙台市宅地保全審議会 委員
2017年～2023年	仙台市宅地保全審議会　技術専門委員会 委員
2007年6月～	地盤工学会 東北支部地盤災害研究委員会
2001年～	地震工学会 会員
2000年～	土木学会 会員
1997年～	地盤工学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	工学部柔道部については移転に伴って土樋の柔道部と統合され，それに伴って工学部柔道部としての活動がなくなった。富谷柔道スポーツ少年団の活動については、柔道の技術的・勝負論的な強さよりも、学生や子供達の人間的成長に重点を置いて指導したいと考えている。
今年度の進捗状況	富谷柔道スポーツ少年団の活動については，ほぼすべての活動に参加できたが，五橋キャンパスに移転したこともあり，練習場に行く時間がこれまでの倍以上かかるようになった。現状で，研究活動に目立った支障はでていないが，今後の業務次第ではスポーツ少年団の活動についても他の誰かに補助をお願いしないといけない状況になると考えている。ただ，新入団員が新たに6名でてきたことから，ようやくこれまでの活動が広まってきたという手ごたえを感じている。特にホームページをみて参加する家庭が多いように感じる。ホームページ作製の成果がようやくでてきたようである。
来年度の進捗目標	引き続き，富谷スポーツ少年団の活動を継続し，青少年の健全育成に貢献していきたいと考えている。また，ホームページで活動内容を紹介し，新たな団員獲得にも努めていきたい。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2020年から東北学院大学点検・評価委員
2022年10月19日東北学院大学・西南学院大学　相互評価出席
2022年12月6日東北学院大学・西南学院大学　相互評価振り返り出席
2023年8月2日2023年度第1回執行部情報交換会出席

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	崎山　俊雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
クイズ形式等（問いかけ）による学生の授業参加の促進	2023年～	「西洋・近代建築史」および「日本建築史」においては、多くの建築や美術の事例を取り上げるため、著名な建物の名称や所在地、設計者などについて小テスト形式で学生に問いかけたり、学生の反応を見ながら進行する授業方法を意識している。小テストは前の週に範囲を提示して予習を促し、解答の集約にはresponを活用し、結果は成績評価に反映することとしている（総合的な成績評価方法については初回の講義で資料を配布して詳しく説明している）。学生の授業参加を促し、メリハリのある授業を心掛けている。
復習課題（小テスト）と講義録画の提供による学習内容の定着と自主学習の促進	2022年～	「西洋・近代建築史」と「日本建築史」では、毎回の授業後に、講義内容の定着を図るための復習課題を課した（manabaを利用）。また、「西洋・近代建築史」「日本建築史」「建築法規」では、対面授業（スライド＋音声）を録画し、自主学習のために提供した。コロナ禍のオンライン授業で修得した効果的な技術は、コロナ以後も継続して活用することにしている。
地域の建築文化に対する視点の醸成	2022年～	建築やまちづくりの分野では、地域への視点が極めて重要である。そこで「日本建築史」においては、特に仙台市、多賀城市、宮城県、東北地方への視点を重視した事例の紹介等を心がけている。数回のレポート課題では地域的課題を取り入れた。またジュニアセミナーの少人数課題（講座配属学生対象）では、多賀城市内の歴史的建造物の実測調査体験を通して、地域への視点を育てることを意識している。
解説リクエスト制による自主学習の促進と効果的な演習解説	2022年～	法律を扱う「建築法規」は特に「繰り返し学習」が重要との判断から、毎回20-30問の演習問題を課した上で、授業の前半を演習問題の解説、後半を新たな単元解説に充てる形式で講義を実施した。特に演習問題の解説に際しては、自分が解けなかった問題の解説をリクエストできるようにすることで、自習を促すとともに、受講生が苦手とする問題を把握して、効果的に補足するようにした。同時に少数意見を見過ごすことが無いように、授業時間内で説明できなかったリクエストに対しては、解説を録画してオンデマンドで提供した。演習問題→弱点の把握→補足解説を連動させた講義展開は、学生アンケートにおいて「分からなかった問題を集中的に解説してくれるので理解が進む」との回答が見られるなど、一定の効果を有することが確認されている。
建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫	2022年～	建築設計の初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導（1対1指導）を実施している。また、意欲的な取り組みを促すため、オフィスアワー以外の時間でも、可能な限り丁寧に1人1人の学生と向き合うことにしている。
ミニッツペーパーを活用した双方向性の確保とレベル別発展学習の促進	2022年～	ミニッツペーパー（manabaの「アンケート」機能を使用）を活用し、講義内容に対する振り返り、疑問点、授業評価（意見や要望）などを記入してもらい、理解度把握・授業改善・学習意欲向上のために活用している。これらは原則として翌週までに返却しているが、学科専門科目（建築コース）の40名程度の講義ではコメントを付してフィードバックし、学生一人々々に目配りするように心がけている。また、特筆されるべき振り返りや疑問点については成績に反映するとともに翌週の授業において紹介または補足説明することでフィードバックしており、学生の到達レベルに応じた発展的な学習を促すコメントを意識している。個別のフィードバックは学生アンケートでの評価も高く、学生の参加意欲の向上に一定の効果を有することが確認されている。
建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫	2016年～	建築設計課題での初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導（1対1指導）を心がけている。
2．作成した教科書、教材、参考書		

「日本建築史」の講義スライド・配布資料（更新）	2022年～	日本建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を刷新した。特に宮城県内および東北地方の歴史的建築を多く取り上げ、地域文化を理解することを促す内容を一層増強した。また、昨年度に作成を試みた予習用オンデマンド教材がやや過負荷だったとの自己反省に基づき、要点を明確にして教え過ぎない教材を意識した。授業アンケートの評価は昨年に比べて良好であった。
「西洋・近代建築史」の講義スライド・配布資料（更新）	2022年～	西洋建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を更新した。写真や図面を多用して視覚的に理解できる内容とすることを心がけるとともに、「歴史を学ぶことの意味」や「歴史からの学び方」を意識的に伝え、「歴史を学ぶことの楽しさ」を体験してもらえるような内容に刷新した。
「フレッシュパーソンセミナー」の講義スライド・配布資料（更新）	2022年～	初年次学生に対する導入的専門科目の講義資料を更新した。作成に際しては、関連分野の最新の動向を調べて資料に反映させるとともに、図や写真、時に映像を用いて視覚的に理解できる内容とした。特に「現在の学びが何に役立つのか」の理解を促す内容とすることを心がけた。
「建築法規」の講義スライド・配布資料・ドリル・補足動画教材	2021年～	建築基準法の重要事項を解説する講義資料を更新した。特に難解な法律用語に対し、当該条文が如何なる目的で定められ、何を、どのように規制しているのかの理解を促す内容とした。特に説明と例題を交互に並べ、予習・復習にも活用しやすい資料づくりを目指した。また、受講者が繰り返し自主学習できるようにmanabaのドリル教材を充実させ、学生からのリクエストに応じて補足的な解説動画を作成して事後学習教材として提供した。

3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4．その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	【学科で定めた共通の授業改善目標】 1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 【個人で定めた授業改善目標】 4．授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 5．予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。 6．配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。
今年度の進捗状況	1．全ての担当講義で画像を中心としたスライド教材を作成（更新）した。座学系の講義では、授業を録画し事後に復習教材として公開した。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、公開した録画は復習に活用されている様子が見られた。改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 2．初回の授業で丁寧な説明を行った上で、適時補足した。特に美意識や価値観を評価対象する建築設計課題（作品）では評価基準が曖昧になりがちな点が課題であったので、丁寧な説明と一人一人との対話を重視した。授業アンケートでは肯定的な評価が増え、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.1 学生の反応を見ながら授業を進めることを心がけた。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.2 manabaの個別指導（コレクション）、対面授業の前後、およびミニッツペーパーを活用した。特にミニッツペーパーを用いた双方向性には学生からも好意的な意見が多く、改善の取り組みは概ね順調に進捗したと言えるが、授業内での質問機会の確保については改善の余地を残した。 4．授業の冒頭で前回の復習を実施するとともに、当該講義のテーマと全体の中での位置づけを示した上で、その日の講義を行った。復習から始める手法は学生からも好評で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。形式は整いつつあるため次年度からはその上に学生の主体的授業参加を促す取り組みへと発展させる。 5．前年度の授業アンケートを踏まえて予習課題と復習課題を見直した。授業アンケートの結果は良好で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。ただし、目標とした自主学習時間には及ばず、継続的な改善が必要と考えている。 6．研究室所属学生の研究・就職活動状況を常に把握し、指導に活かすことを心がけた。

来年度の進捗目標	【学科で定めた共通の授業改善目標】 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。（継続） 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。（継続） 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。（継続） 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。（継続） 【個人で定めた授業改善目標】 4. 学生の主体的な授業参加を促す取り組みを教授法・課題・補足コンテンツの改善・充実を通して実施する。（新規） 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。（継続） 6. 配属学生との緊密なコミュニケーションを通じ、きめ細かな就職活動指導・卒業研究指導を実施する。（継続）

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
明治後半期～昭和初期における東北六県の土木・建築系技師について－近代都道府県庁の土木・建築系技術者に関する歴史的研究－	単著	2023年6月	日本建築学会東北支部研究報告集. 計画系(86)	崎山俊雄	pp.187-190
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
建築が語る東北学院の歴史	単著	2023年	水曜通信	崎山　俊雄	pp.26-35
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
昭和前期の東北六県における県庁所属の土木・建築系技師について	単独	2023年9月	日本建築学会大会(京都)	崎山　俊雄	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿（筆頭著者で年1編以上） 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿（筆頭著者で年2編以上） 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得（年1件以上） 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献（随時）
今年度の進捗状況	1. 学術論文の投稿は未達となったが下記4-3の調査報告は文化財登録の学術的根拠となった。 2. 達成した（2編）。 3. 科研費・基盤（C）での継続課題が1件ある。また新規課題の研究分担者として科研費・基盤（B）に応募した。 4-1. 異分野の研究者や郷土史関係者が多く参加する地域史の研究会に参加して交流を継続した。 4-2. 東北学院宗教センターが発行する『水曜通信』に連載を持った（年10回寄稿） 4-3. 県内外5件の歴史的建造物の調査をゼミ生と実施した。うち1件は調査研究をまとめて国の登録有形文化財（建造物）に申請し、2024.3の登録決定に結実した。 4-4. 重要文化財 東北学院旧宣教師館　保存活用計画策定委員会の学内委員として活動した。活用手法の検討のための調査を共同で実施し、基本計画立案の基礎となる報告書を作成した。
来年度の進捗目標	1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿（筆頭著者で年1編以上）（継続） 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿（筆頭著者で年2編以上）（継続） 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得（年1件以上）（継続） 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献（随時）（継続）

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤C	2019年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	「ヤマモ味噌醤油醸造元店舗」「旧髙橋家住宅」建築調査 助言・指導, 調査担当
2022年3月～2023年7月	「岩沼教会」建築調査 助言・指導, 調査担当
2021年5月～2023年4月	東北建築賞作品賞　選考委員会 委員
2018年4月～	日本建築家協会
2011年4月～	建築史学会 会員
2011年4月～2024年3月	日本都市計画学会 会員
2000年8月～	日本建築学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当活動なし		
今年度の進捗状況	該当活動なし		
来年度の進捗目標	該当活動なし		

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1）東北学院史資料センター　運営委員/調査研究員
2）教務委員
3）工学部外部評価対応委員会　委員
4）環境建設工学科1年グループ主任
5）重要文化財 東北学院旧宣教師館　保存活用計画策定委員会　委員／同WG委員
6）工学研究科修学支援委員

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	千田　知弘	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2022 年度教育功績等優秀教員	2023年	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.に関しては、板書の半分近くを図を用いた説明とし、また、建設関連や災害関連の時事ネタと、現在取り組んでいる勉学との関係性を都度説明に入れた. 2.に関しては，数回の講義に1回の割合で何度も説明し，レポート提出の重要さを示した．また，講義内で企業の方を招聘し，力学を学んだ先にあるものを実感してもらう機会を設けた. 3.に関しては，演習時間等で意見を聞くと共に，オフィスアワーの時間を多く設けた．本年度は，状況に応じて，グループワークを取り入れた. 上記の成果は，学科が独自に行っている学生による教育改善アンケート(JABEEアンケート)で高い評価を受け、取り組んでいる内容に多くの好感が示されていた．また，学科1位の評価を得た.
来年度の進捗目標	本年度，学生から高い評価を得たので，来年度も継続して実施していく. 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
せん断変形作用における極限状態のゴム製支承の応力分布に関する考察	共著	2023年9月	土木学会，土木学会論文集，79(13)	千田知弘、村上海翔、寺澤貴裕、植田健介、佐藤京	pp.1-12
地震時の地盤変動を想定した強制変位が主構に作用した場合のワーレントラス橋の損傷に関する数値解析的検討	共著	2023年9月	土木学会，土木学会論文集，79(13)	千田知弘、中沢正利、若槻直暉、馬越一也、松井友希	pp.1-15
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
地盤変動に起因する強制変位がワーレントラス橋の片方の下弦材のみに作用した場合を想定した数値解析的検討	共著	2023年9月	第43回地震工学研究発 表会講演論文集，43	若槻直暉、千田知弘、中沢正利、馬越一也、渡邊浩佑	pp.1-6
治具とゴム形状のモデル化の違いが90° 剥離試験を対象としたFEM解析結果に及ぼす影響に関する基礎的研究	共著	2023年9月	土木学会，第43回地震工学研究発 表会講演論文集，43	荒川弦太郎、千田知弘、寺澤貴裕、植田健介、佐藤京、若槻直暉、渡邊浩佑	pp.1-6

地盤変動時にワーレントラス橋に生じ得る損傷に対する地盤変動の作用位置と径間数の影響に関する一考察	共著	2023年7月	土木学会, 第26回橋梁等の耐震設 計シンポジウム講演論 文集, 26	若槻直暉、千田知弘、中沢正利、馬越一也、荒川弦太郎、渡邊浩佑	pp.117-124

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	耐震防災系の論文を2本以上投稿する.
今年度の進捗状況	耐震防災系において, 査読論文2編, 査読無し論文3編が学術誌に掲載されたので, 目標を達成できたと考える.
来年度の進捗目標	耐震防災系の論文を2本以上投稿する.

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
その他の補助金・助成金	2022年度～2023年度	個別(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2021年度～2022年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	土木学会・地震工学委員会・性能に基づく橋梁等構造物の耐震設計法に関する研究小委員会 委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	三戸部　佑太	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	以下の学科の授業改善目標に即して授業の改善を目指した. 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。	
今年度の進捗状況	各目標に対して、以下のように工夫を行った. 1. これまでと同様に、新たな現象を取り上げる際に実際の写真・動画を見せるようにし、また、理論の説明の際にも、イメージ図を多用して数式の持つ物理的な意味合いを直感的に理解しやすくするように意識した. さらに、宮城県内における実例を紹介することで授業内容と社会の関連性を示すようにした. 2. 初回授業時やレポート出題時、さらにテストの前の授業時に成績評価の方法を示した. 口頭での説明に加え、説明資料をmanabaで公開し、後から個々の学生が確認できる形で示しておくようにした. また、小課題やレポートの出題時における要点・意図の補足説明や採点後のフィードバックも継続的に実施した. 3.1 昨年度までと同様に、毎回の授業で小課題を実施し、その解答の様子を確認しながら、随時補足説明を行った. また、最終的な正答率も踏まえて次回授業の冒頭で解説を行うようにした. レポート課題についても、採点後にフィードバックを行い、学生の理解状況に応じた解説を加えるようにした. 3.2 授業内の小課題の時間やその後の時間に質問を受け付けるとともに、manabaの個別指導・掲示板およびメールでの質問を受け付けた. 正答率の低かった課題でも質問があまり来ていなかったケースもあり、より積極的に質問しやすい環境づくりは意識したい.	
来年度の進捗目標	1. 例年に引き続き概ね目標通りに実施できていたが、新キャンパスの水路の実験映像の作成・使用など、より内容を充実させられるように努力する. 2. 基本的には目標通りに進行できたものと考えているが、意図を十分に理解せず、取り組みが不十分な学生も引き続き散見されるため、よりわかりやすい説明を工夫し、学生の取り組み状況の改善を目指す. 3.1 現在のやり方で理解度の確認およびその授業内容へのフィードバックはある程度できているものと思われるが、特に専門性の強い授業では理解が不十分なまま計算の手順だけを追っているような学生もいるようである. 小課題やレポートの内容や難易度を見直し、より知識の定着や理解度の確認に適した形にできるよう工夫する. 3.2 小課題の時間やmanabaでの質問機会は確保しているものの、わからないのに質問をしてこない学生も一定数いるようである. より質問をしやすい環境を作れるように努めていきたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
渦-波相互作用を経た波浪変形	共著	2023年11月	土木学会論文集, 79(17)	渡部 靖憲, 飯山 侑, 三戸部 佑太	pp.1-7
プロジェクターを用いた三眼視による面的水面形状計測	共著	2023年11月	土木学会論文集, 79(17)	三戸部 佑太, 飯山 侑, 渡部 靖憲	pp.1-7
セマンティックセグメンテーションによる航空写真の津波瓦礫判別	共著	2023年10月	土木学会論文集, 79(18)	三戸部 佑太, 増田 達男	pp.1-7
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	1. 開発する基礎技術の高度化を進め、現地のモニタリングや実験における計測に応用することで、種々の現象解明に寄与する 2. 防災教育のためのツール開発を行い、また実際に防災教育へ用いていく 3. 個々の研究の質を高め学術誌への投稿を行う
今年度の進捗状況	1. 近年活用を進めている深層学習を用いた解析法について、今年度はその活用の幅を拡げた。UAVを用いた海浜モニタリング手法として、地形および植生観測への深層学習の適用を進めるとともに、新たな波浪観測手法の開発にも着手した。 2. これまで開発してきた津波防災を対象とした防災教育ツールに加え、近年被害が深刻化している洪水災害に対する防災教育ツールの開発を始めた。いずれのツールもイベント等での実践を行うことができた。 3. その他の研究も含め、一定の成果が得られ、複数の和文論文の発表を行うことができた。新たな論文投稿および国際誌への投稿に向けた準備を進めている。
来年度の進捗目標	1. 現在進めている計測手法等の実用化に向けて更なる検討・改良を実施するとともに、その他の新技術を取り入れた手法も検討したい。 2. 津波・洪水いずれの防災教育ツールについても、システムとしての完成度は高まってきており、実践の場を拡げ、多くの市民に触れてもらえるように活動を進める。 3. 引き続き継続的に論文投稿を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	土木学会東北支部幹事 会員
2014年～	国際水理学会（IAHR）会員 会員
2013年～	自然災害学会会員 会員
2008年～	土木学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

・環境建設工学科教育改善委員会（副委員長およびFD小委員長）

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	淡野　照義	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自然科学実験ファンダメンタルズ物理学分野での自由落下実験の新設準備	2023年9月～2024年3月	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」の開発
今年度の進捗状況	自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」の完成
来年度の進捗目標	自然科学実験ファンダメンタルズ「量子力学（仮題）」の開発 自然科学実験ファンダメンタルズ「分光（仮題）」の開発

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究） 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用
今年度の進捗状況	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究）：　解析システムの各部分について進捗があったが、引き続き開発が必要である。 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用：　解析に必要なソフトウェアの導入中
来年度の進捗目標	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究）：　解析システムを完成させ、共同研究者の実験データを解析する。 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用：　解析に必要なソフトウェアの導入を完了し、今までに共同利用実験で蓄積してきたデータを解析する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1983年～	日本物理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	神永　正博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
工学部向け数学教育の実践	2020年4月1日～	工学を学ぶ上で必要となる数学、数学的な考え方は、標準的な数学のカリキュラムとは異なっている。講義では、理論的に興味深いが、応用上不要と思われる部分をカットし、必要な部分に説明を集中している。「情報セキュリティ工学」では、Pythonによる実習に取り組み、「確率統計学」でRによる実習の導入に取り組んだ。今年度は、『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』（コロナ社）を出版し、フーリエ解析の講義にPythonと信号処理を導入した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Rで学ぶ確率統計学 実データ分析編『Rで学ぶ確率統計学（実データ解析編）』	共著	2023年9月	内田老鶴圃	神永正博・木下勉	pp.1-257
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Upper bound for the coefficients of the shortest vector of random lattice	単著	2023年12月	IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, E106.A(12)	Masahiro Kaminaga	pp.1585-1588
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	工学研究科委員会 電気工学専攻専攻主任

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	郷古　学	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年～	前回の講義で実施した課題のなかから、いくつかの回答を選び紹介することで、前回講義内容の復習を行っている。2022年度はオンライン講義が主だったため、講義動画内で、前回課題の回答の中から、いくつかピックアップして、学生に紹介した。
講義内容の定着を目的とした課題の実施	2020年～	講義(「情報工学基礎」)において、講義内容の定着を目的とし、講義で扱った内容に関する課題をオンラインで実施し、毎回採点し評価に組み込んでいる。
講義用ホームページの作成	2020年～	講義や卒業研究で扱った資料や参考文献の情報を確認できるように，講義用のホームページをmanabaで作成し、運用している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
クリティカル・シンキングの技法テキスト	2020年～	講義内容についてまとめたテキストを作成した。2022年度はオンライン講義が主だったため、manabaの機能を利用して、資料等を配布した。
読解・作文の技法テキスト	2020年～	講義内容についてまとめたテキストを作成した。また、より理解を深めることを目的として、様々な配布資料を作成し、講義内で使用した。
卒業研究用の資料	2020年～	卒業研究に必要な知識をまとめた資料（プログラム、文章等）を作成し、PDF化してホームページからダウンロードして利用できるようにした。manabaの掲示板機能やレポート提出機能、slackなどのアプリケーションを用いて、指導を行った。
講義(情報工学基礎)の配付資料に関する工夫	2020年～	講義(情報工学基礎)では市販のテキストの他、毎回配付資料を用いた講義を行っている。配布資料は、当該回の講義内容をまとめたものに加えて、例題や課題を多く掲載し、学生の理解を深めることができるような工夫をしている。また、講義内の小テスト等をすべてmanaba上で実施可能とし、学生の利便性を上げるとともに、講義運営の効率化を図った。
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)演習教材の開発	2020年～	講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で用いる教材を作成した。教材はマイクロコンピュータ、センサ、プログラム等からなり、円滑な講義運営ができるように、何度も試行＆評価を繰り返して作成した。
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)配付資料	2020年～	講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で配布する講義内容をまとめた資料を作成。同資料には学習内容の定着を目的とした課題も記載されている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	(ア)グループワークなど、学生同士が互いに相談し、より積極的に教え合う仕掛けを導入する。 (イ)すべての講義において、その講義の重要性に関して、実例と組み合わせて説明する。 (ウ)講義中の学生とのコミュニケーションを大切にする。
今年度の進捗状況	・上記目標(ア)について、週に数回、ゼミの他にグループミーティングを実施した。 ・上記目標(イ)について、講義の重要性に関する身近な時事問題を加えた。 ・上記目標(ウ)について、講義中に学生とインタラクティブに講義内容についての意見交換をするように務めた。
来年度の進捗目標	・上記目標(ア)について、グループワークの活性化について更に工夫 ・上記目標(イ)について、最新の時事問題に加え、事例紹介を充実させる。 ・上記目標(ウ)について、manabaのチャット機能などの活用を検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Learning of the exploratory behavior of mobile robots for environmental segmentation	単著	2024年2月	Proceedings of The 10th International Conference on Automation, Robotics, and Applications (ICARA 2024)	Manabu Gouko	pp.123-127

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

服装と顔画像にもとづく年齢推定手法の提案	共著	2024年3月	情報処理学会第86回全国大会	兼子大起, 郷古 学	pp.5S-09
環境を分節化するためのロボットの探索行動の自律的学習	単著	2023年9月	第31回インテリジェント・システム・シンポジウム	郷古　学	pp.Th-C4-2

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	(ア)被験者参加型の実験を計画。 (イ)実験データの解析と、論文の執筆。 (ウ)積極的に学会発表を実施。
今年度の進捗状況	・上記目標(ア)については、実際に被験者に参加してもらい、実験を実施した。 ・上記目標(イ)については、データを解析し、その内容をまとて国際会議論文を発表した ・上記目標(ウ)については、国際会議に参加して多くの研究者と議論した。
来年度の進捗目標	・より発展的な実験を計画し、実施する。 ・新たな論文の執筆を行う。 ・機械学習に関する新しい数理モデルの構築を開始する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年7月～	日本家政学会 会員
2014年～	日本ロボット学会研究専門委員会 開かれた知能研究専門委員会 委員 会員
2005年9月～	米国電気電子学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

入試委員、国際交流委員、その他各種委員、グループ主任等を担当

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	志子田　有光	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」（通称MDASH）申請と認定	2022年4月1日～	TGベーシック「東北学院大学　数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」（通称MDASH）として申請し認定された。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
合成画像を用いた機械学習による電子部品識別精度に関する研究	共同	2023年9月	情報科学技術フォーラム講演論文集2023(大阪府堺市)	太田 匠海, 志子田 有光, 森島 佑, 鈴木 順	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	鈴木　利則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義資料の充実，動画の活用など	2020年4月1日～2024年3月31日	担当している全科目の講義資料の充実を図り、事前に配布している。通信システムに関してタイムリーな話題（リモート会議の急増によるネットワークトラヒックの増大など）を取り入れた資料を作成し解説を行っている。 情報通信工学実験IIに関して、オンタイム講義を踏まえて内容を見直し、遠隔で受講者が個別に実験を遂行できるような内容とした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義時の提示資料アップデート	2020年4月1日～2024年3月31日	法令の改正や通信システムの技術進展に応じて、情報通信法規や通信システム工学の提示資料を更新した
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
下りOFDMAへのCAF適用に関する一検討	共著	2024年3月	2024年 電子情報通信学会 総合大会	早坂 勇飛，鈴木 利則	pp.B-3-29-B-3-29
野生動物による農作物被害防止のためのWi-Fiセンシングにおける深層学習を用いた物体位置推定	共著	2024年1月	電子情報通信学会 情報理論研究会	森島 佑，鈴木 利則，小倉 振一郎，松浦 寛	pp.IT2023-66-IT2023-66
レーダー方程式を応用したWi-Fiセンシングエリアの一検討	共著	2023年9月	2023電気関係学会東北支部連合大会	高橋 聖人，五十里 巧，鈴木 利則	pp.2G11-2G11
Wi-Fiセンシングを用いた屋外での侵入検知に関する実験的検討	共著	2023年9月	2023電気関係学会東北支部連合大会	伊藤 健，菅原 拓海，鈴木 利則	pp.2G10-2G10
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
野生動物による農作物被害防止のためのWi-Fiセンシングにおける深層学習を用いた物体位置推定	共同	2024年1月	電子情報通信学会技術研究報告 IT2023-66(宮城県仙台市)	◎森島佑，鈴木利則，小倉振一郎，松浦　寛	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～2025年度	共同(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	吉川　英機	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔授業における双方向性の確保	2020年～	2020年度の遠隔授業ではオンデマンドが主となったが、時間割上の時間帯においてはZOOMにて質問対応ができるようにして、双方向性を確保した。
授業においてManabaを活用して、自作教材を自由に使えるようにした。	2017年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業において自著を使用している。	2019年～	三木、吉川「情報理論」コロナ社
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学生相談員としての業務	2019年～	学生相談室に来室した学生・保護者の対応を行う。
多賀城市との連携協定事業の一環として開催する「21世紀のキーテクノロジーを学ぶ」の講師	2013年～	夏季休業中に多賀城市内の小中学校理科教諭に対し、授業に役立つと思われる内容について講習を行った。
教職課程センター所員としての業務	2010年～	教育課程履修の学生に対して教育実習の支援を行っている。
工学総合研究所啓発活動コラボ授業の講師	2010年～	夏季休業中に多賀城市立東豊中学校の生徒を対象として、情報通信に関連する講習と実習を行った。
工学基礎教育センター相談員	2010年～	数学、物理の学習支援を中心として、専門科目の相談も応じている。

現在の課題・目標	・担当科目に対して興味を引き出させること ・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと ・講義内容を応用できるようになること
今年度の進捗状況	・担当科目に対して興味を引き出させること ・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと ・講義内容を応用できるようになること
来年度の進捗目標	・上記の点について授業資料の内容を見直しながら継続する ・評価項目をより明確にする ・新たな教科書として「情報数学」を執筆中

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・従来より行っている誤り訂正符号の数学的解析を続けている ・学内において組織しているアタックラボで行っている差分電力解析による共通鍵暗号の解析 ・誤り訂正符号、および暗号システムの実装への応用 ・大学院生の指導
今年度の進捗状況	・これまでに国際シンポジウムに投稿した内容の論文投稿の準備をしている。 ・卒業研究において、軽量ブロック暗号や誤り訂正符の性能評価を研究テーマとした。 ・大学院生を指導した
来年度の進捗目標	・情報基盤工学科の新設に伴い、新カリキュラムの充実を全てに優先させる。 ・誤り訂正符号の解析テーマに関しては既発表の内容の論文投稿を行う。 ・ブロック暗号だけでなく、ストリーム暗号のアタックを行う。 ・暗号攻撃にFPGAボードを利用するためのスキルを身につける。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～2024年6月	電子情報通信学会　基礎・境界ソサイエティ 出版委員
2021年6月～2023年6月	電子情報通信学会　情報理論とその応用サブソサイエティ 会計担当
2019年～	計測自動制御学会 会員
2012年～	電気学会 会員
2009年～	電子情報通信学会　東北支部 運営委員
2005年～	電子情報通信学会 論文誌　査読委員
1992年～	The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) 会員
1991年～	電子情報通信学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

情報基盤工学科　学科長
理数教育センター相談員
学生相談員
教職課程センター運営委員

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	門倉　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解促進のための資料作成と配布およびオンライン動画の作成配信	2023年4月14日～2024年1月26日	授業内容のポイントをまとめた資料の配布および授業のオンライン動画を作成配信し，授業理解促進を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
情報数理演習Ⅲの演習資料と小テストの配布	2023年9月21日～2024年1月18日	1年後期の授業「情報数理演習Ⅲ（微分積分学Ⅱ）」の教材を毎回作成し配布した。
情報数学演習の演習資料と小テストの配布	2023年4月19日～2023年8月2日	2年前期の授業「情報数学演習」の教材を毎回作成し配布した。
統計的思考の基礎の解説動画の配信および資料と小テストの配布	2023年4月18日～2023年7月25日	1年前期の授業「統計的思考の基礎」の教材の解説動画および資料と小テストを毎回作成し配信・配布した。
データサイエンス演習の演習資料の配布	2023年4月14日～2023年7月28日	3年前期の授業「データサイエンス演習」の教材を11回分作成し配布した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業内容が理解しやすいような，わかりやすい説明をする。 学習効果が得られるように教材を工夫して作成する。
今年度の進捗状況	授業内容が理解しやすいような教材の作成や改良など，一定の進捗があったといえる。
来年度の進捗目標	引き続き，よりわかりやすい説明と教材の工夫を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
合流のない一群集における歩行者前方距離が滞留伝播性状に与える影響　高層建築物におけるSAG-EB モデルを用いた階段室滞留性状の評価	共著	2024年2月	日本建築学会環境系論文集，89(816)	柴田卓弥，佐野友紀，藤井皓介，水野雅之，門倉博之，関澤愛	pp.24-35
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
図書館閉架書庫における避難経路の選択要因に関する考察	共同	2023年5月	第30回人間・環境学会大会(大阪)	恒松良純，門倉博之	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①同専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②高層建築物における避難時の滞留伝播について分析を行う。
今年度の進捗状況	上記目標①については，共同研究として図書館の避難実験の実施と学術論文の投稿をすることができた。上記目標②については，学術論文への投稿に向けての分析など，一定の進捗があったといえる。
来年度の進捗目標	上記目標①および②について，引き続き，学会での報告と学術論文として投稿する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費助成金若手研究	2019年度～2023年度	個別(研究代表者)	高層ビルにおける全館避難時の階段室内滞留のモデル化
科学研究費助成事業 科学研究費助成金基盤研究(C)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2005年5月～	日本火災学会会員 会員
2005年4月～	日本建築学会会員 会員
2002年6月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
教務委員

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木下　勉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
再履修者に対する演習科目指導体制の構築	2023年	ST(Student Tutor)やSA(Student Assistant)を活用し，情報数理演習I・情報数理演習II・応用線形代数学演習の再履修者がメインの講義について，講義中に細かな指導と質問に対応できる体制を構築した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
情報数理演習IIの演習資料と小テストを毎回配布	2023年	「情報数理演習II」の教材を，学習意欲の低い学生用に見直し，毎回作成し配布した．
応用線形代数学演習の演習資料と小テストを毎回配布	2023年	「応用線形代数学演習」の教材を，学習意欲の低い学生用に見直し，毎回作成し配布した．
応用線形代数学の予習資料と復習資料を毎回配布	2023年	「応用線形代数学」の記入式教材を毎回作成し，1週間前に公開することで予習がしやすいようにした． また，講義後に理解度を確認するテストを作成し，自宅での復習をしやすいようにした．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	再履修者など，学習意欲の低い学生にも，講義内容が理解できるような仕組みを検討する．また，講義資料をブラッシュアップし，理解しやすいものにする．
今年度の進捗状況	各種講義資料について，前年度作成の資料を見直し，図表の追加および説明の追加を行った．
来年度の進捗目標	授業評価アンケートの結果を踏まえ，講義に向けて改善するべき項目に対処する．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Rで学ぶ確率統計学 実データ分析編『Rで学ぶ確率統計学（実データ解析編）』	共著	2023年9月	内田老鶴圃	神永正博・木下勉	pp.1-257
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Quantitative Evaluation of Archeological Classification Based on Haniwa Facial Similarity	共著	2023年8月	日本情報考古学会，日本情報考古学会誌，28(1・2)	Xin Lu, Tsutomu Kinoshita, Akio Kimura, Kouichi Konno	pp.1-11
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
A Study on Correction Method for Vertical Direction of Earthenware Fragments Based on 3D Measured Point Clouds	共著	2024年3月	The 8th IIEEJ International Conference on Image Electronics and Visual Computing	Taishin Kawashima, Mengbo You, Tsutomu Kinoshita and Kouichi Konno	pp.2A1
A Method to Improve the Accuracy of Stone Tools Identification with D2 Distribution	共著	2024年1月	International Workshop on Advanced Image Technology 2024	Ayaka Seto, Mengbo You, Tsutomu Kinoshita, Fumito Chiba, Kouichi Konno	pp.6C4
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

レーザー計測と写真計測の融合による表面形状の計測手法の検討	共同	2024年1月	令和5年度芸術科学会東北支部大会(岩手大学)	◎瀬戸 彩花, 游 梦博, 木下 勉, 千葉 史, ラング, 今野 晃市	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①研究成果を学術論文, 口頭発表などの形で発表する. ②外部資金等を獲得し, 研究環境を整備する. ③学外の研究者と共同研究を実施する
今年度の進捗状況	①査読付き学術論文が採択された. また, 口頭発表もできた. ②科研費は未採択となった, 次年度は採択されるように努力をする. ③岩手大学との共同研究を実施している.
来年度の進捗目標	①研究成果を学術論文, 口頭発表などの形で発表する. ②研究室の運営に備え, 外部資金獲得を目指す. ③学外の研究者との共同研究により, 研究環境をよりよくする.

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

シラバス・時間割委員

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	深瀬　道晴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育支援システムのmanaba folioを活用し、学生がいつでもどこでも課題等に取り組める仕組みを実施している。	2020年4月～	教育支援システムのmanaba folio上に授業の講義資料と課題・レポートを毎回アップロードし、学生が授業時間外においていつでもどこでも予復習や課題に取り組み、どこからでもレポートを提出できるように工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「プログラミング基礎」の講義資料「プログラミング応用」の講義資料	2020年4月～	自身が今年度担当する講義について、独自の講義資料を作成した。それぞれについて、教科書・参考文献と整合性が適切に取れていること、一方で、教科書・参考文献の内容をより分かりやすくなるように学習の流れを整形し、必要な説明を加えながら、教科書・参考文献にはない発展的な内容・課題を取り入れた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究（C）	2019年度～2023年度	個別	格子基底簡約アルゴリズムの改良とRSA暗号安全性解析への応用
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究（C）	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	耐タンパー性を持つ論理演算型軽量ブロック暗号の設計原理の研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	物部　寛太郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
Zoomの導入	2020年～	担当している授業全ててZoomを導入することで、遠隔授業を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生個々に応じた教育を行う
今年度の進捗状況	主に卒業研究において，各自の興味のあるテーマを設定して，それぞれのテーマに応じたシステム開発を支援するなどの対応を行った．
来年度の進捗目標	今年度の反省点を活かしつつ，今年度同様の方針で教育を行う

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
VRを用いた災害体験システムにおける避難支援エージェントに関する研究	共同	2023年12月	工学総合研究所2023年度研究会(東北学院大学)	千葉あん奈，物部寛太郎	
VRを用いた屋内における避難支援エージェントの検討と評価	共同	2023年9月	第28回日本バーチャルリアリティ学会大会(東京たま未来メッセ)	千葉あん奈，物部寛太郎	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	論文投稿を増やす
今年度の進捗状況	学会発表のみとなった
来年度の進捗目標	来年度は，論文投稿を増やす

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本バーチャルリアリティ学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	芸術・実技等活動にも視野を拡げる
今年度の進捗状況	芸術・実技等活動は特に行うことはなかった

来年度の進捗目標	引き続き，芸術・実技等活動にも視野を拡げる
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	講師	氏名	森島　佑	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
東北学院大学おける生成AI活用科目の全学展開	2023年12月21日	
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
野生動物による農作物被害防止のためのWi-Fiセンシングにおける深層学習を用いた物体位置推定	共著	2024年1月	電子情報通信学会 情報理論研究会	森島 佑, 鈴木 利則, 小倉 振一郎, 松浦 寛	pp.IT2023-66-IT2023-66
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
野生動物による農作物被害防止のためのWi-Fiセンシングにおける深層学習を用いた物体位置推定	共同	2024年1月	電子情報通信学会技術研究報告 IT2023-66(宮城県仙台市)	◎森島佑, 鈴木利則, 小倉振一郎, 松浦　寛	
合成画像を用いた機械学習による電子部品識別精度に関する研究	共同	2023年9月	情報科学技術フォーラム講演論文集2023(大阪府堺市)	太田 匠海, 志子田 有光, 森島 佑, 鈴木 順	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～2023年5月	貢献賞（ソサイエティ運営） 企画立案・運営等
2021年6月～	電子情報通信学会 情報理論研究専門委員会 委員

2021年6月～2023年5月	電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ電子広報担当幹事
2013年～	電子情報通信学会 会員
2013年～	IEEE 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

地域総合学部

地域コミュニティ学科

政策デザイン学科

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	伊藤　晶文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを用いたオンデマンド授業	2022年4月1日～	「環境の科学」において，動画および授業資料（アウトラインおよび図表資料），manabaの小テストおよびレポート機能を用いてオンデマンド授業を行った。また，manabaのコレクション機能を用いて，学生からの質問に回答した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業時の配布資料の作成	2022年4月1日～	講義については，アウトライン，図表資料（ともにPDF）をmanabaにて事前配布し，授業の流れを前もって把握できるようにしている。演習および実習については，授業計画全体の流れを示すとともに，必要に応じてレジュメ等の資料を作成・配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	教養教育科目，学部共通科目，学科専門科目の各授業について，標準的な担当科目数を実施するとともに，学生の理解度に応じた授業の実施を心がける。
今年度の進捗状況	本学の教学システムであるmanabaを活用し，小テスト機能や個別指導コレクション機能をとおして，学生の理解度を把握することに努めた。
来年度の進捗目標	今年度の状況把握をふまえて，各授業の内容および配布資料のブラッシュアップを行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
陸域および海域を結合したDEMを用いた2011年東北地方太平洋沖地震津波後の地形変化の解析―宮城県蒲生干潟周辺を事例に―	共著	2023年12月	季刊地理学，75(4)	伊藤晶文，小岩直人	pp.149-158
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	COVID19の影響により進捗が遅れている研究（科研費）をできるだけ進める。
今年度の進捗状況	SfM-MVS処理を進めるとともに，これまでの成果の一部を論文発表した。
来年度の進捗目標	科研費を延長申請した研究を適宜進める。関連して得られた成果を発表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～	東北地理学会 評議員

2023年6月～	東北地理学会 幹事長
2022年6月～	国土交通省国土地理院治水地形判定委員会（東北地区） 委員
2020年4月～2024年3月	日本地理学会 編集専門委員
2017年1月～	宮城県環境影響評価技術審査会 委員
2003年10月～	日本地形学連合 会員
1997年5月～	日本第四紀学会 会員
1997年5月～	日本地理学会 会員
1995年4月～	東北地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

学生委員会委員
学術研究会評議員
奨学会運営委員会委員
「授業改善のための学生アンケート」実施委員会委員
グループ主任（1年生）
設備委員会委員（大学院）
運営委員会委員（地域総合研究所）

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	岩動　志乃夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2023年度岩動・柳井ゼミ合同卒業研究発表会の実施	2024年1月25日～2024年1月25日	12時より卒業研究発表会を合同ゼミにて開催した。多岐にわたる分野の発表が披露され、3年、2年生の参加もあり、たいへん好評であった。
2年生の「社会と産業発展実習B」で五橋キャンパス周辺の飲食店マップに関するフィールドワークを実施	2023年12月7日～2023年12月14日	五橋キャンパス周辺の荒町、連坊、土樋、北目町等の飲食店を対象として、飲食店マップ作成のためのフィールドワークと実施した。
1年生の「地域構想学基礎実習」でフィールドワークを実施	2023年10月23日～2024年1月22日	地域構想学科1年の地域構想額基礎実習で仙台市内の都市構造を学ぶ目的で，旧奥州街道，芭蕉の辻，仙台浅草，仙台銀座を調査した。学んだ内容をまとめた発表会を実施した。10月23日,11月27日,1月22日の3回。
3年演習Bの地域調査（合宿）を秋田県で実施した	2023年10月7日～2023年10月8日	秋田県大仙市で花火資料館・花火アム、角間川の豪商跡地、蔵の展示等を見学調査し、地域資源や花火産業について学習した。夜は「大曲の花火・秋の章」を鑑賞した。翌日は角館にて伝統的建造物群保存地区での街並み保全、伝統産業資料館で蒲細工について学習した。
2023年度発展実習B受講生による市内巡検の実施（四ツ谷用水・六郷堀と七郷堀）	2023年10月5日～2023年10月12日	発展実習B受講生による四ツ谷用水の取水地・四谷堰から仙台市内を巡る巡検（9月15日）、六郷堀・七郷堀を利用した産業まちの発展に関する巡検（9月29日）を実施し、現地で地域を診る目を養う指導をした。
2023年度3年ゼミ生によるフィールド調査にもとずいた報告書を製本した	2023年9月15日～2024年3月31日	3年生の「地域構想学演習B」で学習した成果『遠野市におけるホップ栽培とクラフトビール製造による地域づくり』を製本した。
2023年度3年演習Aの地域調査（合宿）を岩手県遠野市で実施した	2023年8月29日～2023年8月31日	岩手県遠野市でホップを活かしたビールを核としたまちづくりに関する調査合宿を行った。
2023年度地域構想学演習A,卒業研究A受講生の地理学会への参加と卒業生の発表	2023年5月20日～2023年5月21日	東北地理学会の春季学術大会へゼミ所属学生（3年・4年生）が参加した。同学会で3月の卒業生阿部修治氏が「仙台市における公衆浴場の立地変遷と跡地利用の特性」について発表した。
3年ゼミ歓迎巡検の実施	2023年5月15日～2023年5月15日	ゼミ4年生が中心となり3年ゼミ生を歓迎する仙台市内巡検を実施し、指導した。河原町駅−畳屋町−舟丁−南材木町−穀町−連坊−荒町−土樋−米ケ袋−北目町といった城下町時代の町人町から武家屋敷のあった町を巡り、往時を偲ぶとともに現在の変貌を確認した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
高校生への模擬授業の実施	2023年10月20日～2023年10月20日	栃木県矢板市の矢板東高校にて同校の高校生に模擬授業を実施した。
高校生への模擬授業の実施	2023年5月25日～2023年5月25日	本学土樋キャンパスにて東北学院高校の高校生に模擬授業を実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
8.花巻(20-21)　9.釜石(22-23)　11.古川(26-27)『読みたくなる地図　地方都市編②　日本の都市はどう変わったか』	共著	2023年7月	海青社	岩動志乃夫	pp.20-23,26-27.
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
遠野市におけるホップ栽培の展開と「ビールの里構想」の試み	単著	2024年3月	地域総合研究所紀要, 1	岩動志乃夫	pp.21-40
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
岩手県におけるクラフトビール製造企業の立地特性	単独	2023年6月	立正地理学会春季学術大会(熊谷市　日本)	岩動志乃夫	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 文科省科研費基盤研究B	2017年度～	共同(研究分担者)	「観光の組織化と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」というテーマのもとで研究を遂行している。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月	東北地理学会 評議員6期
2020年6月～2024年5月	立正地理学会 副会長
2020年4月～	日本地理学会 代議員6期
2019年8月～	宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議会 委員
2019年4月～	日本観光研究学会 会員
2018年4月～	宮城県七ヶ浜町長期総合計画専門部会 委員
2015年4月～	仙台市泉区区民協同まちづくり事業評価委員 委員長
2015年4月～	仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会 委員長
2006年4月～	東北都市学会 理事
1999年4月～	東北都市学会 会員
1997年4月～	経済地理学会 会員
1990年4月～	日本都市学会 会員
1988年4月～	人文地理学会 会員
1984年4月～	立正地理学会 会員
1984年4月～	日本地理学会 会員
1982年10月～	東北地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	大迫　章史	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業アンケートの実施	2020年4月1日～	授業等の改善のため、manabaのアンケート機能等を活用して学生に授業アンケートを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年8月～	日本国際教育学会　理事 会員
2020年8月～	日本国際教育学会 理事
2019年9月～	日本カトリック教育学会 紀要編集委員
2019年4月～	東北教育学会 紀要編集委員
2019年4月～	仙台白百合女子大学カトリック研究所 客員所員
2019年～	東北教育学会　紀要編集委員 会員
2019年～	日本カトリック教育学会　紀要編集委員 会員
2005年4月～	宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 客員研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	佐久間　政広	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義内容の理解と定着を促進するための三つの工夫	2023年4月1日～	講義科目の授業をおこなうにさいして、次の三つの工夫をおこなった。 ①授業内容の要点を記した資料を作成し、毎回、配布した。 ②毎回の授業において、授業内容の最重要箇所を200字で要約することになる設問への回答を第1課題、授業を受講して考えたことおよび質問を200字程度で記すことを第2課題とし、これら二つの課題をmanabaのアンケートで毎回提出させた。 ③毎回の授業において、授業内容の理解に資する10分～30分程度の動画を視聴させた。
学生が主体的に実施する地域調査実習の工夫	2023年4月1日～2023年8月31日	地域構想学科の実習において地域社会の実態を対象として、問題設定から現地調査、データ分析、報告書作成といった一連の過程を学生が主体的におこなう教育を実施した。授業では、宮城県山元町を調査対象地とし、三つの受講生グループそれぞれが人口の社会増をめぐる諸施策、震災後の災害公営住宅におけるコミュニティ形成、被災神社の再建をテーマとしてフィールドワーク実習を実施した。この実習の成果は、外部に公開可能な報告書にまとめた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2010年4月～	仙台銀行まちづくり基金運営委員 運営参加・支援
2009年10月～2023年12月	日本村落研究学会理事 会員
1992年9月～	日本村落研究学会会員 会員
1983年9月～	日本社会学会会員 会員
1981年4月～	東北社会学会会員 会員
1981年4月～	東北社会学研究会会員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	清水　貴裕	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
体験により理解を深める講義（教育コミュニケーション論）	2018年4月～	コミュニケーションの中で生じる現象を実際に体験し，グループ討議をすることで授業内容に関する知識を深め，関心や学習意欲を持ちやすくするよう工夫している。
学生との間に双方向性を持たせる講義（健康の科学）	2018年4月～	一方的な講義にならないよう，授業内でスマートフォンを用いたリアルタイム・アンケート（Respon）を活用し，講義内容に関する質問や意見を求め，クラス内の意見を共有することによって双方向型の授業を行っている。
マルチメディア機器の利用	2018年4月～	パワーポイントやビデオ等によって図表や映像を提示することで視覚的にも理解を深めやすくなるよう努めている。
シャトルカードの利用（教育の相談と指導Ⅰ・Ⅱ，教育コミュニケーション論，教職実践演習）	2018年4月～	比較的少人数の授業においては，シャトルカードを用いて，学生の毎回の授業に対する感想・疑問・質問を求め，一人ひとりに対してコメントを返すことで授業に関するコミュニケーションを取っている。学生はシャトルカードに蓄積される自分と教員のコメントをみることで，授業全体の振り返りや理解の深まりにも役立てることができる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年1月～	日本心理学諸学会連合　心理学検定局常任運営委員 会員
2018年4月～	日本応用心理学会　機関誌編集委員会委員 会員
2016年4月～	日本催眠医学心理学会　編集委員会委員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	菅原　真枝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費基盤研究(B)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	研究題目「社会統合の展開と可能性―外国人ケアワーカーのキャリアと移動の選択に注目して」、研究代表者　篠原千佳（桃山学院大学）
科学研究費助成事業 科学研究費基盤研究(C)	2018年度～2022年度	個別(研究分担者)	研究題目　外国人ケアワーカーの来日動機と定住意向を規定する要因に関する社会学的研究　研究代表者　菅原真枝
科学研究費助成事業 科学研究費基盤研究(C)	2018年度～2022年度	個別(研究代表者)	研究題目　外国人ケアワーカーの来日動機と定住意向を規定する要因に関する社会学的研究　研究代表者　菅原真枝

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年7月～2023年7月	東北社会学会　研究活動委員会委員長 理事
2021年5月～	みやぎ北ユネスコ協会 理事
2020年4月～	大崎市男女共同参画推進審議会委員長 委員長

2020年4月～	公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員 委員
2020年4月～	第36次宮城県社会教育委員会委員 委員
2019年3月～	日本在宅ケア学会会員 会員
2017年2月～	特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 理事 委員
2016年9月～	特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター 理事 委員
2016年4月～	東北学院大学教育研究所 所員 委員
2006年～	日本福祉文化学会 会員 会員
2006年～	大崎市男女共同参画推進審議会 委員 委員
2003年～	福祉社会学会 会員 会員
1998年～	日本社会学会 会員 会員
1996年～	東北社会学会 会員 会員
1996年～	東北社会学研究会 会員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	原　義彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業への主体的参加と理解の促進	2022年4月～	授業の終わりにレスポンから質問や感想を記入してもらう。その結果の一覧を次の授業時に提示する。質問や感想へのコメントを行うとともに、前回授業の復習に役立てている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教科書、参考図書の作成	2019年4月～	①『生涯学習概論』（理想社、2019）を共著で作成する。生涯学習概論の教科書として利用した。 ②『生涯学習支援の道具箱』（社会通信教育協会、2019）を共編で作成した。生涯学習概論等の授業の参考図書として利用した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
社会教育施設における質評価の構想	単著	2023年11月	日本生涯教育学会，日本生涯教育学会年報(44)	原義彦	pp.i-x
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大学と地域の連携による生涯学習と地域づくりの推進～東北学院大学の取り組み～	単著	2023年10月	日本青年館，社会教育，928(10)	原義彦	pp.10-15
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
デジタルリテラシーの向上と生涯学習支援	単著	2023年7月	日本視聴覚教育協会，視聴覚教育，77(7)	原義彦	pp.2-3
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
A study on the transformation of school value in Danish folk high school between 2017 and 2024	単独	2024年3月	Nordic Education Research Association(Malmö)	Yoshihiko Hara	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年11月～		国立花山青少年自然の家運営委員会委員 委員	
2022年11月～		日本生涯教育学会 会長	
2021年11月～		長野県公民館運営協議会　公民館職員支援講座 パネリスト, 講師	
2013年9月～		文部科学省優良公民館審査委員会 委員	
2000年8月～		国立教育政策研究所「社会教育主事講習」講師 講師	
1991年9月～		日本教育社会学会 会員	
1989年5月～		日本生涯教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	平吹　喜彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
東日本大震災と復興に向き合い，活動する学習機会の導入	2020年～	「持続可能な地域の構築」，「健全な生態系・環境の持続を基軸とするSDGsの推進」という視点から，東日本大震災と復興について考え，行動につなげる機会を，すべての授業に導入してきた。また2011年以降，学術団体や市民団体,被災地住民らと協働で学習会やフォーラム，被災地での復興支援活動を企画・運営し，学生教育にも注意深く導入してきた。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
「ヒトと自然のかかわり」に対する知的理解とともに，学習者の自己形成が育まれるような教育の創出	2020年～	景観生態学・植生学・ESD（持続を可能にする教育）を専門とする立場から，野生生物の生活史，およびヒトー野生生物－環境間のつながりについて，その多様性や形成史，保全・保護に触れながら学習が深化し，あわせて学習者自身の自然観や人生観，世界観が醸成され得るような教育を心がけてきた。そのための一助として，身近にある自然や暮らしを見つめ直す学習，あるいは地域の児童・生徒や住民と向き合うフィールドワークの開発を積極的に行いながら，実体験と学習者自身による課題解決を重視した取り組みを続けている。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
「企画する，段取る，遂行する，分析する，まとめる，表現する，伝える」ことのスキルアップ	2020年～	さまざまな学習の内容・形態の中に，「学び」の基本として，このスキームを挿入してきた。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
「ローカル（地域）」と「グローバル（地球，世界）」を俯瞰し得る視点の獲得をめざした学習の構築	2020年～	さまざまな学習の内容・形態の中に，「地域と地球・世界」，「多様性の意義」といったテーマや視点を挿入し，持続可能な地域の構築，あるいは地球市民の育成に貢献しうる教育を心がけてきた。また，海外学術調査に赴く際には，国内でフィールドワークを積んだ大学院生や学部学生に同行を促し，異なる自然や風土，文化を体験し得る機会を提供してきた。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
導入教育として，「自然に浸る」体験を準備	2020年～	自然科学を志向する学生であっても，入学当初から豊かな自然体験を有する者はごく少数でしかない。そこで,「ヒトと自然のかかわり」を学ぶ際の導入段階にふさわしい，学内や近郊の二次的自然を活用した体験学習プログラムを開発してきた。この学習活動では，五感を働かせて自然を認知することの楽しさを味わうとともに，自然界（生態系）の営みが非日常的なスケールで複雑に展開していることに目を向けることをめざしている。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
自然教育・環境教育・ESD（持続を可能にする教育）・SDGs（持続を可能にする開発目標）にかかわる学習素材・教材アーカイヴ	2020年～	自然教育・環境教育・ESD・SDGsを推進する任意団体を組織し，体験学習フィールドの開拓・維持や学習プログラムの開発を進めてきた。2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，オンライン学習への対応となったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
講義・実験・実習で用いる説明文・図解資料（印刷物やパワーポイント映像，動画など），および標本類。2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，オンライン授業の教材開発に努めた。	2020年～	学習者の理解を助け，しかも自立的な学習活動を織り込んだビジュアル教材の作成に努めてきた。2011年以降は，東日本大震災と復興，持続可能な地域づくりに関わる教材づくりにウエイトを置いている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

平吹喜彦. 2023. タイ王国をフィールドとした海外地域実習 一「手」が生み出すタイの暮らし・文化・社会一. 地域構想学研究教育報告, 13: 71-73	2023年	私は3か年度にわたって担当した東北学院大学教養学部地域構想学科.の「海外地域実習」に関して、その概要・成果・課題を総括した。
4. その他教育活動上特記すべき事項		
東日本大震災に伴う大地震・大津波とその後の復興事業によって大きく変遷する海岸エコトーンと沿岸地域に着目して,「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」と「生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト」(いずれも世話人代表),「地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会」(世話人)の3つのプラットホームを運営。現場・地域に根ざした学術調査で収集したデータに基づいて,「ふるさと・里浜復興」に向けた情報やアイデア, 実践の発信・分かち合い・学び合いを推進	2020年～	被災地住民や市民団体, 学術団体, 行政機関などのステークホルダーと協働して,「砂浜海岸エコトーンの構造と恵み, 自律的再生に立脚したふるさと・里浜の復興」に関する学び合いを推進した(なお, 2020・2021年度は, 新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため, 対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが, 2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた)。それらの活動の骨子は, ホームページ https://sites.google.com/site/ecotonesendai/ (随時不定期更新)などで自主的に公開している。
宮城県仙台市新浜地区や亘理町吉田浜地区などで, 学生が現場で「地域づくり」を体験しうる「地域・市民団体と連携した学習活動」を実施(世話人)	2020年～	住民・市民団体の皆さんの手厚いサポートの下で,「里浜・里地・里山における景観の読み解き, 自然環境と伝統的な暮らしの探求, 賢い資源利用や災害適応術の考究」を体験活動として織り込み, 復興・持続可能な地域づくりのあり方を模索する学び合いを企画・実施した。なお, 2020・2021年度は, 新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため, 対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが, 2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
市民団体・学校・学術団体等が主催する講座・自然観察会・環境保全活動を推進(講師・支援者)	2020年～	新浜町内会(仙台市宮城野区)主催の「新浜フットパス」, 新浜町内会ほか主催の「新浜の自然と歴史の学習会」, 東北学院中学校(2020年度)および高等学校(2021～2023年度)「総合的な学習・中高大一貫教育事業」, 仙台市高砂市民センター・仙台市立岡田小学校ほか主催の「岡田新浜 花咲く浜辺づくり計画」などに参画して, 学びの機会を提供した。なお, 2020・2021年度は, 新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため, 対面による学習活動の一部を断念せざるを得なかったが, 2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化させてきた。
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Comparisons of the crown NDVI and height growth of pines between the preserved and land elevation areas using UAV remote sensing	共著	2023年10月	Proceedings of the 2023 Asian Conference on Remote Sensing (ACRS2023), **	Ogaki Yamato, Tomita Mizuki, Hirayama Hidetake, Hirabuki Yoshihiko	pp.***-***
東北地方太平洋沖地震に伴う津波および地盤の沈降による攪乱を受けた後背湿地の2014年から2019年の植生変化	共著	2023年8月	景観生態学, 28	宮本寛史, 岡浩平, 平吹喜彦, 出村雄太, Park Yong Seuk, 光用直子, 松島肇	pp.1-11
仙台湾沿岸における津波による低頻度大規模攪乱後10生育期間目の植生と人為撹乱の影響	共著	2023年8月	景観生態学, 28	菅野洋, 富田瑞樹, 平吹喜彦, 原慶太郎	pp.13-23
津波被災地における外来植物オオハマガヤ(Ammophila breviligulata Fern.)が海浜植物に与える影響	共著	2023年8月	日本緑化工学会誌, 49	上田晋輔・岡浩平・平吹喜彦・松島肇	pp.57-62
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

Impact of restoration works and ecosystem considerations on vegetation recovery following the 2011 tsunami: a remote sensing approach	共著	2023年10月	Proceedings of the 2023 Asian Conference on Remote Sensing (ACRS2023), **	Tahata Tomu, Tomita Mizuki, Kanno Hiroshi, Hirayama Hidetake, Hirabuki Yoshihiko, Hara Keitarou	pp.***-***
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
モミやタブノキがつくる巨木の森『特別名勝松島ハンドブック』	単著	2024年3月	「“伊達”な文化」魅力発信推進事業実行委員会事務局（宮城県教育庁文化財課）	平吹喜彦	pp.18-23
「よみがえる生きものと自然」に出会う 仙台・名取の海辺マップ（解説用および記録用の2種）『「よみがえる生きものと自然」に出会う 仙台・名取の海辺マップ（解説用および記録用の2種）』	共編者（共編著者）	2024年3月	カントリーパーク新浜(環境部).	平吹喜彦・赤谷加奈	pp.**-**
ふるさと 新浜マップ 2023『ふるさと 新浜マップ 2023』	共編者（共編著者）	2023年12月	新浜町内会・生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト	遠藤源一郎. 平吹喜彦, 菊池慶子, 赤谷加奈	pp.1-6
感性と景観: 自然共生を推進する古くて、新しい視点	単著	2023年8月	日本ビオトープ協会, ビオトープ, 52	平吹喜彦	pp.6-8
屋敷林『亘理町史 自然編』	共著	2023年7月	宮城県亘理町	平吹喜彦, 内山槙子, 三塚明典	pp.349-354
植生『亘理町史 自然編』	共著	2023年7月	宮城県亘理町	平吹喜彦, 滝口政彦, 内藤俊彦	pp.90-107
自然のあらまし『亘理町史 自然編』	単著	2023年7月	宮城県亘理町	平吹喜彦	pp.13-19
「海辺を巡る自然とヒトと私」の12年	単著	2023年4月	東北学院大学, 震災学, 17	平吹喜彦	pp.44-45
東日本大震災の被災海岸　大津波から、着々と回復中.『愛しの生態系　研究者とまもる「陸の豊かさ」』	共著	2023年4月	文一総合出版	島田直明, 平吹喜彦	pp.68-73
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
カントリーパーク新浜 人・むすぶ・自然『カントリーパーク新浜 人・むすぶ・自然』	共編者（共編著者）	2024年3月	カントリーパーク新浜(環境部)	熊谷真由, 平吹喜彦, 田中ちひろ	pp.**-**
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
仙台市汀沈釜湿地における希少湿生植物の分布について	共同	2024年2月	自然環境復元学会第24回全国大会(東京都)	◎宮本寛史・栗栖寛和・岡浩平・齊藤賢治・平吹喜彦・黒沢高秀	
盛土区と津波攪乱跡区におけるクロマツの樹高成長にNDVI・土壌水分・隣接木との競争が与える影響	共同	2024年2月	自然環境復元学会第24回全国大会(東京都)	◎大垣岳斗・富田瑞樹・平山英毅・菅野洋・平吹喜彦	
津波攪乱跡地における人為改変程度に着目した植物の潜在的分布域の変化	共同	2024年2月	自然環境復元学会第24回全国大会(東京都)	◎田畠斗夢・富田瑞樹・平山英毅・菅野洋・平吹喜彦・原慶太郎	
東北地方太平洋沖地震・津波で攪乱された後背湿地におけるビオトープづくり 1. 植生調査とマスタープラン策定	共同	2024年2月	自然環境復元学会第24回全国大会(東京都)	◎齊藤賢治・平吹喜彦・富田瑞樹・杉山多喜子・阿部一敏・髙橋千尋	
粘り強い防潮堤における覆砂土と植生のあり方に関する植生工学的考察	共同	2023年10月	植生学会第28回大会(神戸市)	◎平吹喜彦・岡浩平・松島肇・黒沢髙秀・富田瑞樹・長島康雄	

Evaluation of the ecosystem-resilience and landscape design for the disaster mitigation across a huge tsunami disturbed sand-dune ecotone	共同	2023年7月	11th IALE World Congress(ナイロビ, ケニア)	◎Hirabuki Yoshihiko, Sato Yujiro, Oka Kouhei, Tomita Mizuki, Kanno Hiroshi, Matsushima Hajime, Kurosawa Takahide, Hara Keitarou.	
仙台海岸における東日本大震災後の徘徊性昆虫と植生の関係について	共同	2023年5月	日本景観生態学会第33回淡路大会(淡路市)	◎大越陽・松島肇・根岸淳二郎・平吹喜彦・岡浩平・鐘向梅	
津波攪乱跡地と盛土区におけるクロマツの樹高成長と環境条件の比較	共同	2023年5月	日本景観生態学会第33回淡路大会(淡路市)	◎大垣岳斗・富田瑞樹・平山英毅・平吹喜彦	
仙台市沿岸部における復旧事業後の植物の分布と環境要因の関係	共同	2023年5月	日本景観生態学会第33回淡路大会(淡路市)	◎田畠斗夢・富田瑞樹・菅野洋・平山英毅・平吹喜彦・原慶太郎	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	東日本大震災の津波で大きな被害を受けた東北地方太平洋側では，震災後10年の間にほぼ全ての海岸防災施設が復旧することができた。事業の過程で生じた植物多様性保全上の問題に対処するために，各地において多様でユニークな環境保全事業がなされた。本研究はこのような環境保全事業について，個々の事業の現状を記録し，保全の目標が達成したかを検証し，保全以外の多面的効果の発揮状況に関して調査・分析する。これらの試みの効果や限界，課題を明らかにすることにより，環境保全と防災が両立する海岸防災施設のあり方に関わる基本原理・技術を提示することを目的としている。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	大川小判決で学校関係者に自然災害に対する情報収集義務が課された。児童・生徒の教育を本来の職務とする教員が、学校区毎に異なる多種多様な自然災害(地震・台風・豪雨など)に対して防災科学の新知見を収集し続けることは難しい。官(地方気象台)・学(大学)が協力することで、個々の学校が必要とする最先端の自然災害情報の入手方法・集約方法を提案する。また、学校は継続的に運営されていく存在であり、官・学の協力による研究を行っている一定期間だけ情報収集義務を果たすための仕組みが構築されても成果は限定的である。継続可能な仕組みを、産(民間事業者)・官・学が協力して新規の事業を創出するための条件を明らかにする。
その他の補助金・助成金 2023年度学校法人東北学院個別研究助成金	2023年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年～	植生学会 編集委員
2022年4月～	自然環境復元学会 会長

2022年～	みやぎの運河群利活用推進会議 副座長
2022年～2023年	多田川圏域河川整備学識者懇談会 委員
2021年～2023年	特別名勝松島保存活用計画策定会議 副座長
2020年～	亘理町史編纂委員会 委員
2020年～	植生学会 運営委員
2020年～2023年	植生学会 表彰委員長
2019年～	仙台市広瀬川清流保全審議会 副会長
2018年～	環境省自然環境保全基礎調査検討会植生分科会 委員
2018年～	国土交通省名取川水系河川整備学識者懇談会 委員
2016年7月～	日本海岸林学会 会員
2016年～	国土交通省河川水辺の国勢調査アドバイザー（阿武隈川水系・名取川水系） 委員
2016年～	宮城県土地利用審査会 委員・会長（2019～）
2015年～	環境省希少野生動植物種保存推進員 助言・指導，情報提供，調査担当
2013年～	宮城県野生動植物調査会植物群落分科会 分科会長
2013年～	宮城県文化財保護審議会松島部会 副部会長
2013年～	宮城県希少野生動植物保護対策検討会 委員
2011年3月～	東日本大震災で被災した海岸域で，「ふるさとの自然環境と調和した持続可能な地域づくり」をめざして，市民・行政・専門家らと協働で復興支援活動を展開 出演，コメンテーター，取材協力，インタビュアー，編集，講師，助言・指導，情報提供，企画，運営参加・支援，調査担当，報告書執筆
2011年～	日本景観生態学会 会員
2009年～	自然環境復元学会 会員
2009年～2024年3月	環境省自然環境保全基礎調査植生調査東北ブロック調査会議 委員・東北ブロック統括委員（2019～）
2008年～2024年3月	宮城県文化財保護審議会 委員
2003年～	「仙台市杜々かんきょうレスキュー隊事業」や「子どもゆめ基金」の助成を受けるなどして，里山や栗駒山などで，市民を対象とした環境教育活動を実践（ただし2020年度以降は，コロナウイルス感染拡大防止のため，実質的な活動を控えた） 情報提供，調査担当
1990年～	International Association for Vegetation Science 会員
1987年～2023年	日本森林学会 会員
1985年～	植生学会 会員
1980年～2023年	日本生態学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	増子　正	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
理解度の確認	2022年4月1日～	授業の冒頭で前回の重要事項について振り返りを行って理解度を確認している。
理解度の確認	2010年4月1日～	授業の冒頭で，前回の重要項目の確認を行っている。
フィールドワークによる実体験	2010年4月～	3年生，4年生の演習にフィールド調査を取り入れて，実際の現場で様々な人との関わりを持たせ，現場で起きている課題を知るための活動を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
地域福祉活動を担うインフォーマルセクターの活動資金 ～デンマークのインフォーマルセクターからの考察～	単著	2023年9月	東北学院大学学術研究会，東北学院大学教養学部論集(193)	増子　正	pp.51-63
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 令和3年～令和6年 科学研究費補助金基盤研究（C）	2021年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年4月～	多賀城市こども子育て会議会長(多賀城市こども子育て会議会長)

2013年4月～	宮城県共同募金会評議委員 運営参加・支援
2012年4月～	宮城県社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援
2012年4月～	七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定員会アドバイザー
2010年4月～	仙台市社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援, 調査担当

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	柳井　雅也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
少人数（20人以下）授業で感想文の共有化	2020年4月1日～	少人数（20人以下）授業では、毎回感想文を学生に書いてもらい、名前を伏してPDFに集約して学生に配布している。これにより、私の講義に関する課題を発見するだけでなく、学生同士の「気づき、考える視点、理解の深さ」を「見える化」している。
地域調査を行う教育	2020年4月1日～	ゼミや発展実習では経済地理学的に学習効果のある地域の調査（主に商工業）を行っている。今年度はゼミ生と土湯温泉こけし工人調査、石巻水産加工業調査、防災集団移転移転跡地における企画考案等）の調査・実習を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	宮城県土木部グランドビジョン策定委員会　委員 委員
2020年4月～	総務省「日本ふるさとづくり審査委員会」委員 委員
2020年4月～	復興庁「令和元年度被災地における先行事例収集業務」監修委員会　会長 委員
2019年4月～	多賀城市長期総合計画策定委員会　会長 委員

2019年～	復興庁「東日本大震災復興の教訓・ノウハウ集の作成に向けた調査分析事業」有識者会議委員 委員
2019年～	塩釜市長期総合計画策定委員会　会長 委員
2019年～	北陸港湾ビジョン委員会　会長 委員
2018年4月～	仙台市郊外住宅地西部地区プロジェクトの審査会　会長 委員
2018年4月～	復興庁「東日本大震災復興の事例収集・調査分析事業」委員長 委員長
2018年4月～	復興庁「ハンズオン支援事業委員会」 委員長 委員長
2018年～	経済地理学会評議員 会員
2009年4月～	富県宮城推進会議幹事 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	泉山　靖人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔授業の併用	2022年4月～	一部授業についてその内容を録画し、欠席者に学習機会を提供している。
出席カードの活用	2017年4月～	講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題（授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入）を実施している。
出席カードの活用	2017年4月～	講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題（授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入）を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「生涯学習」の蓄積と今後の課題	単著	2023年11月	日本教育制度学会紀要　特別号　－教育制度学研究の成果と展望－	泉山靖人	pp.278-293
ボランティアとの連携による社会教育施設運営	単著	2023年10月	教育制度学研究(30)	泉山靖人	pp.186-188
地域－学校間連携とコミュニティ・スクール－仙台市の学校支援地域本部、コミュニティ・スクールを事例として－	共著	2023年10月	日本教育制度学会，教育制度学研究(30)	泉山靖人，背戸博史	pp.190-192
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
地域に必要な図書館サービスをいかに提供するか	単著	2023年10月	都市問題研究，114(10)	泉山靖人	pp.46-54
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
地域拠点としての図書館 ―島根県海士町事例―	単独	2023年11月	日本教育制度学会第30回大会（つくば市）	泉山靖人	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2021年度～	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年6月～2026年3月		一般社団法人全国私立大学教職課程協会 研究委員会委員	
2022年4月～2026年3月		仙台市社会教育委員の会議 社会教育委員	
2005年～		日本図書館文化史研究会運営委員 委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	遠藤　尚	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における双方向授業の取り組み	2022年4月1日～	オンデマンド授業の「地理学」において、responのアンケートを活用し、動画による授業内容に関する質疑やコメントを回答してもらい、次回の授業動画でそれについて解説するという形でできる限りの双方向授業の実現に取り組んだ。
教員独自の授業改善活動を実施している。	2020年～	実習を除いた全ての講義で毎回responを用いたミニレポートを実施し、学生の意見に応じた授業改善を行った。また，オンデマンドの授業においても，実習のような内容を取り入れた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	オンデマンドの授業においても，できる限り学生の意見を取り入れた双方向の講義を行う。 学生が主体的に取り組めるオンデマンド授業の実施。 大人数授業における学生のモチベーションの維持。
今年度の進捗状況	ほとんどの授業において、responを利用したクイズやアンケート、ミニレポートを毎回実施し、またそれらに対して回答、解説、授業改善などを行った。 「ハザードマップポータルサイト」「地理院地図」を用いた実習を取り入れた。 「社会と産業発展実習」において、山の寺地区の住民や松島への修学旅行生との活動を取り入れた。
来年度の進捗目標	対面およびオンデマンド授業における双方向授業の実現を引き続き目指す。 新キャンパス周辺に関する実習テーマや授業資料を開発する。 大人数授業における学生のモチベーションを維持するための取り組みを実施する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Chapter 10: Household Livelihoods and Food Consumption in Susukan Village『Two Centuries of Agrarian, Economic, and Ecological Shifts in The North Coast of Java』	分担執筆	2023年6月	Gadjah Mada University Press	Kosuke Mizuno, Pujo Semedi, Arthur van Schaik, Hiroyoshi Kano, Gerben Nooteboom, Pande Made Kutanegara, Agung Wicaksono, Mahawan Karuniasa, Yako Kozano, Nao Endo, Naoko Kawasaki, Zuli Laili Isnaini, Louella de Graaf, Merel van Andel	pp.287-319
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標	2020年度～2022年度に行った先行研究の分析を元に展望論文を執筆する。 2022年度に実施した予備調査の結果を元に、本調査の準備、および実施を行う。		
今年度の進捗状況	インドネシア、西ジャワ州バンドゥン市近郊の農家と企業を対象に本調査を実施した。 また、バリ州において農村調査と研究協力者との打ち合わせを行なった。		
来年度の進捗目標	2023年度3月に実施した本調査の結果の分析、学会による成果報告、論文執筆を進める。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～2023年度	個別(研究代表者)	本研究の最終目的は、インドネシアを事例に、発展途上国における経済成長に伴うフードチェーンの変化による農村社会と農村世帯生計の変動について明らかにすることである。この点について考察するために、国内での商品調達が不可欠な生鮮野菜に注目して、外資系大型スーパーに至るフードチェーンの実態を捉える。そして、外資系大型スーパー向け生鮮野菜産地における生産状況、スーパー向け野菜導入による世帯や農村社会への影響を明らかにする。これら2点について検討するために、外資系大型スーパーや中間業者等に対する聞き取り調査と生産地における世帯調査を実施する。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年3月	日本地理学会 広報委員会		
2019年4月～2023年6月	東北地理学会 評議員		
2018年9月～	東北地理学会 幹事		
2005年5月～	アジア政経学会 会員		
2003年12月～	日本地理学会 会員		
2003年12月～	東北地理学会 会員		
2002年8月～	人文地理学会 会員		
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	大澤　史伸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域構想学演習でのフィールドワークを実施及び成果の製本	2011年4月～	3年生地域構想学演習（ゼミ）において、これまで北海道、愛知県、大阪府、東京都、神奈川県をフィールドに、各都市の企業、福祉施設、学校、NPO等における事例研究を行い、その研究成果として報告書を作成した。
地域構想学発展実習の報告書作成	2011年4月～	2年生向けの実習において仙台YMCAが運営する幼稚園、保育園、児童館、スポーツクラブ、学童クラブ、NPO法人等でのフィールドワークを行い，報告書を作成する。
地域構想学発展実習でのフィールドワークの 実習及び成果の製本	2011年4月～	2年生選択科目における仙台YMCAでのフィールドワークの実施及びその成果を「『NPOを学ぶ』仙台YMCAをフィールドとして」と題する報告書にまとめた。
講義内容の理解促進	2011年4月～	毎回，講義の最初に前回の講義の復習を行い，学生の理解度を高めた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2011年4月～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。
リアクションペーパーの導入	2011年4月～	授業時にリアクションペーパーを配布・収集し、次回授業時の冒頭で質問・コメントに回答し、授業内容の理解の促進を図っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
『反福祉論－新時代のセーフティーネットを求めて』（ちくま新書）	2014年9月～	福祉が持っていた意義とその限界を見極めつつ、さらに発展させていくための方法を不法占拠者や生活困窮者、災害被災者、ホームレスなど、福祉の制度から漏れてきた人々が、公助に頼らず自助・共助によって展開する暮らしを検証している。本書は、地域構想学科1年時の地域構想学基礎購読のテキストとして使用している。
『福祉サービス論－ボランティア・NPO・CSR－』（学文社）	2014年3月～	本書は、著者が所属する東北学院大学教養学部で行っている「福祉サービス論」、および、大学院人間情報学研究科の講義科目「福祉市民活動論特講」、演習科目「福祉市民活動論演習Ⅰ」、「福祉市民活動論演習Ⅱ」の講義資料に基づいて、できるだけ平易で分かりやすく「ボランティア」、「NPO（非営利組織）」、「CSR（企業の社会貢献活動）」に興味を持ってもらえることを期待して執筆したものである。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
小規模私立大学の「建学の精神」における経営戦略に関する一考察	単著	2023年11月	ドラッカー学会編集委員会，文明とマネジメント(20)	大澤史伸	pp.4-21
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年4月～		東京富士大学経営学研究所客員研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆	
2020年4月～		一般財団法人滋慶教育科学研究所特別研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆	
2019年4月～		学校法人正則学院（東京都港区）評議員(学校法人正則学院（東京都港区）評議員)	
2012年4月～		一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員(一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員)	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	品田　光春	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内での動画教材の活用	2023年4月1日	毎回の授業でとりあげる事例地域に関して理解を深めるために動画教材を積極的に活用している。対面授業ではDVDやオンラインで無料公開されている動画を応じて受講生に視聴させ、その内容に関する感想・意見をmanabaで提出してもらい、必要に応じて授業内で教員からコメントをフィードバックしている。メディア授業ではDVDに代替する関連動画を紹介し、同義動画あわせて視聴させ、単調な講義にならないように配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義レジメおよび図表	2023年4月1日～	授業の要点をまとめたレジメと図表のPDFファイルをmanabaで授業前に配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	新任教員として本学での授業環境に適応し、受講生にとってわかりやすい授業を行う。
今年度の進捗状況	授業の時間配分や教材内容に修正の余地が残るが、しだいに授業環境にも慣れ、大きなトラブルもなく授業が実施できた。
来年度の進捗目標	新たに学科の専門科目の「地域資源保全論」や発展実習を担当するので、これらの初めて担当する科目でも、本年度同様に受講生にとってわかりやすい授業を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
山田　誠：「隠された標的-戦時改描図の世界-」	単著	2024年3月	東北学院大学地域総合研究所紀要(1)	品田光春	pp.63-65
G．学会における研究発表					
近代期の新潟県西山油田における開発動向と地域への影響	単独	2024年2月	経済地理学会北東支部2月例会（東北学院大学五橋キャンパス）	品田光春	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1　これまで継続してきた新潟・秋田両県の石油鉱業に関する歴史地理学的研究の補足調査とその研究成果の発表。 2　宮城県の亜炭鉱業の歴史地理学的研究に関する文献資料収集および現地調査を行う。
今年度の進捗状況	上記の目標1について、その一部を経済地理学会北東支部の例会で口頭発表した。 目標2については基礎的な文献については収集できたが、まだ不十分である。

来年度の進捗目標	上記目標1については、補足調査と論文投稿の準備をする。 目標2については、さらなる資料収集と現地調査を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年10月～	産業遺産学会 会員
2010年4月～	鉱山研究会 会員
2004年4月～	地理教育研究会 会員
2003年4月～	日本地域経済学会 会員
2002年4月～	日本地理教育学会 会員
2002年4月～	日本地図学会 会員
2000年4月～	地理科学学会 会員
1997年4月～	東北地理学会 会員
1997年4月～	歴史地理学会 会員
1997年4月～	日本地理学会 会員
1997年4月～	人文地理学会 会員
1997年4月～	経済地理学会 会員
1995年4月～	日本大学地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	坪田　益美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年10月～	全国社会科教育学会　JSSEA専門委員 会員
2016年6月～	東京書籍　教科書編集委員 委員
2016年6月～	東京書籍　教科書編集委員 編集委員
2016年4月～	日本社会科教育学会　評議員、学会誌編集委員 会員
2012年4月～	宮城県教育委員会　入学者選抜試験審議会　委員 委員
2008年4月～	全国社会科教育学会　学会員 会員
2007年6月～	日本カナダ学会　学会員 会員
2007年2月～	日本国際理解教育学会　学会員 会員
2005年4月～	日本公民教育学会　学会員 会員

2004年10月～	日本社会科教育学会　学会員 会員
2004年10月～	日本社会科教育学会　学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	目代　邦康	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
戦後日本における応用地形学的研究の一系譜	単著	2023年12月	地形, 44(4)	目代邦康	pp.121-129
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	柳澤　英明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンライン講義型の授業でもできる限り、実習形式の課題を出す。	2020年4月1日～	作図や簡易的な模型など作成する実習型の課題を出す。
2．作成した教科書、教材、参考書		
独自のプリントをオンライン配布する。	2020年4月1日～	授業に沿ったプリントを作成し、メモができるようにしている。また学生が授業内容を復習できるように，PPTをホームページにアップロードしている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
建築研究所講師	2020年4月1日～	建築研究所にて海外の研修生に対し、津波シミュレーションについて講義している。

現在の課題・目標	・初期段階において学生の技術レベルに差があるコンピュータ授業(GIS実習、基礎コンピュータ)やゼミ演習において，学生のレベルに合わせた適切な課題量を設定すること ・授業時間外における適切な課題量を設定すること ・授業において適切な難易度を設定すること
今年度の進捗状況	・コンピュータ授業においてタイピングテストを行うことで，自宅学習を促している ・GIS実習ではフリーソフトを取り入れ，自宅学習ができるようしている ・授業内において練習問題を行うことで，理解を促進している
来年度の進捗目標	・学生自身が考え，自分のアイディアを反映できる課題を設定する ・自宅での学習時間を増やすようにする ・毎年の学生のレベルを適切に把握する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・多様な分野との連携を進める ・解析手法の高度化するとともに汎用化も進める ・あたらなる調査フィールドを見つける
今年度の進捗状況	・地すべり分野との連携を進めている ・並列化に対応したコードとソフトを開発している ・文献調査より未調査な部分を抽出している
来年度の進捗目標	・人文系との連携を進める ・解析手法の高速化を行う ・あらたなフィールドを調査する

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2018年～		日本地理学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	伊鹿倉　正司	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
毎回の講義の進め方における工夫	2010年4月1日～	講義ではパワーポイントを使用することで,学生がノートを取りやすい配慮を行っている。また,90分間の講義中に5分間の休憩時間を設けることで,学生が集中して受講できるような工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
地方銀行の外国証券運用とリスクガバナンス	単著	2024年3月	東北学院大学地域総合研究所紀要(1)	伊鹿倉正司	pp.1-19
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
地域金融機関は社会の公器なのか	単著	2023年10月	世界経済評論IMPACT 国際貿易投資研究所(3168)	伊鹿倉正司	pp.1
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
人口減少下における地方銀行の新たな役割	単著	2023年7月	世界経済評論IMPACT　国際貿易投資研究所(3050)	伊鹿倉正司	pp.1
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	石川　真作	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
レスポンの活用	2020年～	授業理解と取り組みの測定のため、レスポンを活用。
manabaシステムを活用した双方向的な授業展開	2017年4月1日～	manabaシステムを利用して、講義中にコメントを受け付けるなど双方向的な授業展開を行っている。
授業理解のための映像資料の活用	2015年4月1日～	時事に即した授業内容理解のため、ニュースやドキュメンタリーなどの映像資料を使用。
演習におけるフィールドワークの実施を通したアクティブ・ラーニングの実践	2015年4月～	多文化共生をテーマとする演習において、実情理解のために外国人支援活動現場で参与観察を実施。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
「ヨーロッパの「移民問題」から何を学ぶか」『『日本に暮らすムスリム（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ7）』』	単著	2024年2月	明石書店	石川真作	pp.234-245
「日本の化粧品市場におけるハラール認証の実効性――インドネシア出身ムスリム住民への調査から見えたもの」『『日本に暮らすムスリム（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ7）』』	共著	2024年2月	明石書店	武田沙南　石川真作	pp.76-78
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
「ヨーロッパの『移民問題』から何を学ぶか」	単独	2024年3月	『日本に暮らすムスリム（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ7）』刊行記念シンポジウム(東京)	石川真作	
「名古屋弁の『ファーストペンギン』――中部地方のトルコ出身者コミュニティ事始め――」	単独	2024年2月	宮城多文化研究会例会(仙台)	石川真作	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究は、ドイツ在住トルコ系移民各世代の、トルコとドイツ双方での動向を現地調査することにより、第1世代が築き上げたトランスナショナルなネットワークやリソースをどのように活用し、さらに次世代にどのように継承しようとしているのかを捉える。それによって、国際環境の変化、生活状況の変化、世代の進行によって、移民の行動様式はどのように変化するかを明らかにし、グローバル化の進行に伴うヒトの流動の最新状況を捉えることを目的とする。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	(研究分担者)	旧東独地域の移民・難民の社会統合を目指した諸施策の現状と課題、課題克服の模索を冷戦終結後の同地域の社会背景を踏まえて検証する。 旧東独地域は、旧西独地域と難民・移民との関わり方に違いがみられ、反移民・難民政党や極右運動への支持も高い。 しかし、旧東独の自治体では、統一後の人口減も踏まえ、移民・難民の社会統合を独自に模索している。 日本同様に少子高齢化社会のドイツは、2012年に人口増に転じた。その要因の一つが移民・難民の存在で、彼らに対する政策が、自治体の人口動態にも影響している。コロナ禍は、難民・移民の状況に大きく影響しているが、その中でのドイツの状況の解明は日本への示唆となろう。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年2月～	宮城県多文化共生社会推進審議会 委員
2018年4月～	塩釜国際交流協会 会員
2008年10月～	移民政策学会会員 会員
2002年6月～	日本移民学会会員 会員
2001年4月～	日本中東学会会員 会員
1993年4月～	日本文化人類学会会員 会員
1993年1月～	日本イスラム学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	奥山　忠裕	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	経済学を担当しているため数学を利用する機会がある。学生間での数学の習熟度の差を如何に埋めるかが課題である.	
今年度の進捗状況	講義開始時に数学の補修を取り入れることで学習レベルの差を埋めようと試みた。動画資料も作成し事後学習を行えるようにした。	
来年度の進捗目標	学生によって取り組みに差が生じているためグループワークなどを活用し相互に教えあう機会を設けていきたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
仮想行動法を用いた防疫対策のための生産者の価格転嫁に関する分析手法		2023年9月	第31回地球環境シンポジウム	奥山忠裕	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	政策評価のモデル構築を行っているものの、実態調査が不十分であったため、経済主体の実情を反映させることが困難であった。				
今年度の進捗状況	災害などのリスク評価に関する政策の効果を計測するモデル構築をある程度行うことができた。				
来年度の進捗目標	昨年よりも実態調査を行い、地域の実情に即した政策評価を行えるようにしたい。今年度から風評被害対策や政策の効果について検証したい。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	(研究代表者)	感染症の影響による消費の低迷は社会的な課題の一つである。本年度は，本課題の目的にある消費者側のリスク受容指標の理論モデルの開発と対策施策を考慮した実証分析へ向けた理論モデルの構築を行った。基本的なモデル構造は効用最大化問題に基づく消費者行動モデルである。本研究では，基本モデルの拡張として，消費の中止（抑制）回数が，社会的な義務感などを消費することを仮定し，結果隠れた効用を発生させることを想定することで，便益計測可能なモデルの構築を検討した。便益の定義のため，観光需要とそれに関する家計生産関数を仮定し、観測された観光需要水準とCOVID-19発生による中止回数の水準(α)の関係式を設計した。また，観光地での滞在時間、歴史的建造物や商品の数など観光地の質を変えることで、時間の価値（VOT）、質の価値（VOQ）、消費の自制の価値（VOS）の限界利益をそれぞれ導出可能なことを示した。この限界便益の特徴を数値シミュレーションにより検討した。まず、限界便益の符号を確認すると、VOTとVOQは正、VOSは負であり、自粛による負の便益（VOS）は正の便益より相対的に大きいことが示された。次に、便益値の変化の傾向の確認である。α値の増加はVOT、VOQ、VOSの減少につながり、VOSの減少の加速度は限界便益の中で最も大きいようである。最後に、パラメータの頑健性を確認するため，総利用時間のパラメータ変化の検証を行った。パラメータ値の違いによるVOQとVOSの変化は、VOTのそれよりも相対的に小さいことが示された。今後の課題として，第一に、家計の生産関数形式や期待生産財の特徴の違いによる便益価値への影響を分析すること，第二に、実証的な推定モデルを検討すること，第三に、家計生産関数を仮定しないモデル（すなわち、需要関数を用いた標準的な推計モデル）を検討し、本モデルの適用範囲を向上させることである。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年7月～2023年7月	まちの課題共同調査事業 取材協力，助言・指導，運営参加・支援
2006年4月～	土木学会 会員
2005年10月～	日本経済学会 会員
2003年10月～2024年2月	環境経済政策学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	熊沢　由美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ボランティアの紹介	2021年12月～	NPO法人アスイクの学習支援ボランティアを演習生に紹介した。
アルバイトの紹介	2018年～	仙台銀行でのアルバイト学生に紹介し、金融について理解を深める機会を設けた。
他大学との合同ゼミ	2003年～	他大学との合同ゼミを2回おこなった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年6月～	宮城県後期高齢者医療審査会委員 委員
2020年4月～	宮城県地域年金事業運営調整会議委員 委員
2020年4月～	仙台市経営戦略会議委員 委員
2020年4月～	社会政策学会幹事 会員
2020年～	第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定アドバイザー 委員
2017年5月～	石巻市男女共同参画推進審議会会長 委員
2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員

2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員
2014年10月～	仙台市民生委員推薦会委員 委員
2012年7月～	岩沼市男女共同参画審議会副会長 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	黒坂　愛衣	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2017年度～	個別	社会的少数者の家族成員間での体験共有と関係性の(再)構築をめぐる研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2006年5月～	ハンセン病市民学会会員 会員
2003年4月～	日本社会学会会員 会員
2003年3月～	日本解放社会学会会員（理事） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	佐藤　滋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを利活用した授業到達度の確認、成績評価の透明化	2020年4月～	授業の理解度を確認するため、原則として毎回、manabaを通じて小テストを実施している。また、授業内容や小テストに対する質問・疑義については、manabaの掲示板を通じて受け答えを行っている。さらに、LMSを、成績評価の透明性を高めるためにも利用している。
他大学の学生との交流プログラムの実施	2011年4月～	他大学の複数のゼミと、合同ゼミ合宿、調査研究を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	LMSを利活用し、授業到達度の確認を行うとともに、成績評価の透明性を高める。
今年度の進捗状況	授業期間中、成績評価に関については学生からの疑義は提出されなかった。一定の成果があったものと考えられる。
来年度の進捗目標	継続してLMSの有効活用を行い、授業到達度の確認、成績評価の透明性を高めるために役立てたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Economic Development through Oil in Malaysia and Singapore: Increased State Capacity and Formation of the East Asian Oil Triangle『Oil Crises of the 1970s and the Transformation of International Order: Economy, Development, and Aid in Asia and Africa』	分担執筆	2023年12月	Bloomsbury Publishing	Shigeru Akita, Dane Kennedy, Hideki Kan, Ikuto Yamaguchi, Shigeru Sato, Mark Metzler, Kazushi Minami, Gareth Austin	pp.122-147
「第1章 福祉国家財政の再編・変容と中間層からの支持調達」「第7章 ニューレイバーの税・社会保障政策と『救済に値しない』貧困層」『揺らぐ中間層と福祉国家：支持調達の財政と政治』	編者（編著者）	2023年7月	ナカニシヤ出版	高端正幸, 近藤康史, 佐藤 滋, 西岡 晋, 秋朝礼恵, 小西杏奈, 近藤正基, 千田 航, 西山隆行, 福田直人, 古市将人, 茂住政一郎	pp.1-290
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	刊行予定の研究書2冊の出版を目指すほか、単著の出版計画を進める。
今年度の進捗状況	単著以外の研究書2冊を公刊した。また、単著の出版準備も同時に進めた。
来年度の進捗目標	単著の出版を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年12月～2023年12月		サードプレイスと地方財政：「子どもの居場所」をめぐって	
2023年5月～2023年5月		日本の財政と社会政策の課題(Rengoアカデミー、第23回マスターコース) 講師	
2023年4月		日本財政学会 常任理事	
2023年4月～		日本財政学会 理事	
2020年4月～		日本地方財政学会 理事	
2012年7月～		総務省「地方分権に関する基本問題についての調査研究会 委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	和田　正春	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンライン講義への対応と講義の質の確保	2020年4月1日～	COVID-19感染症への対応として、オンライン講義が導入されたが、導入科目を数多く担当していることからも、講義の質を低下させることなく、オンラインのメリットを拡大することで、新しい講義の手法の創造を目指した。受講者数が多い講義が大半であるため、動画配信のスタイルを取らざるを得なかったが、manabaを通じて質問を受け付け、それに丁寧に回答する（全て動画にし、自由に閲覧できるようにした）ことで、それぞれの疑問に答えるとともに、他者の考えを理解する機会にもなり、オンラインで失われがちな他者意見を知り、自分の考えと比較するきっかけにもなった。個別対応を進めたことが、受講意欲にも反映され、極めて負担の多い講義ではあったが、学生の満足度はとても高かった（学部内でも最高の評価を得た）。 個別対応重視は以前から取り組んできたことではあるが、オンラインにおいても継続することができた。対面が復活しても、この手法の成果を活かして、教育効果の向上を図りたい。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院榴ヶ岡高校との長期課題探求プロジェクトの実施	2020年4月1日～	今年度、榴ヶ岡高校の2年生を対象に、課題探求プロジェクトを実施している。内容は、仙台市交通局から依頼された自転車の交通安全という課題に対し、チームで提案を行うというものであるが、1年をかけた長期的なものであることや大学生がファシリテーターとして関わることなど、新しい要素を含んでいる。ありきたりな内容でなく、様々な調査や実験を行ったり、それを踏まえて提案を作成していくことで、高校生には示唆に富んだ内容になったが、大学生にとってもコミュニケーション面での学びが大きく、大きな成果が得られるものになった。次年度も継続していきたいと考えている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
『運営管理』	共編者（共編著者）	2023年4月	公益社団法人　日本理容美容教育センター	和田正春, 小見山満, 内木和富巳, 倉田和俊, 鈴木政信	pp.8-157
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年11月～		河北新報社　河北経済研究所シニアフェロー	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	小宮　友根	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『実践の論理を描く』	共編者（共編著者）	2023年4月	勁草書房, 1	小宮友根, 黒嶋智美	pp.1-352
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究強化A	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	齊藤　康則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解の促進のため、リプライムービーを作成した（社会運動・コミュニティ論、ボランティア・NPO論）	2022年4月1日～	授業理解を促進するため、寄せられた質問・感想に対し、毎回、30分程度のリプライムービーを作成し、受講者の理解が深まるようにした。
学生の自発的発言の促進（総合演習、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、フィールドワークⅠa）	2021年4月1日～	演習やフィールドワークなど、比較的少人数の科目では、グループワークを取り入れることによって、学生が自発的に発言できる雰囲気を作っている。4年次演習の最終報告は、他学年の受講者も聞くことができるようにし、学年を超えた学びの機会を設けてきた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①講義（社会運動・コミュニティ論、ボランティア・NPO論）では、受講者の理解度を高めるために、授業方法を工夫する。 ②演習（基礎演習（政策デザイン学科）、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（共生社会経済学科））について、受講者の主体性を引き出す。
今年度の進捗状況	①講義科目では、前週の質問内容に対する返答プリントを毎回作成し、配布した。また、半期講義においては3回ほど小テストを実施し、授業内容の定着を図った。 ②演習科目では、文献を輪読する場合など、LMSを用いて事前に質問を寄せてもらう形式とし、より受講者の主体性を発揮できるようにした。また、学生の意欲に応じて、適宜サブゼミを実施した。
来年度の進捗目標	①について、2024年度から政策デザイン学科の講義科目がスタートするが、同様の手法で講義を運営してゆく。 ②について、政策デザイン学科の実習科目、共生社会経済学科の演習Ⅱ・Ⅲにおいて、同様の手法で実習・演習を運営してゆく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①被災者支援、コミュニティ形成の分析 ②被災した農業の復旧・復興の分析
今年度の進捗状況	①について、仙台圏のNPOからのヒアリング調査を実施する一方、査読論文がアクセプトされた（2024年度に刊行）。 ②について、本年度は福岡を3回、愛媛を1回、長野を2回訪問し、2017年九州北部豪雨、2018年西日本豪雨、2019年令和元年東日本台風からの生業の復旧・復興について、関係者からのヒアリング調査を実施した。

来年度の進捗目標	①について、2023年度に十分調査できなかった、災害公営住宅のコミュニティ形成について、石巻市・気仙沼市をフィールドとしてヒアリング調査を実施する。 ②について、幸いにも河川財団、住友電工グループ社会貢献基金から研究助成を得られたので、引き続きヒアリング調査を進めてゆき、中間的な内容を学会報告する。合わせて、「農業ボランティア」に関する共著書籍を刊行する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 環境研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	
競争的資金等の外部資金による研究 人文・社会科学分野・提案研究コース	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

入試部主任として、高等学校高校・進学相談会における広報業務を担うとともに、推薦入試・大学入学共通テスト・一般入試などにおいて入試本部の運営に当たった。
学生相談室兼任カウンセラーとして、学生相談に対応した。

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	佐久間　香子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
視聴覚資料、および学生とのコミュニケーション方法を重視した授業づくり	2020年4月1日～	(1) PowerPointをベースに、概念図、写真資料、短い視聴覚資料を併用することを視覚的にわかりやすく授業内容を伝える。 (2) 毎授業後、受講生にリアクションペーパーの提出を貸すことで授業内容理解度を把握すると同時に、出席状況の確認、そして学生とのコミュニケーションに活用する。 以上を着実に実践することで、学生の授業評価アンケートにおいても高く評価された。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2021年度～2026年度	共同(研究分担者)	本研究は、インドネシア西カリマンタン州及びマレーシア・サラワク州において、小農による土地利用の変化について現地研究者とともに調査し、その変化の要因に関する比較研究を行うことである。そのうえで、両州で今後望まれる多様で持続可能な土地利用のあり方とそれを実現するための具体的施策について検討し、学術論文にまとめて現地社会にその成果を還元することが、本研究の最終的な目標である。

科学研究費助成事業 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤研究(B))	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	研究課題:ボルネオの原生林保護と先住民コミュニティの自律的生存が両立する持続的管理の条件
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年1月～		東南アジア学会 北海道・東北地区理事	
2022年4月～		日本マレーシア学会 編集委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	**場　　所**	**開催年月日(西暦)**	**発表・展示等の内容等**
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	定池　祐季	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事後学習のフィードバック	2023年4月～	
responを活用した授業実践	2023年4月～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	①対面・オンデマンドを問わず、学生の理解を促進する資料作成を行う ②学生同士の交流を促進する	
今年度の進捗状況	①カラーユニバーサルデザインを考慮した資料を作成した ②少人数の演習では、アイスブレイクやグループワークの時間を取るようにした	
来年度の進捗目標	①対面・オンデマンドを問わず、学生とのコミュニケーションを意識した講義を展開する ②学生同士の交流を促進する	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
それぞれの“あのとき”	単著	2023年4月	東北学院大学, 震災学, 17	定池祐季	pp.137-140
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
分科会「北海道胆振東部地震から5年、報道対応と情報発信について考える」	共同	2023年12月	日本災害復興学会 2023年度静岡大会(静岡市)	企画・コーディネーター／定池祐季 パネリスト／小山敏史・福島英博 コメンテーター／所澤新一郎・津久井進	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	科研（基盤C）と厚真町との共同研究課題を進める				
今年度の進捗状況	科研の研究は遅れており、共同研究については実践が中心で研究の要素が少なくなっていた				
来年度の進捗目標	科研・共同研究共に研究課題の遂行に努める				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年3月	「室蘭市町内会合会30周年記念　防災シンポジウム再録」④(室蘭民報)
2024年3月	2024年（令和6年）能登半島地震 中長期の支援活動に向けて 講師
2024年3月	津波避難施設を承認 厚真の協議会 町、浜厚真に建設へ(北海道新聞)
2024年2月	「室蘭市町内会合会30周年記念　防災シンポジウム再録」③(室蘭民報)
2024年2月	ニュース最前線ながさき 備える長崎 暮らし×災害 女性の目線でみる避難所 届きにくい生理用品 平時からニーズ認知を(長崎新聞)
2024年2月	「検証2024　室蘭市予算案」㊥ “冬の防災”(室蘭民報)
2024年2月	「室蘭市町内会合会30周年記念　防災シンポジウム再録」②(室蘭民報)
2024年2月	「室蘭市町内会合会30周年記念　防災シンポジウム再録」①(室蘭民報)
2024年2月	＜はなし抄＞災害対応 普段の地域連携が大切 東北学院大准教授（災害社会学）・定池祐季さん(北海道新聞)
2024年2月	能登半島地震から1か月　道内35市“避難所の寒さ対策”は
2024年1月	損保協会道支部が地震防災・減災シンポ(北海道建設新聞)
2024年1月	能登半島地震1か月 11市が寒さ対策見直し検討 NHK取材(NHK)
2024年1月	避難所での寒さ対策 北海道の11市見直し検討 能登半島地震受け(NHK)
2024年1月	胆振東部地震からの復興プロセス 厚真町の被災者支援に着目して―(胆振東部地震を振り返る 地震防災・減災シンポジウム) パネリスト, 講師
2024年1月	厚南中で一日防災学習 冬の災害に備え 厚真(苫小牧民報)
2024年1月	北海道の災害と復興プロセスについて ―奥尻町と厚真町の事例を中心に―(令和5年度 北海道建設技術職員専門研修) 講師
2024年1月	ワークショップ「さすけなぶる」(1日防災学校) 講師
2024年1月	オンライン開催「地震防災・減災シンポジウム」(北海道新聞)
2024年1月	「命を守る備えを」 地域連携の重要性強調、室蘭市町連防災シンポジウム基調講演(室蘭民報)
2024年1月	室蘭市町連防災シンポジウム　パネルディスカッション(室蘭民報)
2024年1月	防災最前線日常生活 万一の備えに 室蘭市シンポジウム 町内会連30周年記念 避難所への散歩など提案(北海道新聞)
2024年1月	「命を守る備えを」地域連携の重要性強調、室蘭市町連防災シンポジウム基調講演(室蘭民報)
2024年1月	地域防災のシンポジウム「日常生活でも災害への備えを」(NHK北海道)
2024年1月	被災地から学ぶ地域防災(室蘭市町内会連合会30周年記念事業　令和5年度　室蘭市防災シンポジウム) パネリスト, 講師
2024年1月	損保協会道支部が27日に胆振東部地震の振り返りシンポを開催(北海道建設新聞)
2024年1月	地震防災・減災シンポ 27日、オンラインで 胆振東部地震振り返る(苫小牧民報)
2024年1月	被災地再生へ「関わり続けることが重要」 関学大災害復興研が交流集会 広域避難者のサポートも話題に(神戸新聞)
2024年1月	27日、日本損保協会シンポジウム 地震防災、減災テーマ(室蘭民報)
2024年1月	命守るためにできることは 室蘭で20日　防災シンポ(北海道新聞)
2024年1月	地震リスクに備える 防災・減災シンポジウムをオンラインで開催(セキュリティー産業新聞)
2024年1月	被災地から学ぶ防災　室蘭市町連30周年、20日に記念シンポジウム(室蘭民報)
2024年1月	胆振東部地震振返る地震防・減災シンポ 1月27日オンライン開催/日本損保協会道支部(建設通信新聞)
2024年1月	被災地から学ぶ防災 室蘭市町連30周年、20日に記念シンポジウム(室蘭民報)
2023年12月	1/27(土)13:30～「胆振東部地震を振り返る地震防災・減災シンポジウム」をオンラインで開催！(@Press)

2023年12月	損保協会北海道支部 24年1月27日 オンラインで開催、地震防災・減災シンポジウム［2023年］(保険毎日新聞)
2023年10月	厚真 災害記録と記憶伝える 胆振東部地震 教訓継承へシンポジウム(苫小牧民報)
2023年10月	被災伝える資料のあり方を考える 厚真で北大大学院公開講座(北海道新聞)
2023年10月	北海道で復興サミット 地震被災からの課題討論 益城町長ら参加 ／熊本(毎日新聞)
2023年10月	適切な避難所運営考える 市女性連盟が講演会―伊東(伊豆新聞)
2023年10月	北海道南西沖地震と胆振東部地震の経験から(男女共同参画講演会) 講師
2023年10月	避難所運営や防災教育講話 6日に女性連盟ー伊東(伊豆新聞)
2023年10月	震災復興、首長ら語り合う 厚真でまちづくりサミット(毎日新聞)
2023年9月	復興へ まちの教訓は 厚真で被災地首長らシンポ詳報(北海道新聞)
2023年9月	クロストーク①復旧・復興期からのその先における「支える」「つなぐ」「伝える」／クロストーク②胆振東部3町のこれから：コーディネーター(復興まちづくりサミット2023「災害から5年。これからのまちづくりを考える。」)
2023年9月	北海道胆振東部地震から5年(3.11みやぎホットライン)
2023年9月	防災に必要な取り組みは 東北学院大・定池祐季准教授に聞く 地域の絆づくり、行政が支援を 胆振東部地震5年(北海道新聞)
2023年9月	胆振東部地震5年 早期再建 残した課題＝北海道(読売新聞)
2023年9月	防災授業・避難訓練への助言・コメント(上小防災の日) コメンテーター, 助言・指導
2023年9月～	洞爺湖有珠火山マイスター運営委員会 委員
2023年8月	胆振東部地震で大被害、厚真北部で地域の絆再び(北海道新聞)
2023年8月	災害支援の現場から考える北海道の防災・減災(令和5年度 道路防災講演会) 講師
2023年8月	浜厚真に津波避難施設 町防災計画骨子案、25年度以降に(北海道新聞)
2023年8月	津波に備える防災計画作成へ 厚真町で協議会委員が現地視察
2023年8月	胆振東部地震から5年 厚真でシンポジウム コミュニティー再生、必要なのは 被災者支援4人のパネル討論詳報(北海道新聞)
2023年8月	胆振東部地震5年「自然」「技術」「ひと」三つの視点で振り返る 厚真でシンポ ／北海道(毎日新聞)
2023年8月	学校と地域が連携した防災教育の必要性 防災教育における地域資源と教育効果(防災教育コーディネーター養成塾) 講師
2023年8月	「ひと」の視点から胆振東部地震を振り返る　被災地のバトンと支援のリレーをつなぎ、さらに厚い真ごころの町へ：コーディネーター(胆振東部地震から5年 シンポジウム『平成30年北海道胆振東部地震』を振り返る、被災からこれまで。)
2023年8月	厚真町における防災教育と心のサポート ーこれまでの取り組みとこれからに向けてー(厚真町教員研修) 講師
2023年7月	「北海道南西沖地震から30年」(3.11みやぎホットライン)
2023年7月	胆振東部地震から5年 被災と復興から教訓探る 8月4日、厚真でシンポ(北海道新聞)
2023年7月	奥尻から学びのバトン 北海道南西沖地震30年 東北学院大准教授 定池祐季さん 中2で被災 研究者に(愛媛新聞)
2023年7月	1993年北海道南西沖地震／下 体験、心の減災につなぐ 被災の悲しみ・後悔触れ、研究(毎日新聞)
2023年7月	奥尻から教訓のバトン 北海道南西沖地震30年 中2で被災 研究者・定池さん 各地の経験まとめ発信(岩手日報)
2023年7月	奥尻からの学び 各地へ 北海道南西沖地震30年 中2で被災、研究者に 東北学院大准教授 定池祐季さん(福井新聞)
2023年7月	「恐ろしいことが起きている」中2で被災 自ら歩いて見つけた答え(毎日新聞)

2023年7月	北海道南西沖地震30年 東北学院大准教授 定池祐季さん 中2で被災、研究者となって防災の伝道師に 命守る「メッセージ」 奥尻から全国へ(神戸新聞)
2023年7月	伝え続ける学びのバトン 北海道南西沖地震30年 奥尻で被災 定池さん研究者に(室蘭民報)
2023年6月	＜南西沖地震30年＞タワーや経路、防潮堤…津波避難対策、自治体急ぐ 第1波、最短1分で到達(北海道新聞)
2023年6月	勉強会「活きる山と生きる地域の未来に向けてー洞爺湖有珠山ジオパークへの期待ー」 司会, 企画
2023年6月	巨大津波からどう身を守る 厚真町で住民の意見聞く懇談会(北海道新聞)
2023年5月	厚真町が津波防災地域づくりへ23年度内に推進計画(北海道建設新聞社)
2023年5月	令和5年度宮城県市町村防災対応ワークショップ　ファシリテーター 講師, 企画
2023年5月	津波への備え意見交換 年度末までに計画策定 推進協 厚真(苫小牧民報)
2023年5月	『ほっとニュース道央いぶりDAYひだか』「厚真町が津波防災計画づくり始める 最大クラスの津波を想定」(NHK)
2023年5月～	厚真町津波防災地域づくり推進協議会 会長
2023年3月～	宮城県国民保護協議会 委員
2023年3月～	宮城県防災会議 委員
2021年11月～	国土交通省 国土審議会 豪雪地帯対策分科会 特別委員
2021年3月～	日本災害復興学会　学術推進委員会 委員
2019年11月～	厚真町 心のサポート・防災学習推進協議会 委員
2019年5月～	厚真町 地域防災アドバイザー
2018年9月～	徳島県 復興指針検討委員会 委員
2017年5月～	北海道開発局 石狩川流域委員会 委員
2017年～	日本安全教育学会 会員
2013年～	日本自然災害学会 会員
2009年～	地域社会学会 会員
2008年～	日本災害復興学会 会員
2008年～	日本災害情報学会 会員
2007年～	日本民具学会 会員
2006年～	日本社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	宮地　克典	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	1）労働に関する知識に対して、受講生の興味・関心、主体的な学びの意識をいかに喚起させるか 2）ゼミにおけるプレゼン・レポート執筆といったアカデミックスキルの向上	
今年度の進捗状況	1）3年前期の授業改善アンケートをみるかぎり、就活に関わる知識を学べた、などの意見が記されることのほか、総合評価でも平均以上の結果が得られた。 2）2年生・3年生のゼミでそれぞれ取り組み、最終的なまとめを評価する限り、プレゼンやレポートの基本的なポイント・ルールは各受講生が修得できた。	
来年度の進捗目標	講義科目については、学生が積極的に質問を行えるような工夫を講じたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
国民年金創設時における拠出期間をめぐる一考察	単著	2024年3月	地域総合研究所紀要，1	宮地克典	pp.111-129
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
国民年金創設時における支給開始年齢と拠出期間の審議過程をめぐる一考察	単独	2023年9月	社会保障研究会(オンライン)	宮地克典	
国民年金創設時における支給開始年齢の審議過程をめぐる一考察	単独	2023年4月	社会労働研究会(大阪経済大学)	宮地克典	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	科研課題の研究に取り組む。				
今年度の進捗状況	研究報告2回、論文1本を研究成果としてまとめることが出来た。				
来年度の進捗目標	現在獲得している科研が2023年度で終了するため、新たな研究課題の発掘に取り組む。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年5月～	社会政策学会査読専門委員 会員
2009年4月～	社会政策学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	武藤　敦士	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
母子生活支援施設職員の給与水準と待遇に関する諸課題	単著	2023年5月	大原社会問題研究所雑誌(775)	武藤敦士	pp.22-40
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
母子生活支援施設はなぜ利用されないのか：認知度調査からみえてきた実践と研究の課題	単独	2023年10月	日本社会福祉学会第71回秋季大会(武蔵野大学（武蔵野キャンパス）)	武藤敦士	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2026年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～	社会政策学会 会員
2022年4月～	日本自然保育学会 会員
2010年3月～	日本地域福祉学会 会員
2009年12月～	日本社会福祉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	講師	氏名	市川　樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・manaba等を活用し、授業以外の時間においても学生の指導に努める ・新学科という点を踏まえ、学科の専門領域を踏まえたうえで授業計画を行う ・実習関係の授業について、学生の主体的な取り組みを支援するため、他の教員の取組等も参照する	
今年度の進捗状況	・今年度は新しい環境での最初の授業であったため、学生の関心や理解度を可能な限り確認しながら進めた。manabaやrespon、授業動画のアップ等を活用したことで、学生からの様々な質問に回答することができ、進捗はあったといえる。 ・実習報告会に参加するなどを通じ、演習の取組について理解を深めることができた。 ・授業に関して私学連の研修に参加させていただき、授業改善に向けての検討を行うことができた。	
来年度の進捗目標	・新学科の学生に向けた専門科目の講義が本格的に始まることを踏まえ、多様な専門科目を受講した学生がどのような関心を持っているのか把握する ・外部の講師を招く特殊講義が開講されることから、学生が社会に関心を持てるように取り組む	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・社会保障制度運営及び改革に関する個別自治体の事例分析を行う ・いくつかの事例分析については論文として投稿する ・海外の社会保障制度について日本との比較分析を行う				
今年度の進捗状況	・個別自治体の取り組みについて、情報収集を行った ・個別自治体の社会保障制度運用の実態について、今年度の論文発行は行えなかったが、現在論文を投稿中であり、審査が通れば来年度夏に発行される予定である ・海外研究に関しては、他大学の専門家とともに行ったカナダの社会保障研究について、科研申請が受理され現在カナダの研究を開始したところである。				
来年度の進捗目標	・投稿中の論文について、審査を踏まえて適切に修正し、発行を目指す ・カナダの社会保障研究を進めるため、カナダでの実地調査、トロント大学の研究者とのディスカッションを実施する。 ・カナダの社会保障に関する共同論文を作成する。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（海外連携研究）	2023年度～	共同(研究分担者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2016年4月～		日本財政学会 会員	
2015年4月～		日本地方財政学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	**場　　所**	**開催年月日（西暦）**	**発表・展示等の内容等**
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	講師	氏名	河村　真実	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaの活用	2023年～	授業内で使用した資料は、manabaを通じて公開した。また、受講生の理解度を確認するために、manabaを使用してコメントシートの回収や質問の募集を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生が、政治や公共性に関する基礎的な概念や理論について、自身の言葉で説明できる程度まで理解を深められる授業を行うことを目標とした。
今年度の進捗状況	manabaで受け付けたコメントや質問により、学生の理解度を確認しながら、学生が必要な知識を身につけられるよう努めた。
来年度の進捗目標	学生が、授業内容に関心を持ち、理解を深めることができるよう、具体的事例を多く用いるなど、授業方法の改善を試みる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	集合的文化権の擁護論に対する批判への応答可能性を検討することにより、リベラルな多文化主義の今日的擁護可能性を明らかにすることを目標として研究を行った。
今年度の進捗状況	今年度は、特に、集合的文化権が個人の自由を侵害しうる可能性を中心に研究を行い、関連資料の収集を進めた。
来年度の進捗目標	来年度は、収集した資料をもとに研究会報告を行い、論文にまとめる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	本研究は、文化維持に関する集団単位の権利（集合的文化権）の保障に対する根本的批判への応答可能性を検討することにより、リベラルな多文化主義の今日的擁護可能性を明らかにすることを目的とする。本研究では、多文化主義における集合的権利擁護論を、先住民等の文化的少数派に対して集合的文化権を保障すべきだと主張するキムリッカら第一世代と、一時労働者や難民等にまで権利主体を拡大し、より積極的な国家的支援が必要だと主張するパッテンら第二世代に区分し考察する。その上で、集合的文化権の意義それ自体を否定する批判論を考察し、反批判の可能性を検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2023年～	移民政策学会 会員
2018年～	日本政治学会 会員
2017年～	American Political Science Association 会員
2017年～	アメリカ学会 会員
2017年～	政治思想学会 会員
2017年～	日本アメリカ史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

情　報　学　部

データサイエンス学科

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	石田　弘隆	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「代数学Ⅱ」における添削指導	2023年9月～2024年1月	各回に課したレポートについて，履修者全員に対して提出された解答を添削，フィードバック，再提出を繰り返し，理解および正しく記述できるようになるまで行った．
「代数学Ⅰ」における添削指導	2023年4月～2023年9月	各回に課したレポートについて，履修者全員に対して提出された解答を添削，フィードバック，再提出を繰り返し，理解および正しく記述できるようになるまで行った．
2．作成した教科書、教材、参考書		
「線形代数学入門」におけるまとめ問題集の作成	2023年9月～2024年1月	線形代数学入門の講義内容に関わる問題演習として，まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した．
「線形代数学入門」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2023年9月～2024年1月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学入門」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「情報科学基礎演習B」における「数学ソフトウェア入門」の講義資料および事後学習課題の作成	2023年9月～2024年1月	情報科学基礎演習Bにおける数学ソフトウェア入門の講義資料および事後学習課題(全5回)を作成し，manabaコースにコンテンツを作成した．
「代数学Ⅱ」におけるテキストの作成	2023年9月～2024年1月	代数学Ⅱの講義内容に関するテキストを作成し，manabaのコースコンテンツに準備した．
「代数学Ⅱ」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2023年9月～2024年1月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「代数学I」におけるテキストの作成	2023年4月～2023年9月	代数学Iの講義内容に関するテキストを作成し，manabaのコースコンテンツに準備した．
「線形代数学II」におけるまとめ問題集の作成	2023年4月～2023年9月	線形代数学IIの講義内容に関わる問題演習として，まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した．
「代数学I」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2023年4月～2023年9月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「線形代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2023年4月～2023年8月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	伊藤　則之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「情報リテラシー」の授業でのSAの活用	2023年4月1日～	「情報リテラシー」は前期に25コマ開講されており、BYODパソコンを使ったアクティブラーニング形式の授業であるため、各授業に2名のSAを割り当てて、スムーズな授業運営がなされるようにした。
オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業構成および評価方法への新規手法の導入	2023年4月1日～	オンデマンド授業「AI社会の基礎」を担当する専任教員4名により授業構成および評価方法への新しい工夫を盛り込み、授業担当者が異なっても授業内容および評価が同一になるような工夫を盛り込んだ。
対面授業において、欠席者へのオンデマンド指導の対応を実施	2022年4月1日～	対面授業の「情報化社会の基礎」において、欠席者については要望がある場合は、manabaの個別コレクション経由でオンデマンド教材を提供して指導の対応を実施
対面とZoomを併用したハイブリッド授業および総合研究指導	2022年4月1日～	「情報システム運用法A」では対面とZoomを併用したハイブリッド授業を実施し、総合研究指導では指導効率を考えて、適宜、対面とZoomを併用したかたちとした。
履修者へのBYODパソコンの調査結果をフィードバック	2021年4月1日～	「情報システム運用法A」において、履修者へのBYODパソコンの仕様を詳しくアンケートして、アンケート調査結果を履修者にフィードバックして、自分が持っているBYODパソコン仕様の全体のなかでに位置づけを確認できるようにした。
Zoomを利用したオンタイム授業および総合研究指導	2020年4月1日～	
授業支援システムmanabaを利用した遠隔授業の実施	2020年4月1日～	授業の連絡、授業資料の配布、小テストやレポートの提出・回収を実施した。
新聞や雑誌の記事を用いて学生の興味を喚起	2015年4月～	「情報化社会の基礎」において、情報セキュリティなどで実際に発生している問題の事例などを最近の新聞や雑誌から引用して，学生の興味を喚起した。
ゼミ形式演習におけるデザインパターンベースのプログラミング手法の適用	2015年4月～	スマートフォン用アプリの開発教育に，デザインパターンやアジャイルという手法を適用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業教材の作成	2023年4月1日～	オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業教材を専任教員4名で分担して作成し、4コマ分を担当した。
「情報科学演習」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報リテラシー」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「プログラミング上級」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報システム運用法A」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報システム運用法A」、「現代社会の諸問題」、「情報科学演習」の遠隔授業用講義資料	2020年4月1日～	遠隔授業となり、科目によりオンタイム形式またはオンエマンド形式のいずれかになるため、それぞれの形式に合わせて学生が受講しやすいかたちの講義資料を作成した。
「情報化社会の基礎」の遠隔授業用講義資料	2020年4月1日～	TGベーシック科目のために複数教員が同じ科目を担当するため、共通教材となる動画教材、前回授業のまとめ資料と確認テストを作成して、担当する先生方に配布した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張講義（宮城県利府高等学校）	2023年10月11日～2023年10月11日	大学の様々な研究分野の先生方から直接講義を受けることを通じて、大学での学びに触れ、進路選択の一助にするという趣旨で、利府高等学校から模擬授業の要請があった。普通科2年生の生徒のなかで情報学部データサイエンス学科に興味を持つ生徒のために、「情報学の面白さ」をテーマにした授業、また情報学部データサイエンス学科の紹介を行った。60分授業を2回行い、参加者は合計で約19名であった。

現在の課題・目標	・対面授業再開により、対面授業での学生の興味を喚起することによる効果的授業の実施 ・ゼミ形式演習での実践的なデザインパターンを含むプログラミング教育 ・新たなオンデマンド科目「AI社会の基礎」の滞りない授業運営と授業終了後の総括
今年度の進捗状況	・対面授業では最新の新聞や雑誌の記事の引用などいくつかの新たな取り組みを実施 ・対面授業ではmanabaを使った複数回の短いレポート提出などアクティブラーニングの導入 ・ゼミ形式演習では予定通りの教育を実施。より理解度を高めるのが課題 ・新たなオンデマンド科目「AI社会の基礎」の滞りない授業運営と授業終了し、総括はこれから
来年度の進捗目標	・対面授業の新たな科目「情報理論基礎」が前期に始まるため、滞りない授業運営 ・オンデマンド科目「AI社会の基礎」の授業資料改善

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教養教育科目としての「AI社会の基礎」 数理・データサイエンス・AI教育への取り組み	共著	2024年3月	東北学院大学情報学部論集	伊藤則之　菅原研　松本章代　渡邊圭	pp.25-34
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	オンデマンド授業「AI社会の基礎」について、2024年3月までにこの1年間の成果を論文化する
今年度の進捗状況	オンデマンド授業「AI社会の基礎」について、2024年3月までにこの1年間の成果を論文化できた
来年度の進捗目標	・今年度から始まった科目「情報リテラシー」において新たに実施した取り組みの論文化 ・「情報基礎理論」科目でのスムーズな授業運営 ・ゼミ学生4年生の研究テーマの論文化とその発表指導

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2009年4月～	電子情報通信学会会員 会員
1988年4月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

情報学部長

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	片瀬　一男	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年10月～	日本教育社会学会評議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	坂本　泰伸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
中小企業におけるDXの推進について(2)『ESPO No.613』	単著	2023年7月	宮城県中小企業団体中央会, 613	坂本泰伸	pp.10-11
中小企業におけるDX化の推進について『ESPO No.612』	単著	2023年5月	宮城県中小企業団体中央会, 612	坂本泰伸	pp.10-11
震災学『10年の応答』『震災学Vol.17』	単著	2023年4月	東北学院大学, 17	坂本泰伸	pp.14-15
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	我が国の中山間地域では、地域資源や観光コンテンツが乏しく産業の興隆が著しく困難で地域産業のDX化が望むべくもない地域も多い。また、自然災害の発生時に集落が孤立して住民生活が成立しなくなるなどの課題も有する。本研究では、中山間地域の自立型DX化の必要性に着目し、被災後の速やかな復興・復旧(レジリエンス)力の構築を目指し、平時から外部人材との交流を進め当該地域の認知度を向上させる取組を進める。自立型DX化の取組は、活動の成否が地域住民のITリテラシー能力と相関関係にあるので、住民の情報活用能力の測定方法、情報活用能力の醸成方法、外部人材との交流事業による接点増加に関する効果などを明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	菅原　研	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「考えて書く」の導入と「飽き」の防止	2020年9月11日～	講義中に適宜問題を課し，考えて書くことを促進した。また，学生が集中できる時間を考慮し，講義に関連するショートブレーク動画を使うことで飽きの防止を図った。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年9月11日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習と小問の解答，質問・コメント欄に書かれたものへの回答を示し，当日の講義にスムーズに入れるようにした。さらに，授業終了時に振り返りの時間を設け，学習した内容をresponの自由記述でまとめる作業を義務付けた。
教師役の導入による学習深化	2020年5月7日～	教師役を積極的に割り振ることで学習の深化を図った。
予習課題による学習効率の向上化	2020年5月7日～	次回の学習に必要な事前学習を可能とするワークシートを配布した。講義・演習ののち、その内容に応じた簡単な確認テストを実施した。
振り返り小テスト、共同学習による理解の促進	2020年5月7日～	ほぼ毎回，小問を解く形で学習の振り返りを行った。また，学習内容に応じてグループによる学習を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
科学的思考の基礎	2020年9月11日～	市販されている書籍に教科書として適するものがないこと、受講者の理解度に応じて柔軟な対応が必要であることから独自の細かい教材を作成した
複雑系の科学	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための、なるべく直感的に分かるように工夫した教材を作成した。
プログラミング上級	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材（主にアルゴリズムに関するもの）を作成した。
メディア表現の技法A	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材（主にマルチメディアに関わる技術的な面を説明するもの）を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施	2020年～	宮城県視覚支援学校に赴き、視覚障害をもつ小学生（特に2，4年生）を対象としたプログラミングの模擬授業を行った（9/16，11/5，2021/1/27）。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教養教育科目としての「AI社会の基礎」 数理・データサイエンス・AI教育への取り組み	共著	2024年3月	東北学院大学情報学部論集	伊藤則之　菅原研　松本章代　渡邊圭	pp.25-34
単純な群ロボットによる空間構造形成	共著	2023年12月	第24回システムインテグレーション部門講演会論文集	菅原 研，小野寺 継大，齋藤 好汰	pp.1016
ブロックを用いたプログラミングシステムの開発とその実践について	共著	2023年9月	第31回 視覚障害リハビリテーション研究発表大会 IN 金沢	菅原研，松本章代	pp.

空間構造を形成する群ロボットシステム	共著	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会資料	菅原 研, 小野寺 継大	pp.RSJ2023AC1K1-05
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
視覚支援学校におけるプログラミング授業のためのシステム開発および授業の実施	共同	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学（仙台市）)	◎田内海, 折居泰成, 松本章代, 菅原研	
ブロックを用いたプログラミングシステムの開発とその実践について	共同	2023年9月	第31回視覚障害リハビリテーション研究発表大会(金沢市)	菅原研, 松本章代	
視覚支援学校におけるプログラミング教育のためのロボットシステム～第2報～	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台市)	菅原研, 松本章代	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤C	2020年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤C	2020年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	杉浦　茂樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習前の知識状況の把握のための小テストの実施	2020年4月1日～	学科コア科目では，初学者が多いために学習すべき事項が多くなる傾向がある。そのため，重点的に学習すべき事項を学習者自身に絞り込ませることを目的として，毎回の授業の冒頭に小テストを実施し，正解を発表し自己採点を行わせている。
予習の促進と重要項目に対する知識定着の向上を目的とした小テストの実施	2020年4月1日～	学科専門科目では，毎回の授業内容を理解し続けることで発展的な内容も理解が可能となる。そのため，授業理解のための予習を促進，および，重要項目の知識定着の向上を目的として，重要事項の小テストを毎回実施している。Webベースのシステムを利用することで，授業前の予習と授業後の復習の両方で小テストを活用している。
授業資料のインターネットへの公開	2020年4月1日～	授業を欠席した学生は自主的に授業内容の補完ができ，授業を聴講した学生は予習と復習に効果的に活用できるように配慮した，授業資料をインターネット上に掲載している。学生の参照期間に応じて資料を分割することにより，各回の授業が終了した後でも授業内容の確認に利用できるような工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「コンピュータ科学」講義資料	2023年4月1日～	データサイエンス学科1年の必修科目である「コンピュータ科学」のPDFによる解説およびWebシステムによる小テストを作成した。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
「情報リテラシー」講義資料	2022年11月10日～	TGベーシック科目である「情報リテラシー」の講義資料を他の教員と共同で作成した。具体的な担当部分はオープンデータおよびExcelの利用方法の基礎についてである。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①総合研究でのLMS（Learning Management System）の活用を進捗管理などに広げる。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の内容を更新する。 ③『コンピュータ科学』の講義資料の問題点の洗い出しと，それにもとづく修正を行う。 ④大学院『プログラム言語論』の講義資料の問題点の洗い出しと，それにもとづく修正を行う。
今年度の進捗状況	①今年度は進捗がなかったため，来年度も引き続き取り組む。 ②ネットワークに関する技術的進歩が急激なため，重要項目の内容更新を行った。 ③受講生の理解が困難な項目に補足的な説明の追加を行った。 ④基礎知識を欠く受講生に対応するための説明の追加を行った。
来年度の進捗目標	①総合研究でのLMS（Learning Management System）の活用を進捗管理などに広げる。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の内容を最新技術への対応を行う。 ③『コンピュータ科学』の講義資料の問題点の洗い出しと，それにもとづく修正を行う。 ④大学院『プログラム言語論』の演習環境の変更への対応を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	①研究室サーバを当日中のデータに復旧できるように実際にシステムを構築する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の概要設計を進める。
今年度の進捗状況	①セキュリティ対策のためにOS入替えを優先する必要が生じ，本課題は来年度への繰り越しとなった。 ②概要設計が完了し，試行環境の準備を行っている。
来年度の進捗目標	①研究室サーバを当日中のデータに復旧できるように実際にシステムを構築する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の詳細設計を行い，試行環境でのテストを行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年5月～2023年5月	公益財団法人私立大学情報教育協会理事 委員
2001年～	電子情報通信学会会員 会員
1992年～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	鈴木　努	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	コンピュータを用いたデータ分析教育	
今年度の進捗状況	jamovi、R、KH Coder、Pythonなどのソフトウェアを用いたデータ分析教育を行った。	
来年度の進捗目標	Sonic Piを用いた音楽プログラミング、Rによる音楽社会学（ネットワーク分析）。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	ネットワーク分析における中心性指標の理論的含意に関するフォーマライゼーション。				
今年度の進捗状況	点中心性指標に代わって、確率的ブロックモデルにおけるブロック所属を頂点がネットワーク構造において占める地位の指標として用いられないかと考えている。				
来年度の進捗目標	統計的社会ネットワーク分析に関する書籍の執筆を進める。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	本研究では、社会ネットワーク分析における中心性指標を、社会学におけるアクターの重要性や影響力の指標としてフォーマルに定式化する数理モデルを構築する。社会ネットワーク分析における中心性指標を、社会学におけるアクターの重要性や影響力の指標として用いることの数理的、理論的根拠はこれまで必ずしも明確ではなかった。従来、日常言語によって記述、解釈されてきた社会ネットワークの中心性指標と社会関係における重要性・影響力の関係をフォーマルに記述することによって、数理的な含意が明確で実際の社会関係における影響力として解釈可能な定式化が可能となる。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	なし		
今年度の進捗状況	なし		
来年度の進捗目標	なし		
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
なし			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	武田　敦志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自律走行するLEGOロボットを使ったソフトウェア開発教育	2020年4月1日～	LEGO社から販売されているLEGO Mindstormsを使ってソフトウェア開発手法に関する教育を行っている。この自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発教育では，現実に役に立つソフトウェアの設計や確実に動作するソフトウェアの開発に関する演習を効果的に行うことができた。
PowerPointを使った講義資料の配布とWebによる予習・復習のための情報発信	2020年4月1日～	PowerPointを用いて画像やアニメーションを取り入れた資料を作成し，この資料を使って講義を進めることにより，黒板のみを使った講義よりも高い教育効果が得られた。また，講義資料のデータをWebで公開しており，予習・復習を容易に行うことができるようした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
プログラミング演習環境の整備	2020年4月1日～	情報科学科の学生を対象としたプログラミング演習環境をプライベートクラウド上に整備した。プログラムの作成から実行までをクラウドサーバで行うため、開発用のソフトウェアをノートPCなどの操作デバイスにインストールする必要がなく、インターネットに接続している様々な端末からプログラミングの課題に取り組めるようになっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	個別	グリッドニューラルネットワークと転移学習技術を活用することにより、訓練データが小規模であっても高い画像分類性能を有する多層ニューラルネットワークを実現する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2019年4月～	情報処理学会MBL研究会 運営委員 会員
2018年4月～	ETロボコン東北地区大会 技術委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	牧野　悌也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「感覚知覚情報論B」の改善	2020年9月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． ・中間テスト，最終テストを廃止し，中間レポート課題，最終レポート課題を実施．さらに，提出課題を受講生自身で評価するようにした．具体的には，レポート課題提出の次の授業で1）受講生にすべてのレポート課題を見てもらい，各自良いレポートに3つの異なる賞を与える，2）受講生に4～5名の小グループを作るように促し，それぞれの賞を持ち寄って，グループ賞を3つ決める，この過程では，それぞれの賞に決めた根拠をグループ内で共有するよう議論を促す，3）グループ代表者に3賞とそれを選んだ根拠を発表してもらう，ことを実施した． また、上記の内容をZoom遠隔オンラインにより実施し、例年の対面授業と同程度の教育効果を上げることができた。
4年次総合研究の改善	2020年4月～	・ゼミ生全員での週2回の進捗状況報告会ミーティングをするとともに、議論する機会を増やした。 ・研究テーマの意味を学生自身で掘り下げさせるため、過度の説明はやめ、重要ポイントに関わる問いかけを繰り返し行うようにした。 上記のことを、Zoom遠隔オンラインにより試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。
3年次演習の改善	2020年4月～	・読書量の少なさ，議論する機会の少なさを補うため，読解と議論の方法を体験的に学ぶために山田ズーニー著「あなたの話はなぜ「通じない」のか」の輪講を前期冒頭に追加し，読み・書き・議論の演習を交えながら実施した。 ・資格の錯視に関する心理物理実験パートを組み込み，コンピューターシミュレーションのみでなく，より体感できる学びの実践を行った． また、Zoom遠隔オンラインによる授業を試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。
情報科学科1年次授業「情報科学基礎教育」の遂行，講義内容の改善	2020年4月～	2015年度より開始した情報科学科1年生にとっての「大学における勉学」への導入科目としての性格を持つ「情報科学基礎教育」（担当：石田，岩田，菅原，武田，，松本）の講義内容の標準化を行った。すなわち，講義は3パートオムニバスのため，受講生への教授内容に不一致がないように，また各パート間の連携が取れるように，綿密に事前打ち合わせを行った．さらに，授業終了後，来年度に向けての改善点の洗い出しを行った。 Zoom利用によるオンライン遠隔授業を効果的に行うための工夫を試行錯誤的に行い、例年の対面授業と同等の教育効果を上げることができた。
TGベーシック「科学的思考の基礎」：学生とのインタラクション	2020年4月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． オンデマンド授業教材を作成した．また，オンデマンドによる双方向型授業を可能にするため，manaba、responの活用をはかった．
「生命の科学」：学生とのインタラクション	2020年4月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． オンデマンド教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型の授業を可能にするため、manaba、responの活用をはかった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
担当科目「生命の科学」の教科書化	2022年11月1日～	ミネルヴァサイエンスライブラリーの一冊として、担当科目「生命の科学」の教科書化。2025年2月刊行予定

「科学的思考の基礎」の教科書化	2020年4月～	TGB「科学的思考の基礎 」で利用可能な、文理を問わない大学1年生向けの教科書を、情報科学科菅原, 土原, 村上とともに執筆し、脱稿した。現在出版社で初稿ゲラを作成中。2021年9月出版予定。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
多賀城高等学校普通科における模擬授業、探究学習の一環として	2023年12月	
多賀城高等学校災害科学科における模擬授業、探究学習の一環として	2023年9月	

現在の課題・目標	教養教育科目「生命の科学」の教科書化
今年度の進捗状況	教養教育科目「生命の科学」教科書についての出版社との交渉、 教科書の構想確定及び執筆開始
来年度の進捗目標	教養教育科目「生命の科学」教科書の出版

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	生物の情報処理様式の進化の通史的な俯瞰
今年度の進捗状況	幹の部分については概ね見通しが立った
来年度の進捗目標	個別具体的な生物種における展開の詳細についての調査

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2012年3月～	日本VR学会香りと生体情報研究委員会委員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

入試部長2期1年目。
新キャンパスにおける入試の実施・運営。
東日本スカラシップ選抜の新規立ち上げと実施

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	松尾　行雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概要を必ず説明している。加えて、授業途中に重要項目についてresponのアンケート機能を用いて、理解度チェックを行い、講評を含め、コメントしている。授業終了時に授業内容の振り返りを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年5月～	生物音響学会理事 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	松本　章代	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習授業における学生の意欲を向上させるための取組	2023年	演習の授業において学生の学習意欲向上を図るため，課題の題材を「学生の興味を惹き各自工夫の余地がある内容」にすることを常に心がけている。かつ，制作物をウェブ上にアップして公開するといった取り組みを行っている。
プログラミング演習授業における作業手順動画の作成・提供	2023年	「プログラミング概論」においてプログラミングの作業手順を動画にして授業中に学生が各自閲覧できるようにし，自分のペースで作業が進められるようにした。
プログラミング演習授業における講義動画のウェブ公開	2023年	演習授業の解説部分を録画し動画にして，講義スライドとともにウェブ上に公開している。
プログラミング演習授業における掲示板の活用	2023年	実習中に受けた質問の回答をオンライン掲示板に掲載し学生間での情報共有を図った。
プログラミング演習授業において学習者が能動的に学習に臨む仕組みおよび学習した内容が定着するような支援法の実践	2023年	学習者の予習・復習を含めた学習を支援する枠組みを作り，学習効果の実質的な向上を狙っている。
プログラミングのレポート提出システムの構築および運用	2023年	学生が課題のレポートをウェブブラウザ上で相互評価できる仕組みを構築した。
「プログラミング概論」用ウェブサイト作成	2023年	「プログラミング概論」のウェブサイトを作成し，公開している。講義資料の閲覧や課題の提出ができるだけでなく，課題のプログラムを提出すると入力ミスを指摘する機能がついている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「情報科学基礎教育」講義資料	2023年	講義用スライドを作成した。
「情報科学基礎演習A」講義資料	2023年	問題解決技法入門の講義スライドを作成した。
「情報科学演習」講義資料	2023年	演習の説明用スライド，演習に利用する素材を作成した。
「AI社会の基礎」講義資料	2023年	第4回～第7回の講義用スライドおよび動画を作成した。
「プログラミング初級」講義資料	2023年	講義用スライドを作成した。
「プログラミングの基礎」講義資料	2023年	講義用スライドを作成した。
「プログラミング概論」講義資料	2023年	講義用スライドおよび動画を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
2023年度 私情協 教育イノベーション大会「生成系AIの利用を前提としたレポート課題についての提案」	2023年9月7日	「プログラミングの基礎」の授業において実践した生成AIの利用を前提としたレポート課題について報告した。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生を対象とした出張講義	2023年11月2日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで泉高校の生徒を対象として出張講義を行った。
高校生を対象とした模擬授業	2023年9月6日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで須賀川創英館高校の生徒を対象として模擬授業を行った。
高校生を対象とした模擬授業	2023年5月25日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで東北学院高校の生徒を対象として模擬授業を行った。
データサイエンス学科主催公開講座の実施	2023年	データサイエンス学科主催の公開講座「小学生向けプログラミング講座」を企画し講師を務めた。
視覚支援学校でのプログラミング授業	2023年	宮城県立視覚支援学校・静岡視覚特別支援学校にて小学部の児童にプログラミングの授業をおこなった。
日本視覚障害者団体連合からの依頼によるオンラインプログラミング講座の実施	2023年	視覚障害を持つ小学生～高校生の児童・生徒を対象としてオンラインプログラミング講座をおこなった。

現在の課題・目標	①「情報科学演習」において学生が主体的にプログラミングに取り組めるだけのスキルを身に付けさせる。 ②1～2年生向け実習科目「プログラミング概論」「プログラミング初級」において学生がプログラミングに興味を持つような指導を行う。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう指導する。 ④学生に外国語会話を身に付けさせるためのシステムを開発・運用する。 ⑤manabaとresponをより多くの科目で導入し授業改善を図る。
今年度の進捗状況	①「情報科学演習」では学生一人一人が自ら企画した作品を完成させており，ほぼ達成できた。 ②「プログラミング概論」では，スマホアプリという学生に身近な題材によって興味を惹く工夫をした。「初級」は新カリとなって実行結果が視覚化され，意欲的に課題に取り組む学生が増えたと感じた。 ③「プログラミングの基礎」の授業において，生成AIを正しく利用してレポートを作成するよう指導した。 ④外国語会話訓練システムは今年度，学生の会話レベルの判定精度の向上を目指した。 ⑤「AI社会の基礎」「情報リテラシー」「プログラミング概論」「プログラミングの基礎」「プログラミング初級」「情報科学基礎演習A」「情報科学基礎演習B」の7科目でmanabaとresponを活用し授業改善を図った。
来年度の進捗目標	①来年度の「情報科学演習」についても目標を達成できるよう引き続き努力する。 ②プログラミングの初期教育において，授業についてこられない学生の割合は確実に減っているが，全体的なレベルの向上につながっているかどうかは不明なので，意識的に取り組む。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう，指導をより徹底する。 ④外国語会話訓練を目的とした動画配信アプリは各学生のレベルに応じた動画の配信を目指す。 ⑤manabaとresponをより活用し授業改善を図る。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
カリキュラムマネジメントシステムによる教科を横断したカリキュラム改善の分析	共著	2024年3月	日本教育メディア学会研究会論集(56)	稲垣 忠，松本 章代，豊田 充崇，後藤 康志，泰山 裕	pp.77-84
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教養教育科目としての「AI社会の基礎」 数理・データサイエンス・AI教育への取り組み	共著	2024年3月	東北学院大学情報学部論集	伊藤則之　菅原研　松本章代　渡邊圭	pp.25-34
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
カリキュラムマネジメントシステムによる教科を横断したカリキュラム改善の分析	共同	2024年3月	日本教育メディア学会 2023年度第2回研究会(長崎大学)	◎稲垣忠，松本章代，豊田充崇，後藤康志，泰山裕	
教科横断的スキルの取得状況を比較できるカリキュラムマネジメントシステムの開発	共同	2024年3月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 174回研究発表会(オンライン)，2024-CE-174，13	◎志賀奏翔，松本章代，後藤康志，豊田充崇，泰山裕，稲垣忠	pp.1-8
視覚支援学校におけるプログラミング授業のためのシステム開発および授業の実施	共同	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学（仙台市）)	◎田内海，折居泰成，松本章代，菅原研	
ブロックを用いたプログラミングシステムの開発とその実践について	共同	2023年9月	第31回視覚障害リハビリテーション研究発表大会(金沢市)	菅原研，松本章代	
生成系AIの利用を前提としたレポート課題についての提案	単独	2023年9月	2023年度 私情協 教育イノベーション大会 資料(オンライン)	◎松本章代	
視覚支援学校におけるプログラミング教育のためのロボットシステム～第2報～	共同	2023年9月	第41回日本ロボット学会学術講演会(仙台市)	菅原研，松本章代	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①子どものプログラミング教育に関する研究を進める。 ②文書解析に関する研究を進める。 ③外国語会話教育システムに関する研究を進める。 ④視覚障害をもつ児童のプログラミング教育に関する研究を進める。 ⑤カリキュラムマネジメントシステムに関する研究を進める。
今年度の進捗状況	①については子ども向けプログラミング教材を検討しプログラミング的思考への影響について分析をおこなった。 ②については近代文書の文字認識における誤り訂正に関する研究を進めた。 ③については学生の会話レベル判定精度の向上を目指した。 ④については視覚障害をもつ児童・生徒に対するプログラミング教育について，教材開発およびシステム開発をおこなった。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムに過去の登録データと比較する機能を追加した。
来年度の進捗目標	①については視覚障がいをもつ児童・生徒のためのプログラミングシステムを新たに開発する。 ②については近代文文書の文字認識における誤り訂正の精度向上を目指す。 ③については各学生の会話レベルに応じた動画の配信を目指す。 ④については視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育を体系化し普及に向けて取り組む。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムを安定運用する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	初等中等教育における探究学習を対象としたカリキュラム・マネジメントの支援ツールを開発する。特にカリキュラムに関する研究とそれを運用するためのシステム開発を連携させた上で、学校現場での実証を試みる学際的なアプローチを特色とする。探究スキルの明確化は、高等学校学習指導要領（文部科学省 2018）より新設される「総合的な探究の時間」「古典探究」「地理探究」「理数探究」等の探究に関連する科目において、共通の基盤となるスキルを示し、その育成を小学校段階から系統的に行う手法を提案できる。ウェブ上のシステムについては、探究スキルを中心とした情報活用能力のマネジメントを支援するツールとして提供する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年11月～	日本教育工学会会員 会員
2009年1月～	教育システム情報学会会員 会員
2008年9月～	日本データベース学会会員 会員
2007年7月～	電子情報通信学会会員 会員
2005年3月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	村上　弘志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に関するアンケート	2023年4月1日～	毎回の講義に関する質問・意見や感想をオンラインアンケートで尋ね、翌授業回に返答している。 質問のうち他の回に関わるものについては、最後にまとめて振り返って回答している。
学習内容の実践による理解の促進	2020年4月1日～	自然の科学の毎回の授業の中で講義に関連した天体イベントなどを紹介し，実際に体験することで定着を図っている。
学習内容の定着と理解の促進	2020年4月1日～	毎回の講義の最後にその回の内容に関わる小問を出し次回以降に解説する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校への出張講義の講師を務めた	2023年9月26日～2023年9月26日	岩手県立千厩高校にて「データサイエンスの活用　～最新の成果から日常への利用まで～」と題した出張講義を行った。
公開講座の講師を務めた	2023年7月8日～2023年7月8日	データサイエンス学科主催の公開講座「探究のウラにある科学的思考」全4回のうち2回目の講師を務めた。

現在の課題・目標	①学生の到達度にあわせた授業進行を行う ②レポートや練習問題で学生の理解度をはかる ③双方向で意見を出し合いながら講義を進める ④講義資料の改訂および授業方法の工夫を進める
今年度の進捗状況	上記目標①については、オンデマンドの授業期間を変更し、従来の問題解説に加えて質問に対する回答も翌授業回に間に合わせるように心がけ、ほぼ実践できた。これにより、必要に応じて補足説明を取り入れた授業を実施することができた。 ②については引き続き各講義で毎回簡単な小問に答えさせ、正答率をもとに理解の進んでいない点を探った。 ③については、少人数講義においては学生自身に課題解決の方向性を決めさせる工夫として、研究背景や先行研究の紹介をより丁寧にすることを心がけた。大人数講義では、例えば「銀河」が名称に含まれている作品を挙げさせるなど、答えが多く出るアンケートを取り入れ、回答を紹介した。また、講義で触れられなかった内容についての質問も受け付け、最後の回にその内容について触れ、その感想を書かせた。 ④については、「科学的思考の基礎」の講義資料を全面的に見直し、より教科書に即した内容や問題とした。また、学生の解答のしやすさについて調査し、「自然の科学」と「科学的思考の基礎」においてresponからmanabaの小テストへの切り替えを進めた。
来年度の進捗目標	上記目標①については、今後も質問への回答を翌授業回に間に合わせることを徹底するとともに、よく質問が出る内容についての説明を充実させる。 ②については、問う内容について工夫を行う。 ③については、学生がより意見を出しやすいよう例題を充実させるなどの工夫を行う。 ④については、今年度の学生の要望をもとに引き続き改訂を進める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	①XRISM搭載用CCD検出器Xtend-SXIの安定運用 ②銀河系中心のブラックホールの過去の活動性の解明や周辺天体の研究 ③X線CCD検出器の新しいイベント抽出法の研究 ④将来の天文衛星計画の検討
今年度の進捗状況	上記目標①については2023年9月にXRISM衛星が打ち上げられ、CCD検出器の立ち上げ、運用は今のところ大きな問題はなく順調に実施できている。②についてはXRISM衛星の観測が行われ始めたところであり、データ解析を進める。③については、XRISMで明るい天体を観測した場合に生じるパイルアップの問題が明らかになっており、その対処に向けた研究を進める。④については、一部計画の見直しがあったが、中型衛星の提案に向けて検討を継続中である。
来年度の進捗目標	①については、軌道上の環境による性能の変化を明確にし、検出器の性能を最大限引き出す運用を目指す。②については、観測データを解析するとともに、新たな観測提案を行う。③については、XRISM衛星のデータを用いて新しい抽出用による効果を見積もる。④については、次期衛星計画の実現に向けてサイエンス検討およびそれを実現するためのミッション計画を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2013年7月～	日本物理学会会員 会員
2003年7月～	国際天文学連合(IAU)会員 委員
1999年8月～	高エネルギー宇宙物理学連絡会会員 委員
1997年7月～	日本天文学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. 情報処理センター副センター長
2. 学院総合ネットワーク管理委員会

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	岩田　友紀子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
各回の講義でのresponの活用	2020年4月1日～	講義の終了時に，毎回responによる学生の理解できなかった部分などの感想を書き込んでもらうことをした．講義中に質問できなかった学生の声を拾うことができるようになった．
ホワイトボード機能を用いた授業	2020年4月1日～	黒板の字よりもPCのホワイトボード機能で記述した字の方が見やすいとのことで，ワコムの液タブを用いて講義を行う．
2．作成した教科書、教材、参考書		
解析学I，IIにおいてmanabaのドリル機能を用いた小テストを作成した．	2020年4月1日～	manabaのドリル機能を用いて制限時間10分程度で無制限回挑戦できる小テストを課し、学生の講義の『復習』の時間を増やすことを図った。
確率・統計IIの授業で，Excelによる演習問題を15回分作成した．	2018年4月1日～	
解析学I,IIの講義ノートを作成した．	2017年4月1日～	解析学I,IIでの講義全ての講義ノートを作成した．数IIIを受けていない学生が一人で読んでも理解できる内容にしている．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Almost everywhere convergence of the iterates of a bi-stochastic Markov operator	単著	2023年9月	Springer, Positivity, 27	Yukiko Iwata	pp.1-13
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『Markov Operators on a Banach Lattice and Their Applications』	共著	2023年11月	IntechOpen	Takashi Honda, Yukiko Iwata	pp.1-138
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
The Existence of families with cyclic sets for a Markov operator	単独	2023年12月	The 2nd International Conference on Applied Mathematics, Informatics, and Computing Sciences(Gent, Belgium)	Yukiko Iwata	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2011年4月～		日本数学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	片方　江	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・分かりやすい授業の実施 ・manabaの小テストおよびドリルの充実 ・ゼミ生への丁寧な指導	
今年度の進捗状況	・授業評価アンケートの内容を参考に授業改善計画を立てている ・ゼミ生への丁寧な指導および輪講に関する助言を行っている	
来年度の進捗目標	・分かりやすい授業の実施 ・manabaの小テストおよびドリルの充実 ・学生とのコミュニケーションを大切にする ・ゼミ生への丁寧な指導	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
An example of functions of slow growth whose fast escaping set has Hausdorff dimension two	単独	2024年3月	拡大版「リーマン面・不連続群論」研究集会(島根大学)	片方 江	
無限個の擬多項式写像を含む超越整関数の構成	単独	2023年6月	第60回東北複素解析セミナー(東北大学)	片方 江	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・有理関数および超越整関数の力学系の研究
今年度の進捗状況	・これまでの研究成果を2回発表することができた
来年度の進捗目標	・超越整関数の力学系特有の現象を解析すること ・日本数学会での研究成果発表

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	木村　敏幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
「確率統計学演習」演習問題資料	2023年9月～2024年1月	教室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため，演習問題を掲載した資料を後半計6回分作成し，授業開始時にmanabaを通じて配布した．また，演習問題の解答がついた資料を次回授業開始時にmanabaを通じて配布した．
「情報理論演習」演習問題資料	2023年4月～2023年7月	教室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため，演習問題を掲載した資料を計13回分作成・印刷し，授業開始時に配布すると同時にmanabaでも配布した．また，演習問題の解答がついた紙資料を授業の後半に配布すると同時にmanabaでも配布した．
「研究・発表の技法」講義スライド	2023年4月～2023年7月	組版ソフトウェア(TeX Live)やプレゼンテーションソフト(Microsoft PowerPoint)を用いて発表資料(レジュメ，スライド，ポスター)をどのようにして作成するかについて解説したスライドを計15回分作成し，manabaを通じて配布した．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
PDF貼付ソフトウェアを用いた大学キャンパス用電子掲示板の開発及び評価	単著	2024年3月	東北学院大学データサイエンス研究所論集(1)	木村敏幸	pp.75-89
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
指向性スピーカと波面合成法を用いたスケーラブル三次元放射音場再生システムの理論的検討	単独	2024年3月	日本音響学会春季研究発表会(拓殖大学)	木村敏幸	
Multiple Vertical Panningを用いた立体音響システムにおいて奥行表現手法が映像と音の一致度に及ぼす影響	単独	2023年8月	電子情報通信学会応用音響研究会(東北学院大学)	木村敏幸	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年4月～		日本音響学会東北支部 顧問	
2012年5月～		電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員	
2007年12月～		日本音響学会編集委員会 査読委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	小林　信重	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『「同人文化」の社会学: コミケをはじめとする同人誌即売会とその参加者の織りなす生態系を描く（第3章「同人サークルの制作動機とその変化――デジタル化とグローバル化の時代の同人ゲーム制作者に注目して」、付録「コミックマーケット35・40周年調査報告」）』	共著	2024年3月	七月社	玉川博章,小林信重ほか	pp.1-320
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
デジタル化で変化する同人活動をメディア研究として如何に捉えるか	共同	2023年11月	日本メディア学会2023年度秋季大会(オンライン)	玉川博章, 小林信重, 山崎隆広	
ドラゴンクエストへの道――堀井雄二のフリーライター時代の創作活動とその社会的文脈	単独	2023年10月	社会・経済システム学会第42回大会(早稲田大学)	小林信重	
序ーーゲーム研究とはどういうものか？ 新シリーズ 吉田寛『デジタルゲーム研究』を読む 第一回	共同	2023年10月	未来に残したい授業(オンライン)	吉田寛, 小林信重, 代麻理子	
フリーライター時代の堀井雄二の創作活動を支えた社会的文脈	単独	2023年9月	日本デジタルゲーム学会2023年夏季研究発表大会(成城大学)	小林信重	
同人ゲームの歴史と研究	単独	2023年8月	JGS第3回拡大編集会議(オンライン)	小林信重	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
『ゲームスタディーズ入門: 文化のなかのゲーム』	単訳	2024年3月	ニューゲームズオーダー	小林信重	pp.1-268
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年～		日本メディア学会ネットワーク社会研究部会 幹事	
2021年～		Replaying Japan Journal 査読委員	
2018年～		国際ゲーム開発者協会（IGDA）日本　同人・インディーゲーム部会 正世話人	
2018年～2023年		東京ゲームショウ「センス・オブ・ワンダーナイト」選考委員	
2018年～2023年		東京ゲームショウ「インディーゲームコーナー（選考ブース）」選考委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	佐藤　篤	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業での数値計算ソフトウェアの活用	2020年9月～	「数理情報学」と「数値解析」の授業において GeoGebra、gnuplot、octave、pari-gp、R を利用したデモを行い、理解する助けとした。
個人のウェブページの活用	2020年4月～	これまでに書いた文書を公開した。その中には過去の授業等で配布したものも含まれる。また、いくつかの文書については改訂も行った。さらに、「幾何学 I」「幾何学 II」「数理情報学」「数値解析」のページを作成し、配布資料等をダウンロードできるようにした。
授業での動的数学ソフトウェアの活用	2020年4月～	「幾何学I」と「幾何学II」の授業において GeoGebra を利用したデモを行い、定理等の意味を理解する助けとした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材の作成	2020年4月～	「数理的思考の基礎」のオンデマンド授業用の資料を作成した。
教材の作成	2020年4月～	「情報科学基礎演習A」の授業において「データ処理の基礎」の教材を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
教員採用試験（数学）対策講座 講師	2023年11月22日	2022年実施分の宮城県・仙台市の教員採用試験（数学）の解説を行った。

現在の課題・目標	(1) 講義全般について、受講者の現状に沿った内容にする。 (2) 演習について、学生とのコミュニケーションを重視し、「数学を理解すること」がどういうことなのかを学んでもらうよう努める。 (3) 数学科以外の学生を対象とした代数学の演習書を執筆する（共著）。
今年度の進捗状況	(1) については、改善が見られるが、まだまだ満足できる状況とは言えない。 (2) については、まだ満足できる状況とは言えないが、発表の仕方に進歩が見られる。卒業論文の進捗にも改善が見られた。 (3) については、自分の担当箇所についてはほぼ完成したが、さらなる手直しが必要。
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き講義内容の見直しを行う。アンケートでポジティブな回答が多くなるよう努めたい。 (2) については、適当なテキストの探索を続け、知識よりも考え方を重視するような演習を継続的に行えるようにする。 (3) については、共著者と共に早期の完成を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 楕円曲線の同種写像を利用して、代数体の不分岐拡大の塔を具体的に構成すること。 (2) 二次体上定義された、位数11の有理点をもつ楕円曲線の族を用いて、類数が11で割り切れるような代数体の無限族を構成すること。 (3) 楕円曲線上の点の還元に関する振る舞いと、形式群や Tate 曲線との関係を明らかにすること。
今年度の進捗状況	(1) については、同種写像の核に属する全ての点が良還元をもつような素点の分岐について、一定の成果が得られた。 (2) については、コンピュータを利用した計算機を行ったが、計算結果が複雑で扱いかねる状態のままである。 (3) については手付かずの状態である。
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き計算を進め、代数体の類数の可除性の話に結び付けたい。また、既に得られている成果について論文に纏めたい。 (2) については、あまり進展は見込めないかもしれないが、引き続き突破口を見つけるよう努めたい。 (3) については、まずは文献による学習を進め、特に形式群の理解が深くなるよう努力したい。 上記に加えて、Morleyの定理をGalois理論の観点から説明することに挑戦したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1992年4月～	日本数学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	高橋　秀幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
3年生のゼミ生がCivictech Challenge Cup U-22 最終審査会（第4回・2023年度)に出場し、英治出版賞を受賞した。	2023年5月1日～2023年10月8日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	改組に伴う新規担当科目の教材作成や授業準備の時間を十分に確保し、様々な工夫を凝らした授業を行うことで、学生が授業内容に関心や興味を持ち、自らさらに学びたいと思えるような授業運営を行うことが目標である。また、ゼミ生に対しては、キャンパス移転に伴う新たな教育研究環境の整備によって、積極的に学びながら学会発表などを視野に入れつつ、学生自ら研究を進めることができる体制を構築することが目標である。
今年度の進捗状況	2019年4月に本学に着任して以降、新型コロナウィルスに関する授業対応（授業形態の変更に伴う授業準備）、改組に関わる様々な用務、キャンパス移転などに多くの時間を割くこととなった。キャンパス移転に伴い、4年生のゼミ生全員が新たな実験環境で総合研究に取り組めるような環境構築を行った。また、4年生のグループ主任を担当しているため、4年生の多くが卒業できるよう成績指導に加えて、定期的に連絡などを行った。3年生のゼミ生がCivictechのプロトタイプ開発コンテストで英治出版賞を受賞するなど、学部3年生としては、貴重な経験を積むことができた。さらに、ゼミ生の4年生のうち3名が学会発表を行うなどの教育研究に関する多くの成果を得ることができた。
来年度の進捗目標	コロナ禍以前の教育活動が可能となりつつあるので、学生間の交流にも繋がるようなディスカッションやグループワークなどを積極的に取り入れた授業展開を実施することが目標である。また、学生のスキル向上やアクティビティを高めるために積極的にプログラミングコンテストなどへの出場の機会を与えるとともに、総合研究を通して、学生が国内外の研究者と議論できるような教育研究活動を行うことを目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Zooming Operation of FMCW LiDAR: Toward Applications in Rescue	共著	2023年10月	Proc. of the 2023 IEEE 12th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2023)	N. Yokota, H. Takahashi, K. Sugiyasu, H. Yasaka	pp.181-182
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
養殖ブリ出荷時期予測のための魚体長測定の研究	共著	2024年3月	電子情報通信学会，信学技報，LOIS2023-57，123(429)	石下里奈，田中祐大，半田丈都，深江一輝，高橋秀幸，今井哲郎，荒井研一，小林透	pp.50-55
スマート養殖の実現に向けた給餌用ドローンシステムの研究	共著	2024年3月	電子情報通信学会，信学技報，LOIS2023-56，123(429)	半田丈都，田中祐大，石下里奈，深江一輝，今井哲郎，荒井研一，高橋秀幸，小林透	pp.44-49
養殖生け簀向け自動給餌AIドローンの研究	共著	2024年3月	電子情報通信学会，信学技報，，LOIS2023-55，123(428)	小林透，田中祐大，半田丈都，石下里奈，深江一輝，高橋秀幸，今井哲郎，荒井研一	pp.39-43
プロジェクションマッピングを用いたパーソナライズ絵本システムの設計と試作	共著	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究報告	藤原和音，高橋秀幸	pp.1-7

小型ドローンを用いた屋内自動巡回システムの設計と試作	共著	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究報告	谷田言, 高橋秀幸	pp.1-6
トイドローンの連携による動的な接続切替制御機能の設計と試作	共著	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究報告	渡邉澪月, 高橋秀幸	pp.1-7

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

養殖生け簀向け自動給餌AIドローンの研究	共同	2024年3月	電子情報通信学会ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（LOIS）(沖縄)	◎小林透, 田中祐大, 半田丈都, 石下里奈, 深江一輝, 高橋秀幸, 今井哲郎, 荒井研一	
スマート養殖の実現に向けた給餌用ドローンシステムの研究	共同	2024年3月	電子情報通信学会ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（LOIS）(沖縄)	◎半田丈都, 田中祐大, 石下里奈, 深江一輝, 今井哲郎, 荒井研一, 高橋秀幸, 小林透	
養殖ブリ出荷時期予測のための魚体長測定の研究	共同	2024年3月	電子情報通信学会ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（LOIS）(沖縄)	◎石下里奈, 田中祐大, 半田丈都, 深江一輝, 高橋秀幸, 今井哲郎, 荒井研一, 小林透	
トイドローンの連携による動的な接続切替制御機能の設計と試作	共同	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城)	◎渡邉澪月, 高橋秀幸	
小型ドローンを用いた屋内自動巡回システムの設計と試作	共同	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城)	◎谷田言, 高橋秀幸	
プロジェクションマッピングを用いたパーソナライズ絵本システムの設計と試作	共同	2024年1月	2023年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城)	◎藤原和音, 高橋秀幸	
Zooming Operation of FMCW LiDAR: Toward Applications in Rescue	共同	2023年10月	2023 IEEE 12th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2023)(奈良)	◎N. Yokota, H. Takahashi, K. Sugiyasu, H. Yasaka	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	学術論文への投稿および査読付き国際会議論文の発表を積極的に行い、モノのインターネット、マルチエージェント技術、防災・減災に関する研究テーマについて国内外の研究者から評価を受けることを目標とする。また、国際共同研究に加えて、産学官連携も検討し、東北エリアの地域の課題を解決するための研究活動も積極的に行っていく。
今年度の進捗状況	改組に関わる用務や授業準備等、キャンパス移転後の環境構築などで十分な研究活動を行うことができなかったが、国際会議1件、国内学会発表6件の発表を行うことができた。また、フィンランド・ユバスキュラ大学のPekka Neittaanmäki 教授（ユネスコ 新興国DXプロジェクト議長）とフィンランドと日本のIT教育、データサイエンスの現状に関する意見交換会を開催することができた。また、研究内容の一部がテレビ番組に取り上げられた。加えて、一般社団法人 情報処理学会コンシューマ・デバイス&システム研究会・CDS活動貢献賞を受賞した。 その他、これまでの研究活動の実績から岩手県復興防災DX研究会の構成員となった。
来年度の進捗目標	筆頭著者として研究成果に関する学術論文への投稿、外部発表を積極的に行い、国内外の研究者と議論を行う。また、国際会議や企画セッションなどの開催も積極的に行い、国内外の研究者とのコミュニティ構築や提供も行いながら国際共同研究プロジェクトなどの立ち上げを目指す。加えて、東北エリアの官公庁と連携し、地域の課題解決や今後の防災・減災に備えた対策などについて、研究活動を通して社会貢献を目指していく。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年3月～2024年3月	宮城県常盤木学園高等学校出前授業 講師
2024年3月～2024年3月	東日本大震災13年 各地で追悼 被災者のドローン操縦者が描く未来は、最新“AI防災” 400m先の火も発見するAIカメラとは(TBSテレビ「news 23」)
2024年2月～2024年2月	仙台市立六郷小学校における防災教育の実施 講師

2023年12月～2023年12月	宮城県古川黎明高等学校出前授業 講師
2023年12月～2023年12月	2023年度　福島県いわき市薄磯区津波避難訓練 運営参加・支援, 実演
2023年9月～	一般社団法人 情報処理学会・コンシューマ・デバイス＆システム研究会 編集委員
2023年7月～2023年7月	災害時の自治体のデジタル技術活用を県が研究会立ち上げ(岩手 NEWS WEB)
2023年7月～2023年7月	仙台市立六郷小学校開校150周年記念事業「バルーンリリース」への参加協力 運営参加・支援
2023年5月～2023年10月	2023 IEEE 12th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2023) Organized Session Chair
2023年4月～	一般社団法人 情報処理学会・コンシューマ・デバイス＆システム研究会 運営委員
2022年1月～	COMPSAC (IEEE Signature Conference on Computers, Software, and Applications) Program committee member
2021年12月～	The 7th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2022) in conjunction with the 14th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2022) Program Committee Member
2021年12月～	The 7th International Conference on Communication, Image and Signal Processing (CCISP 2022) Technical Committee Member
2021年4月～	一般社団法人 情報処理学会　ユビキタスコンピューティングシステム研究会
2021年4月～	一般社団法人 情報処理学会　ユビキタスコンピューティングシステム研究会 特集号編集委員
2021年4月～	一般社団法人 情報処理学会　ユビキタスコンピューティングシステム研究会 運営委員
2019年4月～	一般社団法人 情報処理学会・コンシューマ・デバイス＆システム研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
Civictech Challenge Cup U-22	東京	2023年5月～2023年10月	「Civictech Challenge Cup U-22」（主催：一般社団法人コード・フォー・ジャパン）にゼミ生が出場し、10月8日に行われた最終審査会の結果、英治出版賞を受賞した。

現在の課題・目標	展示会などに積極的に出展し、現在取り組んでいる研究内容やプロジェクトに関する紹介を行う。さらに産学連携による研究開発の推進を目標とする。
今年度の進捗状況	東北エリアのベンチャー企業、福島県、岩手県、青森県の官公庁および地方自治体との意見交換を行い、様々な共同研究を推進するために討論を行なった。その様子の一部などが、2023年7月18日のNHK岩手NEWS WEBや2024年3月11日のTBSテレビ「news 23」で放送された。
来年度の進捗目標	産学官連携による共同研究や新たなプロジェクトを開始し、様々な応用分野や地域の課題などを考慮した研究開発の推進を目指す。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教養学部教務委員長
学院総合ネットワーク管理小委員会
産学連携推進センター副センター長
AO面接委員
知的財産審査委員会
優秀卒業論文選考委員会
2020年度新入生グループ主任
2021年度情報科学科指定ノートパソコン担当

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	土原　和子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
パワーポイントによる講義と授業用独自プリントの連動・併用、講義データのダウンロード	2020年4月1日～	講義をより効果的にするため、パワーポイントを使用した授業と、独自プリントを併用した。特にパワーポイントには写真や動画を多く採用し、また、プリントはカラーのため、HPをつくってそこにカラーの図表を講義前にアップロードしておき、ダウンロードできるようにした。
オンデマンド講義における、わかりやすい動画の作成	2020年4月1日～	オンデマンド講義において、学生がわかりやすいように動画を作成した。90分しゃべり続けるのではなく、復習、イントロ、講義内容1、2，3、まとめのように区切って作成した。また、講義前に資料をアップロードし、講義を聴きながら書き込むなど併用できるようにした。
教員独自のリアクションカードによる授業評価をおこなっている	2016年4月1日～	講義のたびにリアクションカードを配布し、質問事項や講義における改善点を学生に記入してもらい、質問の多かった点や、気づいた点については、次回以降の講義でフィードバックしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
独自プリントの作成	2020年4月1日～	学生が書き込める穴埋め式の配布資料も準備して「書いて覚える」ということを徹底した。これにより、学生はその単元のポイントがわかり、そのプリントをコピーして学生が使用し、しっかり復習できるようにした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
補習授業	2018年4月1日～	正規の授業のほかに、授業が終了した夕方やオフィスアワーの時間を活用して、補講をおこなった。その週の授業でででてきた基礎知識の確認、および授業でわかりにかった箇所等を学生からつのり、噛み砕いて説明した。これにより、授業の理解が深まり、次の授業へスムーズにはいれるようになった。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
感覚毛による音に対するカイコの行動反応	単著	2023年5月	日本音響学会聴覚研究会資料，53(3)	土原和子	pp.81-84
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
ハエにおける野生型と変異型（不眠）の睡眠に及ぼす催眠薬と興奮剤の影響の違い	単著	2023年9月	東北学院大学教養学部論集(193)	TSUCHIHARA Kazuko	pp.1-14
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	星野　真樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	授業内に演習を行うことによって、能動的な学習を促すとともに、その場で自己採点できるように解説を加え、学生にフィードバックできるようにする。
教員と学生の双方向による授業展開	2021年4月1日～	授業内で適宜学生を指名し，学生を授業に参加させることによって、学生のつまずきやすい点や理解度などを確認する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業内で学生と双方向授業を展開する
今年度の進捗状況	病気療養のため授業を実施していないため評価できない
来年度の進捗目標	引き続き同じ目標をおく: 授業内で学生と双方向授業を展開する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Universal lower bound of the convergence rate of solutions for a semi-linear heat equation with a critical exponent	単著	2023年	Walter De Gruyter GmbH, Analysis, 43(4)	Masaki Hoshino	pp.241-253
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・藤田型方程式の解の漸近挙動の解析 ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集
今年度の進捗状況	・藤田型方程式の臨界指数におけるある種の普遍的な解の挙動が解析できた ・ある程度は他の偏微分方程式に関する文献を収集できた
来年度の進捗目標	引き続き同じ目標をおく: ・藤田型方程式の解の漸近挙動の解析 ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2007年10月～	日本数学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

人間科学部

心理行動科学科

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	加藤　健二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
統計授業（心理学統計法）における情報処理センター及び統計アプリHADを用いた実習的活動の活用	2020年4月1日～	心理統計に関する専門科目において，エクセル及び統計パッケージを用いた自作の例題実習を取り入れて，理解定着を図っている。
心理学専門科目の授業における、動画を含めた映像資料、プリント資料、実験実施を活用した動機づけ・理解促進の工夫	2020年4月1日～	毎時間の授業時に，動画を含めた映像資料とプリント資料を提供し動機づけを高めている。一部授業（知覚・認知心理学）では、学生各自に心理実験を実施させ、その結果を回収してグラフ化してフィードバックしている。
教養科目におけるクラウド型学習支援システムmanaba course、及びアプリケーションResponを活用したアクティーブラーニング型授業の実施	2020年4月1日～	担当している講義授業それぞれにおいて，manaba courseの諸機能を使い，授業進行に伴う情報を提供し，また提出課題の確認ができるようにしている。また、毎授業の最後に振返りコメントを提出させて、それを一覧にして提供し、学生自らの学習状況について自覚させるよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
市民講座での講演	2023年8月8日	多賀城市市民公開講座にて「生活の中で活きる『頭のよさ』とはー 認知心理学から見た『知』ー」とのタイトルで、知的側面に関する最近のトピックについて講義した。
大学オープンキャンパスにおける模擬授業の講師	2023年6月24日	「『賢さ』の認知心理学」とのタイトルで知能に関する最新の知見について参加型の講義を実施した。
各種学内FD研修会に参加	2023年4月1日～	2023.10.05 人間科学部FD研修会「TG-folioの基本と効果的な運用法」に参加 2024.01.25 人間科学研究所講演会「オンライン実験の心理学での活用」に参加 2024.04.10 人間科学研究所講演会「オンライン実験の心理学での発展的活用」に参加
各種学内FD研修会に参加	2020年4月1日～	・4月14日　新任教員研修会にて「今年度前期の授業運営について」のタイトルで話した。 ・9月16日　新任教員座談会にて司会を務めた。 ・9月16日　学内FD研修会にて「後期授業に向けて」と題して、教員向けアンケートの結果概要とあわせ、遠隔授業、特にハイブリッド授業実施について話した。 ・10月17日～　SD研修会に参加。オンラインによる「TG Grand Vision 150 第Ⅱ期中期計画概要及び実行計画作成説明会」。 ・12月10日　FD研修会「コロナ禍での授業運営について」に参加。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2001年4月～		日本イメージ心理学会 会員	
1986年4月～		日本教育心理学会 会員	
1985年4月～		日本心理学会 会員	
1979年4月～		東北心理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	金井　嘉宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
心理学の研究技法を効果的に習得させるために，自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。	2021年4月1日～	2年生向けの心理学に関する実験実習授業において，担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い，心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後，学生が提出したレポートについて，予め公開してある基準に従って丁寧に添削し，コメントをつけて返却する。学生には，修正したレポートの提出を義務づけている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。
授業理解の促進と学習内容の記憶への定着を目的とした工夫	2021年4月1日～	講義では，パワーポイントを用いて画像や図表など，情報(資料)の効果的な提示を心がけている。また，重要な部分を空白にしたパワーポイントの資料を配布し，自分で記入することによって記憶にとどめるようにしている。さらに，DVDなどの視聴覚教材や授業時間内での簡単なレポート課題を取り入れ，自分の経験と授業内容を結びつけることによって内容の理解を深められるようにしている。学生同士での議論や教えあう活動を通して能動的な学習の要素を取り入れている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
認知行動療法とコンパッション－コンパッションは脅威刺激からの回避行動を減らす－	単独	2023年10月	日本認知・行動療法学会第49回大会(北海道，日本)	金井嘉宏	
認知行動療法を構成する基本技法	単独	2023年10月	日本認知・行動療法学会第49回大会(北海道，日本)	金井嘉宏	
治療導入と心理教育(社交不安症診療ガイドラインワークショップ)	単独	2023年5月	第15回日本不安症学会学術大会(東京都，日本)	金井嘉宏	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2021年度～2025年度	（研究分担者）	「かわいい」は，日ごろもっともよく見聞きする言葉の1つである。本研究では，対象の属性である「かわいさ」と，対象に接することで個人内に生じる「かわいい感情」とを区別するという枠組みに基づき，(1)かわいい感情に及ぼす認知と身体感覚の役割の検討，(2)「かわいいもので癒される」現象の解明，(3)動きや対象同士の関係性といった新しいかわいさの発見と定量化，(4)かわいい感情を活用した瞑想（メンタルトレーニング）の実践と体系化を目指す。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	（研究代表者）	社交不安症とうつ病に対する認知行動療法（CBT）は，ネガティブな感情を減らすことを主な目的としてきたが，ネガティブ感情（不安や抑うつ）が下がってもポジティブ感情の欠如があると効果は低い。本研究は，これまでの研究でポジティブ感情を高めることが明らかにされている，他者への親切行動や慈悲の瞑想といったコンパッション（思いやり）に基づく介入が，既存のCBTの効果に及ぼす影響と作用機序を明らかにし，CBTの改善率向上を目指す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年2月～	仙台少年鑑別所　地域援助業務アドバイザー 委員
2020年8月～	一般社団法人　公認心理師の会　専門資格委員会委員長 委員長
2020年6月～	日本認知・行動療法学会　公認心理師対応委員会委員長 会員
2020年3月～	日本不安症学会　学術委員会委員 会員
2019年9月～	日本認知療法・認知行動療法学会　常任編集委員 会員
2019年8月～	一般社団法人　公認心理師の会　理事 委員
2018年12月～	公認心理師の会　設立委員・運営委員 委員
2017年7月～	日本心理学会「心理学ワールド」編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療法学会代議員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療法学会理事 会員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2010年4月～	日本不安症学会評議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	神林　博史	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における動画版／スライド版の同時公開	2021年4月1日～	オンデマンド授業を実施する場合、音声解説つきの授業動画である「動画版」と、音声解説なしでも理解できるよう作成された授業スライドのみの「スライド版」を両方同時に公開し、学生が受講しやすい形態を選択させた。
manabaおよびresponを用いた学生が能動的に参加できる授業運営	2020年4月1日～	・講義系科目において、学生が能動的に授業に参加できるようResponを積極的に利用した。 ・授業で使用したスライドおよび資料をmanabaで公開し、授業後の学修を効率的に行えるようにした。 ・学習内容の確実な定着のための補助となるよう、一部担当科目でmanabaを用いた小テストを実施した。 ・以上3点について、オンライン授業でも対応できるよう工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・教える側の一方通行にならない講義系科目の運営
今年度の進捗状況	manabaおよびその他のオンラインシステムを積極的に利用し、上記課題に取り組んだ。授業時の学生の反応および授業評価アンケートの結果から概ねよい成果が得られたと考えている。
来年度の進捗目標	(1) 今年度の成果と反省点をふまえ、学生が能動的に参加できる授業運営を工夫する。 (2) 学生の能力を多面的かつ正確に把握するための評価方法の検討。 (3) 学生の能力を多面的かつ正確に把握するための授業課題の検討。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Legitimation of Earnings Inequality between Regular and Non-regular Workers: A Comparison of Japan, South Korea, and the United States	共著	2023年6月	International Journal of Comparative Sociology, 64(6)	Arita, S., Nagayoshi, K., Taki, H., Kanbayashi, H., Takenoshita, H., & Yoshida, T.	pp.658-680
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『知っておきたい!統計のオモテとウラ―統計とうまくつき合うために』	単著	2023年8月	大修館書店	神林博史	pp.1-200
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
現代日本における社会的排除感：SSP2022データの分析	共同	2023年10月	第96回日本社会学会大会(立正大学)	神林博史, カローラ・ホメリヒ	
東北地方の自治体における東日本大震災関連社会調査資料の保有状況	共同	2023年7月	第69回東北社会学会大会(東北大学)	神林博史, 三輪哲, 阿部晃士, 小川和孝, 鈴木努, 鈴木伸生	
H. 翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許	
現在の課題・目標	(1)現代日本における格差意識の実態とそのメカニズムの解明 (2)社会経済的不平等の原因としての健康に関する研究
今年度の進捗状況	(1)について、論文(Arita et al. 2023)が海外学術誌に掲載された。また、学会報告(第96回日本社会学会大会)を行った。 (2)について。科研費基盤C(23K01755)を獲得した(2023～2025年度)。研究初年度となる2023年度は、過去の健康状態が社会経済的不平等に与える影響を把握するための予備的調査を実施した。
来年度の進捗目標	(1)現代日本における格差意識の実態とそのメカニズムの解明の推進 (2)社会経済的不平等の原因としての健康に関する研究の推進

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究C(一般)	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金　基盤研究B	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	社会的危機状況下における人びとの意識の変容とその階層差に関する社会学的解明(研究代表:数土直紀)
科学研究費助成事業 科学研究費補助金　基盤研究A	2020年度～2024年度	共同(研究分担者)	「国際調査を通じた報酬格差の受容・正当化メカニズムの比較社会学研究」(研究代表:有田伸)
科学研究費助成事業 科学研究費補助金　基盤研究A	2019年度～2024年度	共同(研究分担者)	「階層意識全国調査の時系列データの収集と標本抽出WEB調査法の確立」(研究代表:吉川徹)

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2010年12月～	American Sociological Association 会員
2005年4月～	International Sociological Association 会員
1998年4月～	日本社会学会 会員
1998年4月～	数理社会学会 会員
1995年7月～	東北社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

大学院情報科学研究科専攻主任として、研究科の諸業務を行った。

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	坂本　譲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解の促進（コメントペーパーの利用）	2015年4月～	毎回の授業終了時に指定した内容に対する小レポート及び質問・感想を書かせ提出させることで，授業の要点を受講者自身に確認させた．
授業内容理解の促進（プレゼンテーションソフトの利用と資料配付）	2015年4月～	授業内容をプレゼンテーションソフトで提示すると共に同様のものを資料として配付し，各自復習できるように配慮した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 東北大学加齢医学研究所共同利用・共同研究助成	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年2月～	東北体育・スポーツ学会 監査
2017年4月～	東北体育・スポーツ学会 会員
2013年6月～	European College of Sport Science 会員
2012年6月～	日本発育発達学会 会員

2010年9月～	日本運動免疫学研究会 運営委員
2009年4月～	日本学校保健学会 会員
2009年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会 会員
2005年7月～	日本分子生物学会 会員
2002年9月～	日本運動免疫学研究会 会員
2001年7月～	日本公衆衛生学会 会員
2001年2月～	International Society of Exercise and Immunology 会員
2000年1月～	日本免疫学会 会員
1997年10月～	日本体力医学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	櫻井　研三	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
三種の心理物理学的測定法でみる精度と確度 (http://psyche.mind.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/index.html)	2020年4月1日～	コロナ禍での遠隔授業に対応できるよう，従来の心理物理学的測定法学習サイトをHTML5に対応させ，スマートフォンやタブレット等の携帯情報端末でも利用できるように調整して，バージョンアップを継続中。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（A）一般	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年3月～	日本心理学会代議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	宍戸　隆之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
Google Form振り返りカード	2020年5月7日～	2020年度のオンライン授業における学生の授業後の振り返りカードとして、Google Formを活用して授業時間の振り返りと課題の提出を実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、特に、後期からの対面授業においても、教員と学生相互のソーシャルディスタンスを保つために、プリントアウトした配布物を極力減らし、接触する機会を減らした。スートフォンやPCを授業に持参させ、対面授業であってもオンラインでの課題提出ができる教材を提供している。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本学校改善学会 会員
2018年～	日本CLIL教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	仙田　幸子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT利用による自主学習の促進	2023年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2023年度～	個別(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2023年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～	International Journal of Sociology and Anthropology reviewer

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	高橋　信二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
生理的・心理的状態および認知機能の級内相関係数	単独	2023年9月	日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会(京都（同志社大学）)	高橋信二	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年～	日本体育測定評価学会理事 会員
2010年～	European College of Sport Science学会員 会員
2001年～	American College of Sports Medicine学会員 会員
1999年～	日本体育学会学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	萩原　俊彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
本学「授業改善のための学生アンケート」実施委員会が実施する「授業改善のための学生アンケート」	2020年4月1日～	2020年度前期・後期授業アンケート結果（5点満点中）： 心理学基礎論A（総合評価）4.5 発達心理学（総合評価）4.3 教育心理学（総合評価）4.2 心理学（総合評価）4.6 心理学実験実習B（総合評価・複数教員担当）4.6 人間科学演習A・B（総合評価）4.6（A），4.9（B）
manabaのresponやGoogleフォームを用いた学生コメントの共有と実験結果の即時提示	2020年4月1日～	無料で大小様々のアンケートフォームをつくり、インターネットを介して回答してもらうmanabaのresponやGoogleフォームを用いて、心理学の簡単な実験や意見調査を実施し、授業で直ちに結果をフィードバックした。学生は自分たちが参加した心理学実験や意識調査の結果をすぐ知ることができ、教授事項への関心を高めることができた。
心理学の研究技法を効果的に習得させるために，自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。	2020年4月1日～	2年生向けの心理学に関する実験実習授業において，担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い，心理学各領域の代表的，基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後，学生が提出したレポートについて，予め公開してある基準に従って丁寧に添削し，コメントをつけて返却する。学生には，修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。
授業内容に関連する視聴覚資料の提示	2020年4月1日～	インターネットを活用し，過去の著名な心理学実験や視聴覚資料を提示した。視聴覚資料を用いることで，心理学の知見が過去の研究の蓄積によって構成されていることを実感させるようにした。
PowerPointアニメーションを活用した解説	2020年4月1日～	初学者にはイメージしにくい心理学の諸概念について，図表に加えアニメーションを用いて解説した。これによって，抽象的な心理学概念を視覚的にイメージしやすくし，理解を助けるようにした。
学期終了前の講義総覧	2020年4月1日～	試験前にこれまでの講義内容を総覧することで，授業が共通するいくつかの視点によって構成されていることを再確認させ，学習への動機づけを高めるようにした。また，一定の枠を設けたまとめを行うアドバイスにより，学生の要約力を高めるようにした。
学生コメントの活用	2020年4月1日～	毎講義時に学生の質問や，授業進行に関するコメントを記入させた。記入内容についてのフィードバックを次回講義時に行い，授業規模にかかわらず受講生と講師の双方向コミュニケーションができるよう配慮した。
ワークの実施（個人・全体）	2020年4月1日～	授業で取り扱った事項について，自分の場合はどうだったか，受講生が自己省察を行うための短時間のワークを講義時間内に実施した。これによって講義内容への受講者の自我関与を高めるようにした。また，ワークの結果を少人数グループやクラス全体で共有することにより，受講生が他者の経験を理解・受容する機会を提供した。なお，プライバシーには最大限配慮し，発言の自由とともに秘匿の自由を保証した。
初回講義における履修契約	2020年4月1日～	授業の最初に授業計画とともに，講義時間中に受講生が遵守すべきルールを提示した。これによって，受講生が講義時間内に守るべきルールを自覚できるようにした。
実証的・批判的検討を経た科学的知見の教授と問題解決能力の育成	2020年4月1日～	実証的・批判的検討を経た科学的知見について、基礎的教養から専門的知見までを教授した。これによって，学生が大学入学までに形成してきた既成概念へのとらわれに自ら気付き，データに基づいた客観的な分析・考察によって，現実の問題を把握し，その解決法を構想し実現できるよう指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
心理実験実習・心理学実験実習Bにおける実験でのマニュアル・プリント類の作成・配布	2020年4月1日～	心理学各領域の代表的，基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させるために，担当教員の綿密な打ち合わせの上でマニュアルを作成し，配布している。

授業内容のレジュメ資料を毎回配布	2020年4月1日～	1回の講義で解説する事項を示した自作のレジュメ資料を配布することで，受講生が講義内容の全体像をつかめるようにした。

3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4．その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	①学習支援システムのより高度な活用を目指す。対面授業効率化のための学習支援システム活用について検討する。 ②実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。 ③現状で使用しているルーブリックを活用しながら改善点を検討していく。
今年度の進捗状況	①については一部を除き全面的に対面授業になったため、実験動画やアプリケーションの説明動画などは対面授業の学修をより深めるため活用することを試みた。授業時間後も繰り返し視聴できるということで好評であった。 ②については授業の課題などにも活用し教材への取り入れが進んだ。 ③については実習授業で現状のレポート様式と齟齬が生じたため、様式に合うようルーブリックの改変を行った。 目標①～③について、以上のような進捗があった。
来年度の進捗目標	①学習支援システムのより高度な活用を目指す。対面授業効率化のための学習支援システム活用について更に検討する。 ②引き続き実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。 ③特に実習授業が新学科での開講となり状況が変わるので、これまでのルーブリックを活用しながら改善点を検討していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①他機関の研究者と科研の研究課題（「高専教育におけるキャリア教育による内発的動機付けと学ぶ力への効果検証」（基盤研究(C)一般・科研費研究課題番号：22K02879・研究分担者）に取り組む。 ②①の研究進捗状況について年1回以上学会発表する。 ③①の研究に関連するキャリア研究資料を収集し、共著での論文投稿を目指す。
今年度の進捗状況	①についてはZoomで研究打ち合わせを行ったが、報告者を含めメンバー間の予定調整が難しく、昨年度より回数は少なくなった。 ②については①の影響もあり、学会発表を見送ることとなった。 ③についても同様であり、論文投稿には至らなかった。 目標①～③について、以上のような進捗があった。
来年度の進捗目標	①他機関の共同研究者と科研の研究課題（「高専教育におけるキャリア教育による内発的動機付けと学ぶ力への効果検証」（基盤研究(C)一般・科研費研究課題番号：22K02879・研究分担者）に引き続き取り組む。 ②引き続き、①の研究進捗状況について年1回以上学会発表する。 ③今年度の研究成果と問題点を踏まえ、①の研究に関連するキャリア研究資料を収集し、共著での論文投稿を目指す。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)一般	2022年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～2024年12月	日本キャリア教育学会 監事
2017年12月～	日本キャリアデザイン学会会員 会員
2010年6月～	日本キャリア教育学会会員 会員
2005年11月～	日本教育心理学会会員 会員
2005年1月～	日本心理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	平野　幹雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生からの授業評価(全教科)	2020年4月～	第一回の講義開始時に講義への要望について調査し講義内容に反映するよう努力している。加えて、講義内容についての感想や要望をマナバの「レポート」に毎回書いてもらい、その代表的なもののいくつかを次回講義の開始時にコメントバックしている。
授業における興味関心の喚起(講義形式の授業)	2020年4月～	今日的課題を取り上げている視聴覚教材・パワーポイントをできるだけ多く提供し、視聴の観点を示してそこから掘り下げて問題を整理するよう指導している。また、タブレット端末の手書き機能を積極的に活用し、手書きで概念図等を作成して理解しやすいに工夫をしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
海外の資料の訳出	2019年4月～	National Institute of Mental Healthが編集している自閉症スペクトラム障害のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)
海外の資料の訳出	2018年4月2日～	National Dissemination Center for Children with Disabilitiesのwebpageに所収されている障害類型別のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
知的障害児・者における特別支援学校高等部卒業前後の友人関係の変化に関する研究	共同	2023年8月	日本特殊教育学会第61回大会(横浜国立大学)	佐々木健太郎・平野幹雄・野口和人	
保育における支援者支援の意義と展開．東北心理学会第76回大会公開シンポジウム「子どもの育ちの援助者を支える：保育・療育者支援の観点と方法(企画：小林智・本間恵美子)	共同	2023年7月	東北心理学会第76回大会(新潟青陵大学)	平野幹雄	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2018年～		宮城県社会福祉協議会宮城いきいき学園講師 講師	
2011年～		日本発達心理学会 会員	
2007年～		日本発達障害学会 会員	
2002年～		アメリカ心理学会 会員	
1996年～		日本心理学会 会員	
1995年～		日本特殊教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	福野　光輝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習活動における統計分析に関する学修メニューの提供	2022年～	統計分析スキルを少しでも養うため、毎回の演習活動時の一部の時間を当てて、統計分析教育を行っている。
LMS manaba による配布資料の配信	2017年～	授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。
授業ウェブによる配布資料の配信	2016年～	授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。
ミニットペーパーのオンライン収集	2016年～	講義形式の授業において、Google フォームを利用したミニットペーパーを実施し、すべての回答と質問への返答をまとめた資料を毎回配布している。
学生による予習課題評価	2016年～	演習の最後に、予習課題の用紙を演習参加者にランダムに配布し、学生自身が他人の予習課題の内容にコメントを書き込ませる。同じ文献を読んでも多様な観点からの読みが可能であることを気づかせるとともに、学生自身にコメントを書かせることで、文献の読み方を考えさせる（その後、予習課題を回収し、教員が再度コメントをつけて返却している）。
演習における予習の可視化	2016年～	演習参加者全員が文献の該当箇所を事前に読み、要約と疑問点、意見を書いた短いレポートを予習課題として毎回提出する。これにより、予習を可視化するとともに、読む力、書く力、考える力の基礎を身につけさせる。
演習におけるグループ議論	2016年～	予習課題をもとに、小グループに分かれ、自分なりの読みや疑問点を他者と共有しながら、文献に対する批判的検討を行う。グループ議論を導入することで、全員が学び、また発言することになるため、演習でありがちな報告者と教員のみの禅問答状態を回避できる。
メッセージングアプリ Slack を利用した演習活動	2016年～	演習における研究活動を補助するために、2016年度後期から、ビジネス向けチャットツール Slack を導入している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
公認心理師大学院科目「心理実践実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整	2021年～	「心理実践実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。
公認心理師学部科目「心理実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整	2019年～	「心理実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。

現在の課題・目標	(1) 講義科目における授業評価の総合評価点で4.70以上を目指す。 (2) 演習における学生の研究リテラシーの向上
今年度の進捗状況	(1) については、すべての講義科目において、毎回の授業前に内容の見直しを行い、スライドをつくりかえたり、新しい研究結果を紹介するようにしている。心理行動科学科の「心理学概論」の授業評価の総合評価点は4.830、人間科学科の「社会・集団・家族心理学」で4.500であった。 (2) 予習活動やグループ議論の導入により、ある程度改善したように思う。また、2017年度よりゼミ研究をグループではなく個人単位にしている。そのことによって各自の研究活動への動機づけも高まり、研究リテラシーの向上にもつながっていると思う。さらに、2022年度から引き続き今年度も、演習活動の一部として、データ分析スキルの向上を目指して統計ソフトの使用法についても指導を始めた。
来年度の進捗目標	(1)「心理学概論」および「社会・集団・家族心理学」における授業評価の総合評価点で4.70以上を目指す。 (2) 演習における学生の研究リテラシーの向上

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
幸福感と悲哀感が独裁者ゲームの分け手の行動に与える効果	共同	2023年11月	北海道心理学会第70回大会(札幌学院大学新札幌キャンパス)	◎福野光輝, 小林尚樹	
日本の若者はなぜ「他人の迷惑にならなければ何をしようと個人の自由だ」と思わないのか	単独	2023年9月	日本心理学会第87回大会（2023年9月15日～17日）(神戸国際会議場・神戸国際展示場)	福野光輝	
Go/No-Go課題が敵意帰属バイアスに及ぼす影響	共同	2023年9月	日本心理学会第87回大会（2023年9月15日～17日）(神戸国際会議場・神戸国際展示場)	◎笠間 葵, 福野光輝	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	（1）科研費の申請を必ず行う。 （2）研究スキルの向上を目指す。 （2）学生と行った対人葛藤に関する研究を学会で発表し、論文化を進める。				
今年度の進捗状況	（1）については、かなわなかった。 （2）生成AIを用いた研究実践、文献管理、オンライン調査時の留意点、オンライン実験課題作成のためのlab.jsの使用など、最近の研究活動に不可欠となっているスキル獲得のため、いくつかのオンラインセミナーに参加したり、人間科学研究所の公開講演会として自ら企画したりした。 （3）については、国内学会で3件の学会発表を行った。そのうち1件は、今年度本学大学院修士課程に進学した本演習卒業生との共同研究であった。ただし、論文化の作業は進まなかった。				
来年度の進捗目標	（1）科研費の申請を必ず行う。 （2）研究スキルの向上を目指す。 （2）学生と行った対人葛藤に関する研究を学会で発表し、論文化を進める。				

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 人間科学部学部長（2023年4月1日～）			

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	天野　和彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向授業の実現、地域社会との共創	2023年4月1日～2024年3月31日	manabaを活用し、講義を双方化するべく努力した 地域の企業と連携し、学生にフィールドワークによる学習環境の整備、報告書作成による協働、発表会(学外）による広報（認知度向上）を行った
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	人間の行動（特に社会のなかで）を分析・理解が出来る学生を涵養すべく、双方向と実践を担保した講義・演習を行うべく心がけている
今年度の進捗状況	演習生は、地域で自らの課題を発見し、分析し、それらを学外にて報告することを実現、それらをサポートした
来年度の進捗目標	より多様な地元企業・組織との共創にむけて、足掛かりを作成したい

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	「愛校心」の探求、地域スポーツ環境の変化の分析
今年度の進捗状況	幾つかの市町村でフィールドワークを行った 先進事例（岡山）を調査した
来年度の進捗目標	上記をより進める 「愛校心」の縦断的な調査を行う

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月	International Journal of Sport and Health Science editor
2023年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会　政策検討・諮問委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	指導する硬式テニス部の女子部員が少なく活動が成立するのが困難になっている（東北の大学は概ねそうなってしまっている）

今年度の進捗状況	男子1部優勝（全日本大学対抗王座決定戦出場） 男女、東北学生テニス選手権優勝
来年度の進捗目標	女子部員の拡充 男女ともに東北上位、全国出場
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	井川純一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生授業評価及び教員相互評価	2015年4月1日～	各期末に学生授業評価を施行している。授業の分かりやすさ，質問への対応等の10の質問項目からなる授業評価であり，過去担当した全ての科目において5段階評定の4以上を継続している。 また，学内のFD研修の一貫として行われている教員の相互評価においても常に高い評価を得ている。
マルチメディア機器の活用	2015年4月～	講義は座学と演習，実習形式の内容をバランスよく配置し，manaba，Moodleの利用などマルチメディア機器を使用した講義を展開している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	現代の教育における主要な課題の1つは、個々の学生の多様性への適応である。異なる学習スタイルやニーズを理解し、それに応じて教育プログラムを提供することが求められている。現在担当している講義について、包括的な教育環境を構築し、すべての学生が成功できるよう支援するため、ManabaやResponなどのITツールを利用し、学生とのコミュニケーションを強化を目指す。
今年度の進捗状況	ManabaやResponなどのITツールを積極的に活用し、学生とのコミュニケーションを強化する取り組みを進めている。オンライン講義では、Manabaを使用して教材や課題を提供し、学生の学習進捗を把握、Responを活用して定期的なフィードバックや質問への迅速な対応を行っている。さらに、対面講義においても教材の多様化やグループワークの導入など、異なる学生のニーズに応じた教育プログラムの提供にも取り組んでいる。包括的な教育環境を構築し、すべての学生を支援する目標に向けて着実に進展している。
来年度の進捗目標	来年度は、教育プログラムの多様性を拡大し、個々の学生のニーズにより適した学習環境を提供することを目指す。本年度と同様に、ManabaやResponなどのITツールを更に効果的に活用し、オンラインや対面の授業での双方向性を強化する。また、対面講義においても教材のアクセシビリティを向上させ、異なる学習スタイルに対応できるよう配慮し、学生とのコミュニケーションを密にし、フィードバックを通じて個々の成長をサポートする体制を強化する。これにより、包括的な教育環境をさらに充実させ、すべての学生が自己実現を果たせるよう取り組む。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	現在のメインの研究テーマは、バーンアウトやネット上のコミュニケーションに関する研究である。前者については典型的バーンアウトの定義やそれらに対する介入ツールを開発すること、後者についてはコメント機能の社会的影響に関連した実験的検討を行なっている。
今年度の進捗状況	学外の助成金を複数受託し、研究を継続している。アジア社会心理学会、日本心理学会、パーソナリティ心理学会、日本社会心理学会国内外の学会に参加し、学術論文を公刊している。

来年度の進捗目標	研究計画にそって引き続き研究活動を継続する。国際応用心理学会、日本心理学会、パーソナリティ心理学会、日本社会心理学会等で成果を発表する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2024年度		人口減少社会の今後の到来に伴い、財政難に直面する多くの地方公共団体では、現在の公共サービスの水準を維持できず、市民生活にも大きな支障が生じることが予想される。従来から我が国では、この課題に対する有効な地域政策として「自治体の連携と集約」がとられてきた。しかし、国内外の分析結果を見ると両者の効果に必ずしも肯定的でない。この要因は実施する分野や形態で異なるその効果を、総括的に分析しているためと推測する。そこで、本研究では自治体の連携と集約が公共サービスの供給費用と品質に及ぼす効果を分野別と形態別に分析して、持続可能で住民も満足できるそのあり方を効果的な分野と形態を中心に明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会 国際交流企画班・大会外企画班
2017年4月～	九州心理学会 会員
2017年4月～	パーソナリティ心理学会 会員
2015年4月～	セルフヘルプ宝町第三者委員 運営参加・支援
2011年4月～	産業・組織心理学会 会員
2009年4月～	中四国心理学会 会員
2009年4月～	日本心理学会 会員
2009年4月～	社会心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教養学部の教務委員、総務委員に加え、心理行動学科においても複数の委員を兼任している。本年度も継続して学内における管理運営業務に関わる。

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	岡﨑　勘造	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県小児肥満対策マニュアルの作成	2021年～	宮城県小児科医会による「宮城県小児肥満対策マニュアル」の作成コアメンバーとして活動している。本マニュアルは、宮城県内の幼稚園を含む学校に配布予定である。宮城県は肥満児が多い県であり、このマニュアルは、子どもの肥満を予防・改善するための一助となるよう学校、一次医療機関（校医）に活用してもらえるマニュアルである。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
高校生の3軸加速度計による睡眠習慣と体力との関連	共同	2023年9月	日本睡眠学会第45回定期学術州会(横浜)	岡﨑 勘造, 小山 雄三	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年12月～	仙台市スポーツ推進審議会 副会長
2020年～	仙台市スポーツ推進計画（2022-2031の施策）検討委員会 委員
2020年～	宮城県小児科医会「宮城県小児肥満対策マニュアル」作成委員会コアメンバー委員

2019年12月～	仙台市スポーツ推進計画検討委員 委員
2018年～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2014年8月～	教育事業 肥満傾向にある子どものための生活習慣向上長期キャンプ 「カラダにeイイキャンプ」(独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家)の講師として参加 委員
2012年1月～	日本発育発達学会 会員
2012年～	International Society for Physical Activity and Health 会員
2011年6月～	東北大学バスケットボール連盟 理事
2011年1月～	日本スポーツ産業学会 会員
2011年～	European College of Sport Science 会員
2010年5月～	日本公衆衛生学会 会員
2009年6月～	日本ウォーキング学会 会員
2008年7月～	日本教育工学会 会員
2006年8月～	日本体育学会 会員
2006年6月～	日本体力医学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
東北大学バスケットボールリーグ　1次リーグ(男子)	東北学院大学	2015年9月～2215年9月	2位

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	東海林　渉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・双方向型授業の実践・アクティブラーニングの積極的活用	2019年4月1日～	健康の科学，心理学，健康心理学，公認心理師の職責の授業において，知識教授型の講義に加えて，授業内でICTシステム（manaba，Respon）を使用した双方向型授業を行い，学生の積極的な授業参加を促す工夫を試みた。また，授業後に資料をシステム上にアップロードし，学生が復習しやすい学習環境の整備に努めた。さらに授業内ではミニディスカッション等を取り入れたり，視聴覚教材を活用して意見交換できるようにするなどアクティブラーニングに相当する活動を頻繁に行い，学生が自らの知識と理解を用いて考える授業を試みた。加えて，授業ではICTシステムを活用して聴取した感想や疑問等について，毎回冒頭で紹介しフィードバックを与えるようにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
・授業スライド教材，配布教材の作成・視聴覚補助教材の研究と利用・独自の体験型教材の考案と作成	2019年4月1日～	担当した各授業の内容に合わせてスライドおよび学生用のレジュメを作成した。レジュメは学生のレベルに合わせて目標とする学習が適切に進むように情報量を調整した。さらに、適宜、授業内容の理解が促進されるよう映画や動画などの視聴覚教材を各授業の補助教材として導入した。また、独自に体現型の教材（ワーク，エクササイズ）を考案し、学生に教材を用いて諸現象を実体験してもらうことを通して学習の補助とした。ゼミでは、学生が著作権を意識しながら授業レポートを適切かつ効率的に執筆できるよう、レポート作成の手引きを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年11月～		日本心理学会 認定心理士資格認定委員	
2021年8月～		日本心理学会『心理学ワールド』 編集委員	
2019年9月～		日本認知療法・行動療法学会 非常任編集委員（編集委員会）	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	吉田　雄大	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT（manaba, respon, Google各種機能等）を活用した双方向性を意識した授業	2020年～	学修支援システムである、manaba、respon、Google各種機能などを活用した授業を行うことができた。オンタイム授業では質問用responやチャット機能などを用いて、可能な限りリアルタイムに回答することを試みた。また、授業後にも感想および質問をresponで受付け、次回の授業で回答することを試みた。今年度はオンライン授業がメインの年度であったが、学生の協力もあり滞りなく授業を実施することができた。オンラインで実施した授業評価の総合評価は全て4を超えていたため、学生の満足度も比較的高かったと考えられる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	座学および実技、両方の授業において、一方的な授業にならないように心がけている。座学でも簡単な実技や実習など、アクティブラーニングの要素も取り入れるよう努力している。学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。オンライン授業では、学生の不利益が極力ないように心がける。
今年度の進捗状況	毎回の授業の感想から、responでの質問ならびに回答については好意的な評価を受けているため効果があったと考えている。
来年度の進捗目標	専門実技など、新カリキュラムでの運営となるので、円滑に運営できるように十分に準備を行う。オンライン授業、対面授業問わずICT教材などを活用して、学生の理解を深める努力をする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
投球動作における機械学習を用いた技能評価の試み	共同	2024年2月	日本体育測定評価学会 第23回大会(福井工業大学)	◎吉田雄大, 相原伸平	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	機械学習を用いたスポーツの技能評価に関する研究を行っている。
今年度の進捗状況	進捗を学会で発表することができた。
来年度の進捗目標	スポーツ技能の評価に関する文献研究および調査を行う。ラグビーの競技パフォーマンスに関する研究も次年度から始めたいと考えている。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 研究活動スタート支援	2018年度～2022年度	個別(研究代表者)	体育・スポーツの現場では運動技能の評価が行われている．運動技能評価は専門的な知識や熟練した経験を要するケースがあり，十分な知識や経験を持つ人材が確保できない場合は運動技能評価が難しい．この課題の解決に機械学習が利用できると考えられ，専門家なしでも客観的かつ信頼性の高い評価が実現できる可能性がある．本研究では，基礎運動能力の中でも技能的要素が比較的大きいと考えられる投動作を題材として，機械学習を用いて投技能を評価できる手法を開発することを目的とする．投動作中の慣性センサデータや画像データを，動作の評価を伴った教師データとして学習させ判別機を作成し判別精度の検証を行う．

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	宮城県ラグビーフットボール協会 女子委員会委員・コーチ

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	体育会ラグビー部監督として、東北北海道地区優勝、大学選手権出場を目指す。		
今年度の進捗状況	東北リーグで3位となってしまい、目標を達成することができなかった。		
来年度の進捗目標	体育会ラグビー部監督として、東北北海道地区優勝、大学選手権出場を目指す。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1．学生委員
2．第64,65期執行委員（副執行委員長）
3．体育科目コーディネーター
4．学科パンフレット編集委員

2023年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	講師	氏名	臼倉　瞳	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	日常・社会生活に生かすことのできる知識を授業の中で扱う	
今年度の進捗状況	受講生の感想や授業アンケートから、自身の経験や体験になぞらえて学習内容を理解することができている様子がうかがえた。	
来年度の進捗目標	日常・社会生活に生かすことのできる知識を授業の中で扱うとともに、より分かりやすく、受講生の興味関心が広がるような工夫を行う	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Comprehensive evaluation of machine learning algorithms for predicting sleep-wake conditions and differentiating between the wake conditions before and after sleep during pregnancy based on heart rate variability	共著	2023年6月	Frontiers in Psychiatry, 14	Li X, Ono C, Warita N, Shoji T, Nakagawa T, Usukura H, Yu Z, Takahashi Y, Ichiji K, Sugita N, Kobayashi N, Kikuchi S, Kimura R, Hamaie Y, Hino M, Kunii Y, Murakami K, Ishikuro M, Obara T, Nakamura T, Nagami F, Takai T, Ogishima S, Sugawara J, Hoshiai T, Saito M, Tamiya G, Fuse N, Fujii S, Nakayama M, Kuriyama S, Yamamoto M, Yaegashi N, Homma N and Tomita H	pp.1104222
Mental Health Problems among University Students under the Prolonged COVID-19 Pandemic in Japan: A Repeated Cross-Sectional Survey	共著	2023年5月	The Tohoku journal of experimental medicine, 260(1)	Moe Seto, Hitomi Usukura, Yasuto Kunii, Yumiko Hamaie, Eiichi N Kodama, Yuko Makino, Yoshitaka Kinouchi, Chihiro Ito, Tadayoshi Ikeda, Hiroaki Tomita	pp.1-11
10年間のコホート調査に基づく東日本大震災被災者における心理的苦痛の経年変化	共著	2023年4月	精神神経学雑誌, 125(4)	臼倉 瞳, 内海 裕介, 瀬戸 萌, 佐久間 篤, 菅原 由美, 國井 泰人, 中谷 直樹, 寶澤 篤, 辻 一郎, 富田 博秋	pp.266-274
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

感情制御における柔軟性に関する研究の動向と今後の展望	単著	2023年9月	東北学院大学教養学部論集, 193	臼倉瞳	pp.35-50

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

情動の柔軟性に関する探索的検討	単独	2023年9月	日本心理学会第87回大会(神戸)	臼倉瞳	
（経常的研究交流委員会企画シンポジウム「回復に向かう心」）災害が心の健康に及ぼす影響とその回復：被災者と支援者双方の視点で	単独	2023年9月	日本パーソナリティ心理学会第32回大会(金沢)	臼倉瞳	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	科研費研究について倫理申請を通し、アンケート調査を1回実施する。
今年度の進捗状況	倫理申請を通し、年度内にアンケート調査を実施した。成果の一部は学会発表や論文化も行った。
来年度の進捗目標	科研費研究について、縦断調査の実施に着手する

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度		トラウマ体験後も心の健康を維持し、社会適応を実現するために役立つ能力として「情動の柔軟性」（状況に応じて感情を表現したり抑制したりする能力）に着目し、18歳以上を対象に、(1) 情動の柔軟性尺度の日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討した上で、(2) 様々な心理社会的適応との関連メカニズムを解明するとともに、(3) 4時点の縦断データに基づき、情動の柔軟性がトラウマ体験後の心の健康の変化パターンに及ぼす影響を検討する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	特に取り組んでいる課題はない		
今年度の進捗状況	特に取り組んでいる課題はない		
来年度の進捗目標	特に取り組んでいる課題はない		

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

なし

教員業務・活動報告

国　際　学　部

国 際 教 養 学 科

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	アンドリューズ　デール	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
個別指導の実施（英語）	2023年9月1日～2024年1月29日	
2022年度東北学院大学教育功績優秀教員受賞	2023年7月6日	
国際学部（新設学部）の国際学概説の講義を用意・実施	2023年4月1日～	
responアプリを使用	2022年4月1日～	授業中に履修者の出席・欠席を計るために、responアプリを使用する。
対面授業への対応	2022年4月1日～	新型コロナウイルス感染症対策の中にすべての授業開講して、アクティブラーニングの授業に工夫したり、感染による欠席した学生のために対応をしたりする。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義に配布する資料の作成	2011年～	パワーポイントに基づいた資料を作成して、受講生に配布することとなっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
個人ホームページの利用	2019年～	学生のため、個人ホームページにクラス・スケジュールや授業の解説などを公開している。

現在の課題・目標	① 対面授業への対応。 ② コロナ過の中で学生にケアする。 ③ 新キャンパスの教室・設備のための対応、授業のやり方を見直す。
今年度の進捗状況	上記目標①については，新しい教材を作成、配布資料を用意する。 上記目標②については，学生の多数の欠席に対応する。 上記目標③については，キャンパスの移転により、教授する環境が変わり、設備を対応するために授業の実施を見直す。
来年度の進捗目標	上記目標①については，対面授業での教授を維持する。 上記目標②については，来年度、通常の出欠を確認する。 上記目標③については，新キャンパスの教室・設備の使い方を見直す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	① 他の専門領域の研究者との交流を進める ② 新しい研究課題に挑戦する。 ③ 過去の調査資料を整理して、論文を書く。

今年度の進捗状況	上記目標①については，ポピュラーカルチャーと巡礼の接点というテーマで、国外の研究者グループが刊行する論集にアニメのファンの美学について論文を書き、投稿した。 上記目標②については，厠神信仰という新しいテーマで、調査を実施する。 上記目標③については、過去に調べた絵馬奉納のデータを分析、論文を書いている。
来年度の進捗目標	上記目標①については，来年度、発表をしたり、論文を書いたりする計画を立てる。 上記目標②については，来年度、研究調査を実施する。 上記目標③については，過去の調査データを整理したり、論文を積極的に投稿する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本デジタルゲーム学会 (DiGRA JAPAN) 会員
2021年6月～	印度学宗教学 常任理事
2017年10月～	日本宗教民俗学会 会員
2016年6月～	日本民具学会 会員
2016年6月～	現代民俗学会会員 会員
2013年9月～	日本宗教学会 評議員
2012年6月～	印度学宗教学 理事
2012年6月～2024年6月	東北民俗の会 常任委員
2010年4月～	日本民俗学会 会員
2009年11月～	Anthropology of Japan in Japan 会員
2008年7月～	American Anthropological Society 会員
2008年6月～	印度学宗教学 評議員
2007年3月～	The American Folklore Society Lifetime Member
2006年3月～	The American Folklore Society 会員
2005年3月～	国際宗教学宗教史学会 会員
2002年3月～	青森県民俗の会 会員
1999年4月～	東北民俗の会 会員
1998年6月～	日本宗教学会 会員
1998年4月～	印度学宗教学 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

①東北文化研究所の所員（2023年4月1日～現在）
②東北学院大学人間情報学研究所の研究員
③推薦・AO A・帰国生特別入学試験実施委員
④敬和会幹事（2023年4月1日～現在）
⑤インターネット広報管理運営委員会委員（2023年4月1日～現在）
⑥学校法人東北学院ブランドデザインプロジェクトワークショップ参加者
⑦国際教養学科のオプーンキャンパスに参加
⑧言語文化学科のDX推進委員会委員
⑨際教養学科のDX推進委員会委員

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	郭　基煥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
コンヴィヴィアリティの喪失と惨めな笑劇――原発事故処理水放出をめぐる社会的プロセス	単著	2024年3月	東北学院大学, 被災学(1)	郭　基煥	pp.117-128
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
災害時の外国人犯罪神話――選民意識とパニック	単著	2024年3月	東北学院大学, 被災学(1)	郭　基煥	pp.31-42
災害と外国人犯罪流言――関東大震災から東日本大震災まで『災害と外国人犯罪流言――関東大震災から東日本大震災まで』	単著	2023年9月	松籟社	郭基煥	pp.1-400
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年3月～2024年3月	日本解放社会学 編集委員長
2009年～	日本社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	佐々木　郁子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
課題探究演習Bにおけるマイナビ課題探究プロジェクトの導入	2023年～	課題探究演習Bで、課題探究プロジェクトを実施。学生たちがチームを組み、企業が求める新規事業や新領域でのビジネスについての企画書作成とプレゼンを行う。マイナビ課題探究プロジェクトと連動して行うため、優秀なチームは全国大会へ出場する機会がある。
2023年度教育功績等優秀教員	2023年	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
アスリートの食事の重要性ー硬式野球部と宮城学院女子大学との共同プロジェクト	2021年～	宮城学院女子大学の協力を得て，アスリートにとって食が重要性であることを意識づける取り組みをおこなっている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
危機時におけるマネジメント・コントロール―新型コロナウイルス感染症禍におけるオムロン株式会社へのインタビュー調査をもとに―	共著	2024年3月	日本管理会計研究学会，管理会計学，32(1)	吉田政之，打田昌輝，佐々木郁子，三矢 裕	pp.1-14
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
新型コロナウイルス感染症パンデミックの経営実践・経営学・経営学教育への影響	共著	2023年9月	日本学術会議経営学委員会新型コロナ感染症による経営実践・経営学・経営学教育への影響を検討する分科会　記録	原 拓志、上林 憲雄、髙田 知実、上野 恭裕、瓜生原 葉子、小津 稚加子、佐々木 郁子、清水 聰、谷口 勇仁、徳賀 芳弘、開本 浩矢	pp.1-8
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

「管理会計の理論と実践を架橋する臨床知に関する研究」(中間報告)	共同	2023年9月	日本会計研究学会第82回全国大会(大阪(大阪公立大学))	◎澤邉 紀生、庄司 豊、青木 章通、尻無濱 芳崇、浅田 拓史、新改 敬英、足立 洋、セルメス鈴木 寛之、飯塚 隼光、飛田 努、市原 勇一、藤野 雅史、岡田 幸彦、丸田 起大、木村 麻子、目時 壮浩、黒木 淳、横田 絵理、佐々木 郁子、吉川 晃史、篠田 朝也、李 燕、篠原 巨司馬	
サブスクリプションビジネスのモデル化とその評価に関する研究	共同	2023年8月	日本管理会計研究学会2023年度年次大会(仙台(東北工業大学))	◎青木章通, 宮崎琢磨,谷守正行, 高橋邦丸, 佐々木郁子, 岩田弘尚, 松岡孝介	
クライシス時のマネジメント・コントロール:コロナ禍で管理会計はどのような役割を果たしたのか	共同	2023年8月	日本管理会計学会2023年度年次全国大会(仙台(東北工業大学))	三矢裕, 打田昌輝, 窪田祐一, 佐久間智広, 佐々木郁子, 劉美玲	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費・基盤研究(C)	2018年度～2024年度	個別(研究代表者)	「原価および収益の構造と顧客関係性の変容に関する研究」(代表)

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～2026年3月	日本管理会計研究学会 理事
2023年～2024年	宮城県第二総合運動場懇話会 座長
2020年10月～2026年9月	日本学術会議連携会員 委員
2019年6月～	日本経営会計専門家研究学会
2018年9月～	日本原価計算研究学会 会員
2014年～	公益財団法人仙台市産業振興事業団非常勤理事 委員
1998年4月～	日本管理会計研究学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	古川　弘子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業で扱うテーマについての理解を深める工夫	2023年4月～2024年3月	「学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり共有したりする工夫」でも触れたが、受講生の関心を探り、それに寄り添った授業内容を提供したり、理論的な事柄を説明する際には学生がイメージしやすい具体的な事例を数多く紹介したりしている。また、配布資料に加えて映画やYouTubeなどの動画、外部ウェブサイトなども活用することで、視聴覚的にも理解を促進させる工夫を行っている。さらに、マナバの「レスポン」機能を使って授業中にグループワークの成果を共有したり、それを見ながら発表してもらったりすることで、受講生の理解度が進んだだけではなく、受講生の主体性が高まる非常に大きな効果も見られた。
学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり共有したりする工夫	2023年4月～2024年3月	毎回の授業後に、受講生にはマナバの「アンケート」機能を使って授業中に考えたこと、疑問、感想や要望を送ってもらい、次の授業の最初に他の受講生と共有している。この活動は受講生が授業を通して考えたことを整理し、言語化する力を養う効果があった。そして、疑問や質問にはその都度、回答をしたり、関連情報を提供して受講生と考察を深めたり議論を行ったりしているため、学びを深める効果もあった。さらには、受講生からの要望もできる限り授業内容に反映させ、受講生の問題意識や興味と授業内容が重なるような工夫を行っている。
学生が主体的に授業に参加し、自分で課題を見つけ、考え、ことばで伝える力を養うための工夫	2023年4月～2024年3月	ディスカッション、個人でのプレゼンテーションやグループでのプレゼンテーションなどの「アクティブ・ラーニング」を可能な限り授業に取り入れている。これらの活動を通して、受講生には「①考えながら学ぶこと、②学んだことをもとに自分で課題を見つけること、③その課題に対する自分の意見を整理すること、④整理した意見を言語化して他者に伝えること」の4点を授業中に積極的に行ってもらい、主体的な授業参加を促進している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．学生が主体的に授業に参加し、自分で課題を見つけ、考え、ことばで伝える力を養うための工夫を行う。 2．学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり共有したりする工夫を行う。 3．授業で扱うテーマについての理解を深める工夫を行う。
今年度の進捗状況	1．ディスカッション、個人でのプレゼンテーションやグループでのプレゼンテーションなどの「アクティブ・ラーニング」を可能な限り授業に取り入れた結果、受講生が「①考えながら学ぶこと、②学んだことをもとに自分で課題を見つけること、③その課題に対する自分の意見を整理すること、④整理した意見を言語化して他者に伝えること」の4点について、能力を養うことができた。また、毎回自分にとっての小さな目標を立てて授業に臨むように促した結果、自ら設定した目標を目指して主体的に授業参加をするようになった受講生が増えたことが、マナバの「アンケート」機能を使って毎回送ってもらっている感想を読むと分かった。 2．上記の通り、受講生にはマナバ「アンケート」機能を使って授業中に考えたこと、疑問、感想や要望を送ってもらった。この内容を次の授業の最初に他の受講生と共有した結果、受講生が授業を通して考えたことを整理し、言語化する力を養う効果があった。また、他の受講生の意見を知ることで、多様な視点や意見への気づきがあり、受講生の学びをさらに深める効果もあった。そして、疑問などには回答をしたり受講生と一緒にさらに考えたりしたことも、学びを深める効果があった。さらには、受講生からの要望も可能な限り授業に反映させることで、受講生のより主体的な授業参加がみられた。 3．受講生が日常生活でなじみのある映画やYouTubeなどの動画、外部ウェブサイトなどを必要に応じて活用することで、授業で紹介する理論的なことや概念的なことがらについての理解を促進し、身近な事例と結び付けて考えることができるようになった。加えて、マナバの「レスポン」機能を使って授業中にグループワークの成果を共有したり、それを見ながら発表してもらったりすることで、受講生の理解度が進んだだけではなく、受講生の主体性が高まる非常に大きな効果も見られた。
来年度の進捗目標	来年度も今年度同様、上記(1)～(3)の目標達成のために努力していく。新学科も1・2年生と在籍者が増えるため、学生の興味や問題意識に合うような授業内容を提供できるように工夫していきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『Tsūji, Interpreters in and Around Early Modern Japan』	共著	2023年	Palgrave Macmillan	Furukawa, Hiroko	pp.pp.73-95
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
『女のからだ』(1974)とフェミニスト翻訳	単著	2023年10月	WAN女性学ジャーナル, 2023/10/19	古川弘子	pp.1-31
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
性教育絵本の英日翻訳の事例研究：Making a Babyと『ようこそ！あかちゃん』の比較分析から	単独	2023年9月	日本通訳翻訳学会第24回会年次大会(関西大学)	古川弘子	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1. まず、科研で採用された計画を基に、Our Bodies, Ourselvesの翻訳テクスト『女のからだ』(The Boston Women's Health Book Collective、秋山・桑原・山田訳編、1975/1973版の日本語訳)を研究対象として、①起点テクストと目標テクストの精読を通して定量・定性分析を含む比較分析、②翻訳の意図や翻訳の背景、読者受容についての調査、の2点について行う。 2. 次に、江戸時代に朝鮮との外交と貿易に貢献した朝鮮通詞と、朝鮮通詞に強い影響を与えた儒学者・雨森芳洲についての論文を発表する。 3. 加えて、女性のからだに関する新たな翻訳テクストの分析を行い、研究結果を発表する。
今年度の進捗状況	1.『女のからだ』の分析結果を「『女のからだ』(1974)とフェミニスト翻訳」と題した論文にまとめ、WAN女性学ジャーナル(2023/10/19: 1-31)で発表することができた。 2. 江戸時代の朝鮮通詞と雨森芳洲についてまとめた論文は、書籍Tsūji, Interpreters in and Around Early Modern Japan (Palgrave, 73-95)の一章として発表することができた。 3. 女性のからだについての新しい翻訳テクストの分析については、「性教育絵本の英日翻訳の事例研究：Making a Babyと『ようこそ！あかちゃん』の比較分析から」と題した口頭発表を日本通訳翻訳学会第24回会年次大会(関西大学)で行うことができた。
来年度の進捗目標	1. まず、科研で採択された課題である、女性のからだに関する翻訳テクストの分析結果を論文にまとめる。 2. 次に、これまでの研究結果をもとに、「①女性がどう訳されてきたか、2女性はどう訳してきたか、③ジェンダー平等を実現するために翻訳に何ができるのか」について、書籍にまとめる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年～	社会言語科学会 会員
2022年～	認定NPO法人ウィメンズ アクション ネットワーク（NPO法人WAN）会員
2012年～	日本通訳翻訳学会（JAITS）会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	松谷　基和	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
東北のキリスト教知識人と朝鮮－押川方義・吉野作造・鈴木義男	単独	2024年2月	韓国日本学会(ソウル)	松谷基和	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	三須　拓也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
メールおよびmanabaでの掲示板を通じた授業改善。	2017年4月1日～	講義科目「国際政治論Ⅰ・Ⅱ」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。数回の小テスト、中間課題を実施し、修学の成果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。
小テスト、リアクション・ペーパーを通じた授業改善。	2017年4月1日～	講義科目「国際政治論Ⅰ・Ⅱ」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。小テストないし中間課題を課し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。
映像を用いた学習効果の向上	2017年4月1日～	講義科目「国際政治論Ⅰ・Ⅱ」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実施。図説だけでは説明しにくい箇所を動画を用いつつ説明したところ、以下の改善がはかれた。(1)学生からのリアクション・ペーパー等で、理解できなかった箇所を具体的に理解できた、とのコメントを貰った。(2)また映像データの一部をインターネットなどで閲覧できるようにし、学生の自学自習に役立たせることができた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義用プリント、パワーポイントデータの作成。	2019年4月1日～	講義科目「国際政治論Ⅰ・Ⅱ」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実践。講義で使用するプリントを毎回準備、配布している。また講義で使ったパワーポイントのプレゼンテーション・データをmanaba上にアップロードし、講義内容の復習に役立てて貰えるようにした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
文章作成、就職活動支援	2017年4月1日～	主に4年生向け演習で実施。希望者に限定されるが、就職活動中の学生の文章力向上の指導を行った。具体的には 、エントリーシートや志望理由書などのチェックを行った。狙いは学生が自分の言葉で志望動機などをまとめられるようにすることにある。副次的効果として、教員が学生の就職活動の進捗状況を知ることで、適切な指導を行えた。
演習での個別研究の実施、指導。	2017年4月1日～	3年生、4年生向け演習科目で実施。東北学院大学学生懸賞論文の応募に向けて、学生が主体となった研究活動を実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『冷戦史』	共著	2024年3月	法律文化社	益田実, 齋藤嘉臣, 橋口豊, 鳥潟優子, 小川浩之, 三宅康之, 池田亮, 青野利彦, 妹尾哲志, 山本健, 細田晴子, 清水聡	pp.273-297
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	従来の国際関係史研究では、冷戦期に生じた様々な対立や紛争の大半は、いわゆる「冷戦の終焉」すなわち米ソ対立の解消あるいはソ連の消滅とともに自然に解消したと考える傾向が強い。これに対して本研究は冷戦の終焉を米ソ対立の終焉とのみ同一視するのではなく、様々な次元で生じた「複数の冷戦の終焉」の集合体として捉え、各国の公文書史料を用いたマルチアーカイヴァル手法に基づく実証的分析によって、「冷戦は世界の異なる場所でいつどのように終焉を迎え、その過程でどのような変化をもたらしたのか」という問いに答えることを目指す。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年3月	「コロナ後」の世界を展望する－2023年の振り返りと意義－ 講師
2024年1月～2024年3月	世界情勢を読み解く 講師
2023年10月	開発の国際政治 －サラ・ロレンツィーニ著『グローバル開発史』を手がかりに－ 講師
2004年12月～	日本アメリカ史学会 会員
1996年6月～	日本国際政治政治学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	渡部　友子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1. 学生の習熟度に合わせて、教材や指導方法を変える。 2. 言語文化学科で(第二外国語だけでなく)英語を学びたい学生に、英語力をつけさせる。 3. 講義科目において、学生間の学び合いや講義外での学びを促す。 4. 英文を読む時に、自分の知識を使って行間を埋めることが重要であることを学生と教員に伝える。
今年度の進捗状況	1.「English Theme Writing A・B」において学生中心の運営を継続したが、昨年度よりも習熟度や意欲の差が大きく、十分に対応できなかった。 2. 英語力不足の英語教員志望者には努力の継続を言い続けたが、昼の英会話への参加は限定的であった。 3.「英文法A・B」は対面実施に戻り、教室でグループ活動ができるような時間配分をしたが、ほとんどの学生が授業外で活動した。manabaプロジェクトへの書き込みは昨年度と同程度だったように思われる。 4. 国際教養学科の「総合英語IA・IB」において、自分で考えることの重要性を伝えることはできた。
来年度の進捗目標	1. 国際教養学科の英語科目において、習熟度の差を考慮した課題の出し方を工夫する。 2. 国際教養学科の英語科目において、自動翻訳や生成系AIを導入し、学習者の自立を促す。 3. 国際教養学科の講義科目において、学び合いができる運営を行う。 4.「総合英語IA・IB」以外の英語科目においても、自分で考えさせるための発問を工夫する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1.「英文法」の本の執筆を目指し、講義を通して内容を精選する。 2. 英語教育に関する活動を、学内外で発表する。
今年度の進捗状況	1. 英文法の講義内容は微修正したが、執筆につながる進捗がほとんどなかった。 2. 国際教養学科における英語教育の特色について、公的な文書にすることができなかった。
来年度の進捗目標	1. 他の研究者が新しく書いた教育用の英文法書を収集する。 2. 国際教養学科における英語教育の特色について、公開できる文書にするとともに、自動翻訳や生成系AIの利用に関する英語教育実践例を積極的に収集し、自身も発表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
国際学部長に就任し、同役職に付随する諸々の用務を遂行した。また、グローバル教育センター設置に向けての検討委員会の委員を務めた。

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	李　承赫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
英語教育に関する重要課題と目標	2020年4月～	2020年に赴任してから、東北学院大学の教養学部で英語教育に携わった。学生たちが実際の能力とは別に、自分の英語力に自信を持っていない場合が多いということが明確になった。学年度が終った後、目に見える形で自分の英語力が伸びたということをどうすれば気づかせることができるか。これが教員としての主な課題であった。そのため、有名な英語原典の本、あるいは有名な英語スピーチを一冊丸ごと完全に読み切り、すべての単語がわからない場合でも文脈で理解できる「推理能力」を養わせることに集中した。この「推理能力」に基づいた英語読解力で学生が自らの力で内容を把握できるように指導した。学年度が終わった時点で、自分の力で英語の本を全部読み切ったという、目に見える形の達成感の存在こそが学生の自信につながると確信する。2023年からは国際学部の所属になったが、現在も学生たちができるだけ「自分の英語」で自分の考え方が表現できるように指導している。
③　多文化共生・グローバル化に関心を寄せる英語教育	2020年4月～	国際的・社会的な問題を扱った英文を様々な視点から比較して読むことにより、多様な文化的な背景を持つ世界中の人々の文化を理解することが重要であるということを認識させるのを目標とした、グローバライゼーションに相応しい英語力の養成を目指した。2023年、国際学部が始まった以降は、特に国際学部の新入生たちに「多文化」と「グローバル的」人材が備えないといけない、英語能力以外の「多文化理解力」につながる教養についても実例を挙げながら指導している。
②　オフィスアワーを使った、英会話講座の実施	2020年4月～	コロナ禍でのZoomオフィスアワーの時に、希望する学生を対象に教員と英会話ができる時間を設けた。授業で習った用語と表現を使って自分の意見を簡単な英語で述べることができるように指導した。2023年五橋キャンパスに移転してからも、希望する学生を対象に英会話の時間を不規則ではありながら続けている。
①「推理能力」を養う、総合的な英語読解力	2020年4月～	すぐ辞書をひくのではなく、慣れない単語や表現が出ても、先ず自分がわかる範囲で内容の「大きな図」を把握し、そこから細かい内容の理解まで自力でたどり着つことができるよう、英語読解における「推理能力」の向上を優先にして指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
岩手県　水沢第一高等学校　出張講義	2023年12月8日	「グローバル(国際)化」するって、どういう意味？　私たちは何をすればいいでしょうか』というタイトルで出張講義を行った

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～		日本政治学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	金　亨貞	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
명사구의 유정성과 복수 표지 '들'(Animacy of Noun Phrase and Plural Marker 'deul')	単独	2024年1月	19th International Conference on Korean Language, Literature and Culture, Nagoya(Nagoya, Meijo University)	金 亨貞	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	佐藤　真紀	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの実施	2021年4月～	毎回の授業に，学生同士のピア・ラーニング（グループディスカッションやプロジェクトワーク等）を取り入れ，学生が主体的に学べるような取り組みを行った。zoomを用いた場合も極力ブレイクアウトルームを活用し，学生同士が良好な関係を構築し，共に学べるような機会を多く提供するようにした。
授業内容の理解促進と自律的な学びの促進	2021年4月～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回のねらいを必ず説明することで，学生が学ぶ内容を常に念頭に置き，知識のネットワークを作れるように配慮している。また，授業終了時にはその回のまとめをし，学生自身による内省の時間を設定することで，理解の定着を促している。
留学生と日本人学生の交流促進	2019年4月1日～	留学生の日本語科目で，聴講で日本人学生が参加する機会を提供し，留学生と日本人学生がプロジェクトワークを通して協働し，双方にとって学びとなる場を提供した。
授業内容の理解促進と自律した学びの促進	2019年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回のねらいを必ず説明した。また，授業終了時にはその回のまとめをし，学生自身によるふり返りの時間を設定することで，学生が内省できるようなサイクルを作った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
仙台市内を中心とした地域日本語教育への貢献(HANDS)	2019年4月1日～	地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル"HANDS"の顧問を務めた。毎週火曜と金曜の19:00-21:00，土樋キャンパスに赴き，継続して活動を行った。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は40名ほど，地域の外国人参加者も述べ40～50名ほどである。 日本語を学ぶ/教える活動を実践することで，参加者双方に多文化共生について考える機会を提供した。
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんぴ)	2019年4月1日～	名取市の介護施設から要請があり，EPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行う団体(みんぴ)を組織した。具体的には，言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と，地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し，インドネシアのEPA介護福祉候補生10名に，毎週1～2回の学習支援を行った。
外国につながる子どもの学習支援の実施（LAMP）	2018年9月～	近年増加・多様化している「外国につながる子ども」の学習支援を行う団体(仙台LAMP)を立ち上げ，学生達を組織し，毎週1回90分～120分の学習支援を継続して実践している。2020年度以降は新型コロナ感染症の影響を受け，zoomを用いた遠隔支援を行っている。学生達が多文化共生において自分自身に出来ることを模索する場を提供できている。
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんぴ)	2018年6月～	名取市の介護施設に勤務する EPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行うグループ(みんぴ)を組織した。言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と，地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し，インドネシアのEPA介護福祉候補生10名程度を対象に，毎週1～3回の学習支援を継続して行っている。学生達には多文化共生社会で自身に出来ることを自問自答し，模索する機会を提供できている。
仙台市内を中心とした地域日本語教育の実施(HANDS)	2015年4月～	地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル"HANDS"の顧問として企画・運営に関わっている。毎週火曜と金曜の19:00-21:00に継続的な活動を実施している。対面活動が可能であった頃は土樋キャンパスにて活動を実施していたが、2020年度～2021年度は新型コロナ感染症の影響を受け、zoomによる遠隔活動を継続して行っている。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は50名ほど，地域の外国人参加者も述べ40名ほどである。 日本語を共に学び，交流する活動を実践することで，参加者双方に多文化共生について考える機会を提供できている。

現在の課題・目標	(1) 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし，学生からのさまざまな相談に応じる。 (2) 日本語教育や国際交流に関心のある学生向けに，様々な情報を与えたり，実際のフィールドに関わる機会を作ったりし，実践的な学びを提供する。 (3) 地域社会で多言語多文化共生社会を目指した日本語教育を展開する。 (4) 日本語教育学を専門とする学生・院生に，専門的な知識を多角的に提供する。 (5) 日本語教育を志す学生・院生に，具体的な進路の助言や情報提供を行う。
今年度の進捗状況	・上記(1)に関しては，多くの学生の相談を受けた。オープンアワー以外の時間も極力応じ，それぞれの学生とじっくり話す機会を得ることができた。特にゼミ生や日本語教育実習生とは一人に対し何度も相談に乗った。 ・上記(2)に関しては，仙台市内の機関（主に日本語学校）とのネットワーク構築を積極的に行った。その結果，学生達に様々なフィールドに参加する機会を提供できた。また，大学内の留学生と日本人学生にも交流機会を多く提供できた。 ・上記(3)に関しては，HANDSやみんぴなど，複数のプロジェクトを組織し，学生達を指導することができた。HANDSもみんぴも毎週2回の活動に自ら参加し，学生達と試行錯誤しながら活動を継続して実施することができた。 ・上記(4)に関しては，ティーチング・アシスタントを多く採用し，専門的知識の学び直しを中心に多くの知識を提供できた。結果，日本語教育能力試験に合格した者もいた。特に院生に関しては，共同研究・発表を行うことで，研究の実地経験を身につけさせ，業績を増やすことに貢献することができた。 ・上記（5）に関しては，海外で日本語教師をしてきた卒業生の講演会を開くことで，日本語教師のイメージを持ちやすくなり関心が高まるよう工夫した。また，修了する予定の院生には，仙台市内の日本語学校と連絡を取り，専任教員として働けるよう推薦を行った。
来年度の進捗目標	・上記目標（1）に関しては，継続し，学生の相談に親身に対応していく。 ・上記目標(2)に関しては，学生のニーズに応じ，新規のフィールドを開拓していく。コロナ禍の制限が少なくなったため，特に海外との交流を積極的に行っていく。 ・上記目標(3)に関しては，年少者を対象に学習支援を拡大していくための体制づくりを行う。 ・上記目標（4）に関しては，継続し，質を上げていく。 ・上記目標（5）に関しては，来年度卒業・修了し，日本語教師の道を希望する学生・院生が多いため，よりネットワークを駆使し，彼らが望む就職ができるようサポートしていく。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
地域日本語教室における日本人参加者の学び―活動記録の質的分析より―	共同	2024年3月	第 1 回タイ国日本語教育国際シンポジウム ―これからの社会に生きる力―(バンコク，タイ)	佐藤真紀，荒木眞緒，小野田理央，山口有里紗	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 実践研究プロジェクトに取り組む。 (2) 日本語教育学の領域で研究発表を積極的に行う。
今年度の進捗状況	・上記(1)に関しては，協働研究にすべく，同じ問題意識を持つ人たちとのネットワークが構築されている。 ・上記(2)に関しては，まず「第1回タイ国日本語教育国際シンポジウム」での共同発表を行った。
来年度の進捗目標	・上記(1)に関しては，科研費への応募を行う。そのための準備を戦略的に行っていく。 ・上記(2)に関しては，「第1回タイ国日本語教育国際シンポジウム」で発表を研究論文にまとめ，学術誌に投稿する予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年10月～	仙台市「『日本語教育の体制整備』総合調整会議」への参加
2018年6月～	EPA介護福祉士の日本語学習支援「みんぴ」運営参加・支援
2016年7月～	日本語教育学会 審査・運営協力員
2016年2月～	協働実践研究会 会員
2015年4月～	地域日本語学習支援サークル「HANDS」助言・指導, 企画, 運営参加・支援
2004年3月～	特定非営利活動法人「子どもLAMP」企画, 運営参加・支援
1999年12月～	日本語教育学会 会員
1999年4月～	日本言語文化学研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1. 国際学研究所　所員
2. 人間対象研究審査委員会　委員
3. 教養学部優秀論文選考委員会　委員
4. 学生相談室　兼任カウンセラー
5. 国語入試問題　採点委員
6. 入試総合選抜　面接委員

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	城山　拓也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
専門科目（「言語文化学演習」）の授業方法	2020年4月1日～	ゼミでは、基本的に学生の主体的な発表と議論を促している。発表者1名のほか、別にコメンテーター1名を事前に指名しておき、発表内容についてコメントしてもらう。そのほかのゼミ生にも、質問事項を事前に考えてきてもらい、学生が主体的に発言できる場になるよう努めている。
外国語科目（「中国語」）の授業方法	2020年4月1日～	外国語科目（「中国語」）については、適宜小テストを行い、学習へのモチベーション維持を図っている。また、1か月半～2か月が過ぎたところで、復習の週を設けた上で、振り返りの中テストを行った。その後、それぞれの学生の理解度に応じて、学習の方法について、きめ細やかに指導するようにしている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	戦火とモダンーー日中戦争時期重慶の文化芸術における表現様式の研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年4月～	日本マンガ学会 会員
2011年4月～	中国人文学会 会員

2010年4月～	中国モダニズム研究会 会員
2008年4月～	日本現代中国学会 会員
2008年4月～	中国文芸研究会 夏合宿幹事
2005年4月～	中国文芸研究会 会員
2005年4月～	大阪市立大学中国学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	房　賢嬉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における学生間のインタラクション	2021年4月1日～	オンデマンド式の授業では学生間のコミュニケーション機会が損なわれることになるため、少しでも互いの意見や考え方が共有できるように工夫した。具体的には、毎回授業で取り上げた問題に対する受講生からの意見やふり返りを紹介するという方法を取った。この方法は学生に好評で、「受講生の意見共有がしっかりとなされていてよい」との声が聞かれた。次のふり返りで仲間の意見に言及する学習者が増えてきたものの、「仲間の意見が参考になった」、「そのように考える人もいて驚いた」などの浅い感想が多く、さらに深めることはできなかった。その問題点を踏まえ、いくつか対立する意見をピックアップし、それに対する意見をふり返りに述べるように促し、それらを次回の授業で丁寧に取り上げて議論するというサイクルを作ったところ、より多様な意見が飛び交うようになり、オンデマンドという悪条件でも議論を深めることができた。上記の工夫によって、批判的思考や内省の過程を経た自他対立、理解のプロセスを作ることがある程度できたと考えられる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生が授業中に配布するPPTやハンドアウトだけにたよる傾向があるため、文献を積極的に読むような仕組みを作る。
今年度の進捗状況	授業のテーマ毎にmanabaのアンケート機能を用いて学生の考えを調査し、授業で扱う内容に照らし合わせて文献を読ませて考察させることで、授業で扱う理論の理解を深めている。
来年度の進捗目標	今年度の取り組みについてしっかりふり返り、問題点があれば改善していきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
韓国語動詞「빠지다(ppajida)」の意味 および対応する日本語動詞:イメージスキーマ変換を用いて	共著	2023年8月	高麗大学校グローバル日本研究院（고려대학교 글로벌일본연구원）(40)	白以然`・房賢嬉	pp.293-325
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①大学学部の教養教育の一環として、環境、食糧、雇用問題などをコンテントとして取り上げ、学生の問題意識を起点としながら、世界、人、コト、モノのつながりを紡ぎ、その中に潜む政治・社会・経済的な問題を「ことばを使って」理解し、発信する実践を2022年度に行った。その実践に関する研究を論文としてまとめる。 ②日・韓ミステリードラマにおけるキャラクターの言語行動の違いについて、役割語とキャラクタースピークの観点から研究する。

今年度の進捗状況	①については、県外の研究者2名と週に1回、zoomで勉強会とミーティングをしながら研究を進めており、論文としてまとめる予定である。 ②については、韓国の大学の研究者1名と週に1回、zoomで勉強会とミーティングをしながら研究を進めており、論文としてまとめる予定である。
来年度の進捗目標	・今年度にまとめた論文を投稿する。 ・日・韓ミステリードラマにおけるキャラクターのスタイルシフトについて、対照研究を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年～	言語文化教育研究学会 会員
2010年～	協働実践研究会 会員
2004年～	日本語教育学会 会員
2002年～	お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	フリック　ウルリッヒ	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～2023年8月	渥美財団「アジア未来会議」審査委員
2023年4月～	日本植民地教育史研究会 年報編集委員
2020年4月～	近現代東北アジア地域史研究会 会員
2010年10月～	日本植民地教育史研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	講師	氏名	沓掛　沙弥香	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	私立大学の風土や学生の傾向をつかみ、学生に大学の学びのあり方や意義を理解させ、批判的思考力を育むことのできる教育を行うこと。	
今年度の進捗状況	私立大学の中でも、仙台市出身者や東北地方からの出身者によって構成される本学は、学生の「同質性」が高く、他者へのまなざし（及び他者からのまなざしを反映したメタ認知や内省）が欠如している傾向にあることがわかった。特に国際学部では、「身近な異文化」への気づきをうながすようにしていることもあり、自らの「当たり前」を疑う視点を積極的に提供することに努めてきた。今年度は着任一年目であったが、私立大学の風土や学生の傾向をおおよそ把握し、そのうえで、批判的思考力の育成に注力することができた。	
来年度の進捗目標	今年度の課題として、学生たちのアウトプットの量を増やすことが挙げられる。批判的思考力を育ませるために、積極的に学生からの発言を促したが、本学の学生は、自らの考えをことばにし、且つ公にすることに、特に抵抗が強いようにみえる。しかし、頭の中にあるものを「外に出す」ための言語化の作業は、大学の学びの意義の一つであり、また、自ら発したことばが、自分自身にどのように響くかや、周りからどのような反応が返ってくるかによって深化する理解もあるということを学生に理解させ、より積極的に発言を促していく必要がある。そのために、教員として、安心して発言できる環境を整える必要がある。来年度は、学生からの積極的な発言によって、批判的思考力をより一層伸ばすことを目標としたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
スワヒリ語は「アフリカの言語」になるか: 近年の動向と今後の可能性	単著	2024年3月	スワヒリ＆アフリカ研究(35)	沓掛沙弥香	pp.近刊-近刊
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
The Sociolinguistic Dynamics of Kiswahili Expansion	単独	2024年3月	International workshop on Bantu linguistics and Swahili studies ″Dialogues in Swahili and Bantu linguistics″: Registration form(Tokyo)	KUTSUKAKE, Sayaka	
Review of recent studies on multilingual practices in Africa and future perspectives	単独	2023年11月	International workshop “A new perspective on descriptive linguistics in Africa based on the translingual ecology”(Tokyo)	KUTSUKAKE, Sayaka	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	研究活動においては、(1) アフリカ諸国の言語政策・言語実践に関する文献研究及び国際関係に係る動向分析と (2) アフリカでの現地調査によるデータ収集から、(3) 現代世界の諸相が映し出される場としての、アフリカ地域の総合的言語政策研究の基盤形成を目指している。				

今年度の進捗状況	今年度は、主に(1)に注力し、学術論文1本と、国際ワークショップでの発表を2回行った。		
来年度の進捗目標	来年度は、引き続き(1)を進めるとともに、アフリカでの現地調査によるデータ収集を行う予定である。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

教養学部

人間科学科

言語文化学科

地域構想学科

2023年度

所属	教養学部　人間科学科	職名	教授	氏名	黒須　憲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
研究合宿の開催	2020年8月1日～	年1～2回，3年生4年生それぞれに日帰り及び一泊の合宿を行い，課題の検討と意見の交換、懇親を行っている。
発表会の実施	2020年4月1日～	構想発表(対面)，中間発表(対面)と総合研究(zoom)の作成のための公開発表会を前期1回，後期1回実施した。 その他ゼミでは調査結果や小論文を作成し発表、質疑応答、コメントを行った。前期zoomミーティング、後期対面
WEBサイトを利用した情報の提供	2020年4月1日～	個人blog，Facebook,Messenger、ラインを利用して，研究内容の公表や活動報告，連絡事項等を行った。ゼミ専用のページやグループを作り活用した。manabaを利用しレポートの提出コメントを行った。Googleドライブに動画をやスライドをUPし視聴してもらった。
視覚教材によるイメージの確認と定着	2020年4月1日～	体育学基礎論A2回、B15回、スポーツ文化論15回、スポーツ実技15回の授業毎にリモートオンデマンド用のテーマに関する，ビデオ，スライドを作成し提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ，提出させコメントを返した。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。レポートを毎回提出させ、コメントを返した
発表会の実施	2013年1月～	構想発表，中間発表と総合研究の作成のための公開発表会を前期1回，後期1回実施した。 またオープンキャンパスにおいて公開ゼミを実施し発表を行った。
人間科学演習(ゼミ)で実際に調査と経験行って成果をまとめレポート提出させた	2013年1月～	日本武道学会，日本スポーツ教育学会，宮城体育学会などに学生と共に参加し，学習内容についてレポートをまとめ報告させた。
視覚教材によるイメージの確認と定着	2013年1月～	数回の授業毎にテーマに関する，ビデオ，スライドを提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ，提出させている。
研究合宿の開催	2013年1月～	年1～2回，3年生4年生それぞれに日帰り，一泊二日，の合宿を行い，課題の検討と意見の交換を行っている。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2013年1月～	毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする
発表会の実施	2011年4月～	構想発表，中間発表と総合研究の作成のための公開発表会を前期1回，後期1回実施した。
体育学演習で実際に調査実習を行って成果をまとめレポート提出させた	2011年4月～	スポーツ博物館，国立競技場，スポーツ図書館を訪れ実際に見学説明を受け，オリンピックやスポーツ普及に関する説明を聞き，レポートをまとめた。
視覚教材によるイメージの確認と定着	2011年4月～	数回の授業毎にテーマに関する，ビデオ，スライドを提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ，提出させている。
研究合宿の開催	2011年4月～	年1～2回，3年生4年生それぞれに日帰り，一泊二日，二泊三日の合宿を行い，課題の検討と意見の交換を行っている。
WEBサイトを利用した情報の提供	2011年4月～	個人blog，mixi，Facebookを利用して，研究内容の公表や活動報告，連絡事項等を行っている。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2010年4月～	毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。
2．作成した教科書、教材、参考書		
スポーツ実技(弓道)のオンデマンド用動画を作成した。15回	2020年4月1日～	弓道概論から歴史、技術、道具に関する内容。GoogleドライブにUPしmanabaを通じて視聴してもらった。
(スポーツ文化論)授業や講習会で使用するスライド教材を動画などを追加し更新した。	2020年4月1日～	パワーポイント用「スポーツのグローバル化」「スポーツ文化論武道」スライドを更新した。 スポーツ文化論15回のシラバスに合わせて、オンデマンド用の動画を作成した。

体育学基礎論A B 授業で使用する教材を追加更新した	2020年4月1日～	パワーポイント用「体育学概論」113枚,「運動生活場の整備」「肥満・食事・運動」「トレーニング」のスライドを更新した。 A 武道文化論 B15回ハイブリット授業をおこなった。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
本学スケート部の指導を行った	2020年4月1日～	4年連続でインカレに出場することができた
梨割り弓道場において外国人弓道家を指導した。ニュージーランド、アメリカ	2020年4月1日～	宿泊し技術指導を行った。
本学スクーバ・ダイビング部員を指導した。	2020年4月1日～	学科と海洋トレーニングを指導しアドバンスの技術認定証を認定した。
伊達印西派研修会の講師を務めた。	2020年4月1日～	週末を利用し、的的に遠刈田梨割弓道場，技術練習，腰矢数矢稽古年30回程度
ヨーロッパ日置流弓道講習会の講師を務めた	2020年4月1日～	今年はコロナ渦により、メール、ライン、メッセンジャー、Facebook、blogなどによる質疑応答を行ったPoland、Austria、Finland、Germany、などから質問がきた。
紅葉会研修会の講師を務めた	2020年4月1日～	年20回、毎回数名の参加者で，技術研修，腰矢組弓，目録解説を行った
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2019年8月～	日本騎射協會 理事 委員
1980年8月～	ヨーロッパ弓道指導講師 昭和56,60，平成3,7,8,10,13,15,16.17.18.19.20.21,22,23,24,24,25,26,27,28,29,30,令和元年、2委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

ドイツ弓道連盟　ゴールドピン賞受賞	ドイツ	2020年12月～	長年のドイツにおける弓道指導の功績を認められ、ドイツ弓道連盟より表彰された。
仙台青葉祭り	仙台市街	2018年5月～	腰矢組弓演武 コロナ渦により中止
スクーバダイビングインストラクター	山形県由良海岸、セブ島、阿嘉島、パラオ、女川	2015年4月～	部員を対象射OWDライセンス講習、レスキュー、CPR等の講習とトレーニングを行った。
一ノ蔵弓道大会	石巻弓道場	2014年10月～	腰矢組弓の演武を行った。コロナ渦により中止
日本文化の海外普及のため1979年よりほぼ毎年夏期及び春期にドイツ，イタリアより招聘され，弓道セミナーの講師を務めている。現在ヨーロッパには数百名の生徒がいる。語学や異文化理解能力が必要である。	ドイツ，イタリア，オーストリア，ハンガリー，スロベニア，フィンランド，ノルウエー,デンマーク	1979年4月～	ドイツ弓道連盟公認トレーナー イタリア弓道連盟公認指導者
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養学部　言語文化学科	職名	嘱託教授	氏名	津上　誠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
『総合研究』における「身の回りの事柄の論文トピック化推奨」と「対話型指導の徹底」	1996年4月～	指導学生に対し，身の回りの事柄を論文トピックに立てることを勧めた上で，各人との間で2週に1回，60分以上かけ，資料収集，文献内容把握，論文構想，アウトライン作り，本文執筆の全局面での「ボールの投げ合い」を密接に繰り返し，当該トピックの文化論的探求を支援。指導下の学生全員に出席を求める研究経過報告会も月1回開き，各学生の取りあげる問題が決して個人的関心事で終わるものではなく，私たちが生きる社会で共有されうる問題であることを実感させる。年度にもよるが同趣旨の合宿も実施。
演習系諸科目における課題提出の恒常化	1996年4月～	例えば『言語文化学演習』においては文化論系の多種多様な良質文献を毎週ひたすら読んでいくのだが,指定範囲を報告者だけでなく全員が毎週読んで来るよう,最低3時間以上の読みを義務づけ,とったメモやノートのコピーの提出を求めている。
講義系諸科目は板書と口頭のみの授業にし,対面的状況を確保している	1996年4月～	対面的状況を大切にするため，原則としてパワーポイントもプリントも使わず，板書と口頭のみで授業を行う。（新型コロナウィルス対策でリモート授業を余儀なくされる場合も，大型ホワイトボードをバックに授業を行う姿を映し，板書と口頭のみの授業に準ずるものとする。）
文化人類学系講義全般における授業時提出物の徹底を通じた，コミュニケーション双方向化および授業参加促進	1996年4月～	受講生150人位までの講義では毎授業終了前に10分程かけ，設問への解答，授業理解度自己診断，授業への感想質問等を書かせる「小テスト」を実施。書かれたことを授業運営に反映させて受講生とのコミュニケーション双方向化を企てるとともに，「授業に集中していなかったことが明白な答案には極めて低い評価しか与えない」と初回予告しておき，受講生の授業参加促進を図る。
2．作成した教科書、教材、参考書		
『論文作成の留意点』（約16,000字，指導学生に対する印刷配布のみ）	1996年4月～	『総合研究』指導用に毎年改訂配布して読み合わせ会を開き,以後1年間学生に手引きとして利用して貰うもの。大きく3部分から成り,第一部分では,論文とは「他者が提示する事実や事実解釈とあなたが観察した事実とを素材にしながら,あなた自身がある結論に向かって構築する物語」である旨を説明,この観点に沿うための技法として,第二部分では論文完成までの作業プロセスを、第三部分では引用表示等の体裁作りを,それぞれできるかぎり平易に解説している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年1月		「家族とは？」～ボルネオ島の異文化研究より～ 講師	
1985年3月～		日本民族学会（現日本文化人類学会）会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養学部　地域構想学科	職名	教授	氏名	松原　悟	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの活用を工夫した。	2020年4月1日～	講義形態を変え、従来の一方的な講義形態から、学生との双方向的な授業に改善した。毎回の小レポートやテーマに基づいたグループワークを取り入れた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントの作成	2021年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
地域実習としてプロスポーツ観戦及びプロスポーツマネジメントの改善	2023年4月1日～2023年8月31日	
実習系科目の改善	2020年4月1日～	地域調査の集団での活動が困難なため、地域構想学発展実習（2年）演習（3年）の授業では、各自が暮らしている地域について、個別に調査を行い、よりよい街づくりに対して成果を報告させた。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	日本サッカー協会 公認マッチコミショナー
2016年4月～	仙台市クラブリーグ連盟会長 委員

2001年4月～	日本サッカー協会マッチコミショナーとして日本フットボールリーグの運営を補助 2019年からはJリーグも担当している 委員
1980年4月～	日本体育学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

教養教育センター

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	今井　奈緒子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaのオンライン小レポート機能の使用	2020年5月7日～	遠隔授業の実施に伴い、従来の出席カードに替わるものとして毎回オンラインによる小レポートの提出を義務づけ、学生に授業内容についての所見、質疑を記すよう求めた。優れた内容の、あるいは他の学生の参考になると思われるコメントを、次週の授業冒頭に（授業進行上その時間が取れないときは、プリントにまとめて配信）紹介し、質問に回答するなどしてフィードバックに役立てている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義科目における各回授業の資料フォルダ（プリント・CD音源・スライドショー）	2020年5月7日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年5月～	日本オルガン研究会 会長
2023年5月～	一般社団法人 日本オルガニスト協会 監事
2023年5月～	一般社団法人 日本オルガニスト協会 会員
2021年5月～	一般社団法人日本オルガニスト協会 会長（代表理事）

1983年4月～	一般社団法人日本オルガニスト協会 会員
1978年5月～	日本オルガン研究会 運営委員・年報編集委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
ジングアカデミー東京 第15回定期演奏会	日本基督教団霊南坂教会	2024年3月～2024年3月	同教会にて修復されたデュモン＆リエーブル社製ハルモニウムによりR. シューマン《ミサ・サクラ》op.147を伴奏
東京オラトリエンコール第30回演奏会	第一生命ホール	2024年3月～2024年3月	J, S. バッハ マタイ受難曲 BWV244全曲を演奏、通奏低音を担当
東洋英和楓の会主催 東洋英和女学院 PRE! 創立140周年記念オルガンコンサート	東洋英和女学院マーガレット・クレイグ記念講堂	2023年11月～2024年11月	同女学院卒業生4名のオルガニストによるガラ・コンサート
今井奈緒子オルガン・リサイタル	松本市音楽文化ホール	2023年11月～2023年11月	ソロ曲数曲、アンサンブルによりJ. F. ヘンデルの作品、坂本日菜作曲「讃歌II」を委嘱初演
国際基督教大学オルガン演奏会	国際基督教大学礼拝堂	2023年10月～2023年10月	J. F. ヘンデル オルガン協奏曲（ソロ版）、J. ブラームス 11のコラール前奏曲 op.122 全曲を演奏
ミヒャエル・ハイドン・プロジェクト「オーストリアで歌い継がれた祈りの響き」	日本基督教団東中野教会	2023年9月～2023年9月	M. ハイドン、F. P. シューベルト, J. A. ブルックナー、J. M. ハイドンの声楽アンサンブル作品を演奏
日本基督教団田園調布教会オルガン奉献10周年コンサート	日本基督教団田園調布教会	2023年9月～2023年9月	オルガン奉献10周年を記念し、バッハ、ヘンデル、ブラームス等の作品を演奏
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2023 vol.1	土樋キャンパスラーハウザー記念礼拝堂	2023年7月～2023年7月	スクァルチャルーピ写本／14世紀フィレンツェの世俗音楽
オルガン・ガラ・コンサート	川口リリア音楽ホール	2023年6月～2023年6月	ドイツの巨匠サットマリーと、留学し教えを受けた3名の弟子達とのジョイントコンサート
アイリスオーヤマクラシックスペシャル 2023	サントリーホール	2023年6月～2023年6月	F. プーランク作曲 オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲を共演
東北学院大学五橋キャンパス押川記念館ホール柿落とし	東北学院大学五橋キャンパス押川記念館ホール	2023年5月～2023年5月	移設されたオルガンの、主として寄付者対象の披露、並びに新ホールの柿落としとして、オルガン独奏、ソプラノとオーケストラの作品、サン＝サーンス作曲 交響曲第3番（オルガン付き）等が演奏された。
一社）日本オルガニスト協会「50年の歩み」	川口総合文化センターリリア	2023年5月～2023年5月	2日間に亘り、総会、新人演奏会、記念演奏、講演3本から構成されるプログラムを運営
オルガンプロムナードコンサート400回記念スペシャル	神奈川県民小ホール	2023年4月～2024年4月	同ホールのプロムナードコンサート第400回を記念し、各奏者の独奏、合奏を披露
日本基督教団霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京都港区日本基督教団霊南坂教会	2023年4月～2024年1月	月1回程度、ランチタイムに25分間のコンサートを行った。
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.3（収録配信）	東京赤坂霊南坂教会（収録）	2022年3月～	H. v. ヘルツォーゲンベルク《受難》全曲の収録配信
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.2（収録配信）	本学多賀城礼拝堂	2022年3月～	J. ブラームス《4つの厳粛な歌》op.121, コラール前奏曲po.122 より数曲

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	岸　浩介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを利用した授業内・授業外課題作成	2020年～	講義科目（「言語基礎論IA」「原典講読A, B」「言語文化学演習A, B」「対照言語学」「言語論」など）において、オンラインシステムmanabaのレポート機能を用い、授業外課題（振り返り課題）の作成を課した。また、外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、同システムの小テスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。
responを利用した双方向形式授業の展開	2020年～	講義科目（「言語基礎論IA」「原典講読A, B」「言語文化学演習A, B」「対照言語学」「言語論」など）と外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。
「ワークシート」を活用した授業運営・改善の実施	2019年～	講義科目（「対照言語学」）では、コロナウィルス感染症の影響により遠隔授業を実施した期間を除き、ほぼ毎回「ワークシート」を配布し、樹形図の作成や統語構造の理解促進に利用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義科目については、授業内外のディスカッションや意見交換、ワークシート作成、振り返り課題の提出などにより、学生の授業内容理解の促進を図る。語学科目（英語）については、外国語教育センター英語セクションの方針に従い、4技能を重視した授業展開を行う。
今年度の進捗状況	講義科目については、ワークシート作成および振り返り課題の提出はほぼ毎回実施できたが、授業内外のディスカッションや意見交換などの時間が多く持てなかった。語学科目（英語）については、4技能を重視した授業展開を心掛けた。
来年度の進捗目標	講義科目については、授業内外のディスカッションや意見交換などの時間をより多く持つように授業を展開する。語学科目（英語）については、4技能を重視した授業展開を引き続き心掛けるとともに、4技能のバランスを考慮した授業展開を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	日・英語の名詞を含む修飾表現、特に非制限同格表現の分析を行う。
今年度の進捗状況	英語を中心とした非制限同格表現の先行研究の内容を確認している段階にとどまっている。
来年度の進捗目標	英語を中心とした非制限同格表現の先行研究の内容と問題の所在を確認し、同表現の分析としてどのようなものが妥当かを検討する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～2024年3月		東北英文学会（日本英文学会東北支部）編集委員（英語学）	
2005年3月～		高次機能障害学会会員 会員	
2004年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 編集委員	
2004年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 学会開催責任者	
2000年4月～		日本英語学会会員 会員	
1998年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
教養教育センター副センター長、外国語教育センター長として学内業務に従事した。			

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	金　永昊	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
井原西鶴『男色大鑑』巻五の第四話「江戸から尋ねて俄坊主」考	単独	2023年11月	韓国日本古典文学研究会(韓国)	金永昊	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
男色大鑑（訳注）『男色大鑑（訳注）』	共訳	2023年8月	知識を作る知識（韓国）	金永昊の他、17人	pp.120-129
武家義理物語（訳注）『무가의리이야기（日本語題名：武家義理物語）（訳注）』	共訳	2023年6月	昭明出版（韓国）	金永昊、金美真、鄭濬	pp.1-550
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
名著翻訳支援（韓国研究財団）	2018年度～	共同	本研究は、韓国研究財団（旧、韓国学術振興会）の支援により、井原西鶴の『武家義理物語』を韓国語で訳注、解説を付けて刊行する作業である。この作品の翻訳・紹介を通して、現在の日本人の考え方を支えている「義理」という概念はいかなるようなものなのか、これは韓国人が日本を理解するうえでどのように役に立つかを提示することが出来ると思われ、文学・社会学・思想・宗教などの関連分野において非常に重要な意義を持つと考えられる。

科学研究費助成事業 科研費基盤C	2017年度～	個別	本研究は、日本と韓国における中国短編白話小説の受容様相を比較し、そこから見出せる日本と韓国文学の特質を究明することにその目的がある。これまでは日韓両国における『三国志演義』『水滸伝』などの長編白話小説の受容様相についての研究は活発に行われたが、三言二拍に代表されるいわゆる短編白話小説については充分な研究が行われていなかった。一般的に比較研究といえば、どちらが優秀なのかについて焦点が当てられがちだが、本研究ではバランスの取れた視点から日韓両国の根底にある文化的背景と特質について考察することに目的がある。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	佐伯　啓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義「読解・作文の技法」におけるWeb活用レポート評価システム	2020年9月23日～	大人数の授業を効果的に運営するためのWeb活用を継続して実践。情報科学科松本章代先生のご協力により,Webを活用したレポートの提出・公開システムおよび提出されたレポートの新しい評価方法の試みを行なっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
学科パラグラフノートの企画、制作	2020年11月～	パラグラフをベースとしたレポート・論文執筆をサポートする教材「Pノート」（言語文化学科新入生用）の改良版を企画、編集、制作。
『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版作成	2020年8月～	読解・作文の技法で用いてきたテキストの全体を見直し、授業での反応と教育的成果を考慮しながら、本文の修正と練習問題等のヴァージョンアップを行なった。その作業をもとに『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版を授業担当者とともに作成した。
ドイツ語検定3級・4級受験者のための指導	2020年4月～	ドイツ語検定を受験する学生のための予備対策として、過去問を編集して作成した教材で、文法,読解,聴解の指導を行なった。
授業を補完する練習問題の作成	2020年4月～	教科書を補完するドイツ語文法練習問題や小テストを作成・印刷し，授業時に配付して活用。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
「がちょうのゲーム」の文化史に関する自主ゼミ	2023年12月15日～	西洋ではボードゲームの古典である「がちょうのゲーム」の文化史に関する自主ゼミを定期的に開催している。
学科ポートフォリオの制作	2020年11月～	大学生活の学習記録となるポートフォリオ（言語文化学科新入生用）の2021年版を編集・制作。

現在の課題・目標	1.『ドイツ文法A1 Ver.2』を授業で使用しながら、さらなる授業方法の改善、練習問題の追加を目指す。 2.『大学生の作文練習帳 Ver.3』の 新しい例文や練習問題を考える。 3.ドイツ語テキストとして刊行した『ドイツ百科ミニ読本』を中級の授業で使用し、語学的・文化的視点からその教育効果を考える。
今年度の進捗状況	1.ドイツ語の授業で使用する中で気づいた改善点を随時リストアップした。 2.『大学生の作文練習帳』オンライン版の例文、練習問題の改定作業を行なった。 3.『ドイツ百科ミニ読本』を中級授業（音読では初級でも）で使用し、その教育効果を分析した。
来年度の進捗目標	1.『ドイツ文法A1 Ver.2』の改善点をさらにリストアップする。 2.『大学生の作文練習帳』の例文、練習問題の改定の準備をする。 3.『ドイツ百科ミニ読本』をドイツ語中級（総合）とドイツ語IIの授業で使用し、教育効果を分析する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

ゲオルク・ビュヒマン『翼のある言葉』初期の編集史	単独	2023年6月	日本独文学会春季研究発表会 (東京、明治大学)	佐伯　啓	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	1.プロギュムナスマタの研究をさらに深め,古典古代から18世紀のGottsched, そして現代につながる作文教育の系譜を辿る。 2. パラグラフに関する文献資料と佐々政一の作文研究書を精査し, 論文にまとめる。 3. Klexikon日本語版制作作業をさらに進める。 4. ドイツ引用句事典の編集史を1冊の研究論文にまとめる。
今年度の進捗状況	1.昨年度に続き、Gottschedのドイツ語原文資料の日本語訳作業をさらに進めた。 2. 5パラグラフ型と弁証法的対比型の論述分構成に関する文献資料をさらに収集した。 3. ドイツ引用句事典編集史について6月の全国学会で発表し、その内容を学部論集に寄稿した。 4. 長年携わってきたビュヒマン『翼のある言葉』初期の編集史をまとめ、博士論文として東北大学に提出した。
来年度の進捗目標	1. 新しい研究テーマとして「がちょうのゲーム」の文化史研究を進める。 2. Gottschedのドイツ語原文資料の日本語訳作業を継続する。 3. Klexikon日本語版制作作業をさらに進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1990年4月～	日本独文学会ドイツ語教育部会会員 会員
1989年4月～	東北ドイツ文学会会員 会員
1989年4月～	日本独文学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	信太　光郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	(1) 抽象的な哲学的問題をなるべく学生の実感に近いところに戻して理解させる。 (2) 学生への多様な文献・資料の提示。学生による積極的な資料発掘への働きかけ。 (3) 自らの研究と授業との連携 (4)オンデマンド授業の工夫
今年度の進捗状況	(1) 小テスト、コメントから判断すると,真面目に聴く学生にはそれなりの効果はある。 (2) 小テスト、コメントから判断すると,ビジュアル資料をふくめた多様な文献・資料の提示は学生に興味を起こさせる効果はあったと判断される。他方で学生が自ら積極的に資料を探すということにはあまりなっていない。 (3) 授業しながら自らも思考を深めるという良い循環ができつつある。 (4) オンデマンド授業では学生のコメントをフィードバックして授業に活かすようにした。
来年度の進捗目標	(1) 自身の研究を深めることにより,抽象的な問題と個別的実感的な問題との架橋をいっそうすすめていきたい。 (2) 学生に自ら積極的に関連の文献・資料を探るよう働きかけを強めたい。 (3) 今後は自らの研究の進展をさらに授業にフィードバックしていきたい。 (4) 学生のコメントを受けてmanabaに授業の補いとなる説明をアップロードするようにする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 美学論文の執筆に向けて資料の読解
今年度の進捗状況	(1) 鋭意調査研究執筆中
来年度の進捗目標	(1) 美学論文の出版

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	千葉　智則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
運動処方を取り入れたスポーツ実技の運営	2023年4月1日～	スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る。 スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る。 スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る
人工環境制御室を利用した運動生理学的研究教育	2021年～	人間科学演習および総合研究では、人工環境制御室および呼吸代謝装置をもちいて，高温多湿，低酸素といった特殊な環境条件下における運動パフォーマンスに関わるユニークな教育研究を試みてきた。 体育実験実習Bにおいては、人工環境制御室で運動負荷試験を実施した際のデータ収集法，データ解析，さらには実験結果をプレゼンテーションするまでの方法を体系的に学習する授業を試みてきた。
運動処方理論を導入したスポーツ実技（フィットネス）	2020年～	従来のスポーツ技能向上型のスポーツ実技授業ではなく，運動処方理論の理解と実践を中心とした授業を試みてきた。授業は有酸素的および無酸素的トレーニングを組み合わせたスーパーサーキットトレーニングさらに軽スポーツで構成される。毎回，受講者が体重，体脂肪率の測定を実施し，授業で実施した運動の総エネルギー消費量を記録しながら，健康関連指標である身体組成，全身持久力および筋力の向上を目的とする試みである。
2．作成した教科書、教材、参考書		
スポーツ実技におけるトレーニング記録ノートの作成	2023年4月1日	トレーニングの記録を記載し分析するためのノートを作成
スポーツ実技（フィットネス）のための教材	2021年～	健康・体力関連の最新の資料と運動処方の具体的な実践法をまとめた教材である。受講生が毎回身体組成および授業時の総エネルギー消費量を記録しながら，運動処方理論の理解と実践ができるように工夫されている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2016年4月～		日本生理人類学会会員 会員	
2016年4月～		日本体育学会会員 会員	
2016年4月～		日本運動生理学会評議員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	塚本　信也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	東方学会 会員
2021年4月～	日本中国学会 会員
2021年4月～	日本中国語学会 会員
2017年9月～	宮城テレビ放送番組審議委員会 委員
2017年～	全日本中国語スピーチコンテスト東北大会審査委員会 委員長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	中村　教博	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
生成AI時代の高等教育の必要性	単著	2024年3月	東北学院大学　教育総合研究所報告集, 24	中村教博	pp.85-94
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
西太平洋赤道域IODP Expedition 363の深海底堆積物の 約900～1800万年前の古地磁気層序と相対古地磁気強度	共同	2023年9月	地球電磁気・地球惑星圏学会(宮城県仙台市　東北大学理学部)	熊谷祐穂・中村教博・山崎俊嗣	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年12月～	国際学術雑誌(Earth, Planets and Space)の編集者 編集者
2023年9月～2024年9月	地球電磁気・地球惑星圏学会　2023年秋学会コンビーナ 地磁気・古地磁気・岩石磁気セッションコンビーナ
2021年4月～2025年3月	地球電磁気・地球惑星圏学会　大林奨励賞選考委員 選考委員
2003年9月～	地球電磁気・地球惑星圏学会 会員
1996年7月～	アメリカ地球物理学会 会員
1992年6月～	日本地質学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	坂内　昌徳	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業外学習としての英語多読活動の積極的実施	2021年4月1日～	英語授業の評価に授業外の英語多読を組み入れ、学生が受ける英語インプットを格段に増大
英語の授業における4技能統合型言語活動	2021年4月1日～	受講者全員が90分間を「聞き」「話し」「読み」「書く」ことが求められる授業展開
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
英語多読活動の継続的実施	2021年4月1日～	
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	楊　世英	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」において課題調査をしました。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。
授業の進め方を工夫、とくに国際涵養に関わる科目（地球社会を生きる）	2021年4月1日～	授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。講義者に対して受講者が多く、授業はなるべく細かく区切りして、キーワードを明確化する。
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進	2021年4月1日～	常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。
授業の進め方を工夫	2021年4月1日～	授業の区切りをよく考えながら，とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。
教員独自の「個別面談による授業評価」を実施している。	2021年4月1日～	とくに語学授業なので，授業の合間や休み時間を利用してヒアリング調査を行っている。2年生会話授業にそれぞれ5分ずつあたる練習を行いました（少人数クラス）
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進	2021年4月1日～	常に授業の前で，復習を通して知識の定着に努め，授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。
2．作成した教科書、教材、参考書		
語学教材として自ら作った中国語学修フリントテキスト配布	2023年4月1日～2024年1月31日	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。
地球社会を生きる	2021年4月1日～	グローバル化世界の貧困・雇用・人口問題の核心に迫る
授業で使用している補助教材（配布プリント）	2021年4月1日～	語学会話授業で生きる言語を学生に伝えるため，大学生に身近の場面設定で会話教材を作って利用した。（中国語会話Ⅰ，Ⅱ）ほかには講義の授業でもプリントをも使っていた。 自ら取ったビデオ（短期語学引率のため中国大学生との語学交流場面）は生の教材として利用した。
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学教育学会 2023年度課題研究集会参加	2023年11月11日～2023年11月12日	学習者中心の大学マネジメントを考えるという大会全体のテーマです。初修外国語との関連および大学の基礎教養教育の課題に関わった分科会を参加しました。詳細は大学総合教育研究所2023年紀要を参照して頂ければ幸いです。

現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅱ　研究活動					
著 書 ・ 論 文 等 の 名 称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要		
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動					
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動					

2023年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	リース　エイドリアン	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Insights into flipped classrooms『Insights into flipped classrooms』	単著	2023年4月	Castledown, 1	Adrian Leis	pp.1-194
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Language Learning Emotions and Mindsets	共同	2023年11月	49th Japan Association for Language Teaching International Conference(Tsukuba International Congress Center)	Nakamura, S., & Leis, A.	
A Self-worth Theory Perspective on the Motivation of Japanese Adolescent Learners of English	単独	2023年11月	Applied Linguistics Association of Australia (ALAA) Conference 2023(Wollongong University)	Adrian Leis	
Enhancing presentation skills to maximize your paper's publication potential	共同	2023年8月	The 62nd JACET International Convention(Meiji University)	Leis, A., Kawano, M., Ohashi, Y., & Haenouchi, H.	
A self-worth perspective on boosting Japanese students' English speaking motivation through flipped learning	単独	2023年8月	50th JACET Summer Seminar(Meiji University)	Adrian Leis	
Silence in Japanese classrooms from the perspective of the self-worth theory	単独	2023年8月	The Japan Society of English Language Education 45th National Conference.(Kagawa University)	Adrian Leis	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2024年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年11月～		Applied Linguistics Association of Australia 会員	
2021年4月～		東北英語教育学会 事務局長	
2021年4月～		全国英語教育学会 幹事	
2020年4月～		日本大学英語教育学会 紀要編集委員長	
2020年4月～		日本大学英語教育学会 理事	
2010年4月～		日本大学英語教育学会 会員	
2010年4月～		東北英語教育学会 会員	
2010年4月～		全国英語教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	井上　正子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
La Transformación del Pasado Inutilizable en Utilizable Tropic Death de Eric Walrond『Anuario de Estudios Centroamericanos, la Universidad de Costa Rica (forthcoming)』	単著	2023年	la Universidad de Costa Rica, 50	Masako INOUE	pp.00-00
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	MLA 会員
2017年4月～	日本アメリカ文学会 会員
2016年4月～	日本比較文学会 会員
2013年4月～	The Society for Caribbean Studies (UK) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2023年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	巖谷　睦月	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	イタリア近現代史研究会 会員
2018年6月～	イタリア学会 会員
2009年4月～	日伊協会 会員
2004年4月～	美術史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	原　貴子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド形式の授業における学生の意欲維持の工夫と学生同士の交流の促し	2023年4月1日～2024年3月31日	オンデマンド形式の授業では、毎回の課題の他に、合計で80点程になる小テストを2回実施した。学習意欲の減退を防ぐために、毎回の課題において難易度や出題形式などに幅を持たせるように工夫した。また、そもそも答えを一つに絞り込むことができないように書かれてある小説の該当箇所に関する課題については、学生が答えを提出した後に、他の学生の答えを閲覧してコメントを残すように促した。その結果、学生間の交流（コメント）が多く見られ、このような試みは新鮮で面白かったという声や、他の学生からのコメントが励みになったというもの、自分とは異なる考え方を知ることができて刺激を受けたという声などが聞かれた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①小説を論理的に解読する力を養成する。 ②明治期～昭和期までの文学（小説）の流れを理解した上で、主要な作品・事項に関する知識を身に付けて応用できるようにする。
今年度の進捗状況	目標①は、教養教育科目の「文学」が該当する。学科や個人などによって差はもちろんあるが、振り返り課題や小テストにおいて、学生たちが小説の構造を捉えた上で、テクストから証拠を具体的に挙げながら意見を構築できるようになってきたため、少しずつ達成されつつあると捉えている。 目標②は、「日本文学史Ⅰ・Ⅱ」が該当する。昨年度に比べると、内容を理解した上で知識を覚えるという基本的な勉強を苦にする傾向が認められた。したがって、目標②の段階まで達していない割合が比較的高いと推察される。この現状を受け止めて、学生に過重な負担がかからないように出題範囲を狭めたり出題形式を工夫したりするなど、期末試験のあり方について改めて考える必要がある。
来年度の進捗目標	目標①については、学科によって達成度に違いが見られるため、引き続き、普段文学になじみのない学生たちが小説の論理的な分析力を身につけられるように教育方法を工夫する。 目標②については、詳細に説明すべき点とそうではない点を改めてよく考えて、講義内容にめりはりをつけ、全体的な知識量を調節するようにする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
森鷗外「羽鳥千尋」と医術開業試験制度	単著	2024年3月	日本近代文学館年誌 資料探索(19)	原　貴子	pp.34-51
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	これまで森鷗外の現代小説について対等という観点で分析してきたが、より幅広い視野で森鷗外の現代小説や歴史小説が有する特質と価値を追究する。

今年度の進捗状況	論文の執筆依頼を引き受けたため、日本近代文学館が所蔵する、羽鳥千尋という医術開業試験の受験生が森鷗外に宛てた書簡である「羽鳥千尋手束 全」を用いながら、それを素材にした森鷗外の小説「羽鳥千尋」に関する論文を『日本近代文学館年誌 資料探索』第19号（2024年3月）に発表した。
来年度の進捗目標	森鷗外の現代小説・歴史小説の特質と価値を追究していくと同時に、研究対象を森鷗外以外の文学作品にも広げていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2011年6月～	昭和文学会 会員
2010年4月～	森鷗外記念会 会員
2009年4月～	日本近代文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	翠川　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の主体性を引き出す外国語教育（フランス語）	2023年4月～	受け身になりがちな外国語学習において、学習者の主体性を引き出し、意欲をもって課題に取り組むことができるよう種々の工夫を行っている。授業内で行う発音練習や会話練習に相互指導を組み合わせるなどアクティブラーニングを充実させるほか、事前・事後学修においても、クラウド型教育支援システム manaba course の諸機能を有効に活用している。特に初級フランス語の授業においてはSA を配置し、上級生による学習サポートの機会を設けて初学者への学習支援態勢を強化している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	① 学生の能動性と主体的取り組みの強化 ② 質問や相談へのきめ細やかな対応 ③ 初級フランス語複数クラスにおける学習内容の規格化
今年度の進捗状況	上記目標①については、アクティブラーニング導入形態の工夫によって昨年度より大きな成果を得ることができた。会話練習や練習問題への取り組みに学習者による相互指導を取り入れたことで、教員の説明に対する受講生の注意を高め、授業への積極的参加を促すことができた（目標達成率90％）。②について、manaba course「個別指導」の利用に加えて、初級フランス語のクラスにSAを配置した。授業で理解が不十分であったところや難しい文法項目についてSAが受講生の質問に答えたり説明を補足したりする機会を設けることで、学習支援態勢をより強化することができた（目標達成率90％）。③について、初級フランス語の授業において「何をどこまで教えるのか」を規格化し、クラスを担当する複数の教員と学修内容の標準化に関し連繋を図った。使用する教科書は教員によって異なるが、一定の成果は得られたように思う（目標達成率70％）。
来年度の進捗目標	上記目標①について、学生の学習意欲の向上を学習成果の向上に結びつけるため、自主学習への支援をより充実させることが目標である。manaba course の「ドリル」機能をより有効に活用したい。②については良い成果が得られているので、引き続きSA設置を申請して学修支援態勢の維持に努めたい。まずは指導力のあるSAの選任が肝要である。③について、学修の到達目標としてコミュニケーションを重視するか文法を重視するかで指導にあたる複数教員の見解に若干の相違がある。文法項目を基準にした学修内容の規格化に加えて、教員が共有できる「到達目標」をいかに設定するかが今後の課題となる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
シンポジウム報告「ミシュレと語り」	共著	2023年8月	日本フランス語フランス文学会北海道・東北支部会報, 16	翠川博之, 阿部宏, 堀内聡太, 石田雄樹	pp.1-14
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
シンポジウム「サルトル演劇の現在」 サルトル演劇における〈単独者〉の系譜	単独	2023年12月	日本サルトル学会 第52回研究例会(東京)	翠川博之	
シンポジウム「両大戦間期の文学の政治、そしてその後」 未発表シナリオ『レジスタンス』をめぐって ー青年期のサルトルー	単独	2023年11月	日本フランス語フランス文学会2023年度北海道・東北支部大会(山形)	翠川博之	

H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	① J.=P.サルトルの演劇理論と演劇作品に関する研究 ② J.ミシュレの歴史学および思想に関する研究
今年度の進捗状況	① 日本フランス語フランス文学会2023年度北海道・東北支部大会におけるシンポジウム「両大戦間期の文学の政治、そしてその後」に登壇し、「未発表シナリオ『レジスタンス』をめぐって―青年期のサルトル―」と題する研究発表を行った。また初期サルトルの重要概念「単独者」に関する未刊行資料を精査し、日本サルトル学会のシンポジウム「サルトル演劇の現在」において「サルトル演劇における〈単独者〉系譜」と題する研究発表を行った。 ② 2022年度に主催した「ミシュレと語り」と題するシンポジウムについて、日本フランス語フランス文学会北海道・東北支部会報『Nord-Est』に「シンポジウム報告」を掲載し、あわせて「歴史を語る手法」と題する研究発表の要旨を公開した。
来年度の進捗目標	① 上記の研究発表「サルトル演劇における〈単独者〉の系譜」を論文にまとめて学会誌に投稿する。また、上記研究発表「未発表シナリオ『レジスタンス』をめぐって―青年期のサルトル―」の準備過程で着想したサルトルと映画との関係について、必要な資料を収集して「サルトルと映画」という新領域の研究に着手する。 ② 歴史と文学が融合するミシュレの「語り」に関する文体研究をさらに進め、「語り」を主題とする研究グループに参加する。また、2022年に刊行した訳書『万物の宴』をもとに、社会倫理の観点からミシュレにおける「宴」と従来の「歓待」概念との比較考察を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年6月	日本フランス語フランス文学会 支部運営委員
1999年4月～	日本サルトル学会 会員
1997年4月～	日本フランス語フランス文学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

学術研究会評議委員

2023年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	文　景楠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	教養教育センターで行う授業を充実させるとともに、言語文化学科に所属する学生の演習を円滑に行う。	
今年度の進捗状況	言語文化学科での演習を通して、哲学を題材に卒業論文を選ぶ学生が増えてきた。	
来年度の進捗目標	教養教育センターで行う授業を充実させるとともに、言語文化学科に所属する学生の卒業論文指導を円滑に行う。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
「海外論文紹介」（Brunschwig; Dukeを担当）	単著	2023年6月	古代哲学研究：Methodos, 55	文 景楠	pp.54-57
G. 学会における研究発表					
哲学史における分析的アプローチ：アリストテレス的観点から	単独	2023年10月	東北哲学会第73回大会(弘前大学)	文 景楠	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	1. アリストテレスの伝記研究を翻訳出版すること。 2. 採択された科研費プロジェクトを進めること。 3. 博士論文をいくつかの単著論文にすること。				
今年度の進捗状況	1. 2名の共訳者とともに作業を進めている。 2. 共同研究者とともに研究会を定期的に実施している。 3. 作業に着手するための段取りを決めた。				
来年度の進捗目標	1. 2024年中の出版を目指している。 2. 研究計画の通りに進める。 3. 2024年度中に1本の翻訳を終える予定である。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	西洋古典研究会 会員
2017年9月～	ギリシャ哲学セミナー 会員

2017年6月～	古代哲学会 会員
2017年5月～	東北哲学会 会員
2012年12月～	日本哲学会 会員
2010年10月～	日本西洋古典学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	遠海　友紀	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
リーディング＆ライティングの共通教材の作成	2023年4月1日～	選択必修科目として実施されているリーディング＆ライティングの教材（シラバス・教案・授業用スライド・小テストワークシート・レポート評価の観点、その他授業に必要な資料）を担当者と協力して作成し、授業を担当する全教員へ展開した。また、2024年の授業に向け、内容をまとめたテキストを作成した。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
遠隔授業実施ガイドの修正・公開作業	2020年5月1日～	コロナ禍に入ってから活用されている「学生のための遠隔授業受講ガイド」「教職員のための遠隔授業実施ガイド」を2023年度の状況に合わせて修正し、公開する作業に携わった。
ラーニング・コモンズの運用・学習支援の実施	2016年4月1日～	ラーニング・コモンズの運用や、そこで実施している学習支援を担当している。学習支援では、施設利用に関するガイダンス、個別相談、セミナー、学生スタッフの育成などに取り組んでいる。 また、担当の教職員と協力して、2023年度から運用が始まった五橋キャンパスのラーニング・コモンズの開室準備に取り組んだ。

現在の課題・目標	学生が大学でよりよく学べるよう、正課内外それぞれにおいて、個々の学生に合わせた支援に取り組むことを目標としている。
今年度の進捗状況	正課内においては、リーディング＆ライティングの授業の取りまとめを担当し、他の担当教員と協力しながら、シラバスや各種教材の作成に取り組んだ。その結果、共通シラバス・共通教材での授業を実施することができた。 また、2024年の授業に向けて、他の担当教員と協力して、レポート作成に活用できる教材を作成した。 正課外においては、ラーニング・コモンズの学習支援担当教員として、施設の運用、セミナーや個別相談といった学習支援に取り組んでいる。また、2023年度はこれまで取り組んできた施設利用の支援をする学生スタッフの育成に加えて、学習相談に対応する学生スタッフ育成にも新たに取り組み始めた。
来年度の進捗目標	正課内においては、2023年度の取り組みを踏まえ、リーディング＆ライティングの授業を学生にとっても、授業を担当する教員にとってもより良いものするため、課題点の改善に取り組む。 また、1クラスの受講者数が多いため、授業内で学生それぞの状況に合わせた対応が難しい状況を改善するため、ラーニング・コモンズで実施している学習支援との連携をより強化したい。 正課外においては、ラーニング・コモンズで実施している学習支援において、学習相談対応に取り組む学生スタッフの育成により力をいれることを目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『教育の方法・技術とICT活用：学びを育む：教育工学と教育心理学のコラボレーション』	分担執筆	2023年	北大路書房	岩崎千晶, 田中俊也	pp.243-250
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大学生の生成AIの認識および態度とメタ認知的方略の使用頻度との関係	共著	2024年3月	日本教育メディア学会研究会論集(56)	大沼 宙生, 遠海 友紀, 嶋田 みのり, 稲垣 忠	pp.58-64
韓国の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン	共著	2024年3月	関西大学高等教育研究, 15	川面 きよ, 及川 ひろ絵, 遠海 友紀, 岩崎 千晶, 嶋田 みのり, 千葉 美保子	pp.113-122
東北学院大学 ラーニング・コモンズ「コラトリエ」における2023年度の学生スタッフの活動	共著	2024年3月	東北学院大学教育総合研究所報告集, 24	遠海 友紀, 嶋田 みのり	pp.107-119

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

学習者中心の評価に関する研究動向と教育工学的な学習評価の枠組みの構築に向けた議論	共同	2024年3月	日本教育工学会2024年春季全国大会(熊本大学)	杉浦 真由美, 岩田 貴帆, 近藤 孝樹, 沙 華哲, 遠海 友紀, 甲斐 晶子, 長濱 澄	pp.5-6
ニューノーマル時代の学習環境をデザインするには －学習環境ハンドブックの開発と拡張版LSRSの試行報告－	共同	2023年6月	大学教育学会第45回大会(大阪大学)	千葉 美保子, 嶋田 みのり, 石井 和也, 多田 泰紘, 村上 正行, 岩﨑 千晶, 川面 きよ, 遠海 友紀, 浦田 悠	pp.71-72

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	自律的な学習者の育成を研究の大きなテーマにし、初年次ライティング科目や大学における学習環境・学習支援に着目した研究に取り組んでいる。
今年度の進捗状況	2023年度は、新カリキュラム開始に伴い新たな授業が始まったり、新キャンパスに新たにラーニング・コモンズが設置されるなど、新しいことが様々始まったため、まずは研究のフィールドとなるそれぞれでの取り組みを軌道に乗せることに取り組んだ。また、他の研究者と連携し、学習環境に関する書籍を分担執筆するなど、これまで取り組んできた調査や研究を形にする活動にも取り組んだ。
来年度の進捗目標	現在取り組んでいる、科研「ラーニング・コモンズにおける学生スタッフのコンピテンシーリストの作成と研修の検討」の最終年度となるため、これまでの取り組みをまとめる。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2020年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年4月～2024年3月	一般社団法人日本教育工学会 春季大会企画委員
2017年2月～	一般社団法人大学教育学会 会員
2009年9月～	日本教育メディア学会 会員
2009年5月～	初年次教育学会 会員
2007年7月～	一般社団法人日本教育工学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

ラーニング・コモンズ運営委員、ラーニング・コモンズの学習支援担当教員として、施設の運用や学習支援の体制構築、運用に取り組んだ。

2023年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	西田　昌之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業外学習の推奨	2023年4月1日～	学生にコラトリエの学習指導を使用したり、教員のオフィスアワーに相談に行くことを積極的に勧めている。また研究、留学、進路に関するものは、個人やグループの相談にのっている。
授業理解を確実なものにする工夫	2023年4月1日	授業の理解を促すために事前事後課題を必ず出題している。また次の授業の初めにスライドを用いて課題の解答を共有したり、学生に回答してもらったりして理解を確認している。
橋渡しとしての初年次ライティング教育	2023年4月1日～	専門化する前の初年次ライティング教育として、可能な限り専門科目との関連を授業の中に組み込み、さらなる学びの深淵へと橋渡しとなるように工夫している。文学、科学哲学、歴史学、文化人類学、社会学などの諸理論やトピックを例題に組み込み諸学問への興味を刺激するようにしている。また大学の文章記述の発展の経緯が分かるように、書き手・読み手の問題、客観性、著作権、文章批判などの諸問題も、理論概念を用いずに事例で示しつつ、ディスカッションしている。執筆行為がいかにさまざまな学問を反映して成立し、かつ諸学問を繋いでいるのか、またさまざまな執筆様式がいかなる限界や問題をかかえているのか理解できるように構成している。
対話型授業の実施	2023年4月1日～	授業の進行全体を学生一人一人と対話し、問答や確認をすることを通じて、考えさせる授業を目指している。そのために話易い雰囲気づくり、パワーポイント作成、テーマ、学生の巻き込みかたを工夫している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・「クリティカルシンキング」において大学生として適切な議論のしかたと民主的な態度が身につくように授業設計と教材を作成する。 ・適切な客観性、証拠重視の姿勢、資料批判を伴った学術的文章が書けるようにわかりやすい授業設計と教材を作成する。 ・授業外においても、豊かな学びの世界に学生が触れられるように、研究室等での学生相談や質問に応じる。
今年度の進捗状況	・「クリティカルシンキング」の授業において、学生との問答を中心として授業が進行するように設計した。アンケート評価から見るとある程度の成果は得られたと考える。 ・レポート作成法においても、レポート作成に必要な技術のトレーニングをとりあえず一通り教えることができた。 ・ただ事前に指摘していた通り、批判的議論とレポート作成を同時に行うことは、詰込み型となり無理が生じた。十分に議論やトレーニングを行う前に、次の課題に移らねばならず、学生の理解にばらつきが生じたため対応が必要である。 ・無批判なインターネット資料の利用が目立ち、せっかくの図書館資料が活用されないでいる点も大きな問題である。 ・授業外では、多くの学生が研究室やコラトリエ（勤務時）に自主的に質問を来てくれた。中には授業内で話した東南アジア研究や調査の話を聞きたいとの希望があり、4回ほどグループ茶話会を行うなど副次的な効果もあった。
来年度の進捗目標	・授業内容、時間は変更できないので、教材で対応する。APAスタイルに準じた参考文献・文中出典表示の模範例の作成を行い、事前配布を行う。 ・図書館の活用を促す課題を追加作成する。 ・研究室などでの学生相談は引き続き継続する。 ・学生を学びの面白さに引き込めるように、授業内で研究や調査の話を課題文などに活用していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

タイのろう教育の発展――女性貴族ネットワークによる慈善事業から国家社会事業へ――	単著	2024年3月	国際基督教大学アジア文化研究所, アジア文化研究(50)	西田昌之	pp.59-77
タイ・ボーイズラブ小説同人誌における執筆戦略 ―「尊い」世界を描くための遠近法―	単著	2023年7月	日本タイ学会, 年報 タイ研究(23)	西田昌之	pp.45-60

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

第二次世界大戦中の帝国日本への「まなざし」の比較―タイとポルトガルの旅行記の並べ読みから	単独	2024年3月	「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」第8回研究会(東京・明治学院大学)	◎西田 昌之	
力の源としての死後世界：タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用	単独	2024年2月	東南アジア学会北海道・東北地区例会(仙台・東北学院大学)	◎西田 昌之	
魂のゆくえを訊ねて―タイ北部コン・ムアン山村における死後観の多様性―	単独	2023年7月	日本タイ学会2023年度研究大会(東京・大東文化大学)	◎西田 昌之	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	・タイ人の外国旅行記の文献収集を行う。 ・先住民権の問題を理解するために、オーストラリア・ニュージーランド先住民の調査を行う。 ・タイBLドラマ研究の第一期調査のまとめと第二期調査を開始する。 ・タイの障がい者教育に関する論文を作成する ・タイにおけるベトナム仏教寺院の調査と結果の公表をする。 ・福島県旧制安積中学の同窓会資料の調査を行う。 ・来年度の研究費応募のためにタイの宗教について論文を書く。
今年度の進捗状況	・夏にタイ・チェンマイで外国旅行記の収集を行った。 ・冬にオーストラリア・ニュージーランド先住民の調査を行い、基礎資料を収集した。 ・タイBLドラマ研究については、「タイ・ボーイズラブ小説同人誌における執筆戦略 ―「尊い」世界を描くための遠近法― 」を刊行、第二期調査も実施した。 ・「タイのろう教育の発展――女性貴族ネットワークによる慈善事業から国家社会事業へ―― 」を刊行した。 ・夏に京都大学と合同でタイにおけるベトナム仏教寺院の調査を行い、自分の調査の成果は2月に「力の源としての死後世界：タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用 」で発表した。 ・早稲田大学と合同で福島県旧制安積中学の同窓会資料の調査を春と秋に郡山で行った。データベースの構築を進めている。 ・2023年7月にタイの宗教に関して「魂のゆくえを訊ねて―タイ北部コン・ムアン山村における死後観の多様性―」を日本タイ学会で発表し、冬に論文を投稿した。
来年度の進捗目標	・タイ人の外国旅行記についてのシンポジウム、書籍化作業が行う。 ・夏にアラスカ先住民イヌピアットの調査を行い。先住民族に関する論文を執筆する。 ・タイBLドラマについて、2024年7月のタイ・国立チュラーロンコーン大学とのZoom国際シンポジウムに参加予定である。さらに第二期調査の結果を夏までに論文にまとめ、タイで書籍化し、プロジェクトを終了させる予定である。 ・秋に「力の源としての死後世界：タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用 」の修正を行う。 ・早稲田大学と合同で行っている福島県旧制安積中学の同窓会資料の調査に関して、2024年5月ごろに中間報告を行い、論文を執筆する。 ・「魂のゆくえを訊ねて―タイ北部コン・ムアン山村における死後観の多様性―」について2024年春は論文修正を行う。 ・投稿が滞っている「嵐を警告するキリスト:フィリピン・レイテ島における災害フォーク・カトリシズムの発生と展開」の投稿を行う。 ・博士論文の出版助成金へ応募する。 ・オーストラリアの「保苅実ドキュメンタリープロジェクト」への協力を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)	2023年度～2025年度	(研究分担者)	

科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2023年度～2027年度	(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2027年度	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 サントリー文化財団 2022-2023年度研究助成「学問の未来を拓く」(2024年延長)	2022年度～2024年度	個別(研究協力者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2025年度	(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年3月	クリティカルシンキング研修「見極めよう！これからの最善の道筋を」(気仙沼青年会議所 3月例会) 講師
2023年4月	タイドラマ“推し活”熱気 俳優来日イベントファン自前で盛り上げ 距離感近く、画像規制緩やか(中日新聞) 取材協力, 情報提供
2023年4月～2025年3月	東南アジア学会 北海道・東北地区運営委員
2023年4月～2025年3月	政治社会学会 事務局運営委員
2021年8月～	東南アジア学会 会員
2015年11月～	Japanese Studies Association of Thailand 会員
2015年4月～	日本タイ学会 会員
2015年4月～	政治社会学会 会員
2014年4月～	日本文化人類学会 会員
2011年5月～	Association of Asian Studies 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

・コラトリエ学生個別指導担当教員
・研究環境改善推進委員
・タイ・チェンマイ大学との大学間協定締結のための準備作業

2023年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	宮本　直規	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2023年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	門間　俊明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の理解度を知るための工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	講義の内容をどの程度学生が理解したかを知るために，講義の後に毎回ミニレポートを書かせている。
ドイツ語検定受験指導	2023年4月1日～2024年3月31日	希望する学生に，ドイツ語検定の受検指導を行っている。
ドイツ語の理解，定着のための工夫	2023年4月1日～2024年3月31日	ドイツ語の理解，定着のために，小テストや練習問題を課している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
体育会「ソフトテニス部」の部長としての活動	2023年4月1日～2024年3月31日	体育会ソフトテニス部部長として、部員の部活動、学生生活一般について指導している。

現在の課題・目標	1.ドイツ語の授業において,プリントの配布や小テストの反復によって,語彙の定着や文法事項の理解の深化をはかる。 英訳: 2.ドイツ語検定向けの指導を強化することによって,4級,3級の合格率のアップを目指す。 3.授業時間以外に時間を設け,学生の質問にきめ細かに答えていきたい。
今年度の進捗状況	1.上記1について,ある程度実践できたと考えてはいるが,引き続き努力していきたい。2.上記2について,本年度は独検受験者の数が少なく、十分な実績があげられなかった。3.ある程度まで実践できたと考えている。
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1.ヴィルヘルム・ラーベの後期の作品いずれかについて,作品論を書き上げる。
今年度の進捗状況	1.上記1について,資料の収集,読み込みに進捗はあったが,論文作成にはいたらなかった。
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1988年4月～	東北ドイツ文学会 会員

1983年4月～		日本ドイツ文学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2023年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	千葉　真哉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域課題演習（地域課題版）の運営	2023年	現地での実習に向け、関係機関と連携し、学生の負担軽減のため、交通費・宿泊費の補助を受けることができるように調整した。
地域課題演習（地域企業版）の運営	2023年	企業における課題解決に取り組むにあたり、通常の授業期間であっても実施できるようなプログラムを設計した。実習日程の調整と遠隔教材の活用を行った。
manabaにおける質問対応	2023年	LMSのmanabaを使用し、科目における質問対応をきめ細かに実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
2023年度　東北学院大学　地域教育科目　地域課題演習（地域課題版）報告書　岩手県南（南いわて）における地域課題の解決の実践ー西和賀町を対象にー	2024年3月11日	地域課題演習（地域課題版）で取り組んだ内容を報告書として取りまとめ、主に演習に協力していただいた方々に報告した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
教養教育センターFD研修発表	2024年3月13日	教養教育センターFD研修会において「地域ボランティア活動の探究」について、科目の説明と報告を行った。
「西和賀町における地域課題の解決」について演習報告	2023年11月17日	地域課題演習（地域課題版）における成果を演習を実施した西和賀町で発表した。
宮手圏つながりカレッジ活動報告会	2023年10月7日	岩手県県南広域振興局が岩手県平泉町で行った「宮手圏つながりカレッジ活動報告会」において、地域課題演習（地域課題版）における成果を発表した。 「西和賀町における地域課題の解決」について演習報告
4．その他教育活動上特記すべき事項		
地域教育科目「地域の課題Ⅰ」の運営	2023年	2学年全学部必修科目で約2,700名が履修する「地域の課題Ⅰ」の調整と運営を行った。

現在の課題・目標	・2023年度カリキュラムにおける新規開講科目である「地域ボランティア活動の探究」、「地域課題の探究」について学生に魅力的で評価される科目となるよう設計、授業運営をに取り組む。 ・旧カリキュラムである地域教育科目群の講義運営を実施する。特に全学部必修科目である「地域の課題Ⅰ」について、通常履修の最終年度となるため、計画通り講義運営を実施する。また、演習科目である「地域課題演習（地域課題版）」、「地域課題演習（地域企業版）」について学外活動において事故がなく、学生から評価される深い学びの内容となるよう実施する。
今年度の進捗状況	・「地域ボランティア活動の探究」について、共同で担当する教員とともに講義運営を行うことができた。 ・「地域の課題Ⅰ」の授業運営について、履修者約2,700名を対象に計画通り行うことができた。 ・「地域課題演習（地域課題版）」、「地域課題演習（地域企業版）」については、学外の演習においても事故がなく、学生アンケートの授業評価の総合評価が非常に高いものとなった。
来年度の進捗目標	・「地域課題の探究」について、学生の満足度が高い科目となるよう、導入初年度の科目運営を共同して担当する教員とともに行う。 ・「地域ボランティア活動の探究」について、共同で担当する教員とともに、さらに充実した教育内容に改善し、学生から評価される講義運営を行う。 ・旧カリキュラムの全学部必修科目である「地域の課題Ⅰ」について、単位未修得者がなくなるように科目内容に改善を加えながら運営を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
大学におけるコロナ禍を経た遠隔授業の活用 ― 東北学院大学の事例から ―	単独	2023年12月	日本通信教育学会 第71回研究協議会(横浜)	◎千葉真哉	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・コロナ禍を経て変化した通信教育のあり方、遠隔教育の活用方法について明らかにする。 ・ボランティアに関する研究を進める。 ・研究分担となっている科研費の研究推進を行う。
今年度の進捗状況	・日本通信教育学会の第71回研究協議会において学会発表を行った。 ・日本ボランティアコーデネーター協会に入会し、日本ボランティアコーディネーター協会認定のボランティアコーデネーション力1級検定に合格した。 ・科研費の研究において、研究推進の一部に貢献した。
来年度の進捗目標	・通信教育、ボランティアに関する研究を継続する。 ・地域をテーマとした研究を進める。その研究推進のため日本都市学会に入会する。 ・研究分担となっている科研費の研究において成果を発表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年2月	気仙沼市アクティブコミュニティ塾及びまちづくり協議会　活動報告会 司会
2023年12月	気仙沼市アクティブコミュニティ大学・塾　フォローアップ研修 司会, 講師
2023年11月	学生を地域に呼び込むためには何が必要か(県内学生を対象とした関係人口の創出・深化事業 令和5年度関係者意見交換会)
2023年10月	若者と地域が豊かに関わりあう未来とは(宮手圏つながりカレッジ活動報告会) パネリスト, コメンテーター
2023年9月	気仙沼市アクティブコミュニティ塾　申込者個別ヒアリング及びフォローアップ 司会, 講師
2023年5月～	日本ボランティアコーディネーター協会 会員
2022年～	全国高校生MY PROJECT AWARD 宮城県Summit サポーター
2021年12月～	日本社会福祉学会 会員
2021年～	地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業審査委員会 審査委員
2020年4月～	日本通信教育学会 会員
2008年～	東北地区大学ラグビーフットボール連盟 理事（事務局・会計担当）
2008年～	宮城県ラグビーフットボール協会 理事（施設・競技委員長）

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	東北学院大学も所属する東北地区大学ラグビーフットボール連盟、宮城県ラグビーフットボール協会の活動により、東北地区における大学ラグビーフットボールチームの強化とラグビーフットボールの普及による社会貢献に取り組む。
今年度の進捗状況	コロナ禍を経て、前年度と比べて大会の開催は増え、競技者人口は増加した。 東北地区大学ラグビーフットボール連盟として、北海道地区との対戦により勝利をおさめ、東北地区から全国大会出場チームが出た。
来年度の進捗目標	東北地区における大学ラグビーフットボールチームの強化とラグビーフットボールの普及による社会貢献に取り組む。より良い環境でラグビーフットボールができる環境整備に取り組む。東北地区大学ラグビーフットボール連盟の所属チームが全国大会で勝利できるように強化・普及活動を行う。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・地域連携センター所員
・気仙沼市アクティブコミュニティ塾　講義担当者
・みやぎ・せんだい地域人材育成協働事業プラトフォーム運営担当
・東北学院大学地域総合研究所所員
・東北学院大学教育総合研究所所員
・東北学院大学生協総代

東北学院大学教員業務・活動報告書
2023

発　行　日　2024（令和6）年8月31日

編　　集　東北学院大学点検・評価委員会　教育・研究業績編集委員会

発　　行　東北学院大学

問い合わせ先　東北学院大学学務部教務課

〒980-8511　仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL. 022（264）6461 ／ FAX. 022（264）6480

E-mail：gakuji@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

印　　刷　ハリウ コミュニケーションズ株式会社

LIFE LIGHT LOVE
SINCE 1886

東北学院大学
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

